悪霊島山

吏



金田一耕助ファイル19 悪霊島 (上)

横溝正史



角川文庫 4879



●横溝正史(よこみぞ せいし)

1902年、神戸市に生まれる。旧制大阪薬専卒。 26年、博文館に入社。「新青年」「探偵小説」の 編集長を歴任し32年に退社後、文筆活動に入 る。信州での療養、岡山での疎開生活を経て、 戦後は探偵小説専門誌「宝石」に、『本陣殺人事 件』(第1回探偵作家クラブ賞長編賞)、『獄門 島』、『悪魔の手毬唄』などの名作を次々と発表。 76年、映画『大神家の一族』で横溝ブームが到 来。以降多くの読者の爆発的支持を得ている。 81年、永眠。 悪霊島(上)



第十五章	第十四章	第十三章	第十二章	第十一章	第十章	第九章	第八章	
谷の鳥 ************************************	串刺し太夫 一	宮の惨劇	水蓮洞	神楽太夫がぐらだゆう	竜平の帰還	蒸発	神の矢	
325	299	271	248	222	208	187	161	

第七章

若者ふたり

139

第	第	第	第	第	第	プロ	
六章	五章	四章	三章	章	華	ローグ	
巴	越	市り	三	な	就わし	グ	
御	智	子こ	人	h	羽章		
寮人	竜平	殺し	御寮	でも	山がんに		
			人	見	7		
				てやろう			次
				3			
				つ 			
			10	24		7	
114	94	68	48	24	9	7	

プロローダ

えったかと思うと)あいつは体のくっついたふたごなんだ……(雑音、雑音、激しい息 ……(雑音、雑音、また雑音、人びとのののしりわめく声、それがしいんとしずまりか

……あいつは腰のところで骨と骨とがくっついたふたごなんだ……(雑音、雑音、 い息使い) 激し

……あいつは平家蟹だ……平家蟹の子孫なんだ……(息使いいよいよ弱まり雑音) ……あいつは歩くとき蟹のように横に這う…… (息使いしだいに弱る。雑音)

す弱り、雑音、また雑音) ……あの島には悪霊がとりついている、悪霊が……悪霊が……(息使いいよいよますま

……鵼のなく夜に気をつけろ……(息使いいよいよ耐えがてになり、雑音と人びとのわ めきののしる声

……その島の名は……その島の名は……その島の名は……(人びとのざわめき騒ぐ声の

本文デザイン 天下井教子+エーダッシュ

9

第一章 鷲羽山にて

「体のくっついたふたごというのはシャム双生児のことなんですか」

それを題材として探偵小説を書いている。そこまではわたしもしってますが、そういう異 それいらい体と体のくっついたふたごをシャム双生児とよぶようになり、二、三の作家が 「むかしシャムにそういう異形な双生児が生まれて、世界中の評判になったことがある。 「と、いうことになるんでしょうな」

形なふたごがこの日本に存在するというんですか、じっさいに」

裡にきざみこまれていたので、死ぬまえに、なにをおいてもそのことを、いい遺しておき たかったんでしょう」 んでしょうな、このテープの声のぬしはですな。それがひじょうに強烈な印象となって脳 「金田一さん、わたしもそれについては懐疑的なんですが、この男はそれをどこかで見た

「それがどういう男だかわかっておりません。青木という苗字以外にはね」 「だれです、それは。どんな男なんです」

磯川警部はそこでプッツリ、テープレコーダーのスイッチを切ると巻き戻した。

なかでひときわ高く、だれかの沈痛な声。「死んだ」……)

のたたずまいをいまにとどめる倉敷市で、東からくる客が足をのばしてそこにあそんだ。 そのあおりをくらって急に大きくクローズアップされてきたのが、古風な江戸の商業都市 まだ開通していなかったけれど、その三年まえには新幹線が東京と大阪をつないでい

(E) 体がたし あ する鷲羽山 れ岡山県警にひとつの問題が提起されたちゅうわけです。金田一さん、ちょっと……」 ープレコーダーを持ち合わせていたので、こういう奇怪なテープがあとにのこり、 た人、やはり警察関係の……?」 「ところがそれがそうじゃなく、ずぶの素人、物好きな一旅行者なんですね。その人がテ 「それにしてもこのテープ、どういう状態のもとに録音されたんですか。このテープとっ この事件のあった昭和四十二年頃には、倉敷から鷲羽山へ通ずる鷲羽山スカイラインは そこは岡 がった。 磯川警部は這い松の群落と大きな岩かげにある、天然にできた石のベンチからつと立ち かに

金田一耕助はかすかに身ぶるいしながら、

見晴らせるからである。 ひろく天下に知られているのは、そこに立つと国立公園瀬戸内海の景観が、一望のもとに った奇岩巨石のあいだをぬうて、ひねくれた矮性の這い松の群落が点綴している。それ自 「の突端である。全山崩壊した花崗岩からなるこの山は、累々層々と積みかさな 山市 いっぷう変わった奇勝にはちがいないが、わずか一三三メートル の西南方、瀬戸内海のほぼ中央に突出している、児島半島の南端にくらい

んだ。なにかいったとしたらそれはおそらく激情的な言葉であったろう。 のために顔面から血の気がひいた。なにかいおうとしたようだが、思いなおして口をつぐ 磯川警部はそこで鋭く金田一耕助を視た。金田一耕助はいっしゅんたじろぎ、ショック

物はいませんでした。あきらかに偽名を使うとったんですな」 るんですが、わが岡山県警から東京のほうへ照会したところでは、該当住所にそういう人 名乗っていたそうです。宿帳にのこった住所では、東京の渋谷区初台ということになって の探しておいでんさる青木氏は修三さんというんでしたね。しかし、この男は青木春雄と 「金田一さん、これがあなたの探しておいでんさる青木氏かどうかわかりません。あなた

「年頃は?」

は変えるわけにはいかなんだろうちゅうことになっとるんです。これがその指輪ですけえ やそっとで抜けんようになっておりました。それですけん偽名を使うにし もはだしでした。ただ左の薬指に金の指輪をはめていましたが、それが認になっておりま 許確認の手懸かりが全然なかったというのは、発見されたときその男、パジャマ一枚で足 「四十二、三というところでしょうか。がっちりとしたよい体格をしておりましたが、身 てな、青木と彫ってありました。それが薬指の肉にガッチリ食いこんでいて、 ても、苗字だけ ちょっと

のほうが長方型になっており、青木という字がくっきりと裏向きに彫ってある。 磯川警部が折り鞄のなかから取り出して、金田一耕助のてのひらに落とした指輪は、

され、遠ざかりいく流人たちの赦免船を、岩のうえから見送る俊寛といった図である。金 一耕助のおもてにはなぜか暗くて悲壮なものがあった。

島は指呼のうちである。戦後金田一耕助がはじめて手がけた事件の舞台となった獄門 備讃の瀬戸はすぐ目の下だ。東は播磨灘から西は水島灘まで。その水島灘金田一耕助の眼下には、いま、瀬戸内海国立公園のすばらしい景観がひ 磯川警部から教えられた。よく晴れた日は対岸の四国の山脈まで見渡せるそうだが、晴れ にうかぶ小島が、金田一耕助がこれから渡ろうとしている刑部島であると、 そのなかにある。 いるとはいえ梅雨どきのこと、靄にかすんでそこまでは見えなかった。しかし、塩飽諸 すぐちかくにみえる釜島は、昔瀬戸内海に猛威をふるった、 「のすばらしい景観がひろがっている。 、かれ のまっただなか はさっき

その沖合いに浮かんでいるのが、あんたが目差している刑部島じゃな。 うど鷲が羽をひろげていまに 作がおありんさるのか、くわしいことはわたしにもわからんけえどな からすぐそばに見える櫃石島、そこからい それからむこうに煙がいっぱい立っているのが水島コンビナー 、さっき磯川警部は説明した。 も翔び立ちそうに みえるところから、 まわ n われのいるこの山 鷲羽山 あの島にどういう と名づけられた を見ると、 ちょ

拠点だったそうなと、

か がわれた。 さっきそういって説明した磯川警部のさいごの言葉には、あきらかに危惧のひびきがう

磯川警部のその言葉によると、金田一耕助は刑部島というのへ渡ろうとしているらしい。

12

それらのなかにはヒッピーまがいの若者もいた。ディスカバー・ジャパンというところだ

きているから、女子どもにも容易に登れる山である。 険阻な山のように聞こえるが、たかが一三三メートルの山である。その麓まで軽便鉄道がほん。 全山崩壊した花崗岩におおわれ、奇岩巨石が累々層々と重なっているといえば またはじめからそこが、観光目的のひとつになっていた人 あそんだひとのなかには、そこではじめて鷲羽山のことを聞 もあったに 67 たひともあったろ ちが か な

一十四日といえば梅雨のさなかなのだが、その日はめずらしく晴れていた。土曜日でもあ 昭和 せいか金田一耕助と磯川警部のふたりが、石のベンチに腰をおろして話しこんでい 四十二年六月二十四日の午後三時頃にも、観光客らしい若い人がたびたびそばを った。なかにはアベックもあり、幼い子どもをつれた夫婦づれもいた。六月

だのたるんだヨレ かげから外へ出ると、 ハタハタとはためき、 磯川警部が立ちあがったので、金田一耕助もそれにつづいた。 一釜帽をわしづかみにして石のベンチから立ち上がり、大きな岩と群生してい あ ヨレの袴をはいて、頭は かわらずである。薄よごれた白がすりのひとえに細い もじゃもじゃ頭は逆立ってうしろになびいた。鬼界島にとりのこ 海から吹き上げてくる風に、白がすりの袂とヨレヨレの袴のすそ いつにかわらぬもじゃもじゃの蓬髪である。 警部は目立たぬ平服だが、 へこ帯をしめ、

15

どうやらその理由がわかりかけている。 へ渡ろうというのを苦にしているようである。金田一耕助もさっきのテープを聴いてから、

た下津井の港ですね 「ときに、警部さん、ぼくになにかご用とおっしゃるのは?」 おお、そうそう、金田一さん、 いま目の下にみえるのが、さっきわれわれのとおってき

の町になにかご用がおありだとか」 「そう、警部さんは帰りにもういちどあの町へ、寄ってみたいとおっしゃいましたね。

らし 岬が三つ四つあってそのあいだが入江になっており、海岸線にはギッチリと人家の屋根が繋ぎ ならんでい ふたりがいま立っている花崗岩の禿山の下には、下津井の港が複雑な屈折をみせている。 たたずま 12 入江にはおびただしい数の漁船がへばりついていて、いかにも古風な港町 である。

海面を、 面を見て、あそこに人が浮かんでいるというわけで大騒ぎになりました。 島の東を迂回して、ようやく下津井へちかづいてきたころ、甲板にいた乗客のひとりが海。 とまえのことですね、坂出を出て下津井の港へむかっていた。ところがむこうに見える本 ~に雲竜丸というのがあります。その船 うにおよばず乗客一同が甲板へ出てみると、なるほど左舷から五〇メートルほどさきの あの下津井と四国の坂出をつないでいる海運会社がありますが、その会社の持ち船のな 人間らしきものが浮きつ沈みつしている。時刻は朝の八時ごろ、海面がキラキラ が五月二十日ですから、 いまから一か月とちょっ 。そこで乗組員は

いう用件があるのかしらないけれど、 その刑部島はいまかれの眼下にある。 こう見たところその島は、 周囲一四キロばかりのその島に、金田 ほかの島々となんら変わ 一耕助はどう

った形態と色彩をもって、梅雨の晴れ間のひとときを、ひっそりと息づいているようにみ そこから見ると大小五十にあまる島々が展望されるのだけれど、どの島もそれぞれちが

「島一つ土産に欲しい鷲羽山」

それらの島 そういう句碑 が立っているのを金田一耕助はさっき見てい あ いだをぬうて大小さまざまな船が行き交う風景は、

そこが海の銀座と

からない。そこに広がっているのはエメラルド・グリーンの縞目をなした、 というよりほかはない美しい海である。 水島が埋め立てられ、そこに臨海工業地帯が発展していくにしたがって、このへんいっ われるゆえんであろう。 の海はひどく汚染されたというけれど、鷲羽山の頂きから見ただけではそこまではわ

かわらず磯川警部はその島に、なにかしら危惧する理由があるらしく、金田一耕助がそこ とつの島にすぎず、べつに不吉な暗雲がその島をおおうているわけではない。それにもか してすなおにうけとれた。かれが目差すという刑部島も、それらの景観を形成しているひ それは金田一耕助のようになにか目論見のあるらしい人物にも、このうえもない景観と

それとも崖からすべり落ちたときにでもできた傷なのか、そこまでは医者も断定しかねて があり、 「どこかの崖からすべり落ちたらしいんですね、全身擦過傷だらけのうえに数か所の骨折 「ところでその男の状態は?」 るんですが 後頭部に大きな裂傷がありました。ただしそれがだれかにぶん殴られた傷なのか、

服装は?」

しているうちに失われたんでしょう」 い縞のパジャマ一枚、足には下駄かサンダルをはいていたんでしょうが、 それは漂流

「それが推定年齢四十二、三というんですね」

胸板の厚い、肩幅の広い、そろそろ腹の出っ張る年頃でしたね」 「筋骨たくましい、がっちりとした体格の男でしたね。うわ背はそれほどではなかったが、

「写真は撮ってあるでしょうね」

「それがこれなんですがね」

るようなむごたらしさで、そこから生前の面影を見出すのはちとむずかしそうであっ 出している。 れて貝の剝身のような目玉がとび出している。額がわれて、血膿がとろろ芋のように吹き 瀬戸内海の靄は少しずつだが晴れていくようだ。さっきまで模糊とかすんでいた四国の 磯川警部がまた鞄のなかから取り出したのは、世にも凄惨な顔写真である。片目がつぶ 鼻が半分かけていた。 金田一耕助のように物慣れた男でも顔をそむけたくな た。

日の光りにかがやいている。だからそこに浮かんでいる物体が、 ですな にもハッキリしてきた。そこで船をそっちへまわしてその男を、 甲板へ引っ張りあげたん 人間らしいとはだれ

態だったわけですね。ところであのテープはだれがとったんですか」 た雑音のなかに、波の音らしきもの、汽船のエンジンの音らしきものがあったことを。 「なるほど、甲板へ引っ張りあげたとき、その男はまだ死んではいなかったが、瀕死の状 金田一耕助はそのときようやく思い出していた。いま聴いたテープのなかにまじってい

の風物詩を、テープにおさめてきたというわけです。巡礼唄や和讃の声、そのほかその地国の八十八か所を巡ってきたかえりなんです。その人が旅行記念としていたるところで音 さる大企業を停年退職して、つぎの職場もきまってるそうですが、その間を利用して、四 にのこる民謡など……」 「それはこうです。船客のなかに福井卓也という旅行者がいたんですな。この人は東京の

しつけたというわけですか 「なるほど、その人がとっさの機転でテープレコーダーのマイクを、瀕死の男の口許に差

ういう奇怪なテープがあとに遺ったというわけです」 こでいまあんたがおっしゃったとおり、とっさの機転というやつですけえど、おかげでこ 甲板へ引き揚げられた男はまだ意識があって、しきりになにかいいたそうにしている。そ 「そうそう、さいわい下津井上陸をまえにして、新しいカセットを用意していたんですな。

てい 爆弾が爆発して、 うとしてい きていながら、一言の挨拶もないのは穏当ではないし、それに金田一耕助はこれから赴こ と躊躇を感じたというのは、それより数日まえの十八日に、 磯川警部もその件で忙殺されているのではないかと気遣ったが、さりとてこの方面へ るのではない かし、 へかえるとい る場所について、予備知識をえておきたかったのだ。磯川警部ならなにか知っ いつまでも旅人の心に酔うておれないのが、この男の因果な性分なのである。 一人が死亡、 ちおう岡山県警の磯川警部に電話をしてみた。かれがこの電話にちょっ 、十八人が重軽傷を負うという事件が起こってい 山陽電鉄の電車の た な から か で時限

件は自分の担当外であるからと、勤務時間がおわるとそうそうに駆けつけてきた。 い警部はいあわせて、あいてが金田一耕助とわかるとひどく懐しがった。あの事

思えば金田一耕助と磯川警部の仲も古いものである。

大事件に、鬼首村の手毬唄殺人事件がある。の三重殺人事件でも、ふたりは行動をともにしている。 殺人事件』として記録にのこっている。終戦後金田一耕助がはじめて手がけた『獄門島』 3 たりがはじめて事件をともにしたのは、昭和十二年の秋のことで、その事件は『本陣 その後ふたりが協力して解決した

三十年になる。それだけにいま挙げたような大事件はべつとしても、 いとまあらずというところだろう。はじめのうち磯川警部のほうに、 ~はじめて相会うたのが、昭和 十二年のことだから、昭和 四十二年では 小さな事件だと枚挙 ライバル意識がな ちょうど

のだろうか、賑やかな軽音楽の音が風に送られてきてふたりの耳朶にふれた。 山脈がしだいに全容をあらわして、讃岐富士がまゆずみ色にそびえていて美しい。いまちゃ鰈。 ょうど本島のかげから姿をあらわした連絡船が、足下の下津井港へ入っていく。

山まで引っ張り出したのである。 に関するてんまつらしい。しかも警部はその話をきかせるために、 いだに交わされている会話は、どうやら酸鼻をきわめた殺人事件、 すべてがこのうえもなく美しい国立公園のたたずまいである。しかし、いまふたりのあ ある 金田一耕助をこの鷲羽 いは殺人未遂事件

=

は、雨にけむっていっそう金田一耕助の旅愁をそそった。 まわった。 まに残る江戸情緒ゆたかな白壁の民家や上蔵のたたずまい、さては水に垂れる柳の風情 の午後二時頃倉敷の旅館に旅装をとくと、ぶらりと宿を出て二時間ばかり街を見物して 金田 一耕助はきのうこの方面へやってきたばかりである。きのう、すなわち六月二十三 きのうは霖雨が降りつづいていたので、宿でかりた傘をさして歩いたのだが、

わざと岡山を避けて倉敷に旅装をといたのだが、雨の倉敷はかれの願望を満たしてくれた。 のえるという意味からでも、孤独な旅人の心でありたかったのだ。そういう意味からでも 金田 一耕助とても事件亡者ではない。たまにはなにものにも煩わされ のだ。ことに行く手になにが待っているか想像もつかな 11 現在、 な い静謐 気息をとと

な が 敵 か 疾 機 つ 患 たが、 中 を持つ 陸 爆撃をうけ 軍 VZ すぐそば に応召 に 5 ぴどく Va たっ る結果 して南 0 海 海 面 方 に叩 の島 ふだん な で爆発し きつけら から島へと移動してい たことが 0) た。 H 常 ñ その衝 生活にさし あ た。 る。 その 投下 撃をうけて磯 ž うけて磯川常次郎軍曹は甲された爆弾はさいわい船に ときの るとき、 わ n は 3 な Ξ か ツ かれ ク 7 たが 0 の乗 か つてい n 疲労 腰 いた輸 が蓄積 は 板 か 中 弾

ると腰

、きた。

か

n

to

3

5 すぐ られ も悪 医大に籍をお ごくな 再 陸 は 軍 平太郎は日華事変が起こるとまもなく応召して上海で散華した。 な かった。 61 ぼ か ま兄嫁 にとら い。七つちが て、 ら甥の健 しょ 今度は 二十年 妻の八重 n ていた。 の八重の家に寄寓している。 が再婚を断念せざるをえなかっ は 南 中国大陸を転戦しているうちに、 11 終戦 六 方 戦争中は とのあ の兄の平太郎は戦前 高 0 と同 島 か 5 か いだに健一 でら島 時 岡 いずこもおなじで、健康な男子という男子は に 医 召集解除になって へと経巡っ 大へと進 という一人息 常次 た後、 h 活 郎 た で で医療器 だ 理 12 か 由 かえ たが 十九年いちど復員し 終戦の 子があっ 5 磯 7 員 翌年の 7 十九 家 しょ たが をや あ 年の 次 春無事 男 秋学徒 常次郎 健 7 で お あ てい は n る 復員 兵 秀才で ことは 3 昭 隊 羽 和 n

母の八重もひところは は ま to 、母校 医 日雇 大へ 復籍 11 みたいなことまでやっ たが 学費 の捻出 た。 苦 もち か ろん医療器具店などあと つ 健 台 11 た

力のとりことなった。それはもちろんかれの一種独特の才能に傾倒したことにもよるが、 ての功を警部にゆずって惜しむところがない。そういう恬淡たる人柄に魅了されたのであ ひとつには勝っておごらず、事件解決後、いささかもおのれの手柄を誇ることなく、すべ ったとはいえないが、事件を重ねていくうちに、警部のほうで金田一耕助のふしぎな魅

くらいうえになり、したがって警部はこの年少の友を弟のように愛するいっぽう、 合によっては金田一先生と、敬称をたてまつるゆえんもそこにある。 ニークな才能には心から底から兄事している。警部がときには金田一さんとよび、 らいであり、これは東京の等々力警部とてどうようだった。年齢は磯川警部のほうが五つ 無関心にみえた。あれで商売がなりたつのであろうかと、いつも警部が気をもんでい 金田 一耕助の情熱は事件解決そのものにあり、そこからえられる結果については また場 そのユ お

過労がたたったのであろうといわれている。夫婦のあいだに子どもはなかった。 った。 思えば磯川警部も不幸な人である。かれももちろんいちどは結婚し、妻の名は糸子とい のだが、その翌年はかなく世を去った。元来が蒲柳の質であったうえに、終戦前後の糸子も磯川警部が南方戦線から復員してきた、昭和二十一年の春にはまだ生存して

もさることながら、 その後かれが二度と娶ろうとしなかったのは、糸子にたいするたちがたき愛情 「かずの少ない、つつましやかな性格だったから、警部はこのうえもなく妻を愛 かれがおのれの肉体に、ひとつの大きな欠陥があることを自覚してい

である。家には年頃のお手伝いさんもいるし、週に二回はかよいのばあやさんが洗濯にく 八重は義弟より三つ年上だが、うば桜もいいところだったし、警部はいまでも血気さかん まから八年ほどまえのことだったが、ふたりとも老いくちたという年頃ではなか しかし、そこに不都合がないわけではなかった。警部が兄嫁のもとに引き取られたのは、 つた。

太っ腹な兄嫁は動じなかった。 部に流布されているとしったとき、警部はすっかり恐縮してあやまった。しかし、この かし、世間の口に戸は立てられぬのたとえのとおり、ふたりの仲をうんぬんする声が、

ちにちだって生きていけませんぞな。それよりお勤めさきではどうですん」 してくれてますけんなあ。世間のうわさなど苦にやんでたら、このうるさい世のなか、 「そんなことほうっておおきんさい。健一も清子も清子のさとも、みんなわたしらを信用

てくれますけ いや、はじめはとやかくいわれましたけえど、みんなわたしの気性をようのみこんでい

「ほんならそれでよろし」

ではない。警部の汚れもののなかに、若者のように強壮な男の証をみせられたとき、彼女 をしたことがある。警部は腰に疾患をもっているとはいえ、性能力をうしなってい 注意をうけて、さすがの女傑もこの義弟のものすさまじい禁欲生活に、 八重の断でその問題はそれでけりがついたけれど、その後のあるとき通い 胸もふさが のば あ るわけ る思い P

学費をみついだ。その当時が磯川警部にとっても、八重母子にとってもいちばん苦しい時 代であったろう。それだけに健一はこの叔父を徳として、いまもってふかく肝に銘じてい かった磯 かたもなく焼けていた。いっぽう子どももなく妻を失い、しかも再婚を断念せざるをえな 川警部は、この健一をわが子のようにかわいがり、生活費の一部をさいて健 <u>一</u>の

この嫁の実家から出ているということだが、そんなことを鼻にかけるような清子ではなか の日などよく子どもをつれて、別居している八重のところへあそびにきた。医院開設費は も学校を出ると母校の病院に勤めて、十年ほど研鑽をかさねていたが、その後独立 力をかりて再建した医療器具店は、戦前にまさるともおとらぬ繁栄をしめしてい |市内に内科の医院を開業した。トシは若いが人柄がよいのでよくはやる医者であった。 病院勤めをしているうちに結婚して二児をもうけたが、気だてのよい嫁の清子は、休み それ以来二十余年、日本が復興するにつれて岡山市も復興した。八重が警部の して岡

の働きものの兄嫁のおかげで、はじめて安住の地をえたわけである。 て、そこへ義弟をむかえいれた。それまで警察寮や下宿を転々としていた磯川警部は、こ とはべつに住宅をたてる必要にせまられたとき、八重は廊下づたいに往来できる離れをた か 重は八重でい までは株式組織になっているが、警部も株主になっているという話である。店舗 までは店舗と住宅を別にしている。磯川医療器具店は数名の従業員をつ

ありますまいな」

「ええ、じつは水島沖に刑部島というのがあるでしょう。そこへ渡ってみたいと思うので 金田一耕助は正直にこたえた。

金田一耕助はさりげなく切り出したが、あいての示す反応におどろいて、

「あなた、その島をご存じですか」

うわけではありますまい」 有名な島ではない。いや、ここにちょっとした事件があって、われわれのあいだでこそい ま問題になってる島ですが、金田一さんはなぜその島へおいでんさる。まさか島見物とい 「いや、あなたこそどうしてその島をご存じなんですか。刑部島は瀬戸内海でもそれほど

依頼人の名誉のためにそこまではいえんとおいいんさるんで」 「いや、それはあとで申し上げるとして、金田一さんこそどうしてあの島へお渡りんさる。 「警部さん、 その島になにかあったんですか、ちかごろ。警察の手を煩わすような

たたみかけるような警部の権幕に、金田一耕助は急に声をおとして、

磯川常次郎は茹蛸みたいになって恐縮した。しかし、それだからといって八重はこの義つかあさい。わたしが人知れず始末してあげますけんなあ」 はこの謹直な義弟をしみじみ不憫とおもわざるをえなかった。 「そうじゃけんなあ、常さん、こんどそういうことがあったら、黙ってわたしにわたして

弟に、再婚をすすめたりはしなかった。かれの独身の決意のうごかしがたいことをしって いたからであろう。

もこの警部が入いちばい強壮な体質を持ちながら、男やもめであることはしっていた。だ ことにたいして、そぞろ同情の念を禁じえなかったのもそのためである。 からあのさいこの警部が、事件の渦中にたたされたある婦人に、ひそかに恋情をいだいた 毬唄殺人事件のあった昭和三十年頃は、まだそれほどふかい関係ではなかったが、それで お八重さんに会ったこともあるし、健一夫婦やその子どもたちもしっている。鬼首村の手 金田一耕助も長いつきあいだから、警部の境遇についてはだいたいのことは しっている。

第二章 なんでも見てやろう

おいでんさらんかな」 「どういうこと……?」

瀬戸内海の島に蜃気楼みたいな御殿をたてて得意がっていたところが、若い細君が殺され れて、またそうそうとアメリカへかえっていった人物のあったことを」(『蜃気楼島の情熱』 てしもうた。おまけにあやうくその犯人に仕立てられそうになったところをあなたに救わ 「あれは昭和二十九年のことになりますけえど、やはりアメリカがえりの成功者が、この

金田一耕助は莞爾として、

のはそのことなんです」 ね。さっきわたしの紹介者越智氏のことを、あなたもしっておく権利があると申し上げた 「志賀泰三氏のことですね。警部さん、よくあの人のことをおぼえていてくださいました

「そのこととおっしゃると……?」

ありませんか。あっはっは ら善根はほどこしておくもんだと思いましたな。ここにひとりおとくいさんがふえたじゃ ねてきたのは、志賀泰三氏の紹介状と志賀氏からの手みやげを持ってきたんですよ。だか カと日本を股にかけて、手広く商売をしているようですが、一昨年ひょっこりわたしを訪 「越智氏もアメリカで産をなして、三年ほどまえ日本にかえってきて、それいらいアメリ

金田一耕助はいたずらっぽく笑うと、

ることですからね。そうだ、あなたはしっておく権利があるかもしれない」 「いや、それほど大げさな問題じゃありませんよ。いずれ島へいったらだれの紹介かわか

刑部大膳殿刑部大膳殿 金田一耕助が古ぼけたボストンバッグをさぐって取りだしたのは、りっぱな西洋封筒で

金田一耕助先生持参

裏を返すと東京の一流のホテルの名が印刷してあり、

という名前が上書きとおなじ達筆で。

「警部さんはその名をご存じですか」

金田一耕助はあいての顔色を読みながら、

この人のうわさでもちきりですよ」 もんですな。越智竜平という人物にはまだ会ったことはありませんが、目下このへんでは かもしれん。まあ、いうてみれば島のぬしみたいなじさまで、島では最高主権者みたいな には、ちかごろ会ったことがあります。年齢は八十くらいかな。あるいはもっといってる 「しっています、ふたりとも。ことに刑部大膳というもっともらしい名前をもったじさま

「どういう意味で……?」

「その人、アメリカがえりの億万長者じゃそうですな。そうそう、金田一先生はおぼえて

水島にねえ

をは コンビナートへも部品を納入しているようですよ」 の島うまれ んにとっては運のつきはじめだといってましたが、まあ、同郷のよしみもあり、瀬戸内海 泰三氏だといいますから、昭和三十年以降のことでしょうね。この志賀氏との邂逅がじぶ それがいくらかましな生活ができるようになったころ、はからずもめぐりあったのが だからはじめは日傭取りどうようの身分で、ずいぶん苦労をしたと自分でもいってました。 す。なにしろむこうにひとりも知り合いがなく、密航同様だったそうですから無謀な話で。 けて徒手空拳、青雲の志を抱いてアメリカへ渡ったのが昭和二十三年のことだったそうで すが、戦後の大改革で網元なんて一文の価値もなくなった。そこで島の将来に見切りをつ 年まえの話ですから、ことし四十四歳になるわけです。うちは代々島の網元だったそうで のかぞえかたで二十五歳ですから、 これは なったとじぶんではいってまし かってもらっているうちに、 平という人は終戦後、 越智氏の受け売りですが、あの人も見えすいたうそはつかんでしょう。つまり越 の輸入、むこうがわからい というのが志賀氏にとっては懐かしかったんでしょう。志賀氏にいろいろ便宜 、昭和二十二年に大陸から復員してきたんですね。そのとき当時 在留邦人のなかでも、成功者の部類にかぞえられるよう た。 いまのかぞえかただと二十四歳。それが 商売のことはぼくにもよくわ えば輸出ですね、 そういうことをやっていて、 からんのですが、 いまから二十

金田

一耕助はひと息

いれると、

いまではさかんにやってるそうですよ。しかし、警部さん、その志賀氏がどうかしました ついでにお耳にいれときますが、志賀氏、むこうへかえってから二世婦人と結婚して、

「そうですか、いや、そうでしたか」

だすと、 磯川警部は感慨ぶかげに、みじかく刈ったゴマ塩頭をふっていたが、やがてひと膝のり

刑部島はいまや過疎の島ですからね。そこへ志賀泰三氏とおなじように、大土木工事を起 だと思いましてな。越智氏は刑部島出身だそうですが、島の半分以上の土地を買いしめま こしてるんですよ。わたしゃこのあいだいってみて、おったまげてしまいましたけえど してな。ただし、これにははたから考えるほど、金はかからなんだろといわれています。 をなして日本へかえってきた人物というものは、だれしもおなじようなことを考えるもん 「いやね、金田一さん、わたしゃ越智氏と志賀氏の関係はしりませんでしたが、海外で財

金田一耕助が目をまるくするのを見て、

だけのことは聞かせてください」 とをお耳に入れておきましょう。そのかわり警部さんもあとで、刑部島について知ってる 「いいえ、それ 金田一先生はそれをご存じじゃなかったんですか」 はいま初耳です。じゃここで、わたしが越智氏についてしってるだけのこ

養殖問題がありますけんな」 しろあの人は島のヌシをもって任じておりますし、じっさいの利害関係としても、真珠の おいでんさる刑部大膳みたいなじさまにとっては、 すんじゃ。そうじゃけん刑部島のある種の人たち、 け とれても鼻のまがった魚じゃ買い手もつかんとおみんさい。ですけん漁業に見切りをつけ た漁民たちは、 いれるのが、水島コンビナートの会社たち。ですけんいまや島は過疎化するいっぽうで に浮かんでいる刑部島の漁民たちで、なにせ魚がとれんのじゃからしかたがありません。 つぎからつぎへと島を離れていく。それをまた待ってましたとばかりに受 水島はおそらく目の敵でしょう。 たとえばあなたが頼っていこうとして

したという記事を、新聞で読んだことがありますが、それ、あの島のことだったんです 「そうそう、そういえばぼくもだいぶんまえ、瀬戸内海のどこかの島で真珠の養殖に成功

みもついてたそうです。それが水島のおかげで元の木阿弥というんですけん、大膳じさま かけてきた。いや、いちじはちょっとした収穫もあり、そうとう良質の真珠がとれる見込 絶していたんですが、戦後またやりはじめた。それが粒々辛苦のすえ、やっとものになり むこうから技術者をまねいたりしましてな。戦争中は人手が足りなかったので、いちじ中 「大膳じさまが戦前からやってたんですな。志摩へ人をやったり自分でも見学にいったり、 ないとおみんさい。なにせあの阿古屋貝というやつはとっても水質をえらぶそうですけないとおみんさい。 なにせあの阿古屋貝というやつはとっても水質をえらぶそうですけ ためのコンビナートを不倶戴天のかたきとして、憎悪のかたまりみたいになっとるもむり

「いや、金田一先生のご存じのことはそれくらいですか。ほかになにか……」 「水島がどうかしましたか」

そうしょっちゅう会ってるわけじゃない。なにしろむこうさん、アメリカと日本をいった 「いや、ぼくのしってるのはそれくらいのもんです。一昨年いらいのつきあいといっても、

りきたりしている人物ですからね。じゃ、こんどは警部さんのご存じのことをどうぞ」 「承知しました。 。ただしわたしもまだそれほど、刑部島のことについて精通してるわけじ

まずいちおう前置きをしておいて、やありませんけえど……」

尾ひれが半分なかったり、そんなもん口にはいりゃしませんや」 のへんいったいすっかり魚がとれなくなったとおみんさい。とれても鼻がまがっていたり、 海工業地帯が発展していくにしたがって、海はますます汚染されていくばかり。それでこ でに、あのへんいったいの海は汚染されはじめたんですね。ところがああして大規模な臨 一さんなんかもしっておいでんさると思うが、あそこの埋め立てがはじまったころからす 「ことの起こりは水島ですな。これはちかごろ新聞などで書きたてておりますけん、金田

がマスコミの話題となり、大きな関心をよびはじめた時代でもある。 年代である。 思えば昭和四十二年といえば、日本が高度成長という危険な綱渡りをはじめたば 経済的成長はそれ自体けっこうなことかもしれないが、そのかわり公害問題 りの

「ところが水島工業地帯の吐きだす公害を、モロにひっかぶったのが水島灘のまっただな

を起こしているというのはそのことですか」 「いえ、それは初耳です。ああ、そう、さっきあなたがおっしゃった、島に一大土木工事

海の観光地にするんだとかで、ホテルやゴルフ場、ほかにもレジャー施設を建設中なんで。 地にするんだというて、御殿のような家を新築したばかりか、いくいくはあの島を瀬戸内 それゃ志賀氏がお建てんさった、蜃気楼みたいな奇抜な建物じゃありませんけえど、 んです。しかし、わたしのいったのはそれじゃない。じぶんが日本へかえったとき安息の 「いや、そのことじゃありません。刑部神社もああいう小っちゃな島としてはりっぱなも れ凡愚のものの目からみれば気ちがいざたとしか思えず、そこになにかウラがあるんじ かと、 島 『の駐在なんかもハラハラしてるとおみんさい』

「ウラとおっしゃると……?」

(上)

軍。あの獄門島のぞくしている塩飽諸島なども、村上水軍の根拠地になっておったちゅう ことは金田一先生もご存じでしょう」 の根拠地になっとったんですな。とおくは藤原純友のむかしから、少しくだっては村上水 「金田一さんも獄門島の事件でおしりんさったろうが、ここらの島いったいはむかし海賊

「はあ、それは聞いております」

獄門島の名前が出るとき金田一耕助の顔色がくもるのは、早苗さんのその後のなりゆき

はありありと危惧の色がうかがわれた。 んな。そうですか、越智竜平という人物は水島コンビナートに関係がおありんさるんか」 磯川警部はうわめづかいに、金田一耕助のもじゃもじゃ頭を視つめていたが、その目に

「それで、 金田一先生はいつお立ちんなります。あしたの便船ででも……?」

これこういう島がある、いつかもいったとおりそこがじぶんの生まれ故郷である。そこへ きあいですが、ちかごろわたしが過労気味でへバっているのを心配して、瀬戸内海にこれ たにあいさつしておかなければと思いましてね」 みたいことがあると、そういうわけでわたしも話に乗ったんですが、ここまできたらあな いってしばらく静養してこられたらどうか。もしいく気があるなら、じぶんのほうでも頼 . やあ、それほど急ぎの用事でもありません。じつは越智氏とわたしとは一昨年来のつ

金田一耕助のコロシ文句に、警部は満面笑みくずれて、

それゃそうですぞな。この方面へおいでんさって、わたしを袖におしんさったら生涯恨

みますけんな。それでいつごろ島へ……?」

「刑部島には刑部神社というのがあるそうですね」

昔から島の守り神になっとるちゅう話です。わたしもちかごろしったんです

です。わたしもそれより少しまえにむこうへいっていたいと思うんですが 「その神社の祭礼が七月七日だそうですが、その祭りまでには越智氏もかえってくるそう

なんかが気をもんどるようなしまつでして」 すこしいきすぎじゃけん、いまになにかひと騒動起こるんじゃあるまいかっと、山崎くん 在、山崎宇一ちゅうもんですけえど、その山崎くんなんかもいうとります。 家をたてたりするのは、みんな刑部家の一族にたいする面当てじゃなかろうかと、島の駐 きたものらしい。そうじゃけんこんど越智竜平氏が、お宮をたてかえたり、 けえど、島へいておみんさい、刑部姓にあらずんば越智姓で、これが代々勢力争い 孫とはわけがちがうというわけらしいんですんじゃ。わたしもくわしいことはしりません われわれはおまえたちとちごうて、平家の公達の血を引いている、ずぶの漁師や海賊の子 御殿 それにしても みたいな

つかあさい」 「これはまたわたしとしたことが、とんだ長話をしてしもうて、気にさわったら堪忍して ここで磯川警部はハタと気がついたように口をつぐむと、いくらかきまり悪そうに、

ておきたかったんじゃありません 「とんでもない。わたしはたいへん興味ぶかく拝聴しておりましたよ。島へ渡るまえに少 いけい , に予備知識を仕込んでおきたいと、そういう意味でもあなたにお目にかかっ

ら、しいておたずねせえでもええけえどな」 れたことがあるいうておいでんさったが、それどげえなこと? 業務上の機密ちゅうんな 「それにしても、金田一さん、あんたさっき保養も保養じゃけえど、なにか越智氏 金田一耕助はなぐさめがおである。 磯川警部はその顔をうわめづかいにうかがいながら、

智竜平にてらしあわせてもうかがわれるのである。越智竜平はさいわい成功者として、ア を案じているからであろう。早苗さんのうちも網元だった。網元のその後のなりゆきは越

メリカからかえってきたけれど、早苗さんはどうであろうか。 金田一耕助にはいささか感慨なきにしもあらずだが、警部はもとよりそんなこととはし

淵ちゅうのがのこっているとおみんさい」(鎌倉方の詮議がきびしいとあって、七人みんな入水してはててしもうた。いまでも落人の(鎌倉)の登議がきびしいとあって、七人みんな入水してはててしもうた。いまでも落人の 島へたどりついた。そのじぶんはまだ妻恋島ちゅうて、神社の名も妻恋神社ちゅうとった そうな。落人は七人、しばらく島でくらしていたが、平家が屋島壇ノ浦で滅亡し、 海賊に早変わりをする。まあ、そんな島じゃったらしいんですな。ところが源平時代にな たんじゃそうです。全島越智姓を名のり、ふだんは漁りを業としているが、いざとなると って福原の都を落ちのびた平家の一族のなかで、屋島まで逃げおくれた武 るよしもない。 「ところが刑部島というのがやっぱりそれで、ずうっと昔は越智一族というのが住んでい 士が数名 その後 刑部

話がこみいってくると警部はおくに言葉まるだしになる。

こした。その男の子がのちに神主の職を継ぐにいたって、落人のすえが島の支配階級にの しあがってきたとおみんさい。どういうわけか落人の子孫はみんな刑部姓を名のったが、 こしたんですな。ことにいちばん頭だったもんが、神主の娘とちぎって男の子をあとにの 「ところが入水するまえに七人の落人が、それぞれ島の娘たちとちぎって子孫をあとにの

わたしゃあなたに聴いてもら

ちばん適当な場所かともおもわれるし、それに鷲羽山のすぐ麓にある下津井の港へもご案 警部はなに かふかく思いこんだようすだったが、さてその翌日のこんにちただい

惨な死人の顔写真を見せられたのである。 たりは 鷺羽山 の突端にいて、 金田一耕助は世にも奇怪なテープを聴き、証拠の指輪と、

悪

ねばならん羽目になるかもしれませんからね。じつは探ね人なんですが 「いや、これはぜひきいておいてください。ひょっとすると警部さんのご協力を、あおが

「探ね人……?」

る人物があるんです。越智氏の片腕みたいな人物だそうです。ぼくは会ったことはないん ですけれどね 「はあ、この五月ごろ刑部島へ渡ったことはたしかなんですが、そのまま消息をたってい

磯川警部の顔色がにわかに悪くなるのをみて、 金田一耕助も唾をのみこんだ。

「警部さん、なにかお心当たりが……?」

|名前は……? 年齢は……? | 体の特徴は……? |

るどくあいての顔色をうかがいながら、 磯川警部の声はしゃがれてふるえている。金田一耕助は目をショボつかせながらも、

があるんですが……」 うそう、左の薬指に青木とほった、認がわりの金の指輪をはめてたそうです。ここに写真 「名前は青木修三、年齢は四十二歳、体の特徴はがっちりとしたいわば精力絶倫型で、そ

脚をまえに投げ出している写真である。なるほど厚い胸板、広い肩幅、がっちりとしたた 水浴場ででも撮ったものらしく、パンツひとつで砂のうえに両手をうしろにつき、太い両 スナップだが、一枚は洋服すがたの胸からうえを撮った顔写真。もう一枚はどこかの海 金田 一耕助がボストンバッグを探ってとり出したのは二枚の写真である。いずれも素人 雪 島

> と期待してたんですがね」 「いやあ、雑音ばかりでしたよ。ぼくはまたジャズかロカビリーでも聴けるんじゃないか 「きみ、このテープを聴いたのか」

リュックサックがおいてあった。

顔の感じは悪くない。笑うと口許からこぼれる白い八重歯が印象的だった。うわ背は一メ 恐縮しながらもさわやかに笑っている。標準型の好男子にはほどとおいが、 日焼けした

ていて、半袖のシャツからのぞいている両腕も、太くてたくましく強そうだ。

ートル七五くらいはあろうか、いまどきの青年としてはめずらしくがっちりとした体をし

「きみ、ほんとうにこのテープ聴かなかったろうね」

青年は呆れたように目をまるくして、

磯川警部はもういちど念を押した。

だから。……それともそのテープ、ひとに聴かれちゃまずいような、機密事項でも吹きこ んであるんですか」 「おじさんは疑いぶかいんですね。なんならスイッチを入れてごらんなさい、雑音ばかり

若者の目はちょっぴり好奇心に輝いた。

V

って持ってくはずですからね」 「おじさん、ぼくが盗みをはたらこうとしたんだなどと思わんでくださいよ。それなら黙 からいきたまえ」

あった。 とつぜん磯川警部は弾かれたようにうしろをふりかえった。金田一耕助とてもおなじで

テープレコーダーをいじっている。ガーガーというさいしょの雑音が、鷲羽山の突端に立 って話しこんでいたふたりの耳朶にふれたのである。 さっきまでふたりが腰をおろしていた石のベンチに、ひとりの若者が腰をおろしていて、

「こら、なにをする!」

と思って……」 って、あわててスイッチを切った。その権幕にあいては辟易したように首をすくめて、 「すみません、それ、おじさんのもんですか。ぼくはまた、だれか置き忘れていったのか 警部は大股にそのほうへとってかえすと、あいての手からテープレコーダーを引ったく

なジーパンをはいている。靴はズック製である。うえに着ているクリーム色の半袖のスポ 般化してはいなかった。その若者も頭をG・I刈りにしていて、脚には身にくいいるよう 二十か二十二、三の若者である。その頃は長髪は一部芸能人にかぎられていて、まだ一 ャツの胸元には

I WILL SEE EVERYTHING ONCE

と、いう文字が弧の型に湾曲して藍色に染めだしてある。石のベンチのうえには大きな

いちどはなんでも見てやろう族というやつでしょう」 はちがってましたね。服装はラフだが、わりに身だしなみがよかったじゃありませんか。 「さあ、ぼくもヒッピーの定義はよくしりませんが、いうところのヒッピー・スタイルと

「えつ、それ、なんのことです」

「あれ、警部さんは気がつかなかったんですか。あの男のシャツのまえに、大きく染めだ

してあったじゃありませんか」

そして、金田一耕助は唄うように口ずさんだ。

"I will see everything once."

どうして気がつかなかったのか、警部はあの若者のどこに心を奪われていたのか、さすが はよくしっている。それにもかかわらず、あの若者の胸に大きく染め出したモットーに、 磯川警部という人が職業柄、そうとう観察眼の鋭い人物であるということを金田一耕助

きの話のつづきをきかせてください。テープの声のぬしと刑部島との関係は、どうしてわ ちかごろはやる脱サラ、脱都会というやつでしょう。それより、警部さん、さっ

の金田一耕助もそれに気がつくまでにはそうとう時間がかかったのである。

「ああ、それ……」 ったんですか」

警部はなぜか夢からさめたような調子である。

41 「それは刑部島の村長、刑部辰馬というもんから、捜索願いが出たからです。島に逗留し

一耕助は神戸出身の友人をもっているが、その男の言葉の訛りとよく似てい 標準語を使っているがどこか上方訛りがある。神戸か大阪か、おそらく神戸だろう。

やみに手をだすんじゃないぞ。たとえ盗みをはたらくつもりはなくともな」 まあ、いい、いいからいきたまえ。ここでいっとくが、これにこりてひとさまの物にむ

「承知しました。以後気をつけます。ではこれで失礼、そちらのもじゃもじゃ頭のおじさ

負った若者のうしろ姿をくいいるように凝視してい 島のほうではなかったか。金田一耕助はちょっと胸騒ぎをおばえたが、警部にはそのこと について語らなかった。しかし、警部もそれに気がついていたのか、なぜかリュックを背 眼鏡を目にあててしきりに海上を眺めていたが、あの双眼鏡のむかっていた方角は、刑部 き、一〇メートルほど離れた岩頭に立って、それとおなじリュックを背負った若者が、双 に見おぼえがある。さっき石のベンチに腰をおろして、テープの声に耳をすましてい へ立ち去った、ジーパンの左右の尻をプリプリさせながら。金田一耕助にはそのリュック ペコリと頭をさげると茶褐色の大きなリュックを背に負って、ゆっくりとむこうのほう

、警部さんはあの青年がよほど気になるようですね

りかえったその額には、うっすらと汗がにじんでいる。ノドの奥で空咳をして、 「金田一さん、ああいうのをヒッピーというんでしょうか」 警部はあきらかに虚をつかれたのである。ハッとわれにかえって金田一耕助のほうをふ 「解剖の結果は?」

雲竜丸の一件がございましょう。そこでわたしが、まあ、責任者として出向 そこで駐在の山崎くんからわれわれのほうへ報告があったちゅうわけじゃが、そのまえに わけですな」 いうわけじゃが、そのまえに島では青木氏の身のなりゆきは、だいたいわかってたちゅう から消息不明になってしもうた。そこで二十四時間待って村長から島の駐在へとどけでた。 「ところがこの青木春雄という人物、えろうその島が気にいったとかで二週間におよぶ長 いろいろ故老の話をきいてまわったりしていたそうじゃけえど、それが十九日の晩 17 てい つ たと

「と、おっしゃると……?」

れば、瀕死の状態となってから投げ落とされたのか……」 とおりあやまって顚落したのか、だれかに突き落とされたのか、それとももっと悪く勘繰 人入水したという……そこからあやまって顚落したんじゃないかというのは、崖の途中に もありました。 レーン・コートがひっかかっているのを、島のもんが見つけたんですな。そのレーン・コ 「きのうも申し上げたとおり、落人の淵ちゅうのがございましょう。昔、平家の武士が七 トは青木氏が錨屋へやってきたとき着ていたもんで、げんに AOKI とローマ字の刺繍 だから、そこから落ちたことはまちがいはないとしても、島のもんがいう

43 だから酒に酔うてふらふらと、落人の淵へいったのかもしれませんが、なんであんなとこ 内臓には異状なしです。そうとう多量のアルコールを飲んでたことは飲んでましたがね。

甲板で青木氏が息をひきとった翌日のことでしたな ている青木春雄という観光客が、一昨日の晩から行方不明になったちゅうてな。

「それで警部さんが出かけられたというわけですね」

秘になっとおりますけん、金田一さんなんかも島へおいきんさってもそのおつもりで」 「承知しました。 「あの奇怪な断末魔の言葉がございますけんな。ただし、あのテープのことはいっさい極 ところで村長の刑部辰馬という人は、やはり大膳さんの親類縁者かなん

「甥っこじゃそうな。そういえば、村会議員なんかもほとんど刑部姓でしめとるちゅう話

かですか」

「それで警部さんがおいでになると……?」

ような年寄りでしてな」 刑部大膳、 ったそうです。そこの主ちゅうのが、あなたがこれから訪ねていこうとしておいでんさる ふらりと島へやってきたのは五月五日の夕方のこと、錨屋ちゅう旅館へわらじをぬいだと ればじゃが、島のもんもまさかみえすいた嘘はつきますまい。青木春雄と名乗る旅行者が 「いや、これはこういうことになりよるんですな、島のもんのいうことがほんまじゃとす みんさい。その錨屋ちゅうのが島でたった一軒の旅館で、昔はよくはやった女郎屋じゃ 八十何歳かのじさまじゃが、これがもうカクシャクという言葉を地でいってる

「それは越智氏からもきいてるんですが、それで……?」

「どういう人物です。青木というのは……?」

うべお目にかけた写真ですが、なんとなく越智氏に感じが似てますね。スケールは越 なんでなにかまちがいがあったんじゃないかと気にかかるといってました。そういえばゆ どはじめて日本へつれてきたんだが、いまでは弟のようにかわいがっている。四十二の厄 がかんばしくなかった。しかし、根は りあったんだが、もとは賭博師かなんかやっていて、在留邦人のあいだではあんまり評判「ぼくもよく知りません。会ったことは全然ありません。越智氏の話によるとむこうで知 のほうがうんと大きいですが、越智氏自身どっかギャンブラーめいたところがありますか いいやつなんでいつか親しくなってしまった。こん 智氏

「女房子供は……?」

こへいくとおなじ独身者でも越智氏のほうは、うんとストイックでシビアな感じがするん ですがね」 「いや、まだ独りもんだそうですよ。人間到るところに女ありという主義だそうです。そ

金田一耕助はまた刑部島のほうへ目をむけて、

でシャム双生児を見たとでもいうんですか」 「それにしても、警部さん、さっきのテープはどういうんでしょう。青木修二氏は刑部島 問題はそれですね。年齢からいっても分別盛り、まさか子どもみたいにありもしない幻

ろへいったのか、落人の淵というのは刑部神社のすぐそばにあるんですが、青木氏の泊ま て十時頃、 日の晩酩酊なさったあげく、パジャマ……このパジャマは自前なんですが、それに着かえっていた錨屋からでは、そうとう坂を登らねばなりません。錨屋の女中の話では五月十九 日ひと晩待っても現われんので、駐在へとどけ出たちゅうんですが……」 お床におは いりんさったちゅうとるんですが……それが朝になって姿が見えず

「遺留品は……?」

ないんですが、それが贋物とあってはな」でいました。ですけん身帯を調査する手がかりといっては、宿帳に記入した住所氏名しかていました。ですけん身帯と 男の化粧道具のはいったケース。金は紙入れと小銭入れにわけて八万三千五百円ほど持っ スひとつなんですが、これはわたしも調べてみました。しかし、内容は着がえの下着類に 「脱ぎ捨てていった洋服にワイシャツ、ネクタイ、下着類、靴、靴下、ほかにスーツケー

そこで警部は探るようにあいてを見て、

それゃまたどうして……?」 「青木氏は越智氏の知り合いだということを、かくしておいでんさったようじゃけえど、

然きいていなかったんですが、もしそうだとすると、自分のやっていることが、島の人た 氏が神社を修復 ちにどういう印象をあたえているか、その反応を知りたかったんじゃないでしょうかね 「ぼくにもよくわからんのですが、あなたのお話をきいていくらか想像はできます。 したり、ホテルやゴルフ場、レジャー施設を建てているということは、

としているのである。 こうしてこの親切な警部は金田一耕助の頭に、 刑部島についての予備知識を注入しよう

うて留守じゃったけえどな」

それにしても、あのテープに遺された言葉はなにを意味するのか。単純な章句の羅列だ

から金田一耕助は暗記している。

あ あ いつは腰のところで骨と骨とがくっついたふたごなんだ。 いつは体のくっついたふたごなんだ。

あいつは歩くとき蟹のように横に這う……。

あいつは平家蟹だ……平家蟹の子孫なんだ。

鵼のなく夜に気をつけろ。 の島には悪霊がとりついている、悪霊が……悪霊が・

その島の名は……その島の名は……その島の名は……

みちた体験をしたのだろうが、それはいったいなんだろう。 金田一耕助の心は暗く、なにか目眩くような思いであった。 いずれにしても青木修三はあの島で、よほど恐ろしいものを目にしたか、あるいは恐怖

その悪霊島はいま金田一耕助の眼下で、しずかに、おごそかに暮れなずんでいく。

「はあ」

端にのぼりますけんな。離島とはいえたかが瀬戸内海です。しかし、金田一さん」 覚を口走ったとは思えませんが、さりとてそんな異形なふたごがいたら、すぐ世間の口の

双生児じゃありません。体はそれぞれちゃんと独立してますけんな」 とどっちがどっちとも見分けのつかんほどよく似たふたごですけえどな。しかし、シャム 「刑部島にふたごがいることはいるんです。一卵性双生児というやつで、われわれが見る

「男性ですか、女性ですか」

おふくろさんはそれゃきれいです」 で、なかなかきれいな娘じゃけえど、しかし、おふくろさんには足下にもおよびませんな。 「神主の娘ですがな。真帆、片帆ちゅうて、年は十九、昔でいえば番茶も出花という年頃

「おふくろさんというのは神主さんの奥さんですか」

うのはそりゃすごいような別嬪で、まあ、いうてみれば島の女王様というところでしょ ですな、その巴御寮人にとっては、大膳じさまは、大叔父になるんじゃそうなが、巴とい 「そうです、そうです。島では御寮人さんでとおってますがね。名前は巴……巴御前の巴

「なるほど、そこで大膳さんが外戚の猛威をふるうて……?」

神主の守衛ちゅうのが婿養子じゃそうです。わしがいたときには神主は倉敷へいてるちゅ 「いや、ところが巴というのは家つき娘じゃそうな。先代神主の一人娘で、だからいまの

大畠という順になるが、吹上が主港になっていて、四国との連絡船はおもにここに着います。 小さな漁船がひしめきあっていた。 とになってい そこが港になっている。 、岬がいくつか海にむかって突出している。その岬と岬のあいだが入江になっていて、金田一耕助が鷲羽山から見下ろしたところからみても、下津井は複雑な地形をなしてい る。 港の沖にはそれぞれ防波堤が構築されているから、 だから港が四つあるという。西からかぞえて下津井、吹上、 入江のなかはどこも 田浦、

下津井の港はまだ明るい。

るとそうとうりっぱな船が横着けになっている。 磯川警部の案内で金田一耕助がお りていったのはその吹上の港だったが、船着き場をみ 磯川警部はうれしそうに笑いながら、

「ああ、着いとおりますわい、やっぱり」 「なにがですか」

「あそこに横着けになっとる船ですんじゃ。船腹に書いてある文字を読んでおみんさい 金田一耕助はいわれたとおり船の名前を読んでみて、おもわずハッと磯川警部の顔を視

「雲竜丸」

いうの

あきら

かに、

49 思うてな、 けさがた海運会社のほうへ連絡をとっておいたとおみんさい。 V) ちおう船長に会うておいてもろうたほうが、 さっき磯川警部の口 か ら出た名前である。 なにかに つけて確 すると、 かじゃろうと

__

まともまきよて、まぎりよて下津井港は はいりよて出よて

三十五挺櫓の 御座船が船が着くよ 下津井港

の六月二十四日、 警部の案内で金田一耕助が鷲羽山から、その下津井港へおりていったのは、昭和四十二年 ときおりテレビでも放映される。 謡われる下津井節は、日本民謡全集のなかにはいってレコードにもなっているし、 、午後五時をちょっとすぎたころであった。 したがって知っている人も少なくないであろうが、 磯川

れかげんになっていた空が、いつかまた曇りぎみになってきていたが、それでもなおかつ ことにこのへんは東京にくらべるとだいぶん日の入りがおそいのではないか。いったん晴 午後五時すぎといっても一年でいちばん日の長い時候である。夏至は一昨日であった。

ような、態度なり口のききかたであった。 しく、この年齢なり体格では、戦争中陸軍か海軍にとられていたにちがいないと思われる

……あの金の指輪の男ですな、あの男について東京から調査にこられた金田一耕助先生、 な。金田一先生、こちらが雲竜丸の船長宮本勇雄くん、宮本くん、こちらあの男のこと 「いやあ、たびたび手間をとらせて申し訳ないが、いちおう念をおしておきたいと思うて

われわれ警察関係のもんのあいだでは、有名な人ですけん、そのおつもりで」

あわせた人びとの目が、つよい好奇心にかがやいたことはいうまでもな 宮本船長と金田一耕助は適当に挨拶をかわしたが、その船長は申すにおよばず、そこに

ら、待合室のなかを見まわして、 しかし、金田 一耕助はそういうことには慣れている。もじゃもじゃ頭をかきまわしなが

ちど、あのときの情景をきかせていただきたいんですが……」 「しかし、警部さん、いいんですか、こういう席で? ぼくこの船長さんの口からもうい

すかさず宮本船長が言葉を引きとって、

ん座を外してくださる約束になっとおります。ただこの人は……」 「いや、金田一先生、そのご心配にはおよびません。警部さんがいらっしゃったらみなさ

た人物を指さして、 と、小腰をかがめてぞろぞろと出ていく人びとのなかにあって、ただひとりあとに残っ

「あのときわたしの船に乗っていたかただし、なにか警部さんのお耳に入れときたいこと

津井に着いて、六時出帆といいますけん、それじゃその時刻までに吹上へいっとるけん、はここと坂出のあいだをいちにちに、何往復かするらしいんじゃが、夕方なら五時半に下 船長に待っていてほしいとそう打ち合わせしといたんです。きょうは予定より少し早目に しい。待たせちゃ悪いけん、さあ、急ごう」

それにしても磯川警部という人が、念には念のいる性分だとは知っていたが、 道理でさっきから磯川警部が、しきりに時間を気にしていたと思い当たった。

この措置には金田一耕助も頭がさがった。かれも島へ渡るまえ、いちおう船長に会ってお きたいと思っていたところである。

から雲竜丸に乗り込もうとしているらしい乗客が数名、粗末な円卓を中心に話に花を咲か まった腰高障子のなかは土間になっていて、そこに船長の制服を着た男を中心に、これ · う看板のあがった家が一軒ある。見たところふつうの人家と変わりはないが、ガラスの 船着き場のすぐそばに粗末な人家がならんでいるが、そのなかに○○海運会社待合所と

お待たせ。ずいぶんお待たせしましたかな」

わたしもいまきたばかりです。なにかまたあの件についてお尋ねがあるそうで

服を着た男である。年齢は四十五、六か。潮風と陽にみごとに染めあげられた膚はたくま 粗末な木造の椅子から立ちあがって、直立不動の姿勢で挙手の礼をしたのは、船長の制

込んだこともあるそうで、それを警部さんのお耳に入れときたいいうんで、この時間にこ はあんたにおまかせします。あんたどうせ今夜は倉敷泊まりでしょう。お羨ましいご身分 こへ来てもらったんです。それではわたしは急ぎますからこれくらいで。山下さん、あと ただこの人青木という金指輪の男にまえにいちど会うたことがあり、その後ちょっと聞き けえど、この人もあの場にいあわせたんですが、なんにも聞こえなんだいうとられます。 置いてゆくような紳士的な人ですけん、おそらくそうでしょう。だからここにいる山下さ ん、ご紹介しときましょう。こちら坂出で学生服をあつかう商売を手広くしている人です

すから、まだだれにも洩らしてはおりません。あの福井さんという人もテープをあのまま

下なる人物を尻目にかけると、つと立ち上がって例のごとく、直立不動の姿勢で挙手の礼 室を出ていった。雲竜丸の出帆の時刻である。 である。くるりと踵をかえすと磯川警部や金田一耕助が礼をのべるまもなく、大股に待合 この謹直そうな船長がはじめてみせた笑顔であった。なにかくすぐったそうな笑顔で山

鼎の形に腰を下ろした。 その雲竜丸が波止場を離れるのを見送って、三人はまた粗末な丸テーブルをかこんで、

すみません。お忙しいところをお引きとめして……わたしゃこういうもんですけえど」

い。金田一耕助とおなじくらいだろうが、肉付きゆたかで色も白いほうである。髪をきれ 山下という男は尊大と卑屈とが同居しているような男であった。 背はあんまり高

とはご存じじゃけん

紹介いたします。で、警部さん、わたしはこの人になにをお話ししたらいいんです」 おありだそうですけん、ここに残ってもらってもいいでしょう。お名前職業はあとでご や、こちらのご質問に答えていただければよろしいんで。金田一先生はだいたいのこ

言葉はあきらかに軍隊調だった。しかし、そうはいうものの金田一耕助は、 だけで十分であった。 えるべき知識はなにひとつえられなかった。だがべつに失望はしなかった。磯川警部の話 よかったし、宮本船長の応答も明快だった。こうして開き直って応対するとき、 そこで金田一耕助と宮本船長の一問一答がはじまった。金田一耕助の質問ぶりも要領が 新しく付け加

ただ、ここに注目すべきはつぎのような宮本船長の発言だった。

しにだけは聴かせてくれたんです。そのわれわれは警部さんの厳重な注意があったもんで れを福井さんがあとで再生してみて、あまりにも内容が奇っ怪至極なもんですから、 た。ただマイクだけがやや正確に、あの男のいまわのきわの言葉をとらえたんですね。そ わたしなどもあの男の頭を膝に抱いてたんですが、なにをいってるのかチンプン ね。しかし、だあれもあの男の言葉を正確に聴き取った人間はい 男ですね、あの男を取りまいてそうとう大勢の人物がいました。男も女も大人も子どもも 個井さんとわたしのふたりきりなんですよ。あのとき、青木という認めのついた金指輪の 「ところがねえ、警部さん、あのテープの声ですが、あれを聴いたのは、録音した東京の なかったんです。げんに

んな」

女房ももちろんわきまえていて許してくれとるこってすから、ここで打ち明けときますけ 生最大の楽しみいうことになっとるんですわ。これは同業者もみんな知っとるこってすし、 曜日の朝早くむこうを立ってこちらへ着くと、児島で用件をすませ、それから倉敷へいて 一泊する。そして日曜日の夕方の便船で坂出へかえる。いまんところ、これがわたしの人

「なるほど、浮気は男の甲斐性というわけですな」 カメさんはうすく頰をそめながら、それでもいくらか得意そうであった。

のだ、金田一耕助のためにも。その金田一耕助は目をショボショボさせながら控え目であ している場合ではない。あの青木という金指輪の男に関するどんな些細な情報でもほしい 警部はそういい かけて口をつぐんだ。いまはあいてをからかったり、おひゃらかしたり

ょうど土曜日でしたけん」 「なるほど、それで五月二十日の朝雲竜丸に乗っておいでんさったんですな。あの日がち

左の指にはめていた金の指輪、いまどきああいう指輪をはめている男はめずらしいですけ ろがあの騒ぎでしょうが。わたしゃ海から引きあげられたあの男をみて、すぐどこか 「そうそう、そういうこってす。あの船長の宮本君とももう古いなじみですんじゃ。 ぼえがあるような気がしましてな。いや、顔はあのとおり滅茶滅茶でしたが、

う年かっこうだが、それにしては洋服もネクタイも派手好みである。 、に左分けにしているが、小鬢にソロソロ白いものがまじりはじめている。五十前後とい

名が印刷してある。 名刺を見ると「学生服卸販売業」という肩書きがあり、名前は山下亀吉、坂出市の町の

よですな、わっはっは」 カメさんですよ。仲間うちではカメさんでとおっとります。もしもしカメよ、カメさん

腹をゆすって笑いあげるところに、尊大と卑屈が同居している感じがある。

「そうそう、そのこと、そのこと」 「それで、山下さんがわたしの耳に入れておきたいこととおっしゃるのは?」

山下亀吉氏は円卓のうえに体を乗り出すと、

生産されとるちゅうことを聞いておいでんさると思うが」 服の本場じゃちゅうことを。日本全国で生産される学生服の、約七〇パーセントは児島で 「警部さんは土地の人ですけんようご存じでしょうけえど、この隣の児島という町が学生

「はあ、それはわたしも知っとおります」

用するとわずか六十分の距離ですけんな」 「ですけん、わたしは週に一度は児島へきます。四国と本土と離れていても、連絡船を利

「それがな、 警部さん、わたしがこちらへくるのは毎週土曜日ときめとりますんじゃ。土 それで……?」

「なるほど、

「なるほど、そのお小夜さんがなにか知っておいでんさったというわけで?」

くれますんじゃ。つまり、土曜日の夜の情事ちゅうわけですな。わっはっは」 の秋からわたしとねんごろになりましてな、土曜日の晩だけわたしのためにあけておいて 敷でも有名な一流のクラブですんじゃ。そこのホステスをやっとるんですが、それが去年 せんのじゃ。そこまでいくと女房にもすまんけんな。お小夜はモナミちゅうてな、倉敷へ しゃお小夜を丸がかえにしとるわけじゃない。つまり二号として囲うとるわけじゃありま いてきいておみんさい、すぐわかる。警部さんなんかもご存じじゃないかっと思うが、倉 「いや、それはそうじゃありません。これはわたしの言葉が足りんかったんじゃが、わた メさんは隅におけない。なかなか味なことをいう。

「ああ、なるほど。モナミならわたしも名前は知っとりますが、そこへお小夜さんに会い 磯川警部はまじめいっぽうで、手帳にメモをとりながら、

たんじゃ、あの金指輪の男にと」 いて、椅子に腰をおろしたとたん思い出したんです。ああ、そうだ、いつかこの店で会う やまたああいう雰囲気が好きでしてな。あの日、五月二十日の土曜日の晩もモナミへ出向 わたしゃいつも九時ごろむこうへいて、お店が看板になるまで粘っとるんですな。わたし 「そうそう、お小夜じゃとてわたしのためにお店をやすむわけにはいかん。そうじゃけん、

(上)

にいかれたんですな

の蒲鉾がただった。 そういう山下亀吉氏も金の指輪をはめている。太めは太めだが、しかし、それはふつう

さい。いそいそとな、あっはっは」 たんじゃが、さて、あの日児島で用件をすませると、いそいそと倉敷へいたと思うてくだ 青木、青木と心のなかで繰りかえしてみました。しかし、そういう名前にも心当たりはな なんにもいわずにすませたんじゃが、指輪の印鑑に青木という字が彫ってあるときいて、 い。取り引き先にもそういう苗字のもんはおりません。それであの場はだんまりですませ 「ところが、あのときはどこで会うたのかどうしても思い出せなんだんですな。だから、

と好色そうに濡れてくる。 カメさんはツルリとゆたかな双頰を、まるまっちい両の掌でなであげた。目がヌラヌラ

夜ちゅうのがじつにええ子でな、わたしにようしてくれますんじゃ。あの手この手を使う 夜子というんじゃが、これはもちろん源氏名でな、わしゃお小夜とよんでます。そのお小 それに馴れそめてからちょうど半年、いまがいちばんええときとちがいますか。名前は小 「それゃ、年甲斐もないといわれるかもしれんが、一週間にいちどの逢う瀬ですけんな、 わっはっは。そこであの晩もお小夜にあいにいたと思うてください。いそいそとな、

羨ましそうに目をショボつかせている。 恋に狂うた初老の男とはこういうものかと、金田一耕助はおのれに経験がないだけに、

字と、あの金指輪が印鑑になっとるちゅうことをお小夜にきいたんですな あしてママさんまでついているんですちゅうてました。そうそう、そのとき青木ちゅう苗 使いのあらいお客さんじゃけえど、お会計のほう大丈夫かちゅうてな。そしたらお小夜が いうのに、それは大丈夫でしょう、あのお客さんこれで二度目じゃけえど、このまえもず 、ぶんお使いになりました。ほんにこのへんには珍しい金使いのきれいな人ですけん、あ

たとおいいんさるんですな」 「すると青木という男が五月十三日の晩、その店へあらわれたのは、それが二度目じゃっ

てみたと思うてください」 目じゃいうとったが、さいしょにきたのはいつごろじゃったとか、しごくさりげなく尋ね うた、あのいやに景気のええ男、あの男、あれからもきたかとか、たしかあのときが二度 しれませんけんな。そいで、まあ、世間話みたような調子で、このまえの土曜日ここで会 リしたことをいうてお小夜を驚かせてしもうたら、おあとの楽しみに差し障りがあるかも ことを思い出したんです。そいでそれとなくお小夜にきいてみたんです。あんまりハッキ の男が息を引きとりましたな。その晩わたしはモナミへいてそのとたん、まえの土曜日の をきいてつかあさい。つまり、こういうこってす。五月二十日の朝、雲竜丸の甲板で、あ 「そうそう、そういうこってすけえど、警部さん、まあ、もう少し落ち着いてわたしの話

「なるほど、それで……?」

警部は手帳をテーブルのうえにおき、右手に握った鉛筆を斜にかまえている。

は警部どうよう緊張しているにちがいな 磯川警部は緊張した。金田一耕助はあいかわらず目をショボショボさせているが、内心 67

「五月十三日にきまっとりますがな。そのまえの土曜日ですけんな。さっきもいうたとお つかとおいいんさったが、その正確な日はわかりませんか」

磯川警部はちらっと金田一耕助のほうへ目をやった。 わたしゃ上曜日以外にそこへいたことがありませんからね」

てすな。いまどき印鑑用の金指輪はめとるなんて、珍しいこってすからな」 うそっちへ気がいったちゅうわけですが、そのうちにあの金指輪が目についたちゅうこっ 痛かろう……ま、さもしいようじゃけれど、そげえなこと思うたもんじゃけん、なんとの て、さかんにお飲みもんを奪っとるんです。おなごにあないに飲まれたらさぞふところが ママさんはじめモナミにはホステスが八人いるんですけれど、半分以上もそばへ引きよせ 「わたしの目がまたなんでその男にいったかちゅうと、そいついやに景気がええんですな。

「それはもうまちがいなし。そのときそばにいるお小夜にきいてみたんです、ずいぶん金 「なるほど、するとそれは五月十三日のことにちがいありませんな」

「で、どういうことがおわかりんさったんです」 警部はちらっと金田一耕助のほうへ目をやりながら、ちょっと緊張した目の色になった。

ちゅう男が倉敷にどういう用事があったかちゅうこってす」 「いや、これはもう警察のほうでも、調べがついとりんさるのかもしれんけれどな。青木

しとったんですか」 いや、われわれは青木と倉敷の関係もまだつかんではおりません。青木は倉敷でなにを

色事をほじくりかえすようなことは、やめといたほうがええとかなんとかぬかしくさって、 小夜に頼んだとおみんさい。しかし、そのときはお小夜はまだ真剣じゃなかった。 ナミへいて、まえの土曜日の晩そこであの男に会うたんじゃということを、卒然として思 出した……いうところまでさっきお話ししましたけえど、そいでお小夜にそれとなくき いいうんです。そこで青木が百合子にどないな話をしとったか、きいてみてほしいとお てみたら、十三日の晩も百合子という子がつきおうて、どこかのホテルへしけこんだら や、五月二十日の朝、青木が雲竜丸の甲板で息を引きとりました。その晩わたしはモ

悪 霊

島

61

わたしの話にのろうとはせなんだんですんじゃ。ところがその翌日青木のことが小い

ながら、新聞の記事になって出たでしょうが。青木という印鑑つきの金指輪をはめた男

然の気を養うつもりじゃとそういうて、お小夜なんかも誘われたそうな。なんちゅても店点へ渡るつもりじゃけえど、島へ渡ってしもうたら女っ気なしじゃけん、今夜は大いに浩 合子という子と話がでけたらしいいうとりましたが……」 ではお小夜がナンバー・ワンですけんな。お小夜はそれを断わったんじゃが、すると、 jo とじゃったけに、五月三日か四日ごろのことじゃったと思う。なんでもこれからどこかの 「そしたらあれからのちには来なんだ。さいしょ来たのは月が変わってからまもなくのこ

警部の指先を視つめながら、 そこまでいってから、山下亀吉氏は急に不安そうな顔色になり、手帳に書きとめている

んでしょうな」 「警部さん、こういうこというても、まさかモナミに迷惑がかかるようなことはありゃせ

かかるようなことはいたしませんけん」 っさいご無用にして、知ってるかぎりのことを話してつかあさい。決してだれにも迷惑の 「その斟酌にはおよびません。わたしとは係りがちがいますけんな。そういうご心配はい

警部はあいてを勇気づけるように、優しい目をして笑っている。 カメさんも安心したように頷きながら、

んてことになると、わたしゃ四方八方立つ瀬がのうなりますけんなあ」 「そうしてください。 山下亀吉氏はもういちど念を押しておいて、 。わたしの口から洩れた言葉がもとになって、お店に手がはいったな

部島の錨屋へ、姿をみせたのは五月五日の夕方だったというから、これで符節があってい てその日の夕方、女日照りの過疎の島へ渡っていったのだろう。青木春雄と名乗る男が刑 おそらく青木修三は百合子をあいてにひと晩かかって、欲望のアカを洗い落とし、そし

うて、探偵みたいなまねおしんさったと、さっきいうておいでんさったが」 「それで……?」山下さんのお調べんさったんはそれだけですか。お小夜ちゅう娘をつこ

「それですん、警部さん、話はこれからじゃっと思うてつかあさい」 山下亀吉氏は膝をのりだし、

ないかっときかれたそうです」 がわかってきたんですな。青木いう男が渡ったのは刑部島で、そこに刑部神社というのが なんの用事でどこの島へ渡るとも、かいもくわからず別れたそうな。ところがそれから十 日ほどたって十三日の晩に会うたときには、ほんのちょっぴりじゃけえど、具体的なこと 「百合子がさいしょ会うたときは、まあ、それくらいの話で、あいてがどこのだれとも、 そこの神主は刑部守衛ちゅうんじゃが、その男、女房子どもを島におっぽりだして、 か玉島に住んどるちゅう話やけえど、おまえその男についてなにか聞いたこと

63 磯川警部と金田一耕助はそこでまた素速い視線をかわした。青木修三は越智竜平の密命

けえど、島は女日照りやそうじゃけん、今夜はこってりつきおうて貰うぜとかいうて、そ な。そこで百合子が憶えとったそうです。はじめてつきおうたのが五月四日の晩じゃった ええ男ですけん、百合子もまんざら悪うはなかったらしいんですんじゃ。だけど、警部さ れゃひつこかったそうです。そのかわりその見返りはちゃんとした。ともかく金ばなれの いうことをな。そのとき青木がいうたのに、あしたはなんとかいう島へ渡るつもりじゃ に警察が調べにこんとも限らんけん、ここでハッキリしといたほうがええじゃろういうて とも相談のうえその新聞をつきつけて、百合子ちゅう子にきいてみたとおみんさい。い が、雲竜丸の甲板で息を引きとったちゅうことが。その船ならわたしが乗っとったにちが いないちゅうことをお小夜もしっとります。そこでお小夜も急に真剣になって、ママさん

と、カメさんは急にまた不安そうな目つきをして、

とがあったら、わたしゃみんなに顔向けがでけませんけんな」 「こないなこといっさいがっさい極内ですぜ。これでもしモナミに迷惑がかかるようなこ

が足りませんけんな。で、山下さん、それが五月四日の晩のことじゃったとおいい 「大丈夫、大丈夫、そげえなこといちいちほじくり返していたら、われわれ何人いても手

た顔色で、ボンヤリともじゃもじゃ頭をかきまわしている。 警部はまた金田一耕助のほうへ視線をやった。その金田一耕助はあいかわらずショボク

要約するとつぎのごとくなり、金田一耕助にとっても参考になることが多々あった。 そこでこの好奇心旺盛な情報屋のカメさんが、蘊蓄をかたむけて披瀝した知識を綜合し、

とは氏子の寄進によるほかはないが、戦後は氏子だって苦しい。それに氏子の信仰心だっ た。これによってどの神社も、国、県、郡、市、町、村からの補助を完全に断たれた。あ ズムの温床があるというわけで、占領後まもなくマッカーサーの神道指令というものが出 の敵にされた。神道こそ日本人すべての精神的支柱をなすものであり、そこにこそファシ 昭和二十年の終戦後、日本がまだアメリカ軍の占領下にあったころ、神道は占領軍

るそうじゃし、十社ぐらいはザラやいう話です」 神主があちこちの神社をかけもちするんじゃそうで、多い神主は三十社くらいかけもちす て昔にくらべるとうんと薄くなっている。その結果神主の生活が苦しくなり、 .。この倉敷にも玉島にもそういう神社がそうとうあるちゅ話です。そういう場合一人の 無住いうたら寺みたいですけえど、神主のおらんお宮がそうとう多うなったとおみんさ

なってきた。こねえな場合刑部島の刑部神社が守衛さんにとっては本務神社、倉敷や玉島 えど、刑部神社の太夫さん刑部守衛さんなども、倉敷や玉島の神社の神主を兼ねるように 「ところで刑部神社の太夫さん……このへんでは神主のことを太夫さんと呼んどりますけ

これは金田一耕助にとっても初耳だったし、ひじょうに興味のある事実であった。

島(上)

悪

65 の神社のことを兼務神社いうんやそうですが、なにせ倉敷市内、水島地区の大発展でござ

をおびて、刑部神社のことを調べていたにちがいない。果たしてかれはなにを知ったのか、 いや、なにをしりえたのだろうか。

「ところがなあ、警部さんもそちらの金田一さんも」

「はあ、はあ

海水浴場を整備しとるのちゅうような噂は、瀬戸内海を越えて四国まできこえとおります らこのへん一帯評判の島ですけんな。アメリカがえりの大金持ちがホテルを建てとるの、 けんな」 のんは、これは警部さんもかねてから聞いておいでんさるじゃろが、刑部島はその時分か 「百合子の口から刑部島の名前が出たとたん、ママさんもお小夜も顔色が変わったちゅう

「いや、それはわたしも聞いとります。それで……?」

あるいうことが、あとになってわかってきたんですな。ママさん、名前を田中静江ちゅう んじゃが、その田中静江が刑部神社の神主、刑部守衛いうもんをよう知っとったんです」 「ところが、そのときママさんの顔色が変わったちゅうのには、もうひとつ重大なわけが

「はあ、はあ、どういう意味で……?」

思いますけんな」 たといちいち注釈をいれとったら、きりがごわせんけんな、こんどの件でわたしが耳にし やなあ、警部さん、金田一さんも、これからさき、これはだれにきいた、かれ わたしの都合のええようにならべさせてください。そのほうが手っ取りばやい

のほうへかこうことになったが、これが玉島の御寮人さんちゅうわけやそうですん」 磯川警部は目をまるくして、

「すると守衛さんちゅう人は刑部島の御寮人さんを含めて、三人御寮人さんを持っておい

でんさるちゅうわけですな」

すけん、果報を一身に集めたちゅうのはこの人のこってすな」 「そういうこってす。しかも三人の御寮人さんが三人とも、たいそうな別嬪さんやそうで

カメさんは鼻の下を長くして羨ましがった。

と、そばから金田一耕助がオズオズと口を出した。相変わらず目をショボショボさせて

「神主さんというものはそんなに収入があるもんですか。いかに水島の発展がめざましい

どさくさにボ 大金持ちで、岡山や倉敷にぎょうさん地所家作を持っておいでんさるばっかりか、戦後の が、この人が巴さんちゅう人の後見をしておいでんさるんやそうです。ところがこの人が んやそうですけえど、その人の大叔父さんの刑部大膳さん、ごたいそうな名前のおかたや 「なあに、それは本務神社の御寮人さん、巴さんいうて、それはそれはきれいなおなごは ロッ株をたくさん買いしめおしんさったが、先見の明があったちゅうのんか、

それがいまではみんな優良株になっていて、そっちのほうからも、ぎょうさんぎょうさん

67

用になってくる。そこでモナミのママさん、田中静江がひと肌もふた肌もぬいだとおみん ちらへ滞在することが多うなってしもうた。と、なると身のまわりの面倒みるおなごが入 うが忙しゅうなっておしまいんさった。いちいち島へかえってはおれません。ついついこ るし、個人で家を建てるもんもぎょうさんおります。そないな場合なにをおいても必要な んが神主さんです。地鎮祭やら上棟式やらいうてな。そこで守衛さん、本務より兼務のほ いましょう。つぎからつぎへと会社はでけるわ、工場は建つわ、それにつれて社宅がでけ

するところが、はじめてふたりに了解できたのである。 なるほどと金田一耕助と磯川警部は顔見合わせた。ここにおいて山下亀吉氏のいわんと

「すると刑部守衛さんに女がでけたということですか

いうこともありますけんな。そいでモナミのママさんがなかへはいって、ひとりのおなご にやいきますま ほどまえからようモナミへ出入りして、ホステスを引っぱり出すかと思うと、またべつの どき五十いうたら働きざかりですけんな。それにこの人そうとう色好みらしい。五、六年 「そうですん。守衛さん、年齢はわたしとおなじ五十がっこうやいう話ですけえど、 ーのおなごをつっつきよる。そら、神上さんやかて人間ですけん、とくべつ責めるわけ いが、それでも兼務とはいえお社をあずかるご身分です、氏子のてまえと

ろがすぐにまたおなごがひとりでけて、これまたモナミのママさんがひと肌ぬいで、玉島 を世話したとおみんさい。それを守衛さん、倉敷の御寮人さんと呼ばせとるそうな。とこ

て、敗残の色が濃

さすがに道路は舗装してあるが、

いように思われるのは、さっき鷺羽山の頂きで、警部から吹きこまれた

両側に建ちならぶ家並みが

いずれもうらぶれ

みてお

いてもらい

たいものがあるということである。

それも刑部島に関連

と一台通れるであろうという道だっ

た。

それ

も対向車がむ

れる

うな始末。 あったが、 これでも昔はよくはやる青楼だったらしいんですよと、警部が指摘した三階建ての建物も 先入観のせいだろうか。 なるほど、ところどころに昔はさぞや立派だったろうと思われる海鼠壁の土蔵もあった。 かつての繁栄が目覚ましかっただけに、 いずれもしっくいは落ち、白壁は剝げ、荒壁の下からこまいが露出しているよ 現在の老残のすがたが痛ましい。

島 な郷土 たしがこれか 「これは 一史家が わた お らお話しするのは、 しが自分で調べたことではありません。下津井には角田直一先生ちゅう奇特 いでんさって、郷土のことを調べてい みなその先生の受け売りじゃと思うてつかあ ろいろ本 -を書 12 てお 61 でんさる。

鷲羽

「の頂

きで磯川警部はこう語った。

代から、領内の干拓事業に力瘤を入れた。そして、新しくえられた干拓地には綿、藍、 このへんいったいは江戸時代池田藩の所領になっていたが、池田藩では初代の光政の時

がこう前置きして、語ってきかせたところによるとこうである。

があるのんかもしれませんぞなあ」 いう人は養子やいう話ですけえど、そねえな場合、舅株の人のほうにかえって遠慮気兼ね が守衛さんにみついで、好き放題なことをさせとるんじゃちゅう話です。聞けば守衛さん といわれてますけえど、そんなこと大した瑕にはならなんだろうといわれてます。この人 配当がはいってくるちゅう話です。この人のただひとつの失敗は真珠の養殖じゃったろう

秘められていたのである。 にこそ、それ 山下亀吉氏の饒舌はとどまるところを知らなかったが、あとから思えばこの饒舌のなか からまもなく起こった、あの酸鼻をきわめた殺人事件の謎を解く鍵の一端が

第 四章 市子殺し

これから倉敷へいて参じます。いそいそとな。わっはつは」

だったが、あたりはまだ明るかった。警部はこの下津井の町でもうひとつ、金田一耕助に 笑いとばしながら文字どおりいそいそと、船の待合所を出ていく山下亀吉氏と別れて、 一耕助と磯川警部が吹上から下津井の町へはいったのは、 、七時になんなんとする時刻

「明治二十年代を境としてドンドン衰微していったと、角田先生は書いておいでんさる。 「それでいつごろからあの港が駄目になってきたんです」

ことに若い荒くれ男が何日か、何十日目かに陸へあがったとあればなにをおいても命の洗

げんに水島には それには下

津井

ていてしもうた。そこへ徹底的に打撃をあたえたのが印度綿花の輸入じゃったと、 ぶと、船にたよる必要がのうなってきたとおみんさい。安全度という点ではかくだんの相 第二は鉄道網の整備発達じゃそうな。鉄道が日本全国の主要都市をすみからすみまでむす その第一の原因は蒸気船ですな。和船よりもうんと安全で輸送力も北前船の比ではない。 こうして、下津井は昔の繁栄からお いてけぼりをくろうてだんだん衰微し

るもんが、遺っとることは遺っとおりますが、それだけにうらぶれて物悲しい町のたたず

船の活躍がはじまったのである。
いコ等の栽培が奨励された。それには肥料が必要になってくる。はじめは関東の鰯が利用がコ等の栽培が奨励された。それには肥料が必要になってくる。はじめは関東の鰯が利用

「金田一先生は北前船の名をご存じですか」

くとその土地はとても栄えたとか……」 「はあ、なにかで読んだことがあります。裏日本をまわってくる船でしょう。その船が着

の関門海峡、昔の赤間関をとおって下にみえる、下津井の港へはいってきたもんじゃそう っていて、北海道から鰊やシメ糟を運んでくる。それが日本海の荒海をのりこえて、 それが三十五挺櫓の船、まあ、千石船みたようなもんじゃろうが、そいつをぎょうさん持 「そうです、そうです、それですんじゃ、船主はみんな北陸地方のもんらしいんじゃが、

「なるほど、それじゃあの港、昔はずいぶん栄えたもんでしょうな」

う。それを無事に切りぬけて、目的の港へたどりついたとあればその喜びもまたひとしお。 れにはそれぞれ問屋があって、ひと船着くごとに大した儲けじゃったそうな。それにそれ、 の代わりに木綿やその他日常必需品をしこたま仕込んで北海道の松前へもってかえる。そ 「それはもう大したもんじゃったらしい。あそこで鰊やシメ糟をおろして売りさばく。そ いだには、波にもまれて沈んだ船もあろうし、時化に遭うて難破したのも何艘 ちゅうもんが板子一枚下は地獄の稼業じゃ。松前を出て日本海の荒海をのりこえてく

「そうですん。刑部島もおなじこってすけん、そのおつもりで」 「ああ、ここは児島の管轄になるんですか」

ると、 官の制服を着た若い男が電話にかじりついていたが、ふたりがはいってくるのを横目にみ 引きちがいになったガラスの腰高障子が一枚開いていて、薄暗い駐在所のなかでは、警

いまお見えんさりました。お連れさんもご一緒のようでござります」

「はっ、承知いたしました。さっそく現場のほうへご案内申し上げます。はあ、係長さん お国言葉をまる出しで、

はまだ現場においでんさります」

話を切ると、いくらかとがめるような目で警部をみ、あとにつづいた金田一耕助の風体を うさん臭そうに観察しながら、 電話のまえでさかんに頭をさげているのは、だれか上司と連絡していたのであろう。

「少し遅かったようですけえど、途中でなにかまた……」

島

見えておいでんさります。ちょうどさいわい警部さんがこっちのほうへおいでんさるちゅ あったのかね 「はあ、現場から妙なもんが見つかりまして……それについて署のほうから広瀬警部補が 「ごめん、ごめん、途中で人に会うていたもんだからね。 それより、原田君、なにかまた

ま

いですんじゃ」

が起こったが、それなども刑部島へ渡るまえ、知っておいたほうがよいように思うと。し それから警部はこうつけくわえた。そのうらぶれた町の一隅で、ちかごろひとつの事件 それがどういう事件だったのか、その場で警部は語らなかっ た。

都会からきた金田一耕助にはちょっと異様な感じだった。 町にはまだ明るさが残っていたが、ごくまれにしか人にいきあわないのが、 そのうらぶれて物悲しい町を金田一耕助はいま、 磯川警部と肩をならべて歩い あわただしい てい

「いったいこの町の人たちは、なにをもって生活を立てているんですか」

安定しとりますけんな。これは刑部島もおなじこってす。女の子は児島の縫製工場かな」 すてて、水島へ通うとるようです。おなじ倉敷市内でちかくもあるし、そのほうが生活が のを金田 「港のちかい家の住人はおおむね漁師じゃったんですな。しかし、ゆうべも申し上げたと そういえば 海が汚れて魚がとれんようになってしもうた。そこで若いもんは未練げものう海を 一耕助 しいい は思い んと静まりかえった両側の家から、ミシンの音がときおり聞こえていた 出した。

「ちょっとここへ寄ってみまひょ」

表にはガラスのはまった引きちがいの腰高障子がはまっていて、そのかたわらの柱に 警部が足をとめたのは外側を細 い板を横にわたして、囲ってある粗末な二階家であった。

警察署 下津井駐在所

鳥 (E)

> 金田一耕助は意外な問題が提出されたのに面喰らいながら、それでもいたこに関する知 たこなら話にきいたことはあります。死人の霊を呼び起こして、死人のいわんとする みずから代わって語る一種の霊媒みたいなもんでしょう」

識くらいは持っていた。 うもんが全国いたるところにいたらしい。式亭三馬の『浮世床』だか『浮世風呂』だか、 「そうそう、そのいたこの流れを汲むもんかどうかしりませんが、江戸時代には市子とい

忘れたが市子の口寄せの場面がありましたなあ」 警部はなかなか物識りである。

んとかよばれて、一種畏敬の念でみられていたようです。わたしゃまたそのばあさんが殺 そういうことを生業としていて、このへんでは銭占い 町に住んでいた浅井はる……これは本名かどうかわからんのですけえど、そのばあさんは すけえど」 されるまで、 配列をあちこちかえているうちに、死霊生霊がのりうつって口寄せをする……と、まあ、 ちょっと変わっていて、竹筒のなかにはいっている穴あき銭を畳のうえにバラ撒き、その うもんは、梓弓の弦を鳴らして死霊生霊を呼びよせ、その口寄せをするもんじゃが、この「ところがこの下津井の町にも市子がひとり住んでましてなあ。ただし、ふつう市子ちゅ そねえな変わったもんがこの下津井に、住んでいることすら知らなんだんで のばあさんとか、神降 ろしの巫女さ

「その巫女さん殺されたんですか」

う連絡が、県警のほうからあったちゅう話で、さっきからお待ちしておりましたんです」 若い原田巡査は直立不動の姿勢でいささか興奮気味である。

「妙なもんというと……?」

「ああ、それは……」

と、いいかけて、思いなおしたように、

ご存じない。みちみち事情を説明しながらいくけんな。その……妙なもんちゅうのは逃げ てきたということを、広瀬君に報らせておいてくれたまえ。こちらのお客人はまだなにも かくれするもんかな」 「ああ、そう、それじゃきみはひと足さきに現場へいて、わしが東京からのお客人をつれ 「それは警部さんご自身でたしかめてつかあさい。ちょっと得体のしれんもんで」

が、さっそく係長さんがかけつけてこられて、しきりに首をかしげておいでんさりまし 「いえ、そんなもんではありません。じつはわたしが発見して署のほうへ連絡したところ

は、ひと足さきにいてくれたまえ」 「ああ、そう、それはお手柄だったね。あとでゆっくり楽しみにしてみせてもらおう。で

出た。肩をならべて歩きながら、 原田巡査がいそぎ足に出ていくのを見送って、磯川警部は金田一耕助とともに駐在所を

「金田一先生は東北の産ですけん、南部恐山のいたこをご存じでしょう」

「どちらの隣にも人は住んでいないんですか」

けんな」 でくるにもうってつけの場所じゃったわけですて。 人目を忍んでかようてくるには恰好の場所じゃが、 「ああ、無人ですな。土蔵のなかは空っぽですよ。 なにしろばあさんひとり住まいでした 残虐な殺意をいだいた凶悪犯が、忍ん 怪しげな口寄せを頼みにくるもんが、

かるような侘しい町なのである。 こちからちらちらと灯の色がもれていた。日が暮れて、はじめて人の住んでいることがわ そういえばいまきた狭い道のあとさきを見まわすと、もう黄昏の薄明につつまれて、あち 四枚はまった腰高ガラス障子の一枚が開いていて、奥のほうから灯の色がもれている。

「警部さん、どうぞ」

奥のほうから威勢のいい声がきこえたので、

「おお、いまいく」

島

抽斗のたくさんついた古風な薬簞笥が四つほどならんでいる。梁のまる出しになった天井のきだ そこは畳半分くらいの土間になっており、そこから床があがって六畳敷きほどのそこには、 警部が腰高ガラス障子のなかへ一歩踏みこんだので、金田一耕助もそのあとにつづいた。 女のかもじがぶらさがっているのも無気味である。

らし の顔が彫ってあり、その慈姑頭がペロリと舌を出しているのだが、その舌に塗ってあった もほぼおなじくらいの大きさで、幅四○センチ、長さ一二○センチくらいの木製の看板で、 四枚はまった腰高ガラス障子の外の軒先に、奇妙な看板が二枚ぶら下がっている。二枚と い看板様のものが軒にぶら下がっていたからである。 「はあ、絞殺されたんですな。紐様のもんで。ああ、この家です」 枚には「舌出し丸」もう一枚には「奇妙丸」と浮き彫りにしてあった。昔はこの浮き彫 金田一耕助はむこうの角を曲がったときから、その家に気がついていた。 い紅もすっかり剝げてくろずんでいる。 ・るば た部分に金泥がほどこしてあったらしいが、いまはもうすっかり剝げちょろけにな かりか、舌出し丸のほうには文字のうえに総髪に慈姑頭、昔の医者らしきもの いま警部に注意されて足をとめると、

「なんですか、これは……?」 金田一耕助はおもわず目をまるくして、

になっとったんですな」 が、置き薬の本場があります。そこから売薬を卸してもろうて、表向きは薬屋ということ すな。薬種商の鑑札も出てきましたよ。岡山県に総社というてな、域中富山ほすな。薬種商の鑑札も出てきましたよ。岡山県に総社というてな、域であるとでは 「なあに、古い売薬の看板ですよ。浅井はる、表向きは薬屋ということになっとったんで

ぞく昔の土蔵の跡である。うらぶれて荒廃した雰囲気があたり一面にたてこめている。そ 一耕助はあらためてその家の周辺を見まわした。両隣とも荒壁の下からこまいのの

したよ。それが口寄せをするときのいつもの装束だったらしいんですな。ほら、これがそ れていましたな。洗いざらしの紺飛白のひとえのうえに、それでも狩衣だけはつけていま ご参考になりゃせんかと思うてな。市子浅井はるはその経机のそばで体をくの字にして倒 みんなこれ市子殺しが発見されたときのまんまを再現さしておいたんです。 のときの写真ですけえどな」 「表の看板といい、あの待合室の座蒲団の配置といい、この祈禱所のたたずまいといい、 なにか先生の

現場写真である。 磯川警部の折り鞄はまるで魔法の袋みたいなものである。こんど取り出したのは三枚の

が裂けて、袖口になすったように血がついてい きくひろげ、体全体は左下の横向きのくの字型になっており、肩にひっかけた狩衣の左の 肩が大きく裂けている。その狩衣はいまつぎの四畳半の隅にある衣桁にかかっており、肩 は、首を絞められたときの苦悶の状態をしめしているのだろう、左右の脚を蹴るように大 なるほど祭壇のほうを頭にして背中をまるめ、両脚は膝頭までまる出しになってい . る。 るの

(E)

悪 79 ちにいって苦悶の形相ものすさまじいというところだが、年齢は五十前後というところか、 るようだ。外出するときはそれでもうしろで束ねて、元結いで結んでいたそうな。ひとく 肩のところまで垂れて大きく乱れている。それがいっそうこの写真の凄惨さを誇張してい もう二枚は顔写真と局部の首のクローズアップである。顔写真でみると髪はさんばらで、

その狩衣のいっぽうの肩が大きく裂けているのを金田一耕助は見逃がさなかっ 団が積み重ねてあった。隅にある衣桁には紗でできた狩衣みたいなものが その店から半間の襖をへだてたその奥が四畳半になっていて、そこが待合室にでもなっ たらしく、 、粗末な座蒲団が二枚適当にまくばられている。部屋のすみには三枚の かかか っているが、 座蒲

祭壇のうえの壁には、七福神の面 りの、 たい市子というのは仏教なの 42 んだせつな、 その待合室と四枚の襖にへだてられた奥が八畳になっているが、その部屋に一歩踏みこ 仏像だか神像だかわ 金田 にさがった古ぼけた御簾の奥が祭壇になっていて、高さ一○センチば 一耕助は大きく目を視張った。あきらかにそこが口寄せの場所になって けの か神道なの わ を横にならべた額がかかっているのが滑稽だった。 からぬ怪異な像が、 か 五つ六つならんでいる。 それでい か

蒲団が二枚、蹴散らかしたように座敷の隅と隅にとんでおり、その座蒲団の一枚に血痕ら しき黒ずんだ汚点がドップリと付着している。 ちめんに散らばっている。金田一耕助がかぞえてみると二十二枚あった。ほかに粗末な座 小さな花筒くらいの竹筒がころがっており、古ぼけた畳のうえには、 その祭壇の まえに経机 みたい なものが んおい てあり、そこから転がりおちたのだろうか、 穴あきの 文久銭が

屋にい 金田 るら にしても原田巡査や広瀬警部補はどこにいるのだろうか。 一先生 ときどきひそひそと囁くような声や、唸るような声がきこえてくる。 かれらは四畳半の隣の部

者がなにげなく狩衣をいじった……と、いうようなことは考えられませんか」 「しかし、警部さん、あなたのご意見に水をさすわけじゃありませんが、この事件の発見

いうわけです」

「いや、そのようなことは絶対に考えられません。絶対にそんなことはありえないのです。

「なぜならば……?

けんな」 「この事件のさいしょの発見者というのはかくいうわたし、すなわち磯川常次郎警部です

せているが、その顔色の底にはふかい悔恨の色が刻まれているようである。 金田一耕助は啞然として警部の顔を視直した。警部はいたずらっぽく目玉をクルクルさ

「金田一先生、まあ、これを見てつかあさい」

こにでも売っているありふれた封筒で、表を見ると万年筆の女文字で、 磯川警部がまた魔法の折り鞄のなかから取り出したのは、一通の封筒である。 それはど

磯川常次郎警部様岡山市岡山県警察本部

裏を返すと、

あとである。犯人はどういう紐を使ったのであろうか、細い綱のようなものではなかった ふだんの顔はわりに垢抜けのした女だったのではないか。肉付きは年のわりにはふっくら しているが、元来が小柄の女だったようである。 もう一枚の局部写真はここに説明するまでもなく、首からノドへかけてのドス黒い紐の

金田一耕助はそれらの写真をていねいに見終わると警部にかえし、

か、迅速かつ的確に目的をとげたようである。

お 「ところで、警部さん、あなたさっきこの現場が事件発見当時そのままに再現してあると っしゃいましたが、なにか犯人が擬装したという疑いでもあるんですか」

「それですんじゃ、金田一先生、まず第一に表の看板ですが……」

じられたということを、暗示しようとしたのではなかろうか。それから第一としては れがああして麗々しくかけてあったというのは、犯行が日のあるうち、 「あれは日が暮れるとはずして店の中へしまうのが、日頃のならわしじゃったそうな。そ と、警部は節くれだった指を一本折り、 すなわち日中に演

警部はまた一本指を折り、

な。殺害したあとで着せたんじゃなかろうかと思われるふしがあるんです。と、いうこと は口寄せのさいちゅうに絞殺されたと、犯人としては思わせたかったんじゃなかろうかと 「この写真ではもうひとつハッキリせんが、この狩衣の着かたがちょっとおかしいんです

紙、なにとぞなにとぞ無下にお読み捨てなく、おわりまでとっくりお読み下さいますよ う切にお願い申しあげます。

ひとさまのいろいろな悩み、秘密にふれることがままあり、空恐ろしゅうなることがよ くありますが、わけてもいまから二十二年まえ複雑なる事情のもとに犯した罪の恐ろし ます。下津井では神降ろしのばばあでとおっているようでございます。そういう職業上 妾はいま下津井で表向きは薬屋をしておりますけれど、本業は口寄せの市子でござい

さ。しかもその秘密を種にしていままで生きてきた業の深さ。 何卒何卒妾を助けて下さい。妾はどのような罪の償いもいといませんが、命だけは惜だが。

にかかって複雑なる事情というのを万々お話し申しあげたいと存じます。 る空もございません。この手紙ごらんになりしだい下津井までお運び下さいませ。お目 しゅうございます。いまにもだれかが妾を殺しにくるのではないかと思えば、生きてい

六月十六日

愚かにして罪深き女

浅井はる

83 あとはキチンと十行ずつ書かれた文字は、なるほど、思い乱れ、心も狂わんばかりとある とおり、 三枚ある便箋の最後の一枚の、浅井はるという名前だけが欄外にはみ出しているほか、 かなり文字に乱れはあるものの、各文章の冒頭が一字下げてあるところや、句読

倉敷市下津井にて

金田一耕助は表と裏を交互に見ながら、 かなり能筆の女文字で書いてある。日付を見ると六月十六日。

は十九日、いまから五日まえの午後のことでした」 わたしは出張で本部へ顔を出さなんだもんですけん、その手紙がわたしの手にはいったの 「もちろんそうです。県警の本部にそれが着いたのは十八日だったんですけえど、その日 「この六月十六日というのは、もちろん、ことしの六月十六日のことでしょうね」

「なかを拝見してもよろしいんでしょうね」

「どうぞ。そのためにここへ持参したんですけん」

げてみた。便箋は三枚あったがノンブルは振ってなかった。十行になるように罫が引いて あり、そこに表書きとおなじ達筆の女文字で、つぎのような文章がつづられていた。 鋏で封を切ってある封筒のなかから、金田 一耕助は四つに折った便箋を取り出してひろ

磯川常次郎警部さま。

こうして愚かな妾が思い乱れ、心も狂わんばかりの気持ちにてしたためまするこのお手 せ。あなたさまのお名前は新聞紙上でだいぶん以前から存じ上げておりましたが、いま 面識もない妾から突然このようなお手紙差上げる無躾の段、ひらにお許し下さいま

れたんでしょう。もしそうでなければ事件の発見は、もっと遅れていたんじゃないです 「しかし、ガセネタかもしれないと思いながらも、二十日の朝あなたはここへ訪ねてこら

「いったい浅井はるはいつごろからここに住みついていたんですか」 「そういえばそうですけえど、そんなことわたしの手柄になりゃせん」

中なんですが、いまのところもうひとつらちがあいとおりません」 殺された、市子の浅井はると同一人物かどうかそれも疑問に思われる。いま問屋筋を調査 な戦争のあったあとじゃけん、日本国中調べたらそういういかがわしい人間も、そうとう なにをしていた女なのか、前身がかいもくわからんとおみんさい。なにしろああいう大き 場にも登記書があるんですが、それによると浅井はるなる女性が、この家を譲りうけて住 家なんですな。そうじゃけんまえの持ち主と浅井はるの双方に譲渡証書も残っており、役 いるんじゃないかと思う。薬種商の鑑札にも浅井はるとあったが、その浅井はるがこんど 「その点はハッキリしとるんです。と、いうのはこの家借家じゃのうて、浅井はるの持ち ついたのは、昭和三十年の十月ということになっとおります。ところがそれまでどこで

ょう。男出入りは……?」 「昭和二十年とい えばいまから十二年まえですが、当時はこの被害者もまだ若かったでし 悪

(E)

うに思われた。 まで金田 点が要領よく打ってあるところなど、そうとう教養のあった女だと思われる。それは 一耕助の脳裡にあった、市子などを稼業とする女とはかなりかけはなれているよ

「それがなあ、 「なるほど、この手紙をごらんになって、あなたが駆けつけてこられたわけですね」 金田一先生」

警部は心から底から臍をかむような調子で、

を綜合すると、犯行は十九日の午後十時から十二時までのあいだじゃったろうということ 案外真実性が薄いもんです。そこで翌二十日の午前中にきてみたんですけえど、そのとき 児島署へ電話をして保護を加えるなりすればよかったんです。しかし、こういう手紙には になっとります」 は後の祭りでした。ひと足ちがいとはこのことで、医師の鑑定、ご近所での聞き込みなど う。午後一時頃のことでした。だからそれを見るとただちに自分で駆け着けてくるなり、 「いまも申し上げたとおり、わたしがその手紙を開封したのは十九日の午後だったでしょ

それでは警部が心から底から臍をかむのもむりはない。

からないことになってしまったわけですか」 しさ』も『その秘密を種にしていままで生きてきた業の深さ』も、いっさいがっさい、わ 「それじゃその手紙にある『いまから二十二年まえ複雑なる事情のもとに犯した罪の恐ろ

「せめて児島署へ連絡しとけばよかったんですけえど、ガセネタで騒ぎ立てるのもおとな

やありますま 「その年日本の主要都市がつぎからつぎへと、アメリカの焼夷弾攻撃にやられて大混乱に ちいった。そのドサクサまぎれに、現代では想像もつかんような犯罪が演じられたんじ いか

おっしゃった犯罪には、主犯か共犯者があり、そいつを強請ってきたということでしょう 警部の声は沈痛そのものである。 その秘密を種にしていままで生きてきた業の深さとありますが、いまあなたの

ロフィーがやってきて、こういうことになったんじゃありますまいか」 「金田一先生はいつかいうておいでんさりましたな。恐喝者はつねに生命の危険にさらさ ていると。浅井はるも長年恐喝をつづけてきたが、被恐喝者になにか致命的なカタスト

二十二年目の破局ですか」

していると思わざるをえない。磯川警部が緊張しているのもむりはない。 「それでだれか目撃者はなかったんですか。妙な人間が出入りをするのを見たとか と、すればこれは単なる市井の市子殺しではなくて、その背後により重大な犯罪が伏在

いや、それがひとりあるんです。ついこの近所に住む夫婦もんの細君なんですが、ご亭

87

だ。 泊まっていったそうなが、それがいっこうどこのだれともわからぬうちにバッタリ足が跡 絶えてしもうた。それっきり女はひっそりと男っ気もなしに暮らしてたそうです」 などを取り寄せたもんじゃけん、すぐわかったちゅこってす。男はくるとかならずひと晩 か如才ないところがある男じゃったそうです。その男がくると酒屋から酒、魚屋から刺身 という年恰好で、日焼けして色はまっくろだったそうなが、がっちりとした体格で、どこ 「それですんじゃ。ひところ若い男が月に一回くらい出入りしとったそうな。三十五、六

うことになっとります。浅井はるはその男のことを清さんと呼んでたそうですけん、清吉 のちにはおはると呼び捨てじゃったと、これは酒屋も魚屋もおなじことをいうとります」 とか清太郎とかいうんでしょうな。男のほうでははじめおはるさんと呼んでたそうなが、 てね、それによると二十二年の十一月から、翌年の四月まで、約半年くらいのあ 「そのおはるさんの前身を語るような写真や手紙は……?」 「それですんじゃ、魚屋のほうは駄目でしたが、酒屋のほうに古い帳簿がのこっていまし 「それ、いつごろのことです」

信文だけ。よほど慎重に過去を隠しとったんですな」 がなんにもありませんのじゃ、もののみごとにな。あるものといえば問屋筋との通

「と、いうことは過去によほど大きな秘密があるというわけですか。ここに……」 と、金田一耕助はもういちど便箋に目を落として、

、ここに、わけてもいまから二十二年まえ複雑なる事情のもとに犯した罪の恐ろしさ……

がると、浅井はるが家のまえに立って両手を合わせていたんじゃそうです。それがまるで 「いや、ところがそればっかりじゃのうて、ヒッピーのあとを見送って細君がカーブを曲 「なるほど、それで服装などを憶えていた……」

うんですね」

うでも、細君の姿に気がついたかして、あわてて家のなかへ駆け込んだそうなが、なんだ か泣いているようじゃったと、そう細君はいうとるんですがね」 ヒッピーの後ろ姿を伏し拝んでるようにみえたので、不思議に思うていると浅井はるのほ

てやろうくんに、ひとつの疑惑を持たれたんですね」 「なるほど、それで警部さんはきょう昼間、鷲羽山で会ったあの青年、

一度はなんでも見

金田 一耕助はほほえんだ。

すけんな。あいつ散髪したばかりのようにみえませんでしたか 「髪にしろヒゲにしろ伸ばすのは一朝一夕には無理でしょうけえど、刈るぶんには簡単で

なるほど警部の監察眼はそういうふうにはたらいていたのである。

「警部さんはそのヒッピーが十九日の晩引き返してきて、市子を絞殺したとお思いです

ところですんじゃ」 と思われてなりませんのじゃ。そうですけん、いまヒッピーの行方捜査に全力を挙げとる 「いや、そこまでは確信がないが、そいつがなにか事件の鍵を握っているんじゃないかっ

けるつもりで、この家のまえを通りかかったところが、妙な男がこの家へはいるのを見た を踏んでるんだそうですが、十五日の午後一時頃、仕事がたまったので児島の工場へとど 主はお定まりの水島通い、おかみさんは児島の縫製工場から、仕事をもろうてきてミシン というんですね

「妙な男とおっしゃると……?」

時間ほどのちにもういちどその男に会うているんですな」 しただけで、なんでそんなに詳しくその若者の風体を憶えていたかというと、それから三それにリュックを背負うていたそうですが、それにしてもそのおかみさんがちょっと一瞥 藍色のオーバーオールというんですか、職工などが着る上下つなぎの作業服みたいなやつ、 あ二十歳から二十五、六までのあいだじゃろうというとります。服装はまっ赤なシャツに、 顔中がヒゲで埋まっていたそうですけん、年恰好はようわからなんだそうですけえど、ま 「ヒッピーですね。髪を長くのばし、まるでパーマでもかけたようにチリチリに縮ませ、

なかでなにかわめきながら、走り去っていったので、ふしぎに思うてあとを見送ったとい ちごうたというんですな。そのとき若者がえろう興奮して、まるで気がふれたように口の を急がせてむこうのカーブまできたところ、この家の方角からやってきたその若者とすれ とどけるものをとどけ、貰うものを貰い、ご亭上が水島から帰ってこぬまに帰ろうと、足 「ついこのさきに道がカーブしているとこがありましたろう。おかみさんは児島の工場へ 田一耕助は卒然としてテープの声を思い出した。

「……あの島には悪霊がとりついている。悪霊が ……悪霊が

「鵼のなく夜に気をつけろ」 それにしても

耕助が背筋が寒くなるような想いに、慄然たらざるをえなかったといっても、だれもか 金田一耕助はそれほど臆病者ではない。いや、むしろ見かけによらず胆はすわったほう しかし得体のしれぬ事態に直面すると、 だれでもうす気味悪いものである。金田

91

息 霊

とはどういう意味だろう。

耕助はしばらく黙考していたのちに開き直って、 だからこの警部の目には二十前後の若者は、すべてヒッピーに見えるのだろう。金田

しかし、警部さん、この事件がなにか刑部島に結びついてるとでもおっしゃるんです

表に四台おいてある薬戸棚には、抽斗がぎょうさんついているでしょうが。その抽斗をか たっぱしから調べてみたら、こねえなもんが出て来たとおみんさい」 「それですよ、金田一先生、薬屋というものはものを隠すにはいたって便利にできていて、

封筒をさかさにふると、封じ文のように結んだ和紙が出てきた。 警部はまた魔法の折り鞄から一通の封筒を取り出した。それは証拠採集用の袋であった。

「開いておみんさい」

それはあきらかに刑部神社の御神籤である。大吉とある。 金田一耕助は開いてみて、おもわず大きく目を視張った。

後は御神籤を出しておらんちゅうんですな で刑部島 「なあ、金田一先生、こねえなことになろうとは知らなんだけえど、青木修三さんの事件 へ渡ったとき、刑部神社へお参りして御神籤を引いてみようと思うたところ、戦

いうことは戦前や戦争中は出していたということですか」

この御神籤をよう読んでごろうじろ。戦時色が濃厚じゃっとお思いなさらんか。刑部島か 「そこまでは念を押しませなんだけえど、そういうことになるんじゃないでしょうか

げて、しきりにもじゃもじゃ頭をひっかいてい 台所の配膳台のうえにならんでいるのは、 一一耕助もすでにそれに気がついていて、警部どうよう大きく目を視張り、首をかし

枚あまりもあったろうか、磯川警部や金田一耕助にとっては、みんな昔懐しい硬貨であっ 、大小さまざまな貨幣であった。 数にして五十

に濡れている。 いうところがいちばん多く、五十銭銀貨が二枚あり、 銭銅貨、二銭銅貨、五厘玉、五銭白銅に十銭銀貨、穴あきの文久銭が五つ六つ、そう みんないま洗ったばかりのように水

「広頼くん、こんなものがいったいどこから……?」

味噌の瓶がおいてあり、刑事の一人は両手を味噌だらけにしている。 警部はしかしそれが愚問であることに気がついて、言葉をのむと足下を見た。そこには

「警部さんがこの家の隅から隅まで調べてみい。台所のカマドの灰まで見落とすなとおい んさったもんじゃけん、つい味噌瓶へ手を突っ込んでみると……」

(F)

「原田巡査が発見したんですよ」

霊

「すると浅井はるは古銭蒐集家だったのかな」 原田巡査は得意そうでもあり、当惑そうでもある。

「古銭ちゅうてもこれみんな明治もんですぜ。まんざら値打ちのないもんじゃないでしょ

時分やよしと思ったの れど、もう少し、もう暫くで警部が引きのばしていたのである。しかし、いまはもう金田 れの臆病をわらうことはできないだろう。 一耕助の頭におのれの知っていること、発見したことのすべてを叩きこんでしまったので、 そこへ原田巡査が呼びにきた。じつはこの巡査はさっきからたびたび呼びにきたのだけ

かいてみようじゃありませんか」 「おお、そうか。こっちのほうも話が終わったところだ。いまいくと広瀬くんにいっとい 金田一先生、妙なもんが発見されたちゅう話ですが、なにが見つかったの

ちにこの警部補と刑部島で、世にも恐ろしい冒険をともにすべき運命にあろうとは、その 任広瀬警部補である。いかにも精悍そうな面構えをした四十男だったが、金田一耕助がの どの板の間に三人の男が突っ立っていた。そのひとりが児島署におけるこの事件の捜査主 ときはまだだれも気がつかなかったであろう。 ふたりが案内されたのは、四畳半の待合室と廊下でつながる台所であった。三畳敷きほ

の男な、 「広瀬くん、お待たせ。こちらが青木春雄……ほら、こないだ雲竜丸の甲板で死亡したあ あの男のことを調査するために、東京からおいでんさった金田一耕助先生じゃが

「や、や、これゃなんじゃ」と、いいかけて、

との青々としてい

るのも男性的である。

髪も黒々している。

「金田 「先生はまだ島へ渡っていらっ 竜平は深い椅子に身を沈めたまま、きびしい目で相手のもじゃもじゃ頭を視すえながら、 しゃらなかったんですか」

金田 とがめるような調子である。 一耕助はこの恐ろしい物語のいっぽうの大立て者ともいうべき越智竜平のことを、

、トイックでシビアな感じのする人物だと磯川警部に報告していたが、その観察は肯綮に

あたっているようだ。

ス

成して貫禄があるということであろう。なかなかどうして、がっちりとして逞しいその体 は、男盛りの精力を連想させて眩しいくらいである。肩幅も広く、胸板も厚い。 ただしそれは年齢に比較してヨボヨボしているという意味ではなく、むしろその反対に老 は四十四歳だというがアメリカで苦労してきたせいか、としよりは老けてみえる。 それに身躾みのよい男でいつあってもヒゲをきれいに剃っているが、その剃りあ 胴まわり

の象徴ではないかと金田一耕助は観察している。 それはかならずしも過去の肉体的労苦だけを物語 るものであろう。両の目尻の下から唇の両端へかけてのその縦皺は、 それでいてとしより老けてみえるというのは、 この体をもってしてなおこのとしまで、 その双頰にきざみこまれた深 るものではなく、 より以上に精神的忍苦 抉られたように

うが、古銭ちゅうほどのもんじゃないでしょう。それに浅井はるはどこからこんなもん持 りそうとう錆びついてるんです。それにねえ、金田一先生」 ってきやあがったのかしらんが、これ久しく土中にでも埋まっていたのか、ごらんのとお

六年以前のものです。それからのちのものは一枚もありません。金田一先生はこの謎をな んとお解きんさる」・ 「はあ」 「もっと面白いことにはこの銅貨や銀貨、鋳造された年を調べてみたら、みんな明治二十

広瀬警部補の口調には挑戦するようなひびきがあった。

第 五 章 越 智竜平

曜日のことである。 金田 |一耕助が刑部島へ渡ったのは、それからちょうど一週間のちの七月一日、 やはり土

ている。あらかじめ電話をしておいたので、竜平は豪奢なホテルの一室でかれを待ってい そのまえにかれはいちど帰京して、中間報告かたがた丸の内のホテルに越智竜平を訪ね

印象を相手にあたえて、難といえば難である。 さすがの金田一耕助も、 まぶしそうに相手の視線を避けながら、

話を綜合するとまずまちがいはなさそうですから、いちおうご報告かたがた、今後のこと についてご相談申し上げようと思って、こうしていったん帰京してきたわけです」 にもないわけです。児島署では死体から指紋はとっておいたそうですが、青木氏 「ですから青木と彫った印鑑がわりの指輪以外、その男が青木修三氏だという確証はどこ 金田一耕助の話しっぷりは淡々として事務的だったが、そこに語られた内容は、そうと った人物の顔写真とでは、比較するにもしようがありませんでした。しかし、いろんな い以上比較のしようがありませんからね。お預かりした写真と雲竜丸の甲板で息を引き

(上) う相手にショックをあたえたらしく、竜平はあいかわらず鋭い視線でまじろぎもせず、金 それでは青木が落人の淵……そこならわたしもしっているが、そこから顚落したことは 一耕助の顔を凝視しながら、

すから。そうそう、磯川警部というのがどういう人物なのか、 りでしたら、志賀泰三さんにお問い合わせになればわかりましょう」 「その点についてはまずまちが いはなさそうです、磯川警部も現場検証をしてきたそうで その点について疑問がおあ

鳥

ない

んですね」

ひそかに憶測しているのである。 独身で通しているというのも、そこいらになにか原因がありはしないかと、金田一耕助は

着姿である。 アメリカがえりだけあって洋服もネクタイもさすがに派手だが、決して派手過ぎるとい それはそれなりに垢抜けしている。しかし、きょうはゆったりとした室内

ではないかということである。 意志が強く、責任感も強そうなのだが、そのかわり他人にもそれを要求する傾向があるの のことを、まだほとんど知っていないといっていいくらいなのだが、ただいえることは、 のなかを開けっぴろげてみせるようなタイプではない。したがって、金田一耕助はこの男 いつも慎重であり、かつ重厚である。言葉もひとつひとつ選ぶほうで、決しておのれの肚 られるであろう。その性格のなかには軽佻だの浮薄だのという傾向はみじんもみら それともうひとつこの男がとしより老けてみえる原因のひとつとして、その人柄があ れない。

らない思いをしているのであろう。 だから金田一耕助が島へも渡らず、東京へ舞い戻ってきたことに対して、かれはあきた

こにある。しかしかるがるしく口をきこうとはしなかった。大きく視張った目でただまじ つけくわえると、さすがに重厚な越智竜平も眉をキリリとつりあげた。深い驚きの色がそ いや、ところが、島へ渡るまでもなく青木修三氏の消息がわかったものですから と、そこで金田一耕助が磯川警部や宮本船長の話を取りつぎ、 山下亀吉氏の探偵談まで

ですね。なぜいったん寝床へはいったものが、パジャマのうえにレーン・コートをひっか

木は徹底的現実主義者でしたから……」 「いろいろ伝説はあるところですが、それはおおむね昔の話ですからね。そこへいくと青

こんどは金田一耕助が鋭く竜平を視て、 しかし、この竜平のコメントにはどこか歯切れの悪いところがあった。

「青木氏は島ではあなたとの関係を、ひた隠しに隠していたようですが……」

「刑部島 竜平の返事は あ V かわらず歯切れ がが

島 (E)

99 建てられたそうですし、 記には あなたの腹心の部下も、そうとう大勢いるんじゃないですか。 目下ホテルやゴルフ場を建設中だという。海水浴場も整備中とか。 あなたは

らぬといってるんですね」 まってそこから滑り落ちたのか、それともだれかに突き落とされたのか、そこまではわか る人物なら、わたしも無条件に信用しましょう。それにしてもその警部さん、青木は 「いや、それは志賀さんに問い合わせるまでもなく、先生がそれほど信頼していらっしゃ あや

「あるいはまた鈍器ようのもので後頭部をぶん殴られ、昏倒しているところを手とり足と 崖から放り出されたのかも……」

「そうすると、刑部島には殺人者がいるというわけですか」

う不吉で凶悪な島だとは思いたくなかったのであろう。 竜平のその語気には嫌悪のひびきが強かった。おそらくおのれの生まれ故郷を、

「青木氏があやまって顚落したのでもなく、 自殺でもないとすればですね」

「自殺……?」 竜平はまた眉をつりあげて

観念からいえば最後の人間でしょう。楽天家も楽天家、底ぬけの楽天家でしたからね。そ れにしても、金田一先生、発見されたとき青木はパジャマ一枚だったとおっしゃるんです 1一先生、その自殺という考えはシャットアウトしてください。あいつは自殺という

人の淵の崖の途中にひっかかっていたそうです。そこいらにも警部の疑惑の種があるわけ 「パジ ・ヤマのうえにレーン・コートを着ていたらしいんですが、そのレーン・コートは落

つを弟のようにかわいがり、あいつもわたしを兄貴とよんでいたんですがね

にうってつけと思ったものですから……そうですか、青木は死にましたか。わたしはあい

もうひとつなにかありそうに思えてならなかった。 々と説ききたり説きさる言葉にはどこか歯切れの悪いところがあり、その言葉の裏に 竜平の目はかわいていたが、その詠嘆にいつわりがあろうとは思えなかった。しかし、

「青木氏は刑部神社の宮司、刑部守衛という人物の行跡にいたく興味があったようですが

が跡絶えたので、不安でもあり不思議でもあったものですから、先生に調査をお願いした 「そうそう、そこまでは書面で報告をもらったんです。ところがそのあとプッツリと消息

しかし、金田一耕助はあえてそれを追及しようとはせず、 考えようによっては、その答えは金田一耕助の質問をはぐらかすようにも受けとれた。

「その青木氏の消息はこうしてわかったわけですから、わたしはここいらで手を引いても

お住居のほうにはもう奉公人がいるんじゃないですか」

揮する総指揮官というのも送り込んであるんじゃないですか。あなたの片腕として……」 ホテルやレジャー施設にはそれぞれ現場監督もいるんでしょう。それらの現場監督を指

なる物好きな旅行者としてふるまっていたんです」 なたの思惑はどこにあったのです。青木氏はなぜあなたとの関係をひた隠しに隠し、たん です。反対に島の故老みたいな人びととばかり接触していたらしいんですが、いったいあ 「それにもかかわらず青木氏は、それらの人びとと接触しようとした形跡はなかったそう

「それはねえ、金田一先生」

竜平もようやく陣容を立てなおし、

本くんは他国もんですから島の人情は全然しらない。反対に叔母の多年子は島の出身者で わたしの叔母……父の妹ですが、その二人がわたしの代理人みたいなかっこうで刑部島に す。それともうひとりわたしの住宅の家事取り締り役として、越智多年子といってこれはす。それともうひとりわたしの住宅の家事取り締り役として、越智多年子といってこれは その松本くんというのを、いわばわたしの全権大使格として刑部島へ送りこんであるんで をですね。それはもちろん松本くん……松本克子というのがアメリカでの私の秘書ですが、 いるんです。その二人から時々刻々、刑部島の反響について報告はあります。しかし、松 「わたしは刑部島での反響を知りたかったんです。わたしのやってることに対しての反響

は、さらにいくばくかの謝礼を支払うであろうという約束がついていた。 「じゃ、適当な時期に島へ渡ってなおいっそうの努力をしてみますが、そのまえにあなた

テープがいついかなる情況のもとに録音されたかを説明すると、 に聴いていただきたいものがあるんです」 `金田一耕助が懐中から取り出したのは小型のテープレコーダーだった。かれはこの

ご理解いただける部分があるかもしれないと、こうして持参したのです。 知死期の精神錯乱状態であった。したがってその内容は支離滅裂で、われわれが聴くとチ と思って聴いてください」 にたのんで再生させてもらったものですが、まずオリジナルと比較しても大差はないもの オリジナルではありません。オリジナルは岡山県警の管理下にあります。これは磯 ンプンカンで、さっぱり意味が捕捉できないんですが、あなたがお聴きになるといくらか 「これはおそらくあなたへの伝言であろうと思われるのですが、不幸、青木氏はそのとき もちろんこれは 川警部

そして、金田一耕助はスイッチをいれた。

……あいつは体のくっついたふたごなんだ……

・あいつは腰のところで骨と骨とがくっついたふたごなんだ……

あいつは平家蟹だ……平家蟹の子孫なんだ…… あいつは歩くとき蟹のように横に這う……

「と、とんでもない」

越智竜平は腰をうかし、両手で相手をおさえつけるような身振りを示すと、

ないでしょう」 ると、その場合犯人を挙げていただかなければなりません。でないと青木の霊は浮かばれ しはそう考えたくないのですが、いちおうそれも考慮にいれておかなければならないとす と、その真相を究明していただかなければなりません。もしそれが他殺とすると……わた 「こうなったらますます先生が必要になってくる。青木の死にそういう疑惑があるとする

金田一耕助も身を乗っていえね、越智さん」

金田一耕助も身を乗り出して、

気をはなれてということはわたしが許しません。これはあくまで最初のご依頼の延長だと 刑部島へ渡ってみようと思っています。磯川警部ももういちど島へ渡りたいといってます し、長年の友情からいっても、わたしは警部の助手をつとめたいと思っているんです」 「それはけっこうです。どのみち真相の究明に役立つことになればですね。しかし、商売 「この事件はいたくわたしの好奇心を刺激しているのです。だから商売気をはなれてでも

酬だが、もう一枚はさらに真相究明のための運動費であった。真相が究明されたあかつき 竜平はそこで二枚の小切手を書いた。一枚は青木修三捜索についての一件落着の成功報

思ってください」

たごがいるというんですか。なるほど、あの島にふたごがいることはいる。しかし、あの ふたりはシャム双生児なんかじゃない」

にあなたに伝言しようとしたか……」 「それをどうして青木氏はシャム双生児と勘ちがいしたか、なぜまたそれをまずイの一番

いっていて、あらぬ幻覚でも語ったんじゃありますまいか」 わかりません。さっき先生もおっしゃったとおり、青木は知死期の精神錯乱状態におち

「そうかもしれません」

そこで金田一耕助はもういちどテープをかけると、

想したのかもしれません。ところがここに全然別の言葉が出てくるでしょう」 ……あの島は平家にゆかりの深い島ですから、体のくっついたふたごを見て、平家蟹を連 たいそれを敷衍した言葉ですね。あいつは蟹のように横に這うとか、平家蟹の子孫だとか 「シャム双生児がいるかいないかは別として、青木氏のつづいて語っている言葉は、だい

「……鵼のなく夜に気をつけろ……」 そのときちょうどテープの声が、

と、息もたえだえに絶叫してい

島

金田一耕助はそこでスイッチを切ると、

したというのは……?」 「これはどういう意味でしょうねえ。シャム双生児とは別に、こういう警告をとくにのこ

……鵼のなく夜に気をつけろ…… ·あの島には悪霊がとりついている、悪霊が……悪霊が……

……その島の名は……その島の名は……その島の名は

……それらの雑音のなかに、そのときの緊迫した空気が、そのまま膚へつたわってくるよ ょうによく再生されていた。波の音、汽船のエンジンのひびき、人びとのののしり騒ぐ声 きおわると啞然たる顔色であった。それは金田一耕助もあらかじめ指摘したとおり、ひじ ではないかときいたときから、すでにかなりの緊張の色を示していたが、さてテープを聴 うなものがある。 竜平は青木修三のいまわの際の声がテープに録音されており、それが自分に当てた伝言

かわらなかった。当惑したような空咳をしながら、 金田 一耕助は竜平の要請でテープを三度かけなおした。しかし、竜平の啞然たる表情は

ようかし 、金田一先生、この体のくっついたふたごというのは、シャム双生児のことをいうのでし

てもそのことを、あなたにいいのこしたかったんじゃないでしょうかねえ」 「わたしに……?」どうしてでしょうか。だいいち、刑部島にそんな化けもんみたいなふ 「たぶんそうだろうと磯川警部とも話し合ったんですがね。しかも、青木氏はなにをおい 青木修三はシャム双生児という言葉を知らなかったらしいが、竜平はしっていた。

て追及しようとはせず、テープレコーダーを巻き戻し、さっさと懐中にしまいこむと、 一ありません 竜平の否定するその言葉は、少し語気が強過ぎるように思われたが、金田一耕助はあえ

と、ペコリともじゃもじゃ頭をさげた。「いや、それは残念でした」

に、竜平の心をさわがせるなにものかがあったらしいということを。しかし、 ム双生児のことなのか、 かし、金田 一耕助の鋭 それとも鵼に関する件なのか、そこまでは金田一耕助にもわ い直感は探りあてていたのである。青木修三のその伝言のなか 、それ から

=

なかった。

島へ渡ろうとする人間が意外に多いのに、金田一耕助は内心ひそかにおどろいて られて、だれも顧みるものもない島だと、磯川警部からきいていたにもかかわらず、その刑部島はいまや過竦の島である。瀬戸内海のまっただなかに、ポツンとひとつ置き忘れ

年の七月一日、 を往復しており、 金田一耕助が連絡船に乗るために、殺風景な吹上の港へおりていったのは、 午後二時ちょっと過ぎのことである。 その第一の寄航地が刑部島である。 その連絡船は四国の丸亀とのあいだ 昭和 四十二

あの下津井というところはな、

金田一さん、金毘羅参道にあたっておりましてな、あそ

「手足は虎、尻っ尾は蛇ということになってますね 「鵼というとたしか源三位頼政に退治された頭は猿、体は狸……それから……」 竜平も眉をひそめて、

金田一耕助はテレ臭そうにもじゃもじゃ頭をひっかきまわし、 白い歯をみせて笑いなが

うことになるんですが、なにかお心当たりはありませんか」 したがって青木氏の警告を現代ふうに翻訳すると、トラツグミのなく夜に気をつけろとい りけりとあります。ですからその異形の怪物自身が鵼ではなく、その声が鵼に似ていると たのは、 いうんですね。では鵼とはなんぞやというと、注によればいまのトラツグミとありま すると四之巻のおわりのほうに『鵼』という項がありますね。それによると頼政の退治し 「わたしも『平家物語』を取り出して読みなおしてみたんですよ、にわか勉強ですがね。 かしらは猿、 むくろは狸、尾はくちなわ、手足は虎の姿なり。なく声鵼にぞ似た

だいたい鳥が夜なくんですかねえ」 「トラツグミなら刑部島にもおりましょう。しかし、青木の警告の意味はわかりかねます。

くものと昔から信じられていたらしいんですね。お心当たりはありませんか」 えとおなじとあります。ところがぬえという漢字にふたいろあって、空偏に鳥とかくばあ 「ところがねえ、越智さん、トラツグミを字引で引くと、ツグミ科のわたり鳥とあり、ぬ と、夜偏に鳥とかくばあいがあるんですよ。したがってトラツグミという鳥は、夜もな

定住して以来のことですが、それがだんだん金額が大きゅうなっとりますけん、恐喝され 期的にはいっとるんですな、盆と暮れと。昭和三十年以来、つまり浅井はるがあの場所に ていたほうとしては耐らなかったでしょう。首を絞めたくなるのもむりはなかったかもし 「一千万円はゆうに超えとりますな。しかも、それを仔細に分類していくと、年に二回定

れません」

あの島にはよほど奇妙で無気味な秘密があるにちがいありません。浅井はるはそれをしっ できる段階じゃありませんけえど、あの青木修三という人物ののこしたテープからみても、 「それで警部さんはその被恐喝者を、刑部島のだれかだとおっしゃるんですね」 、ままで浮かんできた線ではそれとしか考えられません。それがだれであるかまだ断定

乗らなきゃならない」 「しかし、ねえ、警部さん、島というものは密室もおなじですぜ。出るにも入るにも船に

(上) を全廃したわけじゃありません。ただ以前より遠方まで出なきゃならなくなったので、採 「刑部島にも漁船はまだそうとう残っていますよ。魚がとれなくなったちゅうても、漁業

算があわなくなったんですね。それに島のヌシみたいな刑部大膳、このじさまは月に一回 倉敷へくるそうですて」

「倉敷へ……? なにしに……?」

なあに、病院通いですよ。なにせとしがとしですけんな。月に一回健康診断にくるんで

ち寄っていたにちがいありません。それですけん、 ってたちゅう話ですけん、 になっとりま 一个渡るつもりですけえど、そのときにはわたしの捜査にも協力してつかあさい」 しから 四国の丸亀へわたって、そこから讃岐の金毘羅さんへおまいりする。そういう道順 らすが 2、あの浅井はるちゅう市子は金毘羅さん信仰で、月にいちどは丸亀へ渡 途中で刑部島へ寄らなんだとはいえんと思う。いや、きっとな 金田一先生、わたしもひと足おくれて

うもつけくわえた。 ゆうべ倉敷の宿で会ったとき、磯川警部はそういっていきまいていた。 さらに警部はこ

券類。金田一先生、それしめていくらあったとお思いんさる」 なっとったんですな。いや、出てきたわ、出てきたわ、 通帳で銀行も倉敷でした。ところがこないだも申し上げたとおり、薬屋の店先ちゅうもん の重ね目に、裏側 の部分は目薬など小瓶にはいった薬などを陳列しておく簞笥。 が。 は秘密の隠 たけんな。 預金通帳ははやくから見つかっていたんです。あの四畳半の簞笥の抽斗のなかにありまし 「どのくらいあったんですか」 「あの浅井はるが恐喝者だったらしいことは、もう疑いの余地はありません。浅井はるの あ n みんな重ね簞笥になっとるんですな。下の部分は抽斗のいっぱ それでみるとあの女のつつましやかな暮らしぶりがわかるような、ごく普通の し場所の宝庫みたようなもんで、ほら、あそこに簞笥が四重ねありましたろう いらみると二センチくらいの隙間がある。そこが浅井はるの隠し金庫に 岡山のあちこちの銀行の通帳や債 ところがこのふたつの簞笥 いついた簞笥、

蓬髪のうえにお釜帽をスッポリかぶり、合いの二重廻しを肩からひっかけ、ぽうはっ の待合室の片隅で背中をまるくしている。 った。 空は晴れ天気はよいのだけれど、炭火のほしいような陽気である。 何度か水をくぐったらしい袷のきものによれよれの袴をはき、 もじゃもじゃの 金田一耕助は例 さっきからそ

警部のことを念頭からはふり落として、この人たちの会話に耳を傾ける気になっている。 部島の出身者で、これから島へかえろうとしているのである。いきおい金田一耕助は磯川 が気になっていたらしいが、根が陽気で、話し好きなこのへんの人たちである。まもなく りんさったお人の気持ちなどわかろうはずがないけえど……」 てんでに相手を見つけてしゃべりはじめたが、それらの話をきいていると、その大半が刑 さあ……松つぁんにそういわれたかとて、わしらみたいなもんには、あねえに偉うおな そこには老若男女とりまぜて八人いた。その人たちもはじめのうち、金田一耕助の存在

十五、六の娘をつれていた。 なれていたらしく、身のとりなしにどこか都会ふうのところが もおなじ年かっこうで、四十前後というところだろう。松つぁんはおかみさんらしい女と オドオドして、相手を見るにも上目づかいである。それに反して松つあ .陽焼けしてゴツゴツしており、淳朴を通りこして愚鈍にさえみえる。。。 や 吉やんとよびかけられた男は、いまでも島に住んでいるらしいのだが、 みえる。吉やんも松つあん 口の利きかたさえ んは久しく島をは 顔も体もまっ黒

111 ほんなら、松蔵のおじさん、本家がわれわれみたいなもんにまで、ぎょうさんな日当を

した大名旅行みたいだそうですよ。ところがねえ、金田一先生」 すけえど、そのときは巴御寮人をはじめとして、お供がおおぜい扈従していて、 ちょっと

警部は急に声を落として、

あとを追って、ぜひ島へ渡るつもりであるとその決意は固かった。 敷の旅館に一泊して、翌朝島へかえっていくんじゃそうです。それに巴の亭主守衛は倉敷 か玉島にいるときのほうが多いんですけえど、六月十九日の晩守衛は倉敷でしたよ」 の病院で健康診断をうけておるばっかりか、そんなときには巴御寮人はじめ一門郎党、倉 「浅井はるが絞殺された六月十九日は月曜日でしたけえど、大膳じさまその日の午後倉敷 こうして磯川警部の疑惑は刑部神社の宮司の一族に集中し、そのためにも金田一耕助の

=

そうじゃけえど本家のこんどのやりかたは、少し大袈裟すぎると、吉やん、あんたそう思 分の生まれ故郷が見るかげものう寂れていくのを残念がる。それもがてんのい んか それゃ、まあ、本家としては故郷に錦を飾るちゅう気持ちはようわか っちょる。また自

ふりかえった。どうやら本家というのは越智竜平のことらしい。 このへんの人間特有の甲高い声に、金田一耕助はふと瞑想を破られて、声のするほうを

そこは○○汽船発着所の粗末な待合室である。梅雨冷えというのか妙に薄ら寒い日であ

島(上) 丹波の奥の温泉宿にひそんどるちゅうことがわかって、すぐ追手をさしむけて連れ戻した。の娘、身分ちがいもはなはだしいちゅうわけで、八方手をつくして行方を探したところ、 寮人にはれっきとしたかどうかはしらぬが、とにかくご亭主ができてござる。しかも二十 思いで、戦争にいたことじゃろけえど、さて、その戦争も終わって復員してみると、巴御 んじゃろと、これはもっぱら島中の評判じゃったそうな。本家としては無念やるかたなき 徴兵も徴用もご免いうことになっとったんじゃけえど、そこはそれ錨屋の大旦那、大膳さ そのとき巴御寮人おん年十七歳、本家はおれとおないどしじゃけん二十二歳、もちろんこ わけじゃな。本家は網元のすえでこそあれたかが漁師、こっちは由緒ある刑部神社の神主 もってきて錨屋の大旦那がカンカンになってお怒りんさった。身分をもわきまえずちゅう 話じゃ。なにせ時節柄もわきまえずというわけじゃけに、これは本家も分が悪い。そこへ じやおふくろに聞いたところじゃ、そのとき島中ひっくり返るような騒ぎじゃったという 終戦のまえの年じゃけん、昭和十九年の春、二人手に手をとって駆け落ちとしゃ 「そうよ。その時分おまえはまだガキだったから、知らんのもむりはないけえど、あら、 - 赤紙がきた。これはもう否応なしじゃ。だいたい本家は島にとって必要人物ちゅうので、 というじさまは策もあれば顔も広い。その筋に手をまわして赤紙がくるように仕 は昔の話じゃけに数えどしじゃな。さて、島へ連れ戻されるとまもなく、本家のところ もっともその時分おれは兵隊にとられて留守じゃったけえど、復員してからおや れこみん 向けた

三年にはごていねいにふたごがうまれた。そこで本家は絶望の思いをかみしめて、アメリ

112 るんで……?」 奮発して、 刑部神社の祭りにかりだそうちゅうのんには、なにかわけがあるとおいい

印袢天の背中には一つ巴の紋所が染め出してあり、右の襟に「刑部神社」左の襟には「氏 まれたのであろう。 子連中」と染め出してある。一つ巴は刑部神社の紋所らしく、そこから巴御寮人の名がう セーターのうえに水色の印袢天を着て、頭には威勢よく日本手拭いで鉢巻きをしている。 横から口をはさんだのは二十四、五の若いものだが、いま改めてその姿をみなおすと、

が読めているんだ」 「そうとも、信吉なんかにはわからんのもむりはないけえど、 おれにはちゃんと本家の肚

「本家の肚とおいいんさると」

「敵は本能寺というところだろ。巴御寮人にええとこみせようちゅう肚にちがいない

「へえ、そらまたなんで……?」

やけんな」 まだに独りもんじゃっというじゃないけ。なにせいちどは駆け落ちまでおしんさった仲じ 本家は いまでも巴御寮人に惚れておいでんさるにちがいない。だからあのとしをしてい

「すると、竜平おじさん、あの御寮人さんと駆け落ちしたことがおありんさるんで」 金田一耕助は おやと耳をそばだてたが、印袢天の信占も目をまるくして、

とはみんなかつて島を捨て、本土へ移住した連中らしい。 待合室やちどり丸の船内で、金田一耕助が耳にしたところを綜合すると、それらの人び

やけに、こんなありがたいことあれゃせんぞな。おまけにこねえな祭りの印袢天まで送っ里帰りでけるんじゃけんな。それも七日分の日当もろて、往復の旅費まで支給されるんじ てもろたんじゃけんな」 には嫁さんつれて、里帰りしよ思うとったところじゃけえど、それよりひと月半もまえに 「松蔵おじさんはいろいろいうけえど、それじゃかてええじゃないけ。わしら来月のお盆

だ島を知らぬという。亭主の生まれ故郷を知ってもらうにはまたとない機会であると、 信吉は島を出て水島の会社で働いているらしい。そこで職場結婚をしたが、嫁さんはま

そうだ、そうだ」

祭りの印袢天を着た信吉はいきまくのである。

と、たちまち若い同調者が現われて、

ないけ。なんでも本家の寄進で立派な神輿ができたちゅうけん」 た。どうやら会社の上層部に手がまわっているらしいんじゃけえど、いや、本家のおじさ んの勢力も大したもんじゃ。信ちゃん、島へかえったら神輿かついで暴れまくったろじゃ やった。それでおそるおそる上役に申し出たところ、アッサリ有給休暇が出たのには驚い 「おれなんかもこげえなけっこうなことないと思うたけえど、会社がどう出るかと心配じ

惑がわかったろうがの カへ突っ走ったんじゃけえど、どうじゃ、これで本家のこんどのやりくちの、ほんとの思

てきた。連絡船はちどり丸という。 松つぁんの長広舌はとどまるところをしらなかったが、ちょうどそこへ連絡船がはい

第六章 巴御寮人

るとは、さすがの金田一耕助も思いもよらなかった。 する予備知識がえられるのではないかと思ったのだが、その作戦がこうもみごとに奏効す ことわった。一般旅客としてふつうの連絡船に乗ったほうが、少しでもよけいに、島に関 せてほしい。下津井まで迎えによこすようにするといってくれたが、金田一耕助はそれを

びとだった。船長も船員もおどろいていて、 「けさの便でもぎょうさん刑部島で降りていったぞな。いったいなにが起こるちゅうのか

ちどり丸の船客は三十人を超えたが、その半数以上は刑部島へ渡る……あるいは帰る人

いう用件を頼まれてもらえないかと、依頼を受けたのが刑部島へ渡って以来消息を断って うのが話の糸口であった。もしそこへいく気があるならば、ことのついでにこれこれこう 故郷にこれこれこういう島があるから、そこへいってしばらく休養をとったらどうかとい る、青木修三なる人物の行方捜索であった。 さいしょ問題になったのは金田一耕助の健康状態であった。それならばじぶんの生まれ

らばかれ というのが竜平の希望だし、金田一耕助自身あきらかに竜平にのこした伝言と思われる、 こうしてかれはとうとう、悪霊がとりついているという島へ渡ることになったのだけれ の謎めいた章句にふかい興味をもっていた。 そのことはひじょうに意外な結末をみたが、 の使命はそこで終わったはずである。しかし、こんどはその一件の真相を知りた 捜索自体はいとも簡単に終わった。本来な

心を買うようなことばかりではないか。その真意はどこにあるのか。刑部島ではなにが起 雑な人間関係である。松つあんの話がほんとうとすると、竜平は刑部大膳に対して深い遺 部大膳、島のヌシともいわれる権力者と越智竜平との、戦争中から終戦直後にかけての複 こったのか、いや、なにが起こりつつあるのか、そしてこれからのちいったいなにが起こ ど、その船中ではからずも耳にしたのが、刑部神社の宮司夫婦とその背後にい を含んでいるはずである。それにもかかわらずいまかれのやっていることは、大膳の歓 るら

なるような感に打たれざるをえなかった。 かったろうけれど、かれの真意がはたしてどこにあるかと思うと、金田一耕助は心の寒く われているらしいが、そういうことは現在の竜平の財力からして、大した負担にはならな し、七日間の帰島をうながしているらしい。それには日当のうえに、往復の旅費まで支払 これを要するに竜平はかつて島を捨てて出ていった人びとに、かたっぱしから手をまわ

がなければならぬ。 を一堂に集めようというには、見栄とか虚飾とかを乗り越えて、 そういう男が莫大な費用をおしまず、刑部神社の祭礼を機会に、 ろうか。いいや、金田一耕助はそうは思わない。 うとする成 はたんなる氏神様へ対しての敬虔な信仰心なのだろうか。あるいは故郷に錦を飾ろ は思慮綿密で、つねにおのれの打つ手のさきからさきへ 功者、 いわば成り上がりものの、 いやがうえにも張りたい見栄の表われなのだ 竜平という男はそれほど軽薄な男ではな もっともっと重大な思惑 と読んでい いったん離島した人びと る男であ

恋に終わった巴御寮人との関係に、なんらかの形で決着をつけようとしているのではない その思惑とはなにか。それはやっぱり松蔵という男の指摘したとおり、かつての日、悲

部の口 など全然知 は からずもさっき松蔵とい からきいてはじめて知ったのである。竜平はなにも語らなかった。なぜ? いってい なかった。 いや、刑部神社や巴御寮人、刑部大膳のことなども、 う男の口 からきくまでは、 金田 一耕助は竜平と巴のいきさつ そんな 磯川警

け。おまえみたいなやつを獅子身中の虫というんじゃ」よこしたときも、ご注進ご注進と手柄顔に、じさまのところへ駆け込んだちゅうじゃないよ きけば戦争中本家が駆け落ちさきから、こっそりおまえに金のくめんを頼むという手紙を の株内で本家とはいとこ同士でありながら、若いときから大膳じさまにゴマすりくさって、 ことはいわせてもらうで。だいたいこの吉太郎ちゅうのは怪しからん男じゃ。おなじ越智 たけえど、どうせ七日たったらまた島を出て神戸へかえっていく身分じゃけん、いいたい ていけがしにあしらわれてよう。こんどは少しでも本家の顔を立ててあげようと帰ってき 「祟りもヘチマもあるもんけえ。おれはとっくの昔に島を捨てたもんだ。大膳しさまに出

さすが というものは におかみさんが聞きかねて、 つのり、あとで後悔することがあるものだが、いまの松蔵がそれだった。 おのれの言葉に酔い、おのれの言葉に興奮し、激昂し、いわでものこ

れ故郷を捨てもせず、無事安穏に暮らしておいでんさる。羨ましいご身分じゃないけ。 んの身内にくわえていただいて、いまでは一門郎党あつかいじゃとやらで、お あるもんじゃけんな。吉太郎さんは吉太郎さんの考えがあっておしんさったこと。大膳さ っともわたしはそういう生きかたあんまり好かんけえどな」 まあ、 あんた、ええかげんにやめておおきんさい。人にはそれぞれの生きかたが

仲裁にはいったおかみさんの言葉も痛烈な皮肉でおわったが、このおしゃべりをきいて

119

がくだせ、冷静な推理を働かすことができたのである。 たが、つねに第三者的立場を保ってきた。事件の圏外に立っていたからこそ、公平な判断 しまいはしないかということである。かれはいままでずいぶんいろんな事件を手がけてき るというのだろうか。 こんな場合、金田一耕助がいちばん危惧するのは、じぶんが事件の渦中にまきこまれて

「そらそうと、古やんはいまでも刑部神社のじいやをしとるのけえ」

や寺に献身的な奉仕をする男のことをいうのだそうである。 った。あとでわかったところによるとこの男の名は吉太郎といい、じいやというのは神社 松蔵の甲高い声に金田一耕助はまた瞑想をやぶられて、占やんの愚鈍そうな顔に目をや

吉やんは例によって上目使いに松蔵の顔を視ながら、

「うう、じゃとてわしゃほかになにも能のない男じゃけに……」

るぞのう、 「おまえいまでも独りもんじゃちゅうとるが、そねえなええ体をしとってよう辛抱ができ かみさんもなしで。巴御寮人にあんじょうかわいがってもろとんのとちがう

吉太郎はただキョトンとしているばかりだったが、それを聞いてあわてたのは信吉だっ

るぞな。そねえなことが錨屋の大旦那の耳にはいると、どねえな祟りがあるかしれたもん「おじさん、おじさん、なんぼなんでもそねえなこと……いうてええことと悪いことがあ

人びとに、 もおっつかっつであろう。なるほどこの体でこのとしまで独身でいれば、口さがない島の はギタギタとして動物的な生臭さを思わせる。竜平といとこ同士だというが、年かっこう いろいろいわれてもやむをえないであろう。

迎えにきてお 楽しもうじゃないけ。ほら、信ちゃん、おまえのおやじやおふくろさんが、船着き場まで 帰りがでけたんじゃけん、争いごとはいっさい西の海へさらりと流して、七日間の休暇を 「まあ、ええじゃんけ、ええじゃんけ。せっかく本家のきもいりで、みんな久しぶりに里 いでんさるぞな」

家用汽艇とヨットが、威風堂々とあたりをはらっている以外には。 そこは下津井の港よりもっと侘しく、うらぶれた感じであった。 ンの音をひびか かが大声にわめいたとき、さまざまな葛藤を乗せたちどり丸は、 せて、 、静かに小さな港へはいっていく。 防波堤のなかは漁船もまばらで、 ただ越智竜平の豪奢な自 11 、ま単 調なエンジ

採集につかう胴乱のようなものをぶらさげていた。 よそものがいた。それは二十四、五歳の若者で、薄茶色のジャンパーを着て、 このとき刑部島へ降りた乗客のなかに、金田一耕助のほかにもうひとり、島にとっては 肩から昆虫

同時に風待ちの港でもあったという。最終の目的地であるところの下津井の港を目のまえ 磯川 **警部の説によると刑部島という島は、** 北前船がさかんな時代、潮待ちの島であると

いう言葉が、かれの心にひっかかったのである。 金田一耕助はおやと吉太郎の顔を見直した。おかみさんのいった一門郎党と

の宿へ泊まっていたのだと。すると、そのときこの男も一緒だったのではな かも、浅井はるが絞殺された六月十九日の夜も、大膳じさまは一門郎党とともに、倉敷 磯川警部もおなじ言葉を使っていたではないか。刑部大膳というじさまは、月に一度倉 へ健康診断に出掛けるが、そんなとき一門郎党をひきつれて大名旅行もおんなじだと。

然とした態度で船内を睨めまわしている。 わ とむかって罵られるにおよんで、しだいに面をあげ、キョトンとした表情ながらも、傲 金田 いはそれだけ神経が図太いのか。はじめかれは人を見るにも上目使いだったが、松蔵に れてもキョトンとして、眉毛ひと筋動かすではなかった。それだけ神経が鈍 一耕助 はあらためてそれとなく、吉太郎という男を観察してみた。 かれ 11 にをい

かし るぞのう、 「おまえいまでも独りもんじゃちゅうとるが、そねえなええ体をしとってよう辛抱ができ かみさんもなしで。巴御寮人にあんじょうかわいがってもろとんのとちがう

漁師 長靴をはいたその体は、どこもかしこもゴツゴツと節くれ立ってたくましく、脂切った膚 くとして、まったくよい体をしている。額の狭いその顔は、ちょっと猿を連想させるが、 さっき松蔵も指摘 みたいに……いや、 したが、巴御寮人にかわ かれはじっさい漁師であった……鞣革のオーバーオールを着て、 いがってもらっているというのはしばらくお

下津井に似てるとおみんさい」 衰えたのであると磯川警部は説明した。 「そうじゃけんな、 むこうへいたらよう気いつけておみんさい。うらぶれた感じがどこか

これを要するに、刑部島は下津井のおこぼれにあずかって生計を立てていたのである。だ

かれらの持ってきた帆待ちをねらって大いに儲けた。なかなか抜けめのない商法だが、

から下津井が盛んだったころは島も栄えたが、下津井が衰微していくにしたがって、島も

ボストンバッグを片手にぶらさげ、とかく潮風に吹きとばされそうになるお釜帽を、片手 でしっかりおさえて歩きながら、それとなくあたりのようすを観察してい

船着き場で島の人びとと別れた金田一耕助は、なるほどと心に頷きながらただひとり、

の家だったのだろうが、いまは空家になっているのではないかと思われるのがままあった。 当然のことといいながら、船着き場の付近に人家は密集していた。それらの多くは漁師 磯川警部の言葉とは反対に、そのあたり人の往来があわただしく、わめきちらす

潮の

がしつらえてあり、かんたんに用が足せるようになっていた。 舟といい、 や、甘きにつどう蟻のように十何艘かの小舟が漕ぎ出 そういうときが刑部島の書き入れどきであったという。 なかには遊女が乗っていた。 こきが刑部島の書き入れどきであったという。沖に北前船が錨をおろすとみるいがげんや風向きのぐあいで、船が動かなくなる場合があった。 オチョロ舟の胴の間には二畳敷きくらいの小座敷 してい < それらの小舟をオ E

舟へお 乗りこえてきたかれらにとって、なによりも必要なのは命の洗濯である。下津井へ着くま 口舟に で待てない 北前船の水夫たちは、目的地をまえにしてみんな気が大きくなっている。 りてい みちび かれらのなかには、遊女を船へ引っぱりあげるのもあれば、みずからオチョロ って、 かれて島へ渡る船頭であ 、体内にたまった垢を洗い落とすものもある。いちばんよい客はオチョ る。 万里の波濤を

たろう。それらの欲望を遂げさせてもらえるならば、 目的完遂を目前にして、気の大きくなっているかれらの欲望は、 かれらにはあった。 板子一枚下は地獄 の船頭たちは みんな気前がよくカネ離れもみごとであった。ことに 千金をなげうっても吝しまぬふうが ただ酒色あるのみ であっ

かねていた。あらかじめ北前船のほしがりそうな、綿、布、 こうして錨屋は女郎屋としても大いに儲けたが、そこはたんなる女郎屋では 集めておいて、北前船の積荷と物々交換するのである。 これらの上客を手ぐすね引いて待っているのが、島でたった一軒の青楼錨 糸 針、その他小間物類を買 なく問屋をも 屋であった。

たが

ま

かった。

125

らしき女があら かたむけ、かれらの顔色をうかがうふうがあった。 はまっ 長 門から数メートルは たガラス戸が左右にひらいていた。 われて、広い板の間に手をつかえた。若者はふたこと三言その女と話して 1 ったところに、 若者がはい 昔の青楼をお

っていくと、奥から年老

た女中

もわせる広い玄関があり、格子

耕助はそこを通り過ぎた。陽はまだ高いのである。錨屋で旅装を解くまえに、 ス の目ぼしいところを見ておこうと思ったからである。どうせ荷物といっても、 たが、そのま トンバッグひとつなのだから。 この過疎の島に、いったいどういう用件が、あるのだろうかといぶかりながら、金田一 ま靴をぬ いで板の間へあが っていった。 古ぼけたボ ちおう島

かげもなく漆喰は剝げ、 つてはそこに鰊のシメ糟がいっぱい詰まり、その繁栄を誇ったことだろうが、い 錨屋の隣りに古い土蔵があった。 屋根 も鍵屋の持ちものなのだろう。 のうえにペンペン草がそよいでいるのも、下津井で見た風景とおなじで、 白壁は落ち、下塗りの荒壁の下からむざんにこま おそらく問屋としての錨屋が所有していたもので、 錨屋とおなじ錨のマークがついているところをみると、 いか のぞい ま は見る てい

けられたが、どこにも人影が見られないところも下津井と同様だった。洋品店を覗いてみ ると無人の店の奥まったところで、テレビの画像がかってに動いているのも虚しかった。 たりを見まわすと、 、そこに八百屋があり、雑貨屋があり、酒屋があり、洋品店

浴場があるらし せいに里帰りしてきたせいであろうか。このへんを小磯といい、 に も活気があふれているのは、越智竜平のは からいで、 かつて離島した人びとが、 その西にある大磯に海水

家々とは るまでもなく、金田一耕助の頭にはしっかりたたみこまれている。地図によると新在家と 部にかいてもらった刑部島の略図がある。かんたんな地図だから、 てい る錨 一耕助 ち 屋が か 刑部島の銀座通りというところらしい。両側に二十軒ばかり、小磯で見かけた 7 の懐中には鉛筆をはさんだノートがあるが、そのノートのあいだに、 あっ て、いくらか小ましな人家が並んでいるが、そのなかに金田一耕助の目差 た。 いちい ち取り出してみ 磯川

う。二階も階下も細い格子がはまってい 部屋部屋は、昔遊女が荒くれた船頭たちをあいてに、愛欲変相図を展開 船着き場から金田一耕助と抜きつ抜かれつしながら歩いてきた、 が には昔 いてい の武家屋敷によく見かけられた長屋門を、小規模にしたような門があり、 たので、そこから玄関まで見通しであった。 るのは、遊女の逃亡を防ぐためであろうか 門の左右にある二階建ての 薄茶色のジ したところであろ

なかでも島の人びとの喧騒のなかにくわわらず、ひとり圏外にあってかれらの会話に耳を から胴乱をぶらさげた若者が、錨屋のまえまでくると足をとめて、 旅人宿 やがて長屋門のなかへはいっていくのを見て、金田一耕助は へは いっていくところを見ると島のものではないとみえる。そういえば船の おもわず目 あたりの構 ヤンパ をそばだ しに、

そばにたたずんで、 当たるはずである。 かれ 地蔵峠にさしかかるのだろう。道はそこでふた股にわかれており、舗装道路が地蔵峠とわ て南東へむかって走ってい しばらく左のほうを眺めていた。 金田一耕助は「右かぶとやま、左じぞうだいら」と彫った石の道標の る。その道を進むと竜平がこんど新しく建てた豪邸 に突き

る。 自動車 コースによってはそこを往き交う船をながめながら、ゴルフを楽しむことができるのであ 路もはるかにひろがっていて、そのさきに瀬戸内海のエメラルド・グリーンが望見される。 なるほどここははじめから屈強のゴルフ場だったにちがいない。ゆるやかなスロープが目 竜平の建設しているというゴルフ場が、そこにはろばろと緑のひろがりを見せてい すぐ足下にクラブ・ハウスらしき建物がみえ、その隣りにホテルらしき二階建ての洋 やトラ いまや外装に追われているようである。ゴルフ場はもう完成にちかいのではないか。 ックがあちこちをうごめいている。

一耕助 はまた溜め息が出た。

なるほどここは本土に近

い。下津

并

からでもわずか八分くらい

近い将来には博多新幹線も開通するという。 敷や岡山 から船が出 あるいはもっと遠く神戸大阪からでも、 るとするともっと近い のではない か。 ここに完備したゴルフ場ができれ ゴルファーを誘引できるのであろう。 の距離である。

分ついているのだろう。しかし、竜平がこの島に莫大な投資をするのはたんなる商売気 越智竜平のやることだから、そこに抜け目のあろうはずがない。採算のとれる見通しは

そらくおなじことだろう。金田一耕助はなぜか溜め息がでた。 が、道のすぐかたわきにある家を覗いてみると、明らかに無住であった。 うつちゃ もう耕す人もな 畑仕 在家を離れると道は爪先上がりになっていて、両側 らか 事 してあるのだろう。そのだんだん畑の 女房の役目だったのだろうが、 11 らしく、 荒廃するまま ĪZ まかせてあるようだ。 一家をあげて離島 あちこちに、 は段々畑になってい したので、 粗未な家が点在し 思うに亭主は漁業に従事 ほ 畑地 るが、 かの家々もお もその 7 まは 61 ま 3 ま

心に舗装されていた。 新在家をつなぐ道を地蔵坂とい だいに急になってくる。 川警部の この島は東西が四キロ、南北がニキロくらいの、 ち水島コンビナートのほうにむかって開いている。そして南の端れが海面から一 かいてくれた島の略図には誌し ルほど隆起しており、そこから北へむかって急角度に傾斜している。この兜山と 道は自動車がやっとすれちがえるくらいの幅員をもっており、 い、その坂の急なるあたりを地蔵峠というのであると、 てある。 坂は島のほぼ中央部を迂回しながら、 ほぼ長方形をなしており、港は北側

汚れているのも物悲し 坂にも名詮自性、両側に点々として大小さまざまなお地蔵様が鎮座ましますが、首に た赤かるべき涎掛けも、 地蔵坂といい、地蔵 1 によいう名は日本全国に何十か何百かあるそうだが、 いまはもう掛けかえてくれる人もないのか、埃にまみれ この島 て白 のその かけ

そのお地蔵様のかずがにわかにふえてくるあたりから、 坂は急になってくる。いよいよ

なってい 寺があ 石 りはじめた。 が並んでい 金田 の墓地の入口に小さなお堂があり、 ったのだけれど、 一耕助はまた溜め息を吐き出すと、ボストンバッグをぶらさげたまま、地蔵峠を登 た寺のあ しばらくいくと左側がちょっとした平地になっており、そこにたくさんな墓 た。この島の墓地なのだろう。 とへ、越智竜平の家が建っているのであるということであっ 島が過疎化するにつれて住職の生活がなりたたず、久しく無住に 正面に斜に組んだこまかな格子が 磯川警部の話によると、かつてはこの島にも 張 7

けれど、それでもなおかつ見るものをして、ゾーッと寒気立たせるようなところがあると が、これ以上の残酷さはあるまいと思われるような筆使いで、ことこまかに描かれ かつては毒々しい泥絵の具でかかれていたらしいその地獄絵も、いまはもう色褪せている の池地獄に針の山、地獄変相図である。 ったのは、 一耕助がなにげなく覗いてみると、 は急いでそこを離れると、足をはやめて坂を登りはじめた。 金田一耕助がいま不吉な予感に怯えているせいであろうか 薄暗い堂の正面の板壁一面にえがいてあ 地獄におちた亡者どもの責め折檻を受けて 坂の 側 は依然とし る 7

島

石の地蔵尊が点々として鎮座まします。

その地蔵尊が姿を消したあたりまで登ってく

ていた。戦争中竜平は若き日の巴御寮人と駆け落ちしたことがあるという。 だけだろうか 金田 一耕助は ゆくりなくもさっき松蔵の口から聞いた竜平の、昔の秘めごとを思い それ

をい

必須の人物として、徴兵も徴用も免除になっていたはずである。それがにわかに召集されらずからまもなく赤紙がきたという。いったい網元の未裔にうまれた竜平は、島にとってそれからまもなく赤紙がきたという。 そのときの竜平の胸中は察するに余りあるものがあるように思われる。 の吉太郎の裏切り行為から、追手につかまり島へ連れ戻されたところまではよいとして、 、刑部大膳の画策によるものであろうと、当時島ではもっぱら評判だったとい

平の腸は煮えくりかえるようなものがあったろう。 換条件があったにちが 17 金田一耕助はまだ知らないけれど、かれとても巴の駆け落ち一件は知っていたにちが しかも、終戦後復員してみると、巴にはれっきとした婿養子ができていた。おそらく竜 わば疵物である。そういう娘と夫婦になることを諾ったとすれば、そこになにか交 いない。 婿養子の守衛という男がどんな男か、 いなな

巴も首を縦にふらずにいられなかったのであろう。 もう五十だという。ずいぶん年齢のちがう夫婦だが、それもおそらく大膳に強要されて、 竜平と巴は五つちがいだったという。すると巴はいま二十九歳になるはずだが、守衛は

き人物である。しかも、いっぽう竜平の邸宅はもうできあがり、叔母の越智多年子という どちらにしても刑部大膳というじさまは、越智竜平にとって不倶戴天の仇敵ともいうべ

七人を形取ったもので、土地の人はこれを七人塚とよんでいるという。 の大きさで、輪になってなにかを評議しているようにみえる。ここから入水した平家の侍 て、どの石にも苔が青々とむしている。その崖下が落人の淵だろう。 楢の木陰になって

袴といっしょに引きずっている。さいわいどこもかしこもいちめんの苔なので、泥によご たって邪魔っけになるのだが、不精者のかれはそれを脱ぐ才覚もないらしく、よれ づくと金田一耕助はとうとう四つん這いになった。こんなとき二重廻しというやつが、い 歩足下に海がせりあがってくるようなので、とても直立しては歩けない。 る心配はな 金田一耕助は爪先立った歩きかたで、おそるおそるその崖ぶちまで近づいてみた。一歩 崖ぶちまで近 よれの

帽をおさえながら、腹這いになったまま崖っぷちから下を覗いてみたが、なるほどここか質 形に抉られているかららしい。 て、そこが淵になっているというのは、崖の麓に巨大な岩が突出していて、それがアーチ ほとんど垂直といってもいいくらいの急勾配で、断崖は七、八〇メートル下まで落ちてい ら落ちたら命はないと思わざるをえなかった。いくらか傾斜がついているとはいうものの、 やっと崖っぷちまで這いよった。金田一耕助はボストンバッグを胸に抱き、片手でお釜。

らく刑部神社なのだろう。 ると、右手にあたって杉木立ちのあいだから、神社の屋根らしきものが見えてきた。

と、落人の淵は社の背後にあたっている。金田一耕助はなにをおいても、まずそこを見てと、著語のと、語 石段の下のゆるい傾斜をゆっくりとのぼりはじめた。磯川警部のかいてくれた略図による しばらくいくと社へのぼる石段があった。しかし金田一耕助はそちらのほうへいかずに、

おきたかったのである。

歩そこへ踏みこんだ。 間にうかんでいる。土地の人びとが千畳敷きと呼んでいるところである。金田一耕助は がひらけた。そこは百畳敷きくらいの舞台になっていて、いちめんに楢だの櫟だのが茂 ている。そして、そのむこうには明るい瀬戸内海の海がひろがり、となりの島々が指 は昔からあったものだろう。 などもそうとう古いものである。社を建てかえたのは越智竜平かもしれないが、その結構 そのあいだから羊歯の類がいちめんに生えている。さっきの石段もそうだったが、この崖 石段にそってごろた石をたたみあげた高い崖がある。崖にはいっぱい苔がむしていて、 ゆるい傾斜をのぼって崖の背後へまわると、 、豁然として眼界 呼の

に巨石がいくつか並んでいた。数えてみると七つある。ちょうど人間が坐っているくらい 交錯して陽の光りをさえぎっているので、草も生えないのであろう。この千畳敷きの片隅 くとき質のよ さっきの崖とおなじように、千畳敷きのうえにはいちめんに苔がむしていて、そこを歩 い褥のうえをいくような足触りを覚える。頭上にはいちめんに楢や櫟の葉が

獣のような凶暴な目ということは、裏をかえせば獣のように臆病な目ということになるの が だろう。 った人間というものは外界を知らないから、外来人を見るとひどく警戒するのであろう。 ゆるんで、例の人懐っこいニコニコ顔が浮かんでいる。 相手は警戒するような目でまじまじとこちらを視詰めている。元来島で生まれて島で育

吉太郎くん、すまないが錨屋の大旦那のところへ、ひとっ走り使いにいってくれ

と、ギョッとしたように金田一耕助の顔を視直した。 かたくなに沈黙を守っている吉太郎は、さすがに封筒の宛て名と差し出し人の名前を見る トのあいだには例の封書がはさんである。越智竜平から刑部大膳へ宛てた紹介状である。 金田一耕助は二重廻しのまえのボタンを外し、懐から部厚なノートを取り出した。ノー

しておこうと思ってね。日暮れごろまでにはお伺いすると、そう申し上げておいてくれな っき錨屋のまえを通ったのだけれど、まだ陽が高かったもんだから、そのまえに島を見物 「そう、そこに金田一耕助持参とあるだろう。その金田一耕助というのがぼくなんだ。さ

そのほうへ目をやった。ごろた石でたたみあげた崖は高さ五メートルくらいもあろうか。 そのとき背後の崖のうえからとつぜん聞こえてきたのは琴の音である。ふたりは反射的に 吉太郎はその封書と金田一耕助の顔を見くらべながら、うさん臭そうな顔色だったが、

身近になにかものの動く気配を聴いたというより、本能的に感じたからである。振り返っ てみると吉太郎であった。

じとこちらを睨んでいる。狭い額、迫った眉の下に獣のような目が凶暴に光っている。輪になった七つの石の、いちばん金田一耕助に近いやつに手をついて、吉太郎はまじま

して声なく、あいにく沖には通りかかる船もない。 のそのあたり、楢と櫟の葉におおわれて、だれの目もとどかないのである。森羅万象関と がった。彼我の距離五メートル、あたりにはだれもいないし、だれの目もない。千畳敷き 金田一耕助は全身に鳥膚の立つような恐怖をおぼえながら、いそいで苔のうえに立ち上

たからかれはじぶんでじぶんをたしなめる。いけない、いけない、そういう先入観を持つ はなかったろうなと、そう考えると腋の下から冷たい汗が吹き出した。だがそう考えるし 一瞬、二瞬、睨み合いがつづいている。まさかこいつおれを崖下へ突き落とすつもりで いちば んいけないことなのだ。 ……

「吉太郎くんだったね」

った。上目づ 「ここで会ったのは幸いだった。あんたにひとつ頼まれてもらいたいことがあるんだが 金田一耕助はできるだけほほえもうとしたが、残念ながらその微笑は頬のうえでこわば かいにこちらを見ている相手の目が、いくらか怯んだように見えた。

金田一耕助はまたほほえんだ。こんどはほんとうに微笑がでた。その証拠には頬の筋肉

しかに三面のようである。と、すると、巴御寮人とふたごのきょうだい真帆片帆なのだろろうか。巴御寮人なのだろうか。いや、いや、琴の音は一面ではない。二面、三面……た うか。それにしても尺八のぬしはだれなのか。 金田一耕助は林のなかに立って、しばらく琴の音を聞いていた。弾いているのはだれだ

吉太郎が

あいつが……?」

と、疑わしげに口のうちで呟き、

だろう。しかも、それはおよそ尺八などに縁のなさそうな人物にみえたにちがいない。い ったいその客とは何者だろう。 は金田一耕助よりひと足さきに刑部神社へ寄ってみて、そこに客のあることを知ったの と、打ち消していたところをみると、よほどそれは意外な人物なのだろう。おそらくか

郎と相対して、緊迫した一瞬を経験したあとだけに、なんとなく心が和む思いであった。 いう種類の邦楽には、いたって造詣のうすい金田一耕助だけれど、さっきは かれは足下のボストンバッグを取りあげて、ゆっくりと林を抜けると千畳敷きを出てい 金田一耕助はしばらく琴と尺八の合奏に耳をすましていた。さっきもいったとおりこう からずも吉太

刑部神社へあがる石段はちょうど二十段あった。石段の左右についている御影石の手摺

れに嫋々たる尺八の音がまじってきた。 て呼吸があったのか正式な弾奏がはじまった。筝曲に造詣のうすい金田一耕助 その崖のうえにみえるのは刑部神社の背後であろう。琴の音はそこから聞こえるのである。 琴の音は一面、二面、三面である。はじめは調べをあわせるような音色だったが、やが 曲の名はわからなかったけれど、よくハーモニーされていると思ったつぎの瞬間、 のことだか

それを聴いたとたん吉太郎は文字どおり苔のうえでとびあがった。

「あいつが……?」

と、疑わしそうに口のうちで呟いて、

っていた鳥が二羽、晒々と鳴きながら飛び立った。 金田一耕助がさっきやってきた崖下の道へ姿を消した。そのとたん刑部神社の屋根にとま みるや、封書をわしづかみにしたまま、いちもくさんに千畳敷きの林のなかを駆 と、物問いたげな目で金田一耕助の顔を凝視していたが、急にくるりと踵をかえしたと け抜けて

り、捕獲したりすることはいっさい禁じられているという。 ころによると、鳥は刑部神社の使わしめなのだそうである。 えず鳥が頭上を飛んでいった。ずいぶん鳥の多い島だと思ったけれど、あとでわかったと 金田一耕助がこの島へ上陸してから、鳥の声を聞くのはこれがはじめてではない。船着 いっぱい鳥が飛び交っていたし、地蔵坂から地蔵峠をのばってくるあいだも、た だからこの島では鳥を殺した

吉太郎のうしろ姿がみえたので、金田一耕助はおもわずほほえんだ。あの男の目にはじぶ 竜平の自家用汽艇とヨットが小さくゆれている。地蔵坂の中腹を小走りに駆けおりていく んはなんと映じたことだろう。相変わらずおびただしい鳥の群である。 る。遥か下に人家がひとかたまりになっているのは新在家だろう。波止場のなかには越智 と島のほぼ全容が見渡せる。杉木立ちの梢をこえて右下に広がっているのがゴルフ場であ 一耕助はひととおり外回りを見て歩くと、境内の北の端れへ出てみた。そこからだ

ず大きく目を視張って、あわててかたわらの石燈籠のかげに身をかくした。男のシャツの れか出てくるようすである。うしろむきに出てきた男の背中を見て、金田一耕助はおもわ 琴と尺八の音はもうやんでいた。しばらくすると社務所のガラス戸がなかから開いてだ

I WILL DO EVERYTHING ONCE

染め出してある。

たので、背中の文字は見えなかったけれど、胸には、 このあいだ鷲羽山であった若者にちがいない。あのときは大きなリュックを背負ってい

WILL SEE EVERYTHING ONCE

染め出してあるにちがいない。

だ盛んだった江戸時代からあるものだろう。 には下津井の住人と肩書きのついたものもある。 りの柱には、一本一本奉納者の名が彫ってある。 ほとんどが刑部姓のものだったが、なか いうことは、この石段は下津井がま

納まっているはずの神輿もこんど竜平が寄進したものだそうである。 輿蔵があるが、ここからが越智竜平の寄進によるものだろう。 そうとう年代ものである。 石段をあがると古い石の鳥居が立っており、左右に狛犬がすわっている。鳥居も狛犬も 鳥居をくぐると境内はそうとう広く、まず取っつきの左側に神 蔵も新しかったが、 なかに

奉納したものだろう。絵馬のなかには賽子や花札に大きな南京錠を掛けた図が 新しかった。扁額には北前船らしい和船をかいたものが二、三あり、これは北 ものだが、 れはおそらく博奕好きの亭主を持った女房が、博奕から手が切れますようにと願をかけた 神輿蔵のつぎに絵馬堂があり、なかを覗くと絵馬や扁額は古い これらの絵馬を見ていると、昔の漁師の生活がうかがえるようである。 酒という字と女という字に南京錠を掛けた絵馬もある。みんなずいぶん古い ものだが、堂そのものは あ 国 3 の船主が

がった建物がある。琴と尺八の合奏がその社務所の奥から聞こえるところをみると、そこ て、そこに神楽殿が前面にせり出していた。 絵馬堂の奥に拝殿があり、拝殿から右へ廊下がつづいていて、そこに社務所の看板のあ 一家の住居にもなっているのだろう。 この社務所からさらに右へ廊下がつづいてい

全体として小ぢんまりとした作りだが、それでも賽銭箱まで木の香も新しく、ずいぶん

から出てくるものはなかった。金田一耕助の脳裡をそのときまたさっとかすめてとおった それにしても尺八を吹いていたのはだれなのか。 金田一耕助は目を皿のようにして、 巴御寮人たちの背後を注視していたが、だれもあと

「あいつが……?」

「まさか……」 と、それを打ち消すような舌打ちである。 と、いう吉太郎の疑わしげな呟きと、

うという若者だったのか。

それではいままで尺八を吹いていたのは、このなんでも見てやろう、なんでもしてやろ

金田一耕助の目にふかい驚きと猜疑の色がかぎろうている。

第 七 若者ふたり

「金田一さんはきのう巴御寮人にお会いんさったそうですな」

ためにこの島へやってきたのだろう。一度はなんでも見、なんでもしてやろうというスロ ーガンのせいなの 度はなんでも見てやろう。一度はなんでもしてやろうか。それにしてもいつ、なんの か。

耕助は全身に電流を通じられたような、はげしいショックを感じずにはいられなか の美しさは、それをはるかに超えていた。 手があまりにも美しかったからである。磯川警部もいっていたとおり、一卵性双生児であ どうしても思えない。三人とも長い髪をうしろに垂らして、薄いピンクのブラウスに、濃 ろ三十そこそこにしか見えなかった。左右にしたがえたふたごの姉妹、真帆片帆の母とは 者のあとにつづいて三人の女性が出てきたが、そのなかのひとりを目にしたとき、金田一 るところの真帆片帆は、 い朱色のスラックスというお揃いの姿だったが、それが金田一耕助に巫女を連想させた。 それにしても巴御寮人の姿を見たとき、金田一耕助はなぜ激しい戦慄を感じたのか、相 その若者がうしろむきになって出てきたのは、手にカメラを構えているからである。若 一耕助の計算によると、巴御寮人はことし三十九歳になるはずだが、こう見たとこ 瓜ふたつほどよく似ていて美しい。しかし彼女たちの母なるひと った。

かくやとばかり、あたりが明るくなったと思われるほどの美しさだった。 妙な比喩だが天の岩戸がぽっかり割れて、 なかから太陽の女神が出現ましましたときも

巴御寮人は神々しいばかりに美しいのみならず、また小娘のごとく悩ましくもあどけな

なものを着ている。初対面の客に会うにはずいぶん失礼ないでたちだが、このじさまだと は前をあわせて腰のところで紐で結ぶようになっている、これまたすずやかな甚平のよう ふしぎに板についている。だいいち相手にくつろぎをあたえる。それがこのじさまの配慮

に頼まれて、四人の記念撮影のシャッターを切らされましたよ ているところへいきあわせたもんですからね。これさいわいといわんばかりに三津木くん 「はあ、ちょうど三津木五郎くんが、巴御寮人とふたりのお嬢さんの、写真を撮ろうとし

金田 一耕助は人なつっこい微笑をうかべて、

なたはあのかたの、大叔父さまに当たられるんだそうですね」 「それにしても巴御寮人はおきれいですね。神々しいばかりに美しくていらっしゃる。

たごの兄の天膳というものが、婿養子にいったもんですけんな」 「はあ、御寮人の母の母、つまり御寮人の祖母の瑠璃というもののところへ、わたしのふ

金田一耕助はおどろいたように相手の顔を視直したが、大膳はケロリとして、「旦那はふたごにおうまれになったんですか」と

な。よう人に取りちがえられたもんです」 「そう、兄が天膳でわたしが大膳、一卵性双生児というやつで、瓜ふたつにうまれついて

一そのお兄さまは……」

とも兄は海難事故でしたけれど」 るばかりではなく、運勢までおなじようにいうが、そうとばかりはいかんもんでな。もっ 「とっくの昔に亡くなりましたよ。人はよく一卵性双生児というもんは、顔かたちが似て

「海難事故とおっしゃると?」

「釣りが好きな人でしてね。神主の仕事の閑なときにはよく沖に舟をうかべて、釣り糸を

わ になっているらしい。 いたらしく、しばらくうさん臭さそうにもじゃもじゃ頭を見ていたが、すぐ持ちまえのさ やかな笑顔になった。笑うと八重歯が印象的で、それがこの若者のチャーム・ポイント 相手もすぐ金田一耕助を思い出したらしい。金田一耕助が驚いたとどうように相手も驚

「おじさん、おじさん、ちょっとこちらへきてください」

そばを離れた。そばまでいくと、 金田一耕助はこの若者の無邪気さというか、図々しさに呆れながら、それでも石燈籠の

すみませんが、シャッターを切ってくれませんか」 「おじさん、お願い。ぼくこの人たちと記念撮影をしたいと思っていたところなんです。 もういちどファインダーを覗くと、むりやりにカメラを押しつけた。

んだと思ってくれたまえ。今夜から錨屋さんにお世話になるつもりだ。きみは?」 己紹介をさせてもらおう。ぼく金田一耕助、まあ、東京からやってきた風来坊みたいなも 「きみ、そのまえにこの人たちに紹介してくれなきゃいけないじゃないか。そうそう、自

らむかって右が真帆ちゃん、お姉さんのほうです。左が片帆ちゃん、妹さんですね。では 三人さんのうち、まんなかにいらっしゃるのが巴御寮人、宮司さんの奥さんです。それか 金田一さん、 「ああ、失礼しました。ぼく三津木五郎、神戸からきた風来坊です。それからあちらのお 、お願いします」

と、とうとうカメラを押しつけると、

か

ŧ

ない。

るつもりだが、雀の巣のようなもじゃもじゃ頭はあい 昭 て、それだけに気温も高い。金田 和四十二年七月二日の午前十時。きのうとはうってかわって空はカラッと晴れあがっ 一耕助もひとえに着かえ、夏袴に威儀をただしてい

あ の漁船であろうか。天気がよいのでなにもかもがさわやかにみえるが、しかし、長火鉢を の船である。四国との連絡船もあれば砂利船もある。帆をかかげて走るのは下津井あたり いだに挟んで相対しているふたりの胸中はどうであろうか。 のところに水島コンビナートの煙がみえる。そのあいだを往き交うのはさまざまな種類 そこは錨屋の階下にあるお帳場である。開けっぱなした障子の外はすぐ海で、 かわらずである。 海上数キ

ではない きのう金田一耕助が巴御寮人たちの記念撮影の、シャッターを切らされたというのは嘘

帆片帆のふたごの姉妹を侍らせて、いろいろポ の女性が、いちように驚きの目を視張ったので、 って金田一耕助を見た。はたしてこのあいだ鷲羽山で会った若者だった。 ったところで、金田一耕助はつと石燈籠のかげから出た。 あのなんでもしてやろうくんが、 拝殿の賽銭箱のまえへ、巴御寮人を中心に、左右に真 ーズに注文をつけたのち、 カメラを持った若者もうしろを振りかえ こちらをむ 11 て立 シャツの胸に、 ってい ヤツ ターを切

I WILL SEE EVERYTHING ONCE

と、染め出してある。

「真帆さんも片帆さんもニッコリして……」 金田一耕助はもう一度、

しかし、ふたりとも怒ったような表情はかえなかった。

「じゃ、撮りますよ 金田 一耕助はしかたなく、

いいながらシャッターを押した。

けができたらすぐ持ってきます」

「ありがとう、

金田

一さん。ありがとう、

お母さんも真帆ちゃんも片帆ちゃんも。焼き付

りというものを知らぬ性格らしい。あどけない顔でニコニコしながら、 だれにともなく頭をさげると、片帆のあとを追って社務所のなかへはいっていった。最後 れに反して真帆のほうはいくらか気兼ねをしているのか、うすく愛想笑いをうかべながら、 務所のなかへ逃げ込んだところをみると、彼女がいちばん腹にすえかねていたらしい。そ まで残ったのが巴御寮人であるところをみると、彼女がいちばん無邪気で、 りまいている。この記念撮影から解放された三人の女性のうち、まずまっさきに片帆が社 五郎は金田一耕助の手からカメラを受け取りながら、三人の女性にニコニコと愛嬌をふ およそこだわ

「では、五郎さん、写真ができたらみせてください ね

社務所のなかへはいっていった。五郎もすぐそのあとについていくと、社務所のなかから から金田一耕助にむかってにこやかな会釈を送ると、ふたりの娘のあとを追って、

「ぼく、お母さんと並ばせてください」 金田一耕助はこの若者の図々しさに呆れながらも、ファインダーを覗いてみて、 と、巴御寮人と真帆とのあいだに割ってはいって、すましかえってポーズをつける。

肩に手をおいてください。みんなカメラのほうを見てニッコリ笑ってください。じゃ撮り 真帆さんの肩に手をおいたほうがいいんじゃない? そうそう、御寮人さんは片帆さんの みんな御寮人さんを中心に、もうすこし寄ってください。そうそう、五郎くんは

どけなさから、警戒心より好奇心のほうが強いのかもしれない。 にたいして警戒心が強いのがふつうだというが、巴御寮人は持ってうまれた無邪気さとあ よ驚嘆せずにはいられなかった。金田一耕助の指示どおり彼女はかるく片帆の肩に手を いて、ニッコリと微笑をうかべている。島にうまれ島よりほかに知らぬものは、外来者 ファインダーをとおしてみて、金田一耕助は巴御寮人の高貴なばかりの美しさに、いよ

ても、どちらがどちらともわからないほどよく似たふたごだ。 たような顔をしている。なるほど、瓜ふたつとはこのことか、レンズをとおして眺めてみ しているのかもしれぬ。笑えといっても笑えるものではなく、 しい若者を警戒しているのである。いや、とつぜん出現した金田一耕助をより以上に警戒 その巴御寮人と肩すりよせるように並んだ若者は、これまた邪気のない顔で笑っている。 かし年若い真帆片帆はさすがにそうはいかなかった。ふたりは明らかにこのなれなれ ふたりともムッツリと怒っ

147 刑部大膳にふたりの駆け落ちさきを密告した。ふたりは大膳の放った追手につかまり連れ き竜平は金に困っていとこの吉太郎に手紙を書いたが、吉太郎は竜平の期待を裏切って、 と巴とは昭和十九年に駆け落ちをして、丹波の奥の温泉宿にひそんでいたという。そのと 越智竜平

細長いビニール製のバッグを持って出てきた。

のが目にとまった。 にげなく社務所の玄関を見ていた金田一耕助は、そこの壁に妙なものがぶらさがっている うしろ手にガラス戸を締めながら、内部にむかって挨拶をしている五郎の肩越しに、な

が微笑している鼻先へ、五郎がニコニコしながら来て立った。

いきましょう。金田一さんはこれから錨屋へいくんでしょう」

「ああ、そう、きみもあそこに泊まっているの」

「だって、島にはあそこしか泊まるところはありませんからね」

「きみはいつからこの島へきているの」

しろそうなので、そのまま逗留しているんです」 「いつか鷲羽山で会いましたね。あのつぎの日この島へ来てみたんですが、なんだかおも

「なんでまたこんな島へ……? なんでも見てやろう。なんでもしてやろうという、その

スローガンのせいなのかい いてきたよりもっとおもしろそうなんですね 「まあ、そういうことですね。この島のことは倉敷できいたんですが、来てみると噂に聞

「ときに、きみ、そのバッグのなかになにがはいってい 金田一耕助は若者がぶらさげている細長いバッグに目をやった。

短見者流と笑ってばかりはすまされないものを、 ごの姉妹、真帆片帆と款を通じているらしいところをみると、金田 さきに刑部島に出現しており、どういう手段をもちいたのかしらないが、巴御寮人やふた 強く感じずにはいられなかっ 耕助も警部の疑惑を

いままで生きてきた業の深さ」 いまから二十二年まえ複雑な事情のもとに犯した罪の恐ろしさ。しかもその秘密を種に

おちいった。そのドサクサまぎれに、現代では想像もつかんような犯罪が演じられたんじ えば昭和二十年、すなわち終戦の年である。そのことについて磯川警部はこういっていた。 「その年日本の主要都市がつぎからつぎへと、アメリカの焼夷弾攻撃にやられて大混乱に ありますまいか」 と、浅井はるは磯川警部にあてた手紙のなかに書いている。いまから二十二年まえとい

三津木五郎なるこの若者はちょうどそのころ生まれたという。金田一耕助はよっぽど、 浅井はるという女性をしらないかね」

部の職務 かせておけばよいのである。 の若者が と、聞いてみようかと思ったが、かれはそれほど軽率ではなかった。そのことは磯川警 いることをしったら、警部はどういう感懐を持つことだろうか、それは警部にま の領分に属することである。その警部もまもなくこの島へやってくる。ここにこ

「きみはいつまでこの島へ滞在するつもりだね」」金田一耕助は全然別のことを聞いていた。

磯川警部

の胸にあたためている疑惑である。

ネに長年恐喝をつづけてきたあげく、被恐喝者によって消されたのではないかというのが、 らしい形跡がある。 戻されたばかりか、その直後に竜平のところへ召集令状が舞い込んだという。 う下津井で殺害された浅井はるなる正体不明の市子は、その前後に刑部島にいた しかも、その女は刑部島の住人の重大な秘密を握っており、それをタ

の家から飛び出してきて、なにか気が狂ったようにわめきながら走り去るのをもう一度見 の主婦が目撃している。しかも、この主婦は三時間 の六月十五日の午後二時頃、ヒッピーみたいな若者がはるの家 浅井はるが下津井の自宅の祈禱所で絞殺されたのは六月十九日の夜だが、その ののちにおなじヒッピーが、 べは いってい くのを、 浅井はる 四日 I まえ

かしら事件の重大な鍵を握っているのではないかという、磯川警部の推理考察も故な に浅井は わ のごとき現代の若者が、市子を訪ねるというのもおかしいし、どういう祈禱を るは磯川警部に手紙を書いている。 からないが、三時間もかかったというのはよりおかしい。しかも、そのつぎ だからこのヒッピーが犯人でないにしろ、

警部のあまりにも短見者流の観察に失笑したものだが、いまその青年がじぶんよりひと足 五郎なる若者を、そのヒッピーではないかと疑ったことがある。 かも、警部はいま金田一耕助と肩をならべて、地蔵峠から地蔵坂 その とき金田 を下ってい 耕助

「すると、神戸の証券会社は……?」 さすがに五郎 の声 も湿っていた。

の形見の尺八なんです」 ように、八十八か所巡りでもしようかと思って倉敷までやってきたところ、この島の噂を えに両親の菩提をとむらうために……というと古いかもしれませんが、母がよくしていた る人だったようです。ぼくもいずれはその会社へはいることになると思いますが、そのま に仰ぎ、自分は、副社長に納まったんです。新田さんもやりてですが、父もなかなか出来 してくれたんですね。それが成功してメキメキ大きくなり会社組織にするとき、父を社長 かで、戦後失職して困っている父を、わざわざ播州まで迎えにきて、自分の共同経営者に れてきた応召兵なんです。その人とても父の世話になった、いや、父に生命を救われたと の新を組み合わせてあるんですね。つまり新田さんという人は戦争中、父の部隊に配属さ 「それはこうです、うちの証券会社『三新証券』というんですが、それ三津木の三と新田 なんでも見てやろうというわけで、ここへ渡る気になったんです。これ、父

してある。金田一耕助はそれを横目に見ながら、 五郎がたかだかと捧げた真っ白なビニール製のバッグには、SPORTING LIFE

「きみ、なにかスポーツをやっているの」 学生時代剣道をやってました。これも父のアドバイスです。父は五段だったんですが、

いと思ってるんです。なんでもことしのお祭りはとっても盛大のようですから」 「まだハッキリ決めていないんですが、少なくとも六日、七日のお祭りがすむまではいた

の中腹まで下ってきていて、新在家の部落がすぐ眼下にみえている。相変わらずおびただ う装うているのか、とても浮き浮きとした調子である。ちょうどそのころふたりは地蔵坂 い鳥の群れである。 五郎は金田一耕助の下心など全然気がつかないのか、それとも気がついていてわざとそ

=

たそうですよ」 「父は陸軍士官学校時代から尺八をやっていたそうです。だから前線でも尺八を吹いてい 「なるほど、元職業軍人だったお父さんが尺八を吹いていらしたんだね」

られました、ことに父には 「いいえ、ぼくは一人っ子です。両親にとってとても遅い子ですから、それだけに可愛が 「きみはお父さんの四十二の年の子だといったね。すると兄さんや姉さんは……」 ね

「すると、 お母さんがひとり神戸にいらっしゃるのかね

したが、去年の暮れ流感から肺炎を起こし、それをこじらせて死んだんです。でも母は本 父が亡くなったあと快々として楽しまずで、よく四国の八十八か所巡りなんかやっていま 「いいえ、その母も去年の暮れに死にました。三年まえに死んだ父のあとを追うように。

をいく金田一耕助と三津木五郎をボンヤリ見ている。 た松蔵である。カマドの下を焚いているのは細君だろう。庭先に女の子が立って、下の道 がはいって釘を打つ音がきこえる。 り返ってみると、雨戸のつくろいをしているのは、さっきこっぴどく吉太郎を弾劾してい 地蔵坂を下って新在家の手前までくると、さっきまで空家になっていた一軒の家に、人 カマドの煙突から煙が立ちのぼっていた。 何気なく振

「こんどの祭りには、だいぶ離島した人びとが帰ってくるようですね」

神楽殿ではお神楽もあるそうです。備中神楽というんだそうですね。ぼく楽しみだなあ。からいかできた。 「祭りの日にはお宮の境内から地蔵峠へかけて縁日の屋台が並ぶそうですよ。そうそう、

都会生まれの都会育ちのぼくには、なにもかも珍しいことずくめです」

か、 五郎はどこまでも無邪気だが、それが本物なのか、それともそういうふうに装っている 金田一耕助にもそこまでは見抜けなかった。

てから知ったの きみはいろんなことを知っているんだね。どっからそういう情報を入手したの。島へき

身の大富豪、アメリカがえりの成功者が、島を舞台に大博奕を打とうとしているんですっ てね。その人かつては石もて追われるがごとくこの島を出ていったんだそうですが、それ いてましたよ。倉敷のバーやクラブへいくとこの島の噂で持ち切りですよ。 「詳しいことはもちろん島へきてからですが、だいたいのことはこちらへくるまえから聞 なんでも島出

「学校はどちら……?」

「東京です。この春、卒業したんです」

「東京のどちら……?」

二十二歳でその学校を卒業したとすると、 五郎は最高級の秀才でなければはいれない学校の名を挙げた。

くよくの秀才なのだろうと感服していると、五郎が朗らかな声をあげて笑った。 一年も浪人しなかったということになる。

「どうかしたの」

金田一耕助が振りかえると、

「おじさんは金田一耕助さんとおっしゃいましたね」

「ああ、そう」

そんなに珍しいことなんですかね」 くに根掘り葉掘り聞きましたよ。ぼくみたいな若いもんがこんな島へくるということは、 「金田一さんは錨屋の大旦那とおなじようなことをお聞きになりますね。あの大旦那もば

まうだろう。自ら名乗りをあげるまでもないことだと思ったのである。 じぶんの身分職業が書いてある。それに磯川警部がやってきたら、なにもかもわかってし 耕助はあえてそれに触れようとはしなかった。越智竜平から刑部大膳へあてた手紙には、 この男はひょっとすると、じぶんのことを知っているのではないかと思ったが、金田一

きみはぼく

き見かけた老女中が出てきて、 な気がして、あまり愉快な心情ではなかった。 吉太郎はたしかに金田一耕助の依頼を果たしていたのである。錯屋の玄関に立つとさっ

金田一耕助先生でいらっしゃいますね。どうぞこちらへ」 案内されたのは海に面した十畳の座敷である。八畳のつぎの間がついていて、あい

んて、島の人びとも戦々兢々ですよ。おもしろいな、まるでモンテ・クリストですね。 名前はなんといったかな。ああ、そうそう、越智竜平氏……金田一さんはその人をご存じ だけにこの島に莫大な投資をしているのは、なにか復讐をもくろんでいるにちがいないな

「ああ、知ってる。ぼくはその人の紹介状を持ってこの島へきたんだから」 じつに巧妙な質問の切り出しかただと思った。金田一耕助はひと呼吸おいて、

「だれにあてた紹介状です」

相手もしばらく無言でいたのちに、

「錨屋のご主人、刑部大膳さんだよ」

五郎はちょっと虚をつかれたらしく、ちらと流し目で金田一耕助を見ていたが、とつぜ

ん大声をあげて笑い出した。

きたが、びっくりしたような目をして、ふたりの姿を見くらべながらいきすぎた。これか ら刑部神社へでもいくのであろう。 もう新在家 へはいっていた。島の人らしいのが数名連れ立って、小磯のほうからやって

雀の巣のようなもじゃもじゃ頭に、よれよれの着物に袴……それに金田一というのも珍し か知ってますよ。あなたの功名談はそうとうたくさん本になって出版されてますか い苗字ですからね。そうですか、越智氏があなたをこの島へよこしたとしたら……しかも、 「失礼しました。金田一先生、白ばっくれるのは止しましょうねえ。ぼくあなたがだれだ Š

「はあ、でも先客さまがはいっておいでんさりますけえど、よろしゅうございますか」

「置き薬の行商をなさるかたじゃそうでございます」「先客さまってどういう人……?」

消費された分だけ、金を受け取っていく商売であると老女中は説明した。ちなみにこの老 「置き薬というと……?」 置き薬というのはいろいろな薬を各戸ごとにおいていき、年に一回か二回まわってきて、

「ああ、そうそう、越中富山は薬の本場で、そういう商売があるとは聞いていたが、この女中の名はお島さんというのだそうだ。

へんでもそういう商売がいまでもあるんですか」

ょうさんございますけんな。で、お風呂どうなさいます」 「岡山県には総社いうて、富山ほどではございませんけえど、薬をつくる大きな会社がぎ

「その風呂、ふたりはむりなの

「ああ、それじゃ頂戴しよう」 いいえ、十人さんぐらいまでなら大丈夫でございます」

った青年だった。 湯殿へいくとそこの洗い場で石鹼を使っているのは、はたしてきょうちどり丸で一緒だ

「へえ、どうぞ」 「お邪魔します」

取りかこまれ酒池肉林の騒ぎを演じたのち、それぞれ相手を選んで二階の小部屋へ退けた の襖を取り払えば十八畳になる。おそらく昔はここで北国からきた賓客たちが、女たちに であろう。

たちは、そこからこの座敷へ招じ入れられたのであろう。)あとがのこっているところを見ると、おそらくオチョロ舟で運ばれてきた北前船の船頭,て、塀の外はすぐ海である。昔はそこに桟橋でもあったのではないかと思われる、棒坑 金田一耕助が立って縁側へ出てみると、海に面した裏門まで五つ六つの飛石がつづいて

ったん姿を消した老女中が、お茶とおしばりを持って現われると、

けん、明朝にしてほしいというておいでんさります」 「大旦那さまからのお伝言でございます。越智竜平さまのご紹介状たしかに拝見いたしま さっそくご挨拶に参上いたすべきところ、なにぶんにも年寄りのことでございます

、ええ、結構ですよとそう申し上げてください」

快くうべなった。 大膳もあまり唐突だから、気持ちの整理をする時間がほしいのだろうと、金田一耕助も

「それではお食事になさいますか。それともお風呂に……? お風呂ならわいております

「では、お風呂を頂戴しましょうかね」 陽はまだ高かったけれど、腕時計を見るとそろそろ五時半である。

するとあんた本職はお百姓さんなんだね

それから若者は金田一耕助の貧弱な肋骨を見やりながら、ど、いきなりこねえな過疎の島へくるなんて、ぼくよっぽどツイてないんですわ」 に相談してみたら、それじゃものは試しに、やってみるかちゅうことになったんですけえ 「へえ、亡うなったおやじも春、秋の農閑期にこれをやっとったもんですけん、会社の人

「そういうお客さんはまた、なにしにこねえな島へおいでんさったんです」 「ぼくは静養さ。少し仕事がたてこんで、ここんところ過労気味なんでね」

「どういう仕事をしておいでんさるんです」

ているのである。金田一耕助はいたずらっぽく目玉をくりくりさせながら、 若者の質問ももっともだった。いまでこそ素っ裸だが、かれは相手の異様な風体を知っ

「ぼく……? ぼくは探偵、私立探偵というやつだ」

(上)

159 うへ目をやると、 「じゃ、あの服装は変装ですか」 若者は度肝を抜かれたように、湯舟のなかの金田一耕助を視詰めていたが、脱衣場のほ

「あっはっは、いや、あれは変装じゃない。もじゃもじゃ頭によれよれの着物に袴という

人などに似合わない逞ましい体をしているが、首から上と下ではまるで膚の色がちがって ゴツゴツしているのは行商人とは思えない。まるで肉体労働者のようにみえる。 いるのは、絶えず行商をして歩くので陽に焼けているのだろうか。それにしても指が太く 金田一耕助は首まで湯舟につかると、目のまえの若者をそれとなく観察している。行商

金田一耕助は湯舟の縁に両腕をおいて、つくづく相手の体を眺めながら、

「あんたなの、置き薬の行商をしているというのは」

「へえ」

若者は低い小さな声で答えた。

商売にならんと思うな。余計なことをいうようだが……」 賑やかだが、祭りがすむとみんな本土へ引き揚げていくらしいじゃないか。こんな島じゃ 「だけどぼくの聞いてるところでは、この島は過疎の島だというぜ。ここ一週間ぐらいは

まったく余計なお世話である。

「はあ、ぼくまだ新米ですけん」

「ああ、まだやりはじめたばっかりなの」

ってみようと思うたんです」 「へえ、今度はじめてですん。 「シロミテというのは……?」 ちょうどシロミテになって、関になったもんですけん、

金田一耕助の質問に対して、シロミテというのは苗代がミテること、すなわち空っぽに

電気スタンドの灯を消した。青木修三がなにかの証拠をこの座敷のどこかに遺しておいた はないかとふと思いつき、そこらを調べてみようかと考えたが、すぐ思いなおして枕下の と思うと、 としても、 に波の音が耳についてなかなか寝つかれなかった。これは青木修三もこの座敷で寝たので しばらく輾転反側していたが、かれも疲れているのである。やっと睡魔におそわれたか 八畳のつぎの間つきの十畳は、金田一耕助のような野人には広すぎて落ちつかず、それ 、それを見逃がすほど、この家の主人は迂闊とは思われない。 あとは泥のように眠って、そしていま錨屋の帳場で、刑部大膳と相対している

第八章 神の矢

金田一さんは謡曲に『藤戸』というのがあるのをご存じじゃありませんか」 わたしはその方面のこといっこう不調法でして……」

若いころ読んだことがあります。巻頭の祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅 あんた『平家物語』をお読みんさったことは……?」

のが、ぼくのトレードマークでね。ときにきみ名前はなんというの」

「故郷は?」

「柿の木いうて総社のすぐ近くですん」

した。と思うと体が温まる閑もなく飛び出して、 かと体を洗ってしまうと、金田一耕助からなるべく離れるようにして湯舟のなかへ身を浸 上目づかいに答える荒木定吉くんの口調は、あきらかに重くなっている。かれはせかせ

「お先に」

は、なにか身にうしろ暗いところでもあるのではないか。金田一耕助は湯舟のなかでふい 場合はなにか特別に理由があるのだろうか。私立探偵を回避したいという気持ちのうらに と眉をひそめて、溜め息をもらした。 だれだって探偵だの私立探偵などと聞くと、気味が悪くなるのは当然だが、荒木定吉の と、挨拶もそこそこに脱衣場へ出ていった。気味が悪くなったらしい。

らどうかということだけは、書くことを忘れなかった。 う報告である。たんなる報告にとどめて、それについての疑問や感想を付け加えるの コーダーにいたずらをしていた、あのなんでも見てやろうくんが、刑部島へきてい その夜、金田一耕助は磯川警部にあてて手紙を書いた。手紙の内容は鷲羽山でテープレ かれにもまだなにもわかっていないのだ。ただ、それだからはやくこちらへきた

うち入れて、渡しけり……」 深きところは泳がせ、浅きところに打ちあがる。大将軍三河守これをみて、佐々木にたば りける。馬の草脇、胸懸いずくし、ふと腹につくところもあり、鞍つぼこすところあり、 けれども、耳にもききいれずわたしければ、土肥の次郎も制しかねて、やがてつれてぞ渡 殿、物のついて狂いたもうか、大将軍の許されもなきに狼藉なり、とどまりたまえといい かられにけり。浅かりけるぞや。渡せや、渡せと下知せられければ、三万余騎の大勢みな とどめよとのたまえば、土肥の次郎実平、鞭をあぶみに合わせ追いついて、いかに佐々木とどめよとのたまえば、上り

がに寄る年波で息が切れたか、いくらかテレ気味で額をなでながら、 「どうです、よう憶えておりましょうがな」 大膳じさまは調子にのって、張り扇ならぬキセルで長火鉢のふちを叩いていたが、さす

からおやじに仕込まれて、ケンケン服膺、暗記さされたもんですんじゃ」 「その一部分ですな。なにしろわたしどものご先祖に縁のふかい戦ですけんな、幼いとき

「ああ、それが『平家物語』十三巻の『藤戸』の一節ですか」

思いがけのう三万余騎の軍勢が、海をわたって怒濤のように押しよせてきたもんですけん してここまでおいで、甘酒進じょとばかりに、気を許してお調子に乗っているところへ、 「そうそう、そのとき平家の軍勢はまさかそげえな浅瀬があろうとは気がつかず、船を出 「ああ、こちらのご先祖は平家の一門ときいておりましたが、そのときの戦で……?」 あわやとて舟ども押しうかべ、矢さきをそろえてさしつめひきつめさんざんに射る。

162 りますが、あとはもうさっぱりです」 双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす、と、いう章ぐらいはいまでも暗記しておいる。

抜けがけの功名も水の泡、またもし、敵に内通でもされたことには、大事ちゅうわけじゃ たちゅうのは、下郎は口さがないもの、もしや他の武将にしゃべりはせんか、そうなれば 瀬のあることを聞き知った。そこで三郎盛綱、その浦男を斬って捨て、首を刎ねてしもう その大将が蒲の冠者源範頼、それに対して平家は児島に軍をかまえ、その南岸を五百余艘頃がございます。藤戸ちゅうのは児島半島の地名でしてな、そこに源氏の軍勢が陣を張り 進めん にとっては前哨基地ですけん、源氏としてはなんとしてもここを落とさんことには の兵船で、かためておりまして、総大将は平行盛。当時児島は屋島を拠点としていた平家 「あっはっは、ま、そんなもんでしょうな。その『平家物語』の十三巻に『藤戸』という 藤戸から児島まで五丁ほどの海峡になっていたとおみんさい。それを源氏が渡 わけです。ところが当時はいまとちごうて、海がだいぶん陸にくいこんでい いつの時代でも戦ちゅうもんはむごいもんじゃとお思いんさい 馬でも渡れ たとみ まえへ る浅 りか

「さて佐々木三郎盛綱、寿水三年も押しつまった十二月七日、家の子郎党七騎をし そこで大膳じさまはひと息いれると、いつか講釈口調になり、キセルで長火鉢のふちを

ざんぶと海にとびこみましたな。それを見て驚いたのが総大将の三河守範頼、 あれ制せよ

の宮司の娘は日奈子いうて、それはそれはきれいなおなごじゃったと記録にのこっ 大蛇を退治 「その時分この島は妻恋島、神社の名も妻恋神社いうてな、ご祭神は出雲の国で、八岐の 大膳じさま長火鉢のむこうで膝をすすめて、 したという素戔嗚尊。尊の歌とつたえられる

「そうそう、そのことをいい落としてはなんにもならん」

がう、 家柄になってきたというんじゃけん、ま、 が刑部姓を名乗って神職をつぎ、そこで縁につながる落人の未裔が、 たんですけえど、その子どもの親たちが話しおうて、この子たちは島のもんとはわけがち すけえど、 れまでは もんじゃけ れぞれ相手をめっけて、夫婦気取りで暮らしていた。それがみんな子どもをあとにのこし 六人の郎党たちも、なにせここに半年以上もひそんでいたもんですけん、そのあいだにそ けえど、その刑部幸盛が日奈子とちぎって、男の子をあとにのこしたんですな。そのほ 重垣つくるその八重垣を』というところから神社の名もきてるんじゃそうな。そのじぶん |やけん、刑部を刑部と読ませて、それを苗字にさせることにしたんじゃそうな。そ平家の血を引いているんじゃ、とはいえ、まさか平姓を名乗らせるわけにもいかん この島 なにせ日奈子がひとり娘じゃったもんじゃけんな、刑部幸盛のうませ のもんは みんな越智姓を名乗っていて、越智家こそは本家みたい 上客転倒 もええとこじゃとお 『八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八 島に みん とって重 た男の子 要なお てま

人が駆け落ちしたとき、身分ちがいもはなはだしいと、烈火のごとく憤ったのもこの人だ なかなか物分かりのよいところをみせるが、昭和十 九年越智竜 平と四御寮

つれてこの島へかくれひそんだとおみんさい。刑部といいますけん、刑法のことでも司ったんですけえど、ここにひとり逃げおくれた平刑部幸盛ちゅうもんが、家の子郎党六人を 夜に入りければ、平家の舟は沖にうかぶ……で、児島の前哨基地を捨て、屋島まで退散し のりうつり、 源氏のつわものどもこれをことともせず、甲のしころをかたむけ、平家の舟にのりうつり おめき叫んでせめたたかう。源平みだれあい、あるいは舟ふみしずめて死ぬ あるいは舟ひきかえされてあわてふためくものあり。いちにち戦いくらして

ていたんでしょうな

淵。それが、文治元年七月七日、文治元年は西暦一一八五年じゃそうですけん、いまから敷きから身を躍らせて入水して果てたのが、きのうあんたが調べておいでんさった落人の ちょうど七百八十二年前の話ですんじゃ。いや、もうずいぶん古いお話をして恐縮でし 家はことごとく敗滅してしもうた。しかも、そのあと鎌倉がたの詮議がきびしゅうて、つ この七人をかくもうているうちに、その翌年の文治元年二月二十四日壇の浦の戦いで、平 いにはこの島へも及びそうになったので、平刑部幸盛はじめ六人の郎党しめて七人、千畳 「ああ、なるほど、それがこちらさんのご先祖でいらっしゃるわけですね」 「そういうことになっとおりますんじゃ。だいたい西国のもんは平家ビイキですけんな、

「その七人の落人がこの島にかくまわれているうちに、島の娘とちぎって子孫をあとにの こしたというわけですね」

なく尋ねてみた。 金田一耕助は心中靴をへだてて痒きをかくのもどかしさを感じながら、それでもなにげ

「いいや、いまではなにもかも失われてしもうた。わたしの子どものころまではのこって 「こういう島ですから、そのような古い記録が、いまでものこっているんでしょうな」

「どうしたんですか。出火でも……?」いたんですけえど」

れ以上の大台風でございましょう、倉敷なども高梁川の大氾濫で、そのとき以来地形が変年の八月にもそうとう大きな台風があり、県下各地地盤がゆるんでるところへさして、そ さんもごらんのとおり、刑部神社は島の南端の崖のうえに建っておりましょう。それが前 わったといわれるくらいですけえど、この刑部島も大打撃をうけましてな。なにせ金田 が襲来しましてな、岡山県いったいに大惨害をもたらしたもんです。なにせ、そのまえの わたしがかぞえ年で七つのときでしたな。これは都窪郡誌などにものこっているくらいで「いいや、火ではない。水じゃ、風じゃ、嵐ですん。あれは明治二十六年のことですけん、 わたしもよう憶えとおりますけえど、その年の十月十四日にものすさまじい台風

167 話しした昔の記録は神社の宝蔵におさめられていたもんですけん、それも地下に埋まって 年の嵐で地盤がそうとう緩んでるところへさして、二十六年十月十四日の大台風。大きな 崖崩れがございましてな、刑部神社なども崖の下に埋没してしもうたんですわ。さっきお

島とかわったんですか」 なにがこの人をかくも物分かりのよいじさまに変貌させたのか しても、いつごろから神社の名が妻恋神社から刑部神社になり、島の名まで刑部 、金田一耕助はあえてその問題にふれようとはせず、話題をかえて、

うたのもやむをえんこってしょうな。古い記録によると享保八年ということになっとおり ょうけえど、それ以来、刑部の一族と越智の一族のあいだに、はっきり懸隔がついてしも で神社も島も名を刑部と改めたんじゃそうな。その当時の神主がおそらく策動したんでし も刑部姓を名乗っているものにかぎって苗字帯刀を許されたばかりか、ご領主さまの命令 もうけたもんですけに、ここでがぜん刑部の一族がのしあがってきたとおみんさい。島 れがそのまま城中にとめおかれて、ご領主さまのご寵愛いたらざるはなく、つい とうとうご領主さまのお耳にはいって、お城へ召されたのが十六の年じゃったそうな。そ にすぐれて眉目よき娘がいたんですな。その噂がつぎからつぎへと伝えられていくうちに、 ああ、 、それ。記録によると江戸時代の中期、享保時代からですん。その時分神主のうち

あろう。まさか紹介状にある「静養のために云々」という言葉を、そのままうのみにして はその反対に、話が現実にふれるのが怖くて、こうして物語的な伝説に逃避し 由来を調べにきたのではない。もっと現実的な問題にふれたいのだけれど、じさまとして 一耕助にはそれらの会話がいかにも虚しいものに思われた。かれはこの島の来歴や ってい るので

落ちさせておいて、そうっとしておいたほうがよいのである。しかし、金田一耕助の脳裡落ちさせておいて、そうっとしておいたほうがよいのである。しかし、金田一耕助の脳狸 には、明治二十六年十月十四日という数字が、強く、鋭く刻みこまれていた。 れはそれを胸のなかで呟いただけで、相手の返事は期待していない。語るに落ちるものは と、尋ねてみようかと思ったが、それを口に出して質問するほど軽率ではなかった。か

ある。 隣り同士になっているので、昨夜のうちに昵懇になったものらしい。 鳴らして降りてきた二人づれがある。三津木五郎と荒木定吉である。二人の部屋は二階で のない 二人の会話にちょっと隙間風が吹きかけたとき、二階から、正面の広い階段をトントン 五郎のほうから接近していって、款を通じたのであろう。二人はおなじ年頃なので おそらくあの抜け目

「ちょっといってまいります」

は似たり寄ったりだが、陰と陽との対照的な二人のようだ。 した。定吉はなんとなくオドオドしたようすで、金田一耕助から目を反らせている。年頃 帳場をのぞいてそこに大膳と金田一耕助がいるのを見ると、五郎のほうが如才なく挨拶

「ああ、どっかへお出掛けかな」

る時分ですから、出来てたら御寮人さんに届けてあげようと思ってるんです」 ああ、 はあ、きのうまえの絵ハガキ屋さんに写真を頼んでおいたんですが、もう出来あがって あんたはきのう、御寮人の写真を撮ってつかあさったそうじゃな。荒木さんはど

169 悪 「はあ、きの 「ああ、どっ

をあとにのこしたんですけん、必ずしもそれが正鵠をえとるかどうか、 きんわけじゃけえどな」 しもうた。それをわたしのおやじがうろおぼえの記憶の底から掘り起こして、新しい記録 わたしにも保証で

ある。明治二十六年という年号が口に出たとき、金田一耕助の目がショボついたのを、語 弁になり、立て板に水を流すがごとく説ききたり、説きさるのであるが、たとえにもいう があるのではないか、たとえば青木修三の事件など。 平に対する敗北感か。それとももっとほかに現実から、目を反らさねばならぬ重大な問題 るに落ちた大膳は気がついていない。 ではないか、問うに落ちず語るに落ちると。大膳はいまはからずも語るに落ちてい あきらかに大膳じさまは現実から、逃避しようとしているのである。それは何故か、竜 かれは過ぎにし昔のこととなると雄 るので

か錆びついていた。しかも、あのとき広瀬警部補はこういって、金田一耕助に挑戦してき 下津井の市子浅井はるの台所から発見された古銭は全部、久しく土中に埋まっていたの

をなんとお解きんさる」 六年以前の ものなんです。それからのちのものは一枚もありません。金田一先生はこの謎 白 ことにはこの銅貨や銀貨、鋳造された年を調べてみたら、みんな明治二十

田一耕助はそのときよっぽど大膳に、

「明治二十六年の大台風のとき、崖崩れのために社殿は地下へ埋没してしまったとおっし

予行演習がはじまっているのである。それに金田一耕助のふところには、磯川警部にあて 分からはじまっていて、太鼓の響き、笛の音。帰島したひとびとによって、もうお祭りの 「いや、べつにそういうわけじゃありませんが、表のほうがだいぶん賑やかなようですか その賑やかさはいまにはじまったわけではない。かれがこのお帳場へ招じ入れられた時

おりますけん」 た手紙がは 「では、もう少しここにおいでんさらんか。いまの船で太夫がかえってくることになっと

「太夫さんとおっしゃると刑部神社の宮司さんですか」

「そうそう、巴御寮人のご亭主じゃ。会うておいてつかあさい。また何かの役に立つこと

があるやもしれんけんの」

べき口実もない。腰をあげかねてうじうじしているところへ、八の字に開いた表門から、 金田一耕助は内冑を見すかされたような後ろめたさを感じたが、さりとてそれを断わる

見る相手に滑稽感さえいだかせかねない。それでも当人は大真面目でもったいぶっている の馬面に天神ヒゲをはやしているが、それはその男に威厳をそえるものではなく、反対に

171 二人の男がはいってきた。 ふたりとも背広姿だが、ひとりは痩せてひょろ高く、それにそうとうの馬面である。そ

荒木定吉がもじもじしているので、二津木五郎がかわってこたえた。

んです。いいでしょう、御寮人さんや真帆ちゃん、片帆ちゃんに紹介してあげても」 「いやあ、この人もお宮を見たいというので、それじゃ一緒にいこうということになった

「ああ、まあ、いいように頼みますらあ」 大膳はキセルでたばこをくゆらせながら苦笑している。

「じゃ、いってきまアす」

ると、 定吉をうながしながらいきかけたが、なにかまた思い出したように帳場のほうを振り返

んですか。さあ、いこう」 「おじいさん、いま船が着いたようですね。また離島した人が大勢帰ってくるんじゃない

れたかを思いめぐらし、金田一耕助にひとつの疑惑を持ったかもしれないのである。 もしれない。もしそれに気がついたらこの抜け目のなさそうな老人は、どこで会話が跡切 がもう少し遅れていたら、大膳と金田一耕助の会話にちょっと隙間風が吹きこんでいたか いや、ご馳走になりました。それじゃぼくも……」 それにしても五郎と定吉は、よいタイミングに姿を現わしたものである。かれらの出現 五郎に注意されるまでもなく、金田一耕助も連絡船の着いたことに気がついていた。

金田一耕助が腰を浮かしかけると、

いか、 わしゃゆうべ読ませてもろうた」

「さっき船着き場であんたがいうておいでんさった、珍しいお客人というのはこのかたの 便箋を封筒におさめると、大膳じさまに返しながら、

ことかな」

やと思うたもんじゃけんな」 「そういうこってす。私立探偵とは竜平どんもまた、風変わりなお友達を持たれたもんじ

耕助のほうへ目をやって、 村長の言葉にはあきらかに皮肉のひびきがあったが、守衛はそれに耳もかさず、金田一

「この手紙では少し体をこわしているので、この島でゆっくり静養なさりたいとか……」

「はあ、いささかバテ気味なもんですから……」

いんさりました。いちばん最近では……?」 「それは好きなだけ逗留なされじゃが、しかし、金田一さん、あんたいつ越智さんにお会

六月二十九日でした。いちばん最近越智さんにお目にかかったのは……」 「わたしがこの島へきたのはきのう、すなわち七月一日ですが、その二日まえですから、 「東京の丸の内のホテルで」

173

面の天神ヒゲが巴御寮人の夫の刑部守衛だという。 ようだ。やがてお帳場へはいってきて、大膳じさまに紹介されたところによると、この馬

る。しかもこの男にはほかにふたり、御寮人がいるというではないか。 になるわけである。なんだか巴御寮人が気の毒になるような年齢差であり、かつ風貌であ あとでわかったところによると年齢は五十二歳だというから、巴御寮人とは十三ちがい

からな、 金田一さん、そちらにいるのが村長の刑部辰馬、わたしにとっては亡うな

った家内の甥じゃけん、まあ、甥分というところじゃな」

横のほうが広いのではないかと形容したいような人物である。年齢は五十五、六というと の辰馬は守衛とは正反対に、ずんぐりむっくりして、怒り肩に猪首の男で、縦より

ある。 ずけるのである。大膳は守衛の妻の大叔父であるのみならず、刑部神社の氏子総代なので して村長のみならず神主までがむこうから伺候してくるところをみると、なるほどとうな 磯川警部もいっていたではないか、この島では大膳じさまが最高主権者であると。こう

や、ちょっとこれを見てごらん」 「ところで、太夫、こちらはきのうこの島へおいでんさったかたじゃが、こういうお人じ

守衛は差し出し人の名前をみると、ピクリと眉をふるわせたが、無言のまま中身を引き 長火鉢の抽斗から取り出したのは、 越智竜平から大膳じさまにあてた紹介状である。

のだろうが、金田一耕助はこの痩せてひょろ高く、馬面で天神ヒゲの神主をおいおい視直 ている。横柄というよりは社をあずかるものの権威に満ちている。長年の習慣からくるも しかけている。 村長に対する守衛の態度なり、口の利きかたなりは、大膳に対するのとまったくちがっ

「それで、太夫は竜平どんに会うて来たのかな」

「ああ、まえからの約束でしたけんな。東京へきたら丸の内のホテルへきてほしいと」

「して、また、どういう用事で……?」

じゃ、仏つくって魂入れずもおなじことじゃけん、新しくご神体も寄進しようと」 はまえからいうておいでんさったろうが。神殿を新しく建てかえても、ご神体があのまま 「おじさんは聞いておいでんさるはずです。いや、村長もしっているはずじゃ。越智さん

「はあ、出来上がっているから、取りにきてほしいとおいいんさるもんじゃけんな」 それを太夫が受け取りにいったのか」

「なあ、金田一さん」 守衛はかたわらにおいた長方形の風呂敷き包みを解きながら、

ーはあ」

175 もんです。寺院の場合は古い仏像や仏画などがあり、いちおう文化的価値があるもんじゃ けえど、神社の場合はご神体として、古い鏡だのがある場合はまだしもとして、御幣だけ 「よう文化財調査委員などが神社や寺院の宝物を、見せろだの拝ませろなどというてくる

「いいえ、なんにも」 「そのとき、越智さんはなにかわたしのことを、いうておいでんさらなんだかな」

「それはおかしい」

守衛はちょっと眉をひそめたが、すぐ思いなおしたように、

「ああ、いや、なに、あんたはただこの島へ静養に来られたんじゃけん、それでよいのか

もしれんが」

しかし、大膳がそれを聞きとがめて、

「太夫、おかしいとはなにがおかしいんじゃな」

「いえね、おじさん」

と、守衛がいったのは、じっさいは大叔父さんになるわけだが、いちいち大叔父さんは

わずらわしいので、ふつうおじさんといいならわしているのであろう。 「金田一さんがお会いんさったそのまえの日、わたしは越智さんに会うておりますけん

「どこで……?」

「丸の内のホテルで……」

村長は驚いたように、

「ああ、神社庁にちょっと用事があったもんじゃけんな」 「そうすると、太夫さんは東京へいておいでんさったんで?」

-

ふえるごとに、お祭り騒ぎがエスカレートしていったのもむりは で、帰島したひとびとばかりだから、船が着くたびに船着き場には歓声が起こり、 のひとたちはみんな越智姓を名乗っており、しかも総本家であるところの越智竜平の斡旋 で調べたところによると、その数じつに三十二家族、総数にして百二人だったという。こ 便まで帰島するひとびとは後をたたず、あの酸鼻をきわめた大事件が起こったあと、警察 刑部島のお祭り騒ぎは日を追うてエスカレートするばかりである。 刑部神社の祭礼は七月六日と七日の二日間だが、その宵宮にあたる七月六日の午前の船 ない。

に革命でも持ち込もうというんじゃないでしょうけえど」 「いったいあなたの依頼人は、こんどの祭りでなにを企んでいるんでしょうな。まさか島

の印袢天を着て、小磯から新在家のあたりを駆けずりまわっているのだから、磯川警部がいるほどで ャラピーヒャラ、ドンドコドンと太鼓のひびきに笛の音、おまけに大人も子どももお祭り る。その連絡船にも刑部島へかえる人びとが大勢乗っており、それがまず警部を驚かせた みならず、金田一耕助に迎えられて船着き場へあがってみると、どこもかしこもピーヒ 金田一耕助の手紙によって磯川警部が島へやってきたのは、七月四日の午後の船便であ

島

177

かあさい」 人前へも出せぬほどお粗末なのでしたけえど、これからは大自慢で披露できるというもん しとい です。文化的価値はともかくとして、これほど高価なご神体をもっている神社は、日本広 の場合もあり、なんの変哲もない石の場合もある。わが刑部神社のご神体も、いままでは えどもおそらくほかにありますまい。おじさんも村長も、金田一さんもこれ見てつ

桐であろう、よく磨かれた蓋のうえには、て来たのは縦横八センチ、長さ五五センチばかりの長方形の白木の箱である。て来たのは縦横八センチ、長さ五五センチばかりの長方形の白木の箱である。 得意そうに喋りながら、守衛が膝においた紫縮緬の風呂敷き包みをとくと、 なかから出 おそらく総

刑部神社御神体 光陰」

こ、墨くろぐろとした達筆が躍っている。

矢じゃな」

ずっしりと持ち重りのするそのものを、 とると、そのとたん大膳も村長の辰馬も、 こめてひと呼吸、やがて蓋をとるとなかから出てきたのは、緋繻子にくるんだものである。 守衛は長方形の箱を縦におき、うやうやしくぬかずいて柏手を打つと、臍下丹田に力をとはわけがちがう。おじさんも村長も目がつぶれんよう気ィつけてつかあさいよ」 「ええ、そう、おじさん、矢は矢じゃけえど、いままでうちにあったようなお粗末なもの 左手に持った刑部守衛が、右手でパッと緋繻 いや、いや、金田一耕助でさえおもわずあっと

大きく目玉をひんむいて息をのんだ。

「どれどれ、わたしにも見せてつかあさい」

「いや、十八金じゃそうですけえど」

「や、これは重い、重いはずじゃ黄金の矢じゃけんの。いったい、これ、どれくれえの値 村長の辰馬は守衛の手から光陰と命名された矢を取ってみて、

「村長、さもしいことをきくもんじゃない。金田一さんにさげすまれるぞな」

段がするもんじゃろうな」

けえど調べてみればすぐわかる。十八金でいま一グラムどのくらいしているか、歯科医に でもきけばわかりましょう。それにこの矢の目方をかければ数字が出ることですけんな」 ね 「まさかわたしも越智さんに、値段のことまではようきかなんだとおみんさい。そうじゃ 「いえ、旦那、わたしもいまそれを考えていたところです。ずいぶん高価なもんでしょう

きりにぐるぐる振りまわしている。 村長はよっぽどこの矢が気に入ったらしく、ずっしりと持ち重りのする黄金の矢を、し

「これ、どのくらい目方があるじゃろうな」

「これ、辰馬、ええかげんにせんかい。ひとにぶつかると危いぞな」

でもひとたまりもあるまいな」 「いや、ほんとうじゃ。この鏃の鋭いこと。こいつでぐさりと突かれたら、どねえな人間

179 村長がさっと矢を振りおろすのを見て、天神ヒゲの神職はおもわず顔色をかえて、

目をまるくしたのもむりはない。

わたしも越智氏の真意をはかりかねているところなんです」 あの人の口からきいたのは青木修三氏のことだけ。それだけにこのお祭り騒ぎについては、 「ところがわたしはこういうことを、越智氏からいっこうなにもきいていなかったんです。

そうなのだ。

ようだ。 刑部守衛に会って、あの高価な神の矢を寄進しているのである。それにもかかわらず竜平 いた。そしてそのことが一昨日その場に居合わせた三人に、かえって安堵の念をあたえた はそのことについてひとことも金田一耕助に語らなかった。守衛に会ったことすら隠して 金田一耕助は六月二十九日に丸の内のホテルで越智竜平に会っている。その前日竜平は

「竜平どんはほんとうに、太夫のことをあんたにいわなんだんですか」

つきであった。 大膳じさまは不思議そうな顔色だったし、ほかのふたりの守衛と辰馬もさぐるような目

わたしはどうせたんにこの島へ、静養にきただけの人間なんですから」 「いや、いまお うかがいするのが初耳です。いう必要はないと思ったんじゃないんですか。

「なるほどなあ」

「それにしてもその矢、素晴らしいですね、全部純金ですか」 と、目と目を見交わしている三人の顔には、ありありと安堵の色がうかがわれた。

それはびっくりしたと同時に怯えたような顔色でもある。いかにも苦労性らしい五十男「警部さん、この島にまたなにか事件でも……?」

「ああ、 ちょっとな。だけどそのまえにきくが、その後島になにか変わったことはない

つかあさい」 「変わりがあったもなかったも大ありでございますよ。警部さん、まあ、表の騒ぎを見て

ッとしたような顔色になり、声を低めて と、いいながら警部のあとからはいってきた金田一耕助の姿に目をとめると、 またギョ

「警部さん、こちらあなたのお連れさんで?」

「私立探偵じゃそうですな。それに越智竜平さんのご紹介とか……?」 「そうそう、金田一耕助さんというてな。わしとは古いおつきあいだ」

っと変わったことがあるとすぐ噂がひろがってしまうのである。 金田一耕助はまだいちどもこの駐在所へ顔を出していなかったが、こういう島ではちょ

いよそもんが来てるじゃろうが。三津木五郎とかいうて……」 「はあ、あの若いもんがなにか……」 「そうそう、そうじゃけんこちらについては心配はいらんのじゃが、ほかにもうひとり若

181

しまいこんだ。 「そ、そ、そねえな不吉なことを……さ、さ、はやくこっちへ返してつかあさい」 と、急いでその矢を取り戻すと、緋繻子の布にくるんで、大事そうに総桐の箱のなかに

大膳は鋭くその顔を視守りながら、

んじゃないけ。これじゃあんまり至れり尽せりが、過ぎるように思われるけえどな 「ところで、 太夫、竜平どんはその矢をそなたに渡すとき、なにか交換条件を持ち出した

問題はその交換条件なのだと、金田一耕助は、いま磯川警部と肩をならべて歩

きながら、心の中で考えている。

るのを見て、金田一耕助はわざと座をはずして外出したのだが…… 大膳の質問はあのときたしかに相手の急所をついたのである。守衛の顔に狼狽の色が走

ずである。磯川警部はそちらへむかうまえに、島の駐在所へ寄ってみた。駐在所は新在家 ある。駐在所の構えは下津井と似たり寄ったりで、かたわらの柱に、 のとっつきの裏側にあり、このあいだ警部もいっていたが、この島も児島署の管轄なので かれは三津木五郎に会いたがった。その五郎は荒木定吉を誘って刑部神社へいっているは 島には旅館は一軒しかない。磯川警部も今夜泊まるとすれば錨屋だが、それよりまえに

警察署 刑部島駐在所

腰高障子のなかには島の駐在山崎宇一巡査が、殺風景な事務机にむかってなにか書き物と、筆太に書いた表札がぶら下がっている。

の目くばせでやっと自制したようである。 この件は磯川警部も初耳だったとみえ、ちょっと頰に血がのぼりかけたが、金田一耕助

「それであんたはそれらの事情を、あの三津木五郎という若いもんに話したんじゃないで 「へえ、それも……なにせわたしはこの島へきて、もう久しいもんですけんな」

「それは、あの……あの若いもんがおじさん、おじさんと懐しがって、しょっちゅうここ

じゃ、警部さん、ボツボツいこうじゃありませんか」 「なあに、かまいませんよ。どうせこの島のもんはみんな知ってることですからね。それ 来よりましたもんですけん、つい……いけなんだんでございましょうか」

接近してくれば、つい口もほぐれ、おのれの知っているかぎりのことをぶちまけてしまっ だろう。そこへおなじよそもののあの若者がやってきて、おじさん、おじさんと親しげに に駐在という職業上、とかく島のものから白い目で見られがちで、孤独をかこっていたの 思うにこの哀れな駐在さんは、しょせんこの島のものにとってはよそものである。それ

183 金田一耕助はこの単純な山崎巡査を、できるだけ慰め励ましておいたのち、警部をうな

たのであろう。

「あいつこちらへ顔を出さなんだかね」

うしてもらおうとかなんとかいうて、いろいろ巴御寮人のことをきいておりましたけえ の娘さんは琴が上手じゃけん、合奏してみたらと冗談をいいますと、それはええ、ぜひそ たしに吹いてきかせてくれたこともございます。それでわたしがつい、巴御寮人とふたご こういう離れ島が珍しいとみえて、いろいろ島のことききよりました。尺八が上手で、わ 「はあ、この島へきた当座はしょっちゅうここへ来よりました。なかなか人懐っこい子で、

出して、 金田一耕助はちらりと警部と顔見合わせたが、ついでに相手に目くばせすると身を乗り

そうですが、そういうこともあの青年に話されたんじゃないんですか」 袈裟なので、いまになにかひと騒動起こるのではないかと、取り越し苦労をしていられたにき 「山崎さんはこのまえ警部さんがここへ来られたとき、越智氏の金の遣いかたがあまり大

うとうの占顔だそうですが、越智氏と刑部大膳さんの関係などもご存じなんでしょうね」 たでしょう。かれ、なかなか抜け目のなさそうな青年ですからね。山崎さんはこの島でそ 「なあに、それはかまいませんよ。あなたが話さなくっても、どうせどこかから聞き出し 「それは、あの……話したかもしれません。話してはいけなんだんでしょうか」 山崎巡査が心配そうな顔色になるのを、金田一耕助はニコニコしながら励ますように、

「それは聞いております。いつだれからともなく……」

いですか。余計なことをいうようですが」 「それじゃ、警部さん、きょうのところは浅井はるの名前は出さないほうがいいんじゃな

うことにしときますけん」 「いや、いや、わたしもそう思うとります。きょうのところは青木修三の事件できたとい

であろうが、定吉の太鼓は堂に入っていた。そばに立っている師匠株の巴御寮人も感心し らず胸にカメラをぶら下げている。かれは尺八も吹けるところから音感が発達しているの き、五郎が笛、定吉が太鼓だったが、ふたりともなかなか見事であった。五郎はあいかわ けているところであった。ふたりともセーターのうえに祭りの印袢天を着て、むこう鉢巻 ちょうどそのころ刑部神社の境内では、三津木五郎と荒木定吉が笛と太鼓の猛特訓を受

「ほんとに五郎さんも五郎さんですけえど、定吉さんもおじょうずですぞなあ」

「はあ、ぼく故郷の祭りでやっとおりましたけん」 御寮人にほめられて定吉はいささかあがり気味である。

島(上)

ご存じですか」 「おなじ岡山県ですん。総社のすぐそばの柿の木ちゅうところですけえど、御寮人さんは 「定吉さんのお国はどちら……?」

185 「総社いうたら薬の会社が、ぎょうさんあるところじゃそうですなあ」

がしてそこを出ると、

いのに、複雑なこの島の事情に、ずいぶん精通していると感心したもんですがね」 「これであの若者がどこから情報を入手したのかわかりましたよ。やってきてまだまもな

「金田一さん、そこになにか意味があるとお思いですか」

ろうとはちがうかもしれませんね」 「さあ、わたしにもまだなんとも断言できませんが、単なるなんでも見てやろう、してや

たように、 ふたりは新在家を通りぬけ、地蔵坂へさしかかっていたが、金田一耕助はふと思い出し

「警部さんはあの若者に会ったら、浅井はるのことをきいてみるおつもりですか」

「金田一さん、それをきいちゃいけませんか」

女性を……」 「それならなぜ見識り人をつれて来なかったんです。二度までヒッピーを目撃したという

がつれてくることになっとおります。わたしもそのときいっしょにとも思うたんですけえ でした。ところがむこうのつごうで、きょうはどうしても駄目だというもんですけん、あ した広瀬くん、下津井の浅井はるの家でお会いんさった、あの広瀬警部補ですな、あの男 んですけえど」 「ああ、それ。その女は川島ミヨというんですけえど、もちろんきょう連れてくるつもり ちにち遅れて逃げられでもしたら大変ですけん、ひと足さきにこうしてやってきた

第

四十二年の七月はじめも、一日おきくらいに降ったり照ったりで、祭礼当日の天気が気遣 かに当たっている。だから刑部祭りは毎年雨で難渋するそうだが、その年、すなわち昭和の候である。天気も定まっていたのであろうが、これを新暦で行なうとすると梅雨のさな 党の霊を鎮めるために行なわれる年に一度の行事だが、旧暦の七月七日ならばまさに盛夏 これはもちろん、文治元年七月七日に入水して果てた平刑部幸盛ほか、六人の家の子郎 七月七日は全国的に七夕祭りであるが、刑部島では同時に刑部神社のご祭礼である。

187

切らず、そのたびに刑部島のお祭りさわぎはエスカレートするいっぽうだったが、それが しかし、島ではそんなことおかまいなしで、連絡船が着くたびに帰島する人びとひきも

やじもやっとおりましたけんな」 「はあ、それでぼく農閑期を利用して、こねえな商売をはじめたんですん。亡うなったお

「あら、お父さんお亡くなりんさったんですの」

ませんか。としは三十六でしたけえど」 ていたようですけえど。御寮人さん、荒木清吉いう置き薬の行商人を憶えておいでんさり 三で小学校を出て中学へ入った年でした。名前は清吉いうて、この島へもちょくちょく来 「はあ、昭和三十三年の六月のことでしたけん、いまから九年まえになります。ぼくが十

定吉はくいいるような目で、巴御寮人の横顔を視詰めている。

御寮人は額に手をかざして西陽を避けていたが、その立ち姿はあいかわらず美しい。

寮人はふとその目を地蔵峠のほうへむけて、

がおありのようですけえど」 「あれ、五郎さん、あそこへ金田一さんがお見えんさりましたぞな。どなたかお連れさん

男だと気がつくと、ちょっとドキリとしたような目の色だったが、すぐニヤリと不敵な笑 うにその横顔をうかがっている。 みをうかべた。かれにはそれよりいまの巴御寮人の態度のほうが気になるらしく、探るよ 五郎も金田一耕助とその連れの姿を木の間がくれに認めた。その連れが鷲羽山で会った

ったが、それはいったいなぜだろう。この御寮人はひょっとすると、荒木定吉の父親、昭 一耕助とその連れにかこつけて、この人はまんまと定吉の質問をはぐらかしてしま

「蒸発……?」

「へえ」 「それで、そのお父さん、この島へも行商にきていらしたの」

じゃ。こちらの宮司さんのお名前のほか、錨屋さんの名前なんかも……その時分、この島「へえ、うちにのこっとる帳面には、ちゃんとこの島の人びとの名前がのっとおりますん まほど過疎の島やなかったとみえ、ほかにもぎょうさん、島の人たちの名前がのっとお

「それできみのお父さん、この島で蒸発したというの」

小意気なところのある男じゃったちゅう話ですけえど」 すけえど、あなたもしやおやじを憶えておいでんさりませんか。百姓にしては、ちょっと 衛さんとこへなにをなんぼ、かにをいくら置いてきたちゅうような記録がのこっとるんで んです。御寮人さん、うちにのこっとおります帳面には、ちゃんと刑部島の宮司、 思うとるんですけえど、とりあえずいまこの島が評判ですけん、こうして訪ねて来てみた 村にも、ぎょうさんお得意さんを持っとったもんですけん、ぼく順繰りにたずねて歩こう 「いいや、そうはいうとりません。おやじはこのへんの島のほか、吉備郡や浅口郡の町や 刑部守

いたが、ちょうどそのとき社務所のなかから、真帆片帆の姉妹が飛び出してきて、 定吉は詰めよるような調子である。五郎も瞳をこらして、巴御寮人の顔色をうかがって

188 二、三紹介しておくのもむだではあるまい。 えに、あとから思えば、その事件の前触れであったのではないかと思われるこぼれ話を、 酸鼻をきわめた殺人事件として発展していくのだが、ここではそこへ話をすすめてい う。そして、それからひいてその翌日の夜、すなわち刑部祭りの宵宮の夜における、あの ピークに達したのは、なんといっても越智竜平が帰島した七月五日の午後のことだったろ

「荒木くん、きみのお父さん、三十六の若さで亡くなられたの?」

くれに認めたが、五郎はまるでそれを無視するかのように、定吉にむかって話のあとを促 ふたりは、巴御寮人の注意で金田一耕助と連れの男が、地蔵峠を登ってくるのを木の間が 七月四日の午後のことである。笛と太鼓の猛特訓をうけていた三津木五郎と荒木定吉の

十六日を命日として、後弔いをしとるんです」 「ううん、ハッキリ死んだとはわかっとらんのですけえど、いちおう昭和三十二年六月二

定吉の声は悲しげだったが、その目はなにかの期待をこめて巴御寮人の横顔にそそがれ 五郎はいぶかしそうにふたりの顔を視くらべながら、

のは?」 「おやじは昭和三十三年六月二十六日の朝、シロミテになるのを待ちかねて、置き薬の行 どういう意味なの、ハッキリ死んだとわからないのに、後弔いをしているという

商にいくいうて家を出たきり、そのまんま帰ってこんのです。つまり蒸発してしもうたん

「はあい、いままいります」 と、小娘のような無邪気な声を張りあげておいて、巴御寮人はいたずらっぽく首をすく

めると、

えど、なにかご機嫌でもお悪いようかえ」 「真帆ちゃん、片帆ちゃん、お父さんは朝からいらいらしておいでんさるふうじゃったけ

「お祭りがちかいもんですけに、気が立っておいでんさるんでしょ」

真帆は心配そうに眉をくもらせたが、

と、片帆はいまいましそうに唇をとがらせている。瓜ふたつほどよく似たふたりだが、「お父さん、あんまり気が大きいほうではおありんさらんけんな」

耕助と磯川警部が、石段をのぼって頭のほうから現われ 守衛に呼ばれて巴御寮人が、社務所のなかへはいっていったのといれちがいに、金田一

性格はだいぶちがうらしい。

金田一耕助はひと目その場のようすを見ると、皓い歯を出してニコニコし

まえに会ったことがあるそうだね」 鷲羽山でこの人に会ってるね。こちら岡山県警の磯川警部さんだ。真帆さんや片帆さんは たりともずいぶん熱心なんだね。そうそう、紹介しておこう。三津木くん、きみこ さっきから笛と太鼓の音がきこえると思っていたが、きみたちだったの

191 磯川警部の出現に真帆と片帆はあきらかに怯えているらしかったが、それにもまして怯

「お母さん、お母さん、そこでなにをしておいでんさる」 と、真帆がまず呼びかけると、

「お父さんがなにか大事なお話があるけん、すぐきてつかあさいいうておいでんさりま

と、片帆がそのあとをつぎ、

てつかあさい」 「五郎さんや定吉さんのお相手は、わたしらがつとめますけん、お母さんははよいてあげ

と、姉の真帆がしめくくった。

ぎろうたが、それでもすぐ艶然とほほえんで、 そのとき五郎の目にうつった巴御寮人の顔色には、たしかにホッとしたようなものがか

おたく屋号を柳屋さんいうておいでんさったとちがいますか」 「定吉さん、いまあなたのお話をうかごうているうちに、思い出したことがございます。

「そうそう、その柳屋です。うちの表に大きな柳の木があるもんですけん」

もしれませんものを。荒木清吉などとしかつめらしいお名前をおいいんさるもんじゃけん。 「ほんなら、それをもっとはよいうてつかあさったら、わたしももっとはよ思い出したか

「御寮人、御寮人、なにをしておいでんさる。はようこっちへきてつかあさい」 そのとき社務所のおくから、守衛のいらだたしげな怒号がきこえた。 柳屋さんなら置き薬の代の借りがのこっているはず」

警察でも相手にしてくれなんだと、母はいまだに恨んどおりま す

「ふうむ、それが三十三年の六月蒸発して、いまだに行方がわからんというんじゃな」

昭和三十三年というのが警部の心にひっかかっているのである。

「へえ」

「それでお父さんの名は……?」 「荒木清吉いうんです」

一清いという字に木下藤吉郎の吉です」 「セイキチ……? どういう字を書くんだね」

「三十六歳でした

「失踪したときの年齢は……?」

らなかった。 昭和三十二年の秋から三十三年の春へかけて、下津井の市子、浅井はるのもとへ出入り 磯川警部は金田一耕助のほうへ視線をやりたい衝動を、抑制するのに苦労しなければな

どこか如才ないところがある男だったという。農業の片手間に置き薬の行商をしていたと と、年かっこうも三十五、六。日焼けして色はまっくろだったが、がっちりとした体格で、 していた男は、清さんと呼ばれていたという。しかも、出入りの魚屋や酒屋の証言に よる

らずにはいなかった。 は一瞬逃げ場を捜すように境内のなかを見まわした。それはだれの目にもうさん臭くうつ あろうかと、すでに覚悟をきめていたらしく、泰然自若たる面構えだったが、定告のほう えの色を深くしたのは、三津木五郎よりも荒木定吉のほうである。五郎はそういうことも

「どうしたの、荒木くん、きみなにをそんなにキョトキョトしてるんだね」 金田一耕助はいぶかしげに、その定占の顔色をうかがいながら、

「いやあ、金田一先生」

「荒木くんはお父さんの行方を捜しているらしいんですよ」 と、五郎は先生という言葉に力をこめて、

ってたが……」 「お父さんの行方……?」だって荒木くんはこのあいだ、お父さんは亡くなったようにい

十三年の六月蒸発してしまって、いまだに生死が不明らしいんです」 「それがそうじゃないらしいんですよ。この人のお父さんはいまから九年まえの、昭和二

あの時分、母から警察へ捜索願いを出したんですけえど、警察はなんの力にもなってくれ なんだですけん」 「いいんですよ、三津木さん、そのこととこの人たちとはなんの関係もないんですけん。

「きみのお父さんてどういう人」

磯川警部がはじめて口をひらいた。かれの関心は定吉よりも五郎にあったのだけれど、

「いいえ、警部さん」 定吉はいくらか激した調子で、

を聞かせていただけたらと思うとるんですけえど」 ゆめにも思うとりませんけえど、父についてどういう印象を持っておいでんさるか、それ いてみたいんです。こちらの御寮人さんじゃかとて、父の蒸発に関係がおありんさるとは ですけん、ぼく父を知っとられる人にできるだけたくさん会うて、どげえな人だったか聞 悪うはございません。まめやかな面倒見のええ人じゃったというてつかあさります。それ れわれきょうだいをとても可愛がってくれたんです。部落の人びとにきいてみても評判は かくは家をあける人でしたけえど、家にいるときは、ぼく妹が一人あるんですけえど、わ 意味で母は父を憎んどるようです。そうじゃけえどぼくは父が恋しいんです。毎年半年ち 「母なんかもそういうとおります。どこかに隠し女があったにちがいないっと。そういう それは不自然なかたちで父を失うた子の、切実な願いであるかもしれない。

父さんに、隠し女があったにちがいないというとられるんじゃな」 「へえ、きっとそうにちがいないっと……」 荒木くん、これをいうときみはまた気イ悪うするかもしれんが、お母さんはお

195

島

すれば、そういう風貌であったのではないか。 「それで、きみ、お父さんはこの島へもきておったのかね」

たもあるやもしれんと、こうして来てみたんですけえど」 の島の人の名前がぎょうさん載っとりますけん、ひょっとすると憶えておいでんさるおか 「へえ、その時分、この島もいまほど過疎はしておらず、うちにのこっとる帳面にも、こ

定吉もようやく落ち着きを取り戻してきたようである。

たんです。こちらの神主さんのお名前なんかも、うちにのこっとる帳面にちゃんと記載さ で蒸発したんかわかりませんけえど、この島、ちかごろ評判ですけん、とりあえず来てみ 「それできみはきみのお父さん、この島で蒸発したとでも思うとるのかな」 「そうはいうとりません。父はずいぶん広い範囲にわたって行商しとりましたけん、どこ

「さっきここに御寮人さんの姿が見えとったようじゃけえど、きみ、尋ねてみなかったか

れとりますけんな」

ど、神主さんがお呼びじゃいうて、神社のなかへはいっておしまいんさりました」 屋号で憶えていてくださいました。そいでぼくもっと詳しいこときこう思うたんですけえ 「きみ、荒木くん、お父さん蒸発したとき三十六じゃったというたね」 「御寮人さんも憶えていてつかあさったんです。うち屋号を柳屋いうんですけえど、その

「へえ」

つけてあったものを剝ぎとってきたのであろう。 った写真だが、裏面に灰色の紙がこびりついているところをみると、アルバムにでも貼り

る。 る。 もう一枚もおなじときに、本家の伯父さんが撮ってつかあさったもんですん」 髪をみじかく刈って唇をきっと結んでいるが、目だけがなにか誇らしげに笑っている。 肩にめりこむようなその顔は、いかにも三十五、六という年齢を思わせて精力的であ 枚は首からうえの顔写真で、どうやらこのとき荒木清吉は裸であったらしい。たくま まめで面倒見のいい性格といったが、容貌にもそれが表われて誠実そうな顔をしてい

の精力が、静なる構えのなかにも躍動してい から撮 t のにちがいない。裸のうえに回しをつけて、 ったものである。 も誇らしげに胸を張ったが、それはあきらかに、草相撲のときかなんかに撮られた 厚い胸板、太い胴回り。体全体にボリュウムが充実していて、はち切れんばかり なるほどこうして裸でいるところを見るとよい体をし 一 蹲踞のかまえをしているところを、 7 真正面

197 島(上) 共通点があるような気がしてならなかったのはなぜだろう。 康的である。 さえみえたが、 0 、裸身を越智竜平が撮影したものである。それはひとめ見て肉感的というよりは淫蕩的に うかべた。海岸の砂浜にパンツひとつで両脚を大きく開いて投げ出している、青木修三 それ それに反して、いま金田一耕助の掌中にある写真は、あくまで男性的で健 にもかかわらず金田一耕助にとって、ふたつの写真のあいだに、どこか しようちゅう

警部からまわされたその写真を手にとってみて、金田一耕助はふと青木修三の写真を思

跡もないんですね。逆に父の荷物を調べてみたら、おかしげなものが出てきたんです」 もありませんし、蒸発するまえに銀行なり郵便局から、ドカッと金を引き出したちゅう形 なもの。金なり、なにか金目のものをですね。しかし、 「母はなんべんもそれを考えてみたそうです。ですけえど、それならなにか持 「それじゃ、そのおなごと駆け落ちでもして、 いまでもどこかに隠れとるんじゃないけ」 うちには金目のものなんかひとつ ち出しそう

定吉はお祭りの印袢天の下に着込んだ、薄手のセーターをたくしあげると、その下に革「おかしげなものとは」

す。父が蒸発するちょっとまえに でできた胴巻きを腹にまきつけている。その胴巻きからなにか探り出すと、 「そう、そう、これが父の写真ですけえど。本家の伯父さんが撮ってつかあさったもんで

「なんだ、きみは お父さんの写真を肌身離さず持っているのかい」

ぬところであろう。 に切り出せたとしても、この若者がげんにこの場に持ち合わせていようとは、思いもよら でなく持ち出したものかと、さっきから腐心していたところである。よしまたいかに巧み た。警部のほうから写真のことを切り出そうと思いながら、それをいかに不自然なかたち 磯川警部はわざとからかい顔にいってのけたが、じっさいは渡りに舟みたいなものだっ

ぼくにとっては恋しい父、いうてみればまぶたの父ですけんな」

それは縦十一センチ、横八センチのいわゆる手札型の写真が二枚、あきらかに素人の撮

突き出したとき、磯川警部も金田 抑制するのに骨を折らずにはいられなか で出来た巾着が握られている。 定吉はさっきから革の胴巻きに突っ込んでいた右の拳を抜き出すと、その手には白木綿 巾着の紐をゆるめて中身を左の掌にあけ、ふたりの 一耕助もおもわず口をついて出ようとする、 驚きの声を まえ

=

銀貨がしめて五個、定吉の掌にのつかっていた。

は明らかに浅井はるの家の味噌瓶から出て来たとおなじ種類の、錆びついた銅貨やは明らかに浅井はるの家の味噌瓶から出て来たとおなじ種類の、錆びついた銅貨や

た大きな葛籠をふたつまでそばにひかえているので、すぐにそれとわ らは白無垢の着物に袴をはき、黒紋付きの羽織を着ているうえに、神楽衣裳やお面を入れ 物が七人乗り込んでいた。こんどの祭礼のために神楽を舞う神楽太夫の一行である。かれ 込んできたのだが、その日の午前の便船で広瀬警部補が川島ミヨをつれてやってきている。 「ところがねえ、警部さん、金田一先生も聞いてつかあさい。わたしはこのとおり平服で その便船にも帰島する人びとが大勢乗っていたのみならず、ちょっと毛色のかわった人 越智竜平はその翌日、すなわち昭和四十二年の七月五日の午後三時ごろ、刑部島へ乗り かるのであ

わたしをつかまえて、おかしげなことを聞くんですよ」 わたしを警察のもんとは気がつかなんだとおみんさい。 いま表にいる川島ミヨくんもあのとおり平凡な若女房ふう。ですけん神楽太夫の そのなかの長老株の男が

「昭和三十二年の秋の祭りの奉納相撲で、父が優勝したとき、本家の伯父さんが撮ってつ 「この写真はいつごろ撮ったんかね」

の写真しばらくわしに預けてくれんかね」 「いやねえ、荒木くん、いまになってこういうことをいうのは軽薄みたいじゃけえど、こ

かあさったもんです。それですけん、父が蒸発するまえの年の秋の撮影いうことになっと

「警部さんにはなにかお心当たりでも……?」

みの話をきいているうちに、つくづくときみの孝心に感じいったしだいでな」 「いや、そういうわけじゃないけえど、袖すりあうも他生の縁ちゅうじゃないけ。

下津井で殺された浅井はるの家に出入りしていた、酒屋や魚屋に鑑定を請うつもりであろ なるほど警部の言葉は軽薄みたいだが、かれにはこの写真が必要なのである。おそらく

まじゃ蛇の生ま殺しみてえで、母もわたしも一日も生きた空はございませんけん」 「ようござりますとも。なんとかお役に立てて父の安否をたしかめてつかあさい。このま

いる金田一耕助も、そぞろ惻隠の情をもよおさずにはいられなかった。 この若者の背負うている暗い影は、そこに端を発しているのであろうと、そばで聞いて

「へえ、それはこれですん。ようく見てつかあさい」 それでお父さんの荷物から出て来たちゅう、おかしげなもんちゅうのは……?」

たもんですけん、こうしてお耳に入れとくしだいです。しかし、それについてなにか が少しおかしゅうなっとりますけんと、その周章狼狽ぶりがかえっていぶかしゅう思われ じいさんを押しなだめ、わたしにむかってこのじいさんが、いまなにをいうたかしりませ んけえど、なんにも聞かなんだことにしてつかあさい。このじいさん、年のせいでお ツム

「それで、その神楽太夫の一行はどこに泊まっとるんかね」 広瀬警部補は探るように、ふたりの顔を見くらべている。

「ああ、そう。それじゃなんとかして、その件についても探りを入れてみよう。しかし、 「ことしの大当番は錨屋じゃそうですけん、七人揃うて錨屋へ繰り込みましたよ」

広瀬くん、こちらにもひとつ話があるんじゃけえど、そのまえにきみに見ておいてもらい たいもんがある。きみはこれをどう思うかね」

警部がポケットから取り出したのは手垢で薄汚れた白木綿の巾着である。口をしぼった

広瀬警部補がおもわず大きく目を視張るのをみて、 紐をゆるめて左の掌のうえではたくと、なかから飛び出したのは錆びついた五個の硬貨。

じゃないけ 「遠慮はいらん、手にとってよう調べてみたまえ。ひとつきみの意見も聞かせてもらおう

一警部さん、いや、金田一先生、これまたみんな明治二十六年以前のもんばっかりです 広瀬警部補はひとつひとつ手に取ってみて、大きく息をはずませると、

査を、敬遠しておくほうが無難であろうという、磯川警部の配慮から、ていよくパトロ ルにと追っ払っておいたのである。川島ミヨも駐在所の表で待機させてある。 たものかと打ち合わせする必要があったのである。しかし、それにはあの口の軽い山崎巡 をそれとなく、三津木五郎に会わせるまえに、どういう手段方法で、ふたりを突きあ 但し駐在の山崎巡査はパトロール中とやらでその場にはいなかった。じっさい川島ミヨ そこは刑部島の駐在所のなかである。 わせ

んじゃけえど、兄さんはなにかそんな噂をきいたことはないかっと」 「いまから二十年ほどまえにこの島で、神楽太夫がひとり蒸発したと思われるふしがある おかしげなことちゅうのんは……?」

「広瀬くん、それはまたどういう話じゃな」 蒸発……と、聞いて金田一耕助と磯川警部は、思わずハッと顔見合わせた。

、警部さん、あなたなにかお心当たりが……?」

「いやいや、それはまたあとで話す。それより、神楽太夫がこの島で蒸発したちゅうのは

しで唐突のことですけん、答えに窮してマゴマゴしておりますと、ほかのもんがあわてて ろ七十ちかいじいさんでしたが、わたしを島のもんとまちがえたんですな。わたしはわた っというまでしょうが。それにこの島がまぢこうなってから、そのじいさん、もうそろそ やいや、それがな、わたしにもよう各み込めんのですわ。なにせ下津井とここではあ

離さず持って歩いとるんじゃそうな。清吉すなわち清さんじゃな」 十六個出てきたそうな。そのなかの五個だけをなにかの証拠にと、写真といっしょに肌身 きみの持っとる写真がその清吉で、清吉の荷物を調べてみると、明治時代のその古銭が二 んの名前がぎょうさん載っとるけん、とりあえずいま評判のこの島へきてみたと……い

警部補もやっと警部のいわんとするところを諒解した。

「わかりました。それじゃきょう下津井へかえったら、さっそく浅井はる宅出入りの酒屋 へ出向いていて当たってみましょう。しかし、警部さん、もうひとつの一件、三津

木五郎のほうはどうなっとおります」

ても、きみに頼まれてもらわねばならんことがあるんじゃけえど」 「それじゃて、こいつ年は若いがなかなかひと筋縄ではいかんやつでな。そのことについ

磯川警部は苦渋にみちた微笑をうかべた。

「よう、なんでも見てやろうくん、またおかしげなところで会うたじゃないか」 そのとき五郎は拝殿の階に腰をおろして、真帆、片帆のお相手をつとめていたが、警部

きのう荒木定吉との応対がおわると、警部は改めて三津木五郎のほうへ鋒先をむけた。

に声をかけられると、自分の出番が来たなとばかりに、ゆっくり立ってこちらへきた。 ようね 「あっはっは、 まったくですね。警部さんはまさかぼくを追って来られたんじゃないでし

「きみはなにか警察のもんに、追われるようなことをやっとるのかね」

まから聞き出しておいてくだすったのじゃけえど、それはまたあとで話そう。それよりこ の銀貨や銅貨について君の意見は……?」 「そう、明治二十六年という年にどういう重大な意味があるか、金田一先生が錨屋のじさ

瓶から発見された、あの古銭と同種類のものにちがいないと断言した。 かれの意見も警部や金田一耕助とどうようであった。下津井の市子浅井はるの家の味噌

「ところで、きみはきょう下津井へかえる予定だったな」

けん。それがなにか……?」 「はあ、いま表にいる川島ミヨを、夕方までに送り届けると亭主に約束してきたもんです

浅井はるの家へ出入りしていた酒屋や魚屋のもんに、鑑定を請うてもらいたいんじゃけえ 「それはちょうど幸い。ここにこういう写真が二枚あるんだがね、これを持って帰って、

「それ、どういう……?」

そこで警部が荒木定吉の話をことこまかに取り次ぐと、広瀬警部補の興奮は極限に到達

「それじゃ定吉のおやじの清吉いうもんも、この島で蒸発したとおいいんさるんで」 警部補は興奮のため口角泡を飛ばさんばかりである。

「いや、そうはいわんと定吉はいうんじゃけえど。うちにのこっとる帳簿にはこの島のも

五郎はちょっぴり皮肉ると、らお聞きになったとみえますね」

ついでに三新証券のところもいっときましょう。神戸市生田区海岸通……」

きますがね、ぼくは決して怪しいものじゃありませ 「そこへいってお尋ねになると、ぼくのことならなんでもわかりますよ。 何丁目の何番地を付け加えると、 ハッキリい

は考えている。 怪しいものではないといいながら、この若者は少ししゃべり過ぎるようだと金田 一耕助

磯川警部はそれに気づいているのかいないのか、目をシワシワさせながら、

、それできみ、こんな島へきて面白いかね」

ですからね。それに巴御寮人や真帆ちゃん片帆ちゃんともおちかづきになれたし」 「面白いですね、ぼく都会生まれの都会育ち。こういう地方の古風なお祭りなんか初体験

「どうです、ぼくなかなか器用でしょう」 そこで手にしていた笛を口に当てると、たくみに祭り囃子を吹いてみせ、

と、のんきらしくニコニコ笑っていたが、ふとその目を定吉のほうにむけると、

縁だと。ぼくなど両親の死に目にあってますから、その点諦めもつきやすいですが、荒木 さんを捜してあげてくださいよ。警部さんもさっきいってたでしょ。袖すりあうも他生の それに荒木くんという友人も出来たことだし……そうそう、警部さん、荒木くんのお父

あいかわらずさわやかな笑顔である。笑うと八重歯が魅力的であることはまえにもいっ やだなあ、そういういいかたをするから、警察の人は世間から好かれないんですよ」

警部は眉をひそめたが、相手の笑顔を見ると、なんとなく憎めないらしい しかし、考えようによっては、これで警部の質問をまんまとはぐらかしたことになる。

「ときにきみは神戸から来た風来坊だそうだが、神戸のどこだね、きみの家は……?」

「それは職務質問というやつですか」

に偽名を使うとるんじゃないだろうな」 「なんとでもいえ、身に疚しいところがなかったらいったらいいじゃないか。まさか宿帳

倒ですからここでいっときましょう。神戸市垂水区瑞が丘……」 「じゃ、その宿帳を調べてごらんになったら……と、いいたいところだけれど、それも面

何丁目の何番地であると付け加えた。

「しかし、きみは両親が亡うなったんだろう。いま家にはだれがいるんだい」

ていても、そう不用心ってことはないんです」 ってるんですがね。すぐご近所に新田穣一さんのお宅があるので、年寄りひとり留守番し 「浅野こうさんがいますよ。ぼくのばあやさんです。その家、両親の死後ぼくの名義にな

「新田穣一さんというのは三新証券を作った人だね」

「あつはつは、警部さんはよっぽど詳しくぼくのことを、そこにいらっしゃる探偵さんか

207 子どもをおいてけぼりにして、行方をくらます女房もあった。それを蒸発と称したものだ い田舎でもあった。妻子を捨てて消息を絶つ夫があるかと思うと、亭主や

聞いていたのに」 この人もいってたとおり、蛇の生ま殺しもおんなじことです。当時捜索願いが出てたとい うのに、これじゃ警察の怠慢も甚だしいじゃありませんか。日本の警察はとても有能だと くんの場合、お父さんが蒸発して、そのまま消息不明というんでしょう、それじゃさっき

五郎はたくみに話題をすりかえたようである。警部はせせら笑いながら、

「三津木くん、きみはなかなか秀才らしいが、それじゃまるで聖徳太子みたいじゃない

「と、いうと……?」

聞いていたんだね」 や片帆ちゃんと、よねんなく遊んでいるようにみえていたのに、こっちの話も抜けめなく 「聖徳太子は十人の訴えを同時にお聴きになったというが、きみはさっきから真帆ちゃん

それは……」

と、いいかけたが、五郎は急に話題を転じて、

でしょう」 「それより、警部さんはなんのご用でこの島へ来られたんです。まさか祭り見物じゃない

「え?」 「そのことなら、真帆ちゃん片帆ちゃんのほうがよう知ってるよ」

「なあに、この五月のおわりにこの島に、ちょっとした事件があってわしはここへやって

ンと張りつめた一本の針金のように島全体を金縛りにした。にあわただしさを加えてきた人の出入りに、さあ、いよいよきょうだという緊張が、ピーにあわただしさを加えてきた人の出入りに、さあ、いよいよきょうだという緊張が、ビー きょうあたりという期待があるうえに、地蔵平にある越智邸の動きをみていると、にわか越智竜平はべつに島全体に、帰郷の時期を予告してきたわけではないが、島の人たちに 昭和四十二年七月五日の午後になると、刑部島の動きはにわかに活発になってきた。

刑部神社へ登っていった。 駐在所で磯川警部や広瀬警部補と綿密な打ち合わせをすませると、川島ミヨをともなって 金田一耕助にもそういう予感がしていたが、かれには かれの務めがある。 その日 の午前、

は太鼓を叩く拍子にも明るさをましているようだ。 い。定吉はきのういっさいの秘密を打ち明けたのでいくらか心が軽くなったのか、 三津木五郎と荒木定吉はきょうもまた、刑部神社の境内で祭り囃子の稽古によね んがな

ましてやかれはきのう警部や金田一耕助が下山したあとで、巴御寮人にあらためて会っ

い出しただけでも、義理がたいお人じゃったように思いますぞな。それに置き薬の行商を じゃったもんじゃけに、 まあ、 あん たが柳屋さんの息子さんでしたかいなあ。さっきはあんまりだしぬけたが柳屋さんの息子さんでしたかいなあ。さっきはあんまりだしぬけ わたしも面喰うてしもうて失礼しましたけえど、いまぼ んやり思

農家の若女房で蒸発したのが、のちに都会でトルコ嬢をしているところを発見されたこと しかし、なかには推理小説もどきの蒸発もあり、 もある。 があるが、その男の場合株で大穴をあけ、借金に困って蒸発したのだとのちにわかった。 が、なにしろ当時は無責任時代であった。 大阪で蒸発した男がのちに、四国の八十八か所巡りのお遍路さんとして見つかったこと これなどは戦後のあやまった解放感が、 のちに殺人事件と判明した蒸発もある。 若い女に道を踏みはずさせたのであろう。

「あの島には悪霊がついている。悪霊が……悪霊が……」 金田一耕助はそのとき、青木修三のテープの声の一節を思い出していた。 荒木定吉が心配しているのもその点であろう。

て、声をかけたのはそのときである。 駐在所のまえに立たされていた川島ミヨが、たまりかねたように腰高障子を外からひら

てはよ帰りたい 「ちょっとお、刑事さん、うちいつまでここに待っとらないけませんのう。用事をすませ と、怒ったように鼻を鳴らした。 んですけえど……」

第十章 竜平の帰還

える島影へはいっていった。 南の障子が開いているのでその座敷に坐っていると、いながらにして千畳敷きの林を越 瀬戸内海が明るくみえる。四国へ通う連絡船であろうか、いま一隻の汽船が南に見

きに染め出してあり、両襟には刑部神社とこれも白抜きで。 た白木綿のシャツのうえに、黒い法被を着ている。法被の背中には二つの巴の紋所が白抜 両手に持った男が五人のまえに現われた。吉太郎である。きょうの吉太郎はゴワゴワとし 南側の庭を掃く箒の音がきこえていたかと思ったら、そのとき突然竹箒を

五郎も定吉もあっけにとられて無言でいたが、吉太郎の姿が見えなくなると、 ると、無言のまま会釈もせずに一同のまえを通り過ぎていった。この男の突然の出現に、 吉太郎は無愛想な表情をして、砂を敷きつめた南側の庭にていねいに箒の目をいれおわ

「御寮人さん、あの人は……?」

五郎は小声で、

「このあいだぼくがこの座敷で、琴と尺八の合奏をしていただいたときも、あそこから覗き

「と、するとここの奉公人ですか」 「ああ、あの人は吉太郎さんいうて、このお宮のじいやですん」

211 「いいえ、奉公人ではございませんの。あの人本職は漁師ですけん」

でも、御寮人さん、お言葉を返すようですが、このへんの魚は水島の公害で、漁れても

あ、蒸発しておしまいんさったとはなあ」 た。そうそう、ふだんは故郷で百姓をしておいでんさるちゅう話でしたなあ。あの人がな ご商売がご商売じゃったけん、こうして座敷へあがってもろたことは一度もござい いつも社務所の玄関先での応対じゃったけえど、あんたに似てええ体をしておいでんさっ しておいでんさっただけに、世間が広うて、お話のおもしろいお人でしたなあ。もちろん ません。

ててのもてなしとあっては、定吉の感激ここに極まれりというていたらくであったのもむ の筆かはしらないが、水墨の山水の軸もかかっていた。おまけに巴御寮人みずから茶を点 ような喜びと感激だった。床の間の隅には三面の琴が油単をかけて立てかけてあり、だれくも通されたことのないという座敷へ、五郎とともに招じ入れられた定吉は天にも昇る 吉にとっては本望だったであろうに、ましてやそこは社務所の奥の十畳の座敷であった。 この神々しいばかりに美しい御寮人さんの、しみじみとした述懐をきいただけでも、定

ぶん打ちとけているようだ。五郎に懐柔されたのであろう。 定吉にすすめてくれた。ふたりともはじめて金田一耕助が会ったときにくらべると、だい 真帆と片帆も神妙にその場にひかえていて、御寮人の点てる茶を真帆は五郎に、片帆は

錨屋へでも出向いていったのであろう。 たが、祭りの打ち合わせがあるとかで、 守衛はさっき人を遠ざけて一時間ほど、この座敷で巴御寮人と差し向かいで話しこんで むつかしい顔をして山を下っていった。たぶん

「荒木くん、それじゃそろそろお暇しようじゃないか」

やけん、あんさんがたもご一緒にどうぞ」 つかあさい。あしたは島の若い人もおおぜいおいでんさって、お稽古をおしんさるそうじ 「あら、もうおかえりですん。それじゃお引き止めはしませんけえど、あしたもまたきて

くこれまた越智竜平の寄進によるという、ま新しい神輿を点検しているところであった。 屈強の男たちがおおぜい集まって、笛や太鼓の稽古によねんがない。なかにはこの島へく るとき金田一耕助と一緒だった松蔵や信吉もまじっている。かれらはお囃子の稽古ではな 「ふうむ、これはまたきょうとい(恐ろしい)ほど立派な神輿じゃけえど、本家はいった どういう了見じゃろう。この神輿だけでもひと身代ふっとんだろうに」 それがきのうのことだったが、きょうはなるほど刑部神社の境内には、祭り袢天を着た

松蔵はとかく分別顔である。

ショイ、ワッショイ、暴れまくるだけじゃけん。 もうそげえなこというのはやめとおきんさい。ばくらこの神輿かついでワッ なあ、謙ちゃん、辰ちゃん」

(E)

「松蔵おじさん、このお神輿、きょうじゅうに、小磯のお旅所へ担ぎおろしておかないか 「そうじゃ、そうじゃ、こげえな盛大なお祭り何年ぶりじゃろうか 「わしらが物心ついた時分には、この島もうだいぶん寂れていたけんなあ

んのとちがうか」

見てつかあさります」 がそういうふうに掛けおうてあげたんですん。あのおじいさまはなにかにつけて、 のないお人ですけんな。 「ですけん、その魚を水島へ持っていって買い上げてもらいますんよ。錨屋のおじいさま にははいらんというじゃありませんか」 そのお礼ごころとでもいうんでしょうか、このお宮の面倒をよう 抜けめ

在が、なんとなく気になるふうであった。 御寮人はこともなげにいってのけたが、五郎はうわ目づかいに人を見るこの吉太郎の存

巴御寮人は笑いながら、

げでこの二、三日、いくらか開けてきたようですけん、わたしは心の中でよろこんどおり 遣いますんよ。わたしにはおかしゅうてなりませんけえど、島のもんはみんな心が狭うて ますんよ。 所帯のうえに、 うぞ。ことにあんさんはお父さんとのご縁もございますけんなあ」 を出して、この子たちをあんじょう教育してやってつかあさい。定吉さん、あんさんもど けませんぞなあ。この真帆や片帆もはじめのうちはそうでしたけえど、五郎さんのおか なにせ若い娘がふたりまでいるこのうちでございましょう。 そうですけんな、五郎さん、あんたも島にいるあいだはちょくちょくここへ顔 、主人がとかく留守がちときとおりますけんな、あのじいやがなにかと気を わたしと三人、女ばかりの

った。それに御寮人はそのつもりでいったのかどうかわからないが、女ばかりの所帯へ上 御寮人に畳に手をついて挨拶されると、さすが図々しい五郎も恐縮せずにはいられなか

「いや、ぼくは神戸です。でも、この春東京の学校を出たばっかりですから」 「あんたの言葉をきいとると東京のおかたのようじゃけえど」 これだけの会話があったのだから、川島ミヨが人知れず五郎を観察する余裕は十分あっ

その結果は陰性であった。

は二の足を踏んでいたのだが、結果は果たしてそのとおりになった。 にのこっているのは、あのヒゲだらけの顔とチリチリ縮れた長髪だけなのだからと、彼女 すれば、そこからあの若者の顔を再現することはおぼつかないかもしれない。 ら、それと指摘することが出来るかもしれないが、髪を切り、ヒゲを剃り落としてい だったから、ハッキリ顔を憶えてるかどうかわからない。それもあのときの顔形のままな るとはいうものの、 もともと彼女はこの面通しというのをひどくいやがっていた。その若者を二度目撃して 、最初はうしろ姿だけだったし、二度目はあっというまの 自分の印象 ずれ ると

ただけではなく、じっさい、彼女はどちらとも断定しかねて、困惑しているふうであった。 一年かっこうや背丈はよう似とおるように思いますけえど、あのときの若い人はもっと粗 むりはな するものだが、 なかった。 ハッキリあのときの若者とちがうと否定はしなかったが、さりとてそうであると肯定も 由来一般庶民というものは、警察に係かりあいを持つということをひどく危 ましてやこれは殺人事件である。川島ミヨが最初から尻ごみしていたの さりとてこんどの場合、川島ミヨの言葉が曖昧だったのは、それを惧れ

よう見えるように飾っておけ」 ょうの昼過ぎ、帰っておいでんさるふうじゃ。どうせ自動車じゃろうが、通りがかりに、 「そうだ、そうだ、そのためにおまえらを連れてきたんじゃけんのう。本家もどうやらき

ヤンスであった。 |背後に立って爪先立っているところだから、人知れず面通しをやるには打ってつけのチ 五郎と定吉も祭り囃子の稽占をやめて、この豪勢な神輿を見物にやってきていた。人垣

ているところを見るとふつうの四十男である。 広瀬警部補も平服のうえにおそらく山崎巡査にでも借りてきたのだろう、祭り袢天を着

じゃないけ」 「へえ、これがこんどご本家が寄進おしんさったちゅうお神輿け、これはまた豪勢なもん

「ほんとに立派なもんですね。ぼくもあしたは担がせてもらおうかな」 話しかけられて振り返った五郎は、相手をだれとも気がつかずニコニコしながら、

そういう五郎の顔をびっくりしたように視直すと、

「あれ、そういうあんたはどこからお見えんさった。そういえば島では見かけんお顔じゃ

いやあ、ぼくは旅のもんです。ここにいるこの人もね」

「だけど、こちらの御寮人さんにお願いして、祭りのあいだじゅう氏子にして貰ったんで と、そばにいる荒木定吉の肩を叩いて、

在家のほうへくだっていった。 二台の自動車は道のかたわらに立っている、金田一耕助と磯川警部を尻目にかけて、新

かなかしっかりもんらしいじゃありませんか」 あれがあんたのいうておいでんさった、秘書と家事取り締まりでしょうな。あの秘書な

「なにしろアメリカ仕込みですからね」がながしっかりもんらしいじゃありませ

きょうの午前中、 お見んさい。越智さんの自家用汽艇も出港の用意が出来とるふうじゃ」 駐在所で打ち合わせをやっているとき、汽艇の乗り組員三名が山をく

だって小磯のほうへいったということを、山崎巡査の報告で磯川警部も知っていた。時刻 を見るとちょうど二時。

から一時間ののち、克子や多年子を乗せていったん刑部島を出ていった汽艇が、

者たちが一列になってならんでいる。守衛は白の小袖に黒紋付きの羽織袴、馬面の天神ヒ船着き場には万国旗が張りめぐらしてあり、宮司の守衛や村長の辰馬、ほかに村の有力 だかりであった。小磯からあふれた人たちは、新在家の道の両側に立ちならんでいる。 智竜平を乗せて水島から引き上げてくると、船着き場から小磯へかけては黒山のような人 んな島出身のこの成功者の姿を、一刻も早く見ようと固唾をのんで待っているのである。

野で、荒っぱかったように思います。いま会うた人は穏やかでニコニコしておいでんさる。 ふたりから受ける印象はまるでちごうとりますけえど、そうじゃかとて、全然人違いとは

それで満足しなければならなかった。 いかねると、川島ミヨの言葉はどこまでいっても堂々めぐりであったが、磯川警部は

るふうじゃ。あんた船着き場まで迎えにおいでんさらんでもええのかな」 ん、下津井まで送ってあげてくれたまえ。金田一さん、どうやら越智さんが帰ってこられ ああ、そう、ええですよ、ええですよ、それくらいで。ご苦労さん、それじゃ、広頼く

「警部さん、あなたもごいっしょしましょう」

動車が二台走り出してきた。 広瀬警部補をつけてさきに下山させ、自分は金田一耕助といっしょにゆっくり地蔵坂をく だりはじめた。例の道がふたまたにわかれているあたりまで来ると、地蔵平のほうから自 地蔵峠のあたりで待機していた磯川警部は、川島ミヨの混乱した報告をききおわ

おそらく越智竜平の秘書で、この島における竜平の事業の、総指揮官を仰せつかっている という松本克子であろう。あとの車には運転手がついていたが、後部の座席に坐っている まえに乗っているのは中年の女性だったが、彼女は洋装で自らハンドルを握っていた。 霊島

島した人びとが金を出しあい、倉敷で調達してきて、きょうこの瞬間のために用意してあ ったものだという。 あとでわか ったところによると、万国旗といい、この花火といい、松蔵の音頭取りで帰

ともなく、万歳の声が波止場のなかを圧倒した。うな微笑をうかべている。それがまた待っていた人たちの好感をよんだのか、だれが叫ぶ ければ、驕ったようなところもなく、いつもの厳しい表情のなかにも、いくらかテレ とりひとり握手をしながら挨拶をしている。その様子にはべつに思い上がったところもな やがて鼻白んだような笑いをうかべて、まず守衛と、ついで辰馬や村の有力者たちと、ひ これは越智竜平も予期せざるところだったとみえ、驚いたように空を見上げてい たよ

子がついている。黒っぽい、 竜平は手をあげて歓呼の声にこたえながら、あたりの群集を見まわしていたが、ふと金 金田一先生、 一耕助の姿を見付けると、つかつかとそばへ寄ってきた。背後には松本克子と越智多年 いかがですか。島の居心地は……?」 清楚な洋装に身をくるんだ松本克子はなかなかの美人である。

ていただきましょう。こちらこのあいだお耳に入れてお もうすこぶる快適な毎日を送らせていただい 1) ております。そうそう、紹介させ た磯川警部さん」

竜平はちょっと虚をつかれたように警部のほうへ目をやったが、すぐ莞爾とばかり頻笑

ほ ガクガクと貧乏ゆすりをしているふうである。村長は古ぼけたモーニングに威儀をただし ゲが汐垂れているが、本人はしごくまじめでひどく緊張しているらしく、袴の下の膝頭がいかがある。 ヒゲの宮司と同様である。大膳の姿は見えなかった。 かの有力者たちも似たり寄ったりの風体だが、だれもかれも緊張しているところは天神

あきらかに日頃の落ち着きを失っていた。 からはあの人を食ったような微笑が消えていて、なんだかそわそわしているようすである。 と荒木定吉の二人である。五郎はあいかわらず胸にカメラをぶらさげているが、その顔色 その二人とまた少し離れたところで、人ごみに揉まれながら立っているのは、三津木五郎 金田一耕助はその人たちから少し離れたところで、磯川警部と肩を並べて立っていた。

やありませんか」 「金田一さん、あれごろうじろ。三津木五郎のやつ、なんだかひどく興奮しているようじ

「妙ですね。荒木定吉のほうはただあっけらかんとしているのにね」

か・・・・・・」 「あなたも気がついておいでんさったか。あの若僧、なにが目的でこの島へやってきたの

花火が大きく炸裂し、綿屑のような煙のなかから一つ、二つ、二つ、小旗がヒラヒラ舞い から越智竜平が下り立ってきたところであった。と、思うと港の空に一発、二発、三発と で万雷のような拍手が起こったので、そっちのほうに目をむけると、いましも自家用汽艇 金田一耕助は悩ましげな目をして、首を左右にふっていたが、そのとき船着き場のほう て食えない魚を漁っている。

克子も運転台へ乗り込んでハンドルを握った。竜平は窓ガラスを開いて身を乗り出し、そ こにいる老若男女に手を振り、自動車が動き出した。 竜平はもう一度そこに群がっている人びとに手を振ると、やおら座席へ乗り込んだ。松本 さきにいる自動車のうしろの座席のドアを開いて、松本克子が直立不動の姿勢をとった。

あ のちょっとした異変が起こったのは、ちょうどその瞬間であった。

かわめいた。それは御領主様に直訴する農民のようにみえた。 が、そのとき突然なにかの激動にかられたかのごとく、自動車のそばへ駆け寄って、なに 少し離れたところでさっきから、それらの様子を感慨ぶかげに視守っていた三津木五郎

情をして、窓のなかから五郎の顔を見ていたが、自動車はそのまま走り去った。そのあと から多年子を乗せた自動車がつづいた。 定吉があわててそばへ駆け寄って五郎の腕をとって引き戻した。竜平はふしぎそうな表

そのときのことをあとで竜平にきくと、五郎はたしかに、

と、叫んだようだったという。

がったとき、ちらっとそのほうを振り仰いだが、それっきりわれ関せずえんと、黙々とし われるオチョロ舟を浮かべて、新家の吉太郎がしきりに網を打っていた。 ちょうどそのころこの島の西海岸の沖合いに、島にたった一艘しかのこってい さっき花火があ

どうです、金田一先生、このままわたしといっしょにいらっしゃいませんか。警部さんも ごいっしょにどうぞ」 「これはこれはようこそ。お噂はかねがね先生からうけたまわっておりました。ところで

よっと躊躇したのちに、 と、船着き場のそばに駐まっている二台の自動車のほうを顎で示した。金田一耕助はち

「いや、きょうのところはご遠慮しましょう。お宅もおとりこみで大変でしょうから」 竜平もちょっと考えて

もごいっしょにどうぞ」 「ああ、そう、それではあしたの夕刻、 お迎えを差し向けましょう。そのときは警部さん

「はあ、ありがとうございます」

新造の神輿が飾ってあった。神輿の屋根にとりつけた鳳凰が燦然と金色にかがやいていて 自動車のほうへいった。一台駐まった自動車のすぐそばに、仮設のお旅所があり、そこに みごとであった。 金田一耕助と磯川警部が異口同音にいって頭をさげると、 竜平はふたりのそばを離れて

はみんなお揃いのま新しい祭り袢天を着込んでいて、これまたお揃いの鉢巻きが凜々しか をあげてあいさつをした。松蔵はふかぶかと頭をたれたがいかにもうれしそうである。男 竜平はそのお旅所を取り巻いている若者たちのなかから、松蔵の姿を見つけると、右手

った。

思えない。 ないが、がっちりとしたその体は岩のかたまりのようで、とうてい七十を越えた老人とは ものには務まらない。だからきょう錨屋へおちついた神楽社の一行七人も、みんな頑健 神楽そのものがそうとう激しい労働であるうえに、このかけもちがひどいから、体の弱 たくましい体をしている。いちばん年かさの四郎兵衛でさえ、上背こそそれほどでは 弥之助などもみんな右へならえである。 まだ若 い誠、 勇のふたりはいうまでもないとして、ほかの四人の平作、徳右衛

郎 らの通されたのは、金田一耕助と磯川警部が泊まっている階下の十畳の座敷であった。 ってい ている合いの二重廻しに目をとめると、案内に立った大膳をふりかえって、は兵衛は床脇の下においてある古ぼけたボストンバッグや、つぎの間の八畳の衣桁にかか 一行がどやどやと錨屋に繰り込んできたのは、七月五日の朝の十時ごろだったが、かれ

ろう。それから誠の二十五歳、勇の二十三歳ということになっている。

平作が六十代、徳右衛門、嘉六が五十代、弥之助が少しはなれて三十代というところだ

おや、ここだれか先客がおいでんさるのんとちがいますか」

悪霊島

第十章 神楽太夫

_

は二十五歳、勇は二十三歳、ふたりは兄弟で、ともに四郎兵衛の孫である。姓は全部妹尾下としの順に名前を挙げると、平作、徳右衛門、嘉六、弥之助、誠、勇となっており、誠月郡井原市近在の部落のもので、社長を四郎兵衛とよび年齢は七十四歳であるという。以山県にはそうとうたくさんの神楽の社があるらしいが、こんど島へ招かれてきたのは、後山県にはそうとうたくさんの神楽の社があるらしいが、こんど島へ招かれてきたのは、後山県にはそうと で、聞くところによると、かれらの住んでいる部落では全戸妹尾を名乗っているのだそう このへんの神楽はいつか三津木五郎もいっていたとおり、 備中神楽とよばれている。

祭りの秋ともなれば羽織袴とかたちを改め、あちらの村、こちらの部落とまわって歩くの である。 ふだんはふつうの農民とおなじように、郷里の村で農耕に従事しているのである。それが 神楽太夫といっても、 かれらは神楽を舞うことをもって正業としているわけではなく、

だから毎年秋の祭りの季節ともなれば、かれらは目のまわるような忙しさであった。 毎

いよいよ出港の準備をしているとさっき村長から聞いて、さてはきょうかとちょっと胸を かれもなんとも落ち着かぬふぜいである。小磯に停泊している越智竜平の自家用汽艇が、 大膳は七人の神楽太夫と、ふたつの大きな葛籠をあとに残してお帳場へ引きとったが、

だがと思案をしたのちに、手を鳴らして老婢を呼んだ。お島さんが帳場の外へきて手をつ なくとも、家の前で出迎えるぐらいは礼儀ではあるまいかと考えている。さて、その服装 かえると、 つかれる思いがしているのである。 越智竜平が帰ってきたら、まんざら知らぬ顔もできまい。船着き場までは出向いていか

「お島、 夏物の紋付きと袴を用意しといておくれ。いつでも手を通せるようにな」

「船着き場まで迎えにおいでんさりますか」

るまい。どうせ相手は自動車じゃろうが、いちおう敬意を表しておかずばなるまいよ」 「承知しました。それではあちらの居間に用意しときますけん」 「いや、そこまではせえでもええと村長もいうてくれるけえど、門までは迎えに出ずばな

「旦那、 いたが、そこへ四郎兵衛がさっきの姿のまま、帳場のまえへきて手をつかえた。 お島さんがひきさがったあと、大膳はしばらく思案顔で、しきりにキセルをくゆらして お邪魔してもよろしゅうございますか」

るじゃろ。よしんばそうでのうても、いたって気さくなお人じゃけん、二階へいてもろて 「ええて、 ええて。その先客さんはたぶん今夜あたりから、ほかへお移りんさることにな

もええ」

世話になったぞな」 「四郎兵衛さん、昭和二十三年にこの島へ神楽を舞いにきたときも、たしかこの座敷でお

平作がいった。

けえど、水島はすっかり変わってしもうたのう。あのきょうとい煙突をお見んさい」 「そうじゃ、そうじゃ。障子の外に水島や鷲羽山が見えておった。鷲羽山は昔のままじゃ

徳右衛門がそれに応じると、嘉六もつづいて、

大ちがい、きょう来てみたら、この島、えろう活気づいとるじゃないけ あの煙突が一本ふえるごとに、この島では人口が減ると聞いていたが、見ると聞くとは

外を見まわしている。 るらしい。弥之助、誠、勇の三人ははじめてらしく、物珍しそうにこのりっぱな座敷の内 これらの会話を聞いていると、この四人はまえにもこの島へ神楽を舞いにきたことがあ

「旦那、それじゃこのお座敷でお世話になってもよろしゅうございますか」

んは、ここしかないけんな。先客さんにはわしからあんじょう断わっておく。四郎兵衛さ いじゃけん、歓待するのんはわしの務めじゃ。それにこの家で七人いっしょにいられるの 「ああ、ええとも、ええとも。あんたがたにここへきてもろたんは、みんなわしのはから

んけんな。あのかた、旦那がこの島から、追い出しんさったお人じゃそうですな」 「もっぱら評判ですぞな。この島に少しでも関係のあるもんなら、聞きもらしは出来ませ

「四郎兵衛さん、その話はもうやめとこう」

ボンに開襟シャツと、ラフな洋装に改めている。 大膳が心苦しそうに顔をしかめたとき、お帳場の外に誠と勇が現われた。ふたりともズ

「おじいさん。ぼくたちちょっと島を見物してきます。いいでしょ」

「おまえいま出かけるのけ。もうじきお昼じゃぞな」

じゃと、こちらのおばさんにいうときましたけん」 「なくべくそれまでに帰ってくるつもりですけえど、遅れたらおむすびに漬物でけっこう

あんまり人さまに迷惑をかけるでないぞな」 「そうか、そんならそれでもええけど、島の人たちは祭りの用意で大いそがしのようじゃ。

「ようわきまえとおります。それじゃ、勇、 ふたりが出かけるうしろ姿を見送って、

「へえ、誠、勇ちゅうて、いまから十九年まえ、旦那にさんざんご迷惑をおかけした、松 一あのふたりあんたのお孫さんかな」

若のわすれがたみでござります」 四郎兵衛はちょっと鼻をつまらせたが、大膳は目を丸くして、

わすれがたみとおいんさると、松若どんはお亡くなりなさったんで。いや、わしがさっ

「ああ、

四郎兵衛さん、こっちへ入っておいでんさい。座敷のほう少しは片付きましたか

ですんじゃ」 なあに、 いまおおまぜくりの最中じゃけえど、あとは若いもんにまかせておけばええん

んなのだろう。 この四郎兵衛の目から見れば六十代の平作も、五十代の徳右衛門や嘉六もみんな若いも

らもう何年になる?」 「それにしても、四郎兵衛さん、あんたに会うのんもずいぶん久しぶりじゃのう。あれか

「あれは昭和二十三年のことですけん、ちょうどことしで十九年になります」

すかのう。お互いに年をとったんもむりはないて」 「十九年か。十年ひと昔というけえど、そうするとかれこれふた昔ということになるんで

じゃかてお年には見えませんぞな」 「旦那、それはいわんことにしましょう。わたしはこれでも若いつもりですけんな。旦那

ととりこみごとが多うて、めっきり年をとったような気でいたおりじゃけんな」 「あっはっは、そげえにいわれてみるとやっぱしわしもうれしい。ちかごろはなにやかや

うとしておいでんさるそうじゃが、その話のことですけ」 「旦那がとりこみごととおいいんさるんは、越智竜平さんちゅうかたが、故郷に錦を飾ろ 一そげえな話、 もう後月郡のほうにも聞こえとおりますか」

だいいたしました。いまから思えばあのころはこの島もお盛んでござりましたなあ」 が心残りでござりまする。いや、もう愚痴はこれくれえにして、神楽は首尾よう舞い め、島の人びとにも喜んでもらい、おまえさんからも礼をいわれ、過分のお鳥目をちょう おおさ

なったのは、それからずうっとのちのことじゃけんな」 ょうさんいよった。いや、こちらからも倉敷や岡山へ、ヤミの魚を売りにいたもんです。 きおった。それにあのころはまだヤミが盛んで、本土からヤミで魚を買いにくるもんがぎ いきおい島のもんもふところぐあいが温かだったんじゃろうな。それに水島があのザマに には戦死したふびんなものもおったけえど、そらごくわずかなかずで、大部分は復員して 「二十三年といえば兵隊にとられていった、島の若いもんもおいおい復員してくる。なか

大膳の憎悪と愚痴は、なにかにつけて水島へむけられるのである。

たごのお嬢さまがお生まれんさったとかで、日那も上機嫌でおいでんさりましたなあ ひねりが舞台に飛びこみました。それにお宮のほうでもおめでたつづきで、そのまえの年 に充ちた島じゃなと思いましたけんな。お神楽舞うていても、見物の衆からぎょうさんお 一人娘の巴さまに婿どのをお迎えんさったところが、夫婦仲もむつまじゅう、 「そらそうでござりましょう。わたしらみたよなよそもんの目から見ても、

やった。あのふたごの娘の名づけ親はわしじゃけん、よう憶えとおりますわい」 「そうそう、それもわたしは聞いとおります。真帆、片帆、ふたごの娘としてはこのうえ 「そうじゃったかのう。そういえば真帆、片帆がうまれたんは昭和二十三年の五月の末じ

うなりんさったのけ。はれ、まあ、おいたわしや。あげえにええ体しておいでんさったの きお尋ねしたいことがあるちゅうたんは、松若どんのことじゃけえど、あの松若どんが亡

四郎兵衛は探るようにその顔をまじまじと視詰めながら、

果てで死んでしもうたのか、そこがハッキリせんとおみんさい もうすらぎましょう。ところが松若の場合はいまだに生きているのか、それともどこかの ます。その当座は悲しゅうても、日がたつにつれてだんだんと忘れもしましょう。悲しみ それがなあ、旦那、松若が死んだとハッキリわかっていれば、身内のもんも諦めもつき

大膳は役者のような大きな目を視張って、四郎兵衛の顔を熟視しながら、

「はれまあ、そらまたどげえなことですん」

した大膳の顔を凝視しながら、しかし、その声は深い悲しみに打ちひしがれたように沈ん 四郎兵衛はあいかわらずなにかを探り出そうとするかのごとく、目鼻立ちのかっきりと

けん、悲しみもうすうござりまする。それにひきかえ松若だけが、いまだに生死不明なん 人だけ。あとの二人はみまかりましたけえど、これはハッキリ死んだとわかっとお かでこんどもいっしょにきたのは、いまむこうにいる平作、徳右衛門、嘉六とわたしの四 お招きで、この島へ神楽を舞いにきたのんは。あのときも七人でごわした。その七人のな 「あれは昭和二十二年の刑部神社のお祭りでございましたな。わたしどもがおまえさまの「いない」という。 ります

月にはいって六日の日に家を出たきり、とうとういままで帰ってまいりません。戦後はや も姿を隠すのでござります。そういうことが七月、八月、九月と三度つづきましたが、十 身内にもえているものがあるらしく、その衝動をどうにもに抑えかねるかして、またして うな目の色で、野良仕事はいうまでもなく、お神楽の稽古にも身がはいりません。なにか がいないちゅうておりました。それが一週間ほどして、やっと精気が戻ってまいり、夫婦 はてっきりどこかのおなごに、さんざんおもちゃにされて、精も根も抜かれてしまうにち のかたらいがもとの軌道に戻ってまいりましても、松若はとかくなにかに憑かれているよ くらいはつづいたと、嫁のお照は申しておりました。ですけんお照の申しますには、あれ

りとしたような顔色でキセルを指で弄んでいたが、 四郎兵衛の老いの繰りごとは、纏々として、いつまでもつづくのである。大膳はうんざ

った言葉でいえば、蒸発してしもうたんでござりまする」

消してしもうたにつき、もしやこの島へきとるんじゃないかと、 ておいでんさったのは……?」 おまえさんがここへ訪ね

「いやな、四郎兵衛さん、その話ならあの当時たしか二度もきいたぞな。松若どんが姿を

たのをよう憶えとおります」 二十三年の十一月のなかばでござりました。それから十二月にもう一度お訪ねにあがっ

ほんならあのときわしのいうたことも憶えておいでんさるじゃろけえど、ここは本土か

もないええ名前じゃろうがと、自慢しておいでんさりました」 「はっはっは、そげえなことがありましたかいな

そのお美しいことはまるで照り輝くようでござりました」 なしてつかあさりました。あの時分たしか数えで二十じゃいうておいでんさりましたが、 「巴御寮人さんは巴御寮人さんで産後の肥立ちもよろしゅうて、わたしどもを手厚くもて

「御寮人はいまでも綺麗じゃぞな」

面目をほどこして故郷へかえりましたが、それ以来のことでございます。松若がちょくち ょく姿を隠すようになりましたんは」 お年をとらないものでござりましょう。それはともかくわたしども一行七人、ことごとく 「そうでござりましょう。そうでござりましょうとも。ああいうかたはいつまでたっても、

「そうそう、あの時分もおまえさんはそういうておいでんさったな」

ちょく家を抜け出すようになってから、てっきりどこかにええおなごがでけたにちがいな ざりました。それまでは夫婦仲もよろしく、波風も立たぬ家庭でござりましたが、ちょく は女房とのあいだに誠、勇という子供がふたりまでありました。誠が六歳、勇が四歳でご すけえど、どこへいってたんかは絶対に口をわりません。松若はあの当時三十三歳、家に 「月に一度は姿を消します。そして一、三日たつとふらりっと帰ってまいるのでございま ません。あの頑健な松若が、帰ってきた当座はいつも腑抜けみてえなありさまで、露骨と、お照というのが嫁の名前でござりまするが、お照の悋気の凄まじいのもむりはござ

っていたのである。

きの十月六日の蒸発ですけんなあ。つい愚痴が出てしもうて……どうぞ堪忍してやってつ 消えたんか……そろそろ秋のお祭りの季節がちかづいて、準備おさおさ怠らぬ、そのやさ 大蛇退治の素戔嗚でござりましたけえど、その素戔嗚の面をもったまま、いったいどこへいただいたのが、松若の最後の舞台になりましたけんな。あのとき松若の舞うたんは、いただいたのが、松若の最後の舞台になりました 聞くにつけ、十九年前のことが思い出されましてなあ。なにしろこちらのお社で舞わせて も思い、またかたじけのうとも感じ入っておりますんじゃ、そうじゃけえどこの島の名を ったとしたら、こんどの祭りのお神楽をおまえさんには頼みませんぞな」 「そうはようわかっとります。それだけにこんどのお招きについてはつくづくと有難うと いや、おまえさんの気持ちもようわかるけえどな、もしわしになにか疚しいところがあ

座をあずかる頭とはいえもう年寄り、四郎兵衛の愚痴はとめどもなくつづくのである。

_

りは かれらはうえの神社の境内で、川島ミヨが三津木五郎に会うてくる、その結果の報告を待 ちょうどそのころ、誠と勇の兄弟が地蔵峠を登ってくると、道端の大きな石の地蔵尊の いまどき珍しい着物に袴をはいていた。いうまでもなく磯川警部と金田一耕助 ふたりの男が人待ちがおにたたずんでいた。一人は洋服姿であったが、い ま ひと

入りしたら、どうしても人目につくはずじゃっと」 ら離れた島じゃ。ここへ来るにはどうしても連絡船に乗らねばならん。他国もんが島へ出

ませんか」 「旦那はそうおいんさりますけえど、あの時分ここはヤミ島といわれたくらいで、倉敷や 一山、遠くは神戸大阪からも、ヤミ屋がぎょうさんはいり込んできていたいうではござり

お思いんさるんかな」 さん、あの時分から島の宿屋ちゅうたらこの錨屋一軒だけじゃった。ところがわしはその 「なるほど、それはおまえさんのいうとおりかもしれん。そうじゃけえどなあ、四郎兵衛 お泊めしたような記憶は皆無じゃけんな。それともわしが嘘をついたとでも

島々もおなじことでござります。この刑部島のほかにはなあ。それにこの家には泊まらな んだかもしれませんけえど、島にはほかにもぎょうさん家がござりますけんなあ」 「と、いうとおまえさんはいまでもこの島に、疑いを持っておいでんさるんけ」 「いえ、いえ、そういうわけではござりませんけえど、あの時分松若が下津井から坂出へ ・く連絡船へ乗るのんを、見たものがござりましてな。ところがわたしどもの家では坂出 おろか、四国のどこにも身寄りも識り合いもござりません。また連絡船が途中立ち寄る

「そういうわけではござりませんけえど、溺れるもの藁をもつかむちゅう譬えの かに心当たりがないもんですけん、ついなあ、これも年寄りの愚痴じゃと思うてつかあ

「勇、さっき駐在のおまわりさんは、千畳敷きちゅうのんは、このお宮のうしろがわじゃ

いてきた勇をふりかえって、

な名の場所があるちゅうことしっていたのけ」 いうたなあ」 「うむ、おまわりさんはそういうたけえど、お兄ちゃんはどうしてまたこの島に、そげえ

ぱりこの石段を登らんといかんのけえの」 「それはいま話すけえど、このお宮のうしろがわちゅうたら、どういけばええのけ。やっ

れをさっきから心配もし、不思議にも思っているのである。 見廻している。その顔色はなぜか青ざめ、緊張のために頰の筋肉が硬直している。勇はそい場所へ出るのを好まないらしく、石段に一歩足をかけたまま、当惑したようにあたりを 若者たちのはやしたてるような声がまじってきこえる。誠はどうやらそういう晴れがまし さっきもいったとおり、その石段のうえからは賑やかな祭り囃子の音がきこえ、大勢の お兄ちゃんはどうしてこの島

(E)

「お兄ちゃん、その崖下に小ちゃな道がついとるようじゃけえど、そこをいけばお宮のうに、千畳敷きちゅう場所があることをしっていたのだろう。 しろがわへ出られるのんとちがうやろか」

「ちょっとお尋ね申しますけえど、刑部神社へいくにはこの道をまっすぐいけばええんで 誠は磯川警部のまえにふと足をとめて、

「ああ、もう少しいけば右手の杉木立ちのあいだから、神社の屋根が見えてくる。しかし

「きみたちこの島のもんじゃなさそうだね。どこから来たんだね」 警部はふたりの若者を見くらべながら、

「井原のほうから来ました」

「井原というと後月郡だね。こんな島へなにしにきたの。祭り見物かね」

「へえ、まあ、そんなもんです。どうもありがとうございます。勇、いこう」

ふたりのうしろ姿を見送って、磯川警部は苦笑した。

「こんどの祭りはよっぽど評判なんでしょうな。井原といえばここからそうとう遠いが、

かけて、露店がずらりと並ぶそうですから」 「あのふたり露店商人じゃないんですか。あすあさっての祭りには、境内からこのへんへ

そげえなところから見物がくる」

「ああ、そうか。それで下見に来よったんじゃな」

それと気がついていたら、さっき駐在所で広瀬警部補から聞いた二十年ほどまえの神楽太 不覚にも磯川警部も金田一耕助も、それが神楽太夫の連中とは気がつかなかった。もし

「お兄ちゃん、その岩のかげになに 「ううん、だれか人がいると困るけんの」 かあるのけ」

に、楢や櫟の青葉若葉がザワザワと音を立ててゆれるばかりである。 こえてくるが、千畳敷きのなかは静かである。ただおりおり南の海から吹きあげてくる風 だれもいなかった。崖のうえからは賑やかな祭り囃子や、若者たちのさんざめく声がき

「だれもおらんな」

「だれも聞いとるものはおらんな」 「うん、だれもおらん」

「うん、だれも聞いとるものはおらん」

視しながら、 勇はゴクリとノド仏を鳴らして唾をのみこんだ。誠は光ったような目で鋭く勇の目を凝

ゃんは気が立っておいでんさるけん、なおのことしゃべったらあかんぞな」 ちゃんにもいま宿屋にいる小父ちゃんたちにも、絶対にいうたらあかん。ことにおじいち 「勇、これからお兄ちゃんのいうことは、絶対にだれにもしゃべったらいかんぞ。おじい

「誓うか、神さんに誓うか」 「そらお兄ちゃんがそうおいんさるなら、うちだれにもしゃべりやせん」

「誓う。神さんに誓う」

誠も崖下の道をのぞいてみて、「なに、小道が……」

豁然と眺望のひらけた千畳敷きへ出た。それでも素直にそのあとについていった。 「うん、そうかもしれ 誠はさきに立ってその小道をいった。勇は気遣わしそうに兄の顔色をうかがいながら、 ん。おまえよう気がついた。ほんならそっちへいてみよう」 よほど仲のよい兄弟らしい。まもなくかれらは

「勇、見い。崖のうえにお宮の屋根が見えとる。おまわりさんのいうた、お宮のうしろが

「そうじゃけえど、お兄ちゃん、こわとはここのことにちがいない」

畳敷きは大袈裟じゃ 「そうじゃけえど、お兄ちゃん、ここは千畳も敷けやせんぞな。広いことは広いけえど千

ければ千畳敷きいうてもおかしゅうはない」 「おまえそげえな屁理屈いうたらいかん。これ花崗岩の一枚岩にちがいない。これだけ広復贈さば大袈裟しょ」

誠の顔色がいよいよ青ざめ、頰がピクピク痙攣するので、勇の心臓はドキドキと早鐘を打 で、千畳敷きのなかへ踏みこんだ。兄の誠がそうするので、弟の勇もしぜんそうするのだ。 つような乱拍子になっている。 のような感触である。ふたりは頭上を覆う楢や櫟の葉の下を、足音を盗むような歩きかた 誠はズックの靴で足下を踏んでいたが、そこには厚い苔がびっしりむしていて、快い褥

千畳敷きの海を見晴らす一角に人間が坐っているくらいの大きさの七つの岩が、 車座の

「それはおまえも聞いとるな。父ちゃんに隠し女があったらしいちゅうことを」 「かたきというのはおなごか」

揚句の果てには殺されてしもうたにちがいないと、おじいちゃんは小っちゃいときから、 「うん、それはおじいちゃんから聞いとります。そのおなごにさんざんおもちゃにされて、

口を酸っぽうして、うちにいうておいでんさった」

じいちゃんを失望させたけえど、おまえは父ちゃんに似て逞ましゅうええ体に生まれて育 った。年々歳々おまえは父ちゃんに似てくると、株内のひともみんないうておいでんさる。 「そうじゃろう、そうじゃろうとも。おれはこのとおり母ちゃん似で、ひ弱う生まれてお

その父ちゃんはおじいちゃんにとって、目の中に入れても痛うないほどの秘蔵っ子じゃっ

満足もおしんさるかわかりゃせん。それがおじいちゃんにとってなによりのご恩返しじ た。それだけに父ちゃん似のおまえに、おじいちゃんは希望をつないでおいでんさる。そ うじゃけんおまえが父ちゃんのかたきをとってあげたら、おじいちゃんどげえに喜びもし、

敷きとそのおなごとどういう関係があるのけ」 「お兄ちゃん、うちなんとかして父ちゃんのかたきを討ちたい。そうじゃけえどこの千畳

っとったのけと尋ねとったが、問題はそのこっちゃ。勇、おれがだれから千畳敷きちゅう 「よし、ほんなら話してやる。おまえいまこのおれが、どうして千畳敷きちゅう名前をし

名前をきいたと思う」

勇は怯えたような目をして語尾がふるえた。「だれから……?」

のまま行方不明になっておしまいんさった、父ちゃんから聞いたんじゃ」 「父ちゃんから聞いたんじゃ。おまえが四つ、おれが六つの年の十月六日に家出して、そ

いるが、兄の誠は体つきも華奢で神経質そうである。 誠の語気は鋭かったが、その目には涙がにじんでいる。弟の勇は頑丈で逞しい体をして

「父ちゃんがここのことをしっておいでんさったんけ」

ぱり正しかったと思わざるをえん」 きてみたら千畳敷きちゅう場所がちゃんとある。そうすると、おじいちゃんの疑いはやっ ちゃんが蒸発したんは、この島にちがいないちゅう疑いを持っておいでんさる。その島へ 「千畳敷きちゅう名前はあちこちにあるかもしれん。そうじゃけえど、おじいちゃんは父

「ほんなら、なんでおじいちゃんにいわ んのじゃ」

たらしい母ちゃんがわれわれ兄弟を振りすてて、さっさとほかへお嫁にいてしもうたあと、 もしれん。おじいちゃんももう年じゃけん、あんまり興奮させたらいかんのじゃ。あの憎 「いかん、いかん、そげえなことおじいちゃんにいうてみい。あの人どげえに興奮するか

ってからというもの。必ずいくさきざきで千畳敷きのことを聞くんじゃけえど、 わなんだもんじゃけんな」 「そうじゃけん、おれ大人になって神楽の社に入れてもろて、あちこち旅をするようにな かにも残念そうである。

った。ふたりとも胸のところに横縞のある揃いのセーターを着て、水色のスラックスをは たのだろう。つぎの瞬間、千畳敷きへはいってきたのは、真帆、片帆のふたごの姉妹 配せされて別の岩のかげに身を潜めた。べつにそうしなければならぬ理由はどこにもなか どこでも反応がなかった。それがきょうお巡りさんに聞いてみたら……」 ったのだけれど、そのときの雰囲気がふたりにそういう行動をとらさせずにはおかなか いかけて、誠は急に口をつぐむとかたわらの岩のかげに身を隠した。勇も兄に目 であ

Ξ

「片帆ちゃん、うちに話があるちゅうてなんのこと?」 真帆は いつものとおり無邪気だが、片帆はなぜか頰がこわばってい

「真帆ちゃん、あんたきのう荒木定吉さんの話きいて、なにか思いあたることない?」

「思いあたるってどげえなこと?」 ゙まあ、憎らしい。あんたはうちよりよっぽどアタマもええし、物憶えもうわ手やのんに、

そのとき父ちゃん、なんじゃらひょんなげな(おかしげな)ことおいいんさった」 やおまえにもすまんすまんと思いながらも、千畳敷きの誘惑に勝てなんだんじゃないけ。 んさった。それでおれがどこにいてたんかと聞いてみたら、千畳敷きへいてたんじゃとお 夜になるとおれを抱いて寝てつかあさった。父ちゃんおれを強く抱きしめて泣いておいで 母ちゃんはすっかり怒っておまえをつれて、里へかえってしもうた。そうしたら三日目か いいんさった。父ちゃん、母ちゃんにもすまん、おじいちゃんやおばあちゃんにも、 ておいでんさったおばあちゃんに、さんざん脂をしぼられておいでんさったけえど、さて に父ちゃんふらりと帰っておいでんさった。父ちゃん、おじいちゃんやその時分まだ生き んじゃけえど、あれはたしか二度目に父ちゃんが家出をおしんさったときじゃったと思う。 いうことをな。 「そうじゃ、それをいうとこう。おれがいつ父ちゃんから、千畳敷きの名前を聞いたかと これは大きゅうなってからいろいろ小ちゃいときのことを思い出してみた

「鳥ちゅうて鳥け、雀け 「ひょんなげなことちゅうてなにけ」 鳥が鳴いたらどうじゃとか、こうじゃとか……」

「そいで鳥が鳴いたらどうしたというんけ」 「うんにゃ、鳥でものう雀でもなかった。おれの聞いたこともない鳥じゃったと思う」

じゃと思う。まさかそれからひと月のちにその父ちゃん、蒸発しておしまいんさるとは思 「それをよう憶えとらんのじゃ。なにせまだ六つじゃったけんな。そのうち寝てしもたん

真帆の顔色はさすがに蒼くなっていた。

「そげえなことあったん? うちはちっとも知らんけえど」

ておいでんさったんをうちよう憶えとるわ いていた。その枕もとで刑事さんがお母さんに、根掘り葉掘りあの人形遣いのこと、尋ね ょうど夏休みじゃったけんな。うちも一緒にいくつもりじゃったけえど、病気をして寝つ 「あっ、そうか、そういえば真帆ちゃんはあの時分倉敷のほうへいておいでんさった。ち

げたわなあ、 「それで、その人形遣いの小父さん、この島で蒸発したと刑事さんおいいんさったの」 「まさか。そうじゃかとてあの人形遣いの小父さん、ひと晩ここへお泊まりんさったんは んまじゃけえど、そのつぎの朝真帆ちゃんと二人で、小磯の船着き場まで送っていてあ ちょうど学校へいきがけじゃったけん」

連絡船で出ていくのんを、バイバイいうて手を振って見送ったわ 「そうそう、それならうちも思い出したわ。またつぎの島へ渡らんならんおいいんさって、 一そうそう、それを刑事さんにいうたんよ、うちが……たしかにこの島を出ておいきんさ

につくわなあ。刑事さんのおいいんさるには、あの小父さん人形背負うて旅に出たまま ゆうことじゃった。そうじゃけえど、あげえな人形三つも背負うてたら、いやかて人の目 ったちゅうて。ところが刑事さんのおいいんさるのんは、その後また来やあせなんだかち

そげえにしらばっくれんさって……」 「しらばくれるもなにも、うちあんたのおいんさることちっともわからへん」

淡路から人形遣いが一人島へきて、巡礼お鶴というのんを、人形を遣うて語ってつかあさらが小学校の五年か六年のときじゃったけん、いまから七年か八年まえのことじゃった。 うちは泣かなんだけえど」 と、うちのお母さんせんどお泣きんさった。真帆ちゃんじゃかとて泣いておいでんさった。 かかさんはお弓と申しますと、人形遣いの小父さんがお弓とお鶴の人形を使いながら語る った。うちはいまでもあの浄瑠璃の一節を憶えとるけえど、ととさんは阿波の十郎兵衛、 「ほんならほんまに忘れんさったん。それでは思い出させてあげますけえど、あれ、うち

形が怖うて、怖うて、あの時分よう夢を見たもんじゃ。そうじゃけえど、片帆ちゃん、そ それから阿波の十郎兵衛の人形を背負うておいでんさったけえど、うちあの十郎兵衛の人 れが荒木定吉さんとどげえな関係があるん?」 「そうそう、そういえば思い出したわ。あの人、人形遣いの小父さん、背中にお弓とお鶴、

「あら、真帆ちゃんはそのあとのこと憶えておいでんさらんの」

「どげえなこと」

「あの人形遣いの小父さん、ひと晩うちへ泊まっておいでんさったでしょ」

「それはうちも憶えとおりますけえど」

「それから半年ほどして警察の人が調べにきたじゃない? あの人行方不明になってしも

「片帆ちゃん、あんた、いったいなにを……?」

の島に原因があるんじゃないかっと……」 の島に縁のある人が一人ならず二人まで蒸発しておしまいんさった。そうするとなんぞこ 「ううん、きのう荒木定吉さんの話を聞いているうちに、うち怖うなってしもうたん。こ

「片帆ちゃん、原因ちゅうてどげえなこと……?」

りしめると 片帆はしばらく黙っていたが、やがてうっすら目に涙を浮かべ、真帆の手をしっかり握

りやのん。うち近ごろこの島が怖うて、怖うて……」 ばっかりしてる子や。あの子は油断がならんとおいいんさったけえど、ほんまにそのとお や。真帆は素直でええ娘じゃけえど、片帆は人の顔色ばかりうかごうて、他人のあら探し その反対にうちときたら現状の裏の裏をと見ようとする。いつか錯屋のおじいさんもいう 現状に満足しておいでんさる。少しも疑うなどという神経は持ち合わせておいでんさらん。 ておいでんさったけえど、あのきょうだい顔かたちは瓜ふたつじゃが、心の中は雪と墨じ 「真帆ちゃん、あんたはほんとにええ性格やわなあ。あることをあるがままに受け取って、

片帆は真帆の手をいっそう強く握りしめて、堰をきったように激しく泣きむせんだ。 金田一耕助が刑部大膳に聞いたところによると、世間ではよく養子三代というが、刑部

245

悪

行方不明におなりんさったんじゃて。つまり蒸発おしんさったんやわなあ」 「ほんならこの島に関係ないんじゃない?」

た。そういう順序になるらしいのん。うちゆうべこのことを寝ずに考えたんよ」 察から岡山の警察へ照会があって、岡山の警察から刑事さんが問い合わせにおいでんさっ ちゅうて、おうちの人が心配して淡路の警察へとどけて出たんやわなあ。そいで淡路の警 小父さんうちで人形遣うて見せてつかあさったあと、あちこちの島や村を巡ったあと、い んばっかりか、手紙もハガキもやって来ん。なんぞ途中で間違いでもあったんじゃないか ってくるし、道中あちこちから手紙やハガキがくるのんに、今度は一か月の余も帰って来 てまた巡業にお出んさったんじゃそうな。それがいつもなら一週間か、長うても十日で帰 ったん、淡路島の自分の家へお帰りんさったのじゃそうじゃけえど、それから二、二日し 「うん、うちもそのときはそう思うてたんよ。そのときの刑事さんのお話によると、あの

「片帆ちゃん」

と、真帆は憂わしげな目で探るように、じぶんとおなじ顔をした片帆の顔を視詰めなが

旅人みたいに装うてきたとしたら、連絡船じゃかて島の人じゃかて気がつかんこともある 島へやって来たとしたら、いやかて人目につくといまおいいんさったばかりじゃない?」 「あんたなにをそげえに心配しておいでんさるん。あげえな人形三つも背負うてまたこの 、うん、そうじゃけえどなあ、真帆ちゃん、人形を荷物のなかに隠し、服装なども普通の

まわして、 島にどげえなことがあったか……」 そこでまた片帆は激しく身をふるわせると、急に気がついたように千畳敷きのなかを見

るつもりやのん。この怖い、恐ろしい島から逃げ出すつもりやのん」 「こげえなこといつまでいうていてもきりがない。それより真帆ちゃん、うちこの島を出

「逃げ出すいうていつ? どこへ……?」

「どこへいくかまだ決めてえしません。ともかくこの島を出たいのん。きょうのうちに

...

「いいえ、とめんといてつかあさい。うちの決心はもう変わりはせんけんな。このこと真 「きょう……? そげえな……そげえな……」

帆ちゃんだけに打ち明けとくけえど、だれにもいわんといてつかあされや。 に告げ口でもおしんさったら、七生までお恨みするけんな」

「片帆ちゃん、待って……そげえな無分別なことやめて……」 片帆は急に身をひるがえして、千畳敷きの入口の道へと駆け出した。

兄弟である。二人の顔は藍をなすったように真っ青である。 二人の姿が崖下の道を曲がって見えなくなったとき、岩の陰から現われたのは誠と勇の

神社では養子四代ということになりそうだということであった。大膳のふたごの兄の天膳 ちろん神主になる勉強をしてのちのことである。 というものが、刑部神社の娘瑠璃というもののもとへ婿養子にはいって神職をついだ。も

宮司になる資格のあるものを養子に迎えたが、夫婦のあいだにまたしても巴しか生まれな かった。そこで、守衛という倉敷で神主をしているものを養子にとった。 ところがその夫婦のあいだに珊瑚という娘が一人しか生まれなかったので、そこでまた

島で教育を受けたが、高校は島にないので真帆は倉敷の御寮人、片帆は玉島の御寮人に預 あるという。 けられ、ともにこの春倉敷の高校を卒業して、島へ送り返されてまだ三月たつやたたずで ことにならざるをえないだろうと大膳は歎くのである。なお真帆と片帆は中学まではこの 帆片帆という、 こうして世間でよくいう養子二代がつづいたのだが、守衛と巴のあいだにまたしても真 、ふたごの娘しか生まれなかった。だから刑部神社の場合、養子四代という

「真帆ちゃん」 「片帆ちゃん、 あんたこの島がなぜ怖いのん。ここはあんたが生まれた島やないのん」

じみとした調子になって、 と、片帆は激したようになにかいいかけたが、すぐ思いなおしたように涙を拭い、しみ

お 「あんたの預けられておいでんさった倉敷の御寮人さんいう人は、穏やかなよいおかたで いでんさる。それに反してうちの預けられていた玉島の御寮人さんいう人は、うちとお

器量にうまれたばっかりか、血のめぐりもようないところは、あの醜いすっぽんかもしれ そうじゃ、わしはすっぽんじゃ、すっぽんでええ、わしは……本家の竜平どんが男振りも すっぽんじゃと、株内のもんから耳がいとうなるほどはやしたてられて育ったもんじゃ。 ながら、あのふたりは月とすっぽんじゃ。本家の竜平どんが月なら新家の吉太郎 ったん食い ん。そうじゃけえど、 れて育った。なにかにつけて本家の竜平どんに較べられ、いとこ同士のおない年とは り頑健じゃけえど、血のめぐりはあんまりようないと、小さいときから身内のも 「そうじゃかとてわしにどげえな生きかたができるというんじゃ。なるほど体はこのとお 知恵分別、才覚もひと一倍よう働くのんに、わしは色もどんぐろう、みっともない ついたら、 首がちぎれても相手を放さんちゅう執念深さがあるという。 すっぽんにはすっぽんの意地がある。すっぽんちゅう生きもんはい

乗せた舟を漕ぐとき、かれの頭のなかは悔しさで、火箭が旋回するような思いであったろ あろうか りがあんまりよくないといわれる吉太郎でも、心たいらかならざるものがあるに い。いわんやその竜平の竇客として、この島へ招待されてきているという、金田 かごろ竜平の噂がこの島のみならず、近隣近在まで高くなるにつけ、い それが顔色に出ないのがこの男の特徴で、すっぽんのすっぽんたるゆえんで かに血 ちが 一耕助を

昭和四十二年七月六日、 つまり刑部神社の宵宮の日の昼過ぎのことである。ゆうべから

「お兄ちゃん、うちの父ちゃんのほかにもこの島で、蒸発した人があるのんとちがいます 勇、いまの話聞いたか」

兄弟は顔見合わせて激しく身ぶるいをした。「うん、それも一人やない、二人らしい」

第十二章 水蓮洞

金田 るのは刑部大膳、舟を漕いでいるのは越智竜平のいとこの吉太郎である。 一耕助はいまオチョロ舟に乗って刑部島を一周している。案内者に立って同舟して

を、深く肝に銘じて恩にきている。吉太郎はみずから進んで越智家の反対党の旗頭、刑部 という、生活のみちをあたえられ、おかげで生まれ故郷の島をすてずにすんだということ かれは大膳の斡旋で、ひとの口にはいらぬ魚をとって、水島コンビナートへ売りつける

ることにも甘んじて、刑部神社に献身的な奉公をしているのである。

大膳のもとに身を投じて、その股肱をもって任じているばかりか、じいやの名前で呼ばれ

「あなたいつか舟で島を一周してみたいいうておいでんさったけえど、どうです、これか

「いいや、いいですよ。それよりあの人たちはどうしてます。神楽太夫の一行は……?」

金田一耕助はぎょっとしたように相手の顔を視直して、

いんですか、こんな日に……? お忙しいんじゃないんですか」

刻、竜平どんのお迎えがあるそうですけえど、それまでには帰ってこられるでしょう。一 んか。なまじマゴマゴしてるとはたが迷惑するばかりですけんな。そうそう、きょうの夕 「なあに、祭りのことなら村長や太夫にまかせてあります。この老骨になにが出来ますも

かとあやぶまれたが、さりとて断わるべき口実も見つからなかった。それにかれはかねて 周ちゅうたところで、どうせこげえな小っちゃな島ですけんな」 からこの島を、外から見ておきたいという希望を、大膳に伝えておいたのである。 ノンキな島めぐりの案内をしようというのである。なにかよからぬ下心があるのではない 金田一耕助はちょっと相手の心を測りかねた。よりによってこの大事な日の昼過ぎに、

金田一耕助が念を押すと、大膳はこともなげに笑って、

わらず帷子の甚平すがただ。 昼食のお膳をたいらげたところへ、ひょっこり顔を出したのが大膳である。大膳はあいか あるじの大膳の要請で、階下の座敷を神楽太夫の一行七人に明けわたし、二階の八畳へう つった金田一耕助と磯川警部が、臨時雇いのお関ちゃんという若いお手伝いさんの給仕で、

「いや、けっこうでしたよ、旦那、二人で寝るにはこのぐらいがころあいですよ。階下の 「どげえでしたかな、金田一さんも磯川はんも、この部屋の寝心地は……?」

十畳と八畳では広過ぎて、かえって気が落ち着きませんでした。ねえ、警部さん」 「いや、これは金田一さんのおいいんさるとおりです。ですけん旦那も気になさらんでお てつかあさいよ。この部屋すこぶる快適ですけんな」

これは必ずしも金田一耕助や磯川警部が、気休めをいったわけではな

職とい 大量か四畳半の小部屋である。北側の雨戸を開けると水島から児島半島、鷲羽山へかけて の眺望は、むしろ階下の十畳よりまさっている。 この家を取りま この部屋は昔この家が北前船の船頭相手に、青楼をいとなんでいたころ、 れるような立場の遊女に、あてがわれていたものにちがいない。ずらりと四 いている一階の部屋でも、海に面したこの部屋だけが八畳で、 おそらく、 あとは全部 一角く

あの連中が来るちゅうことを、つい度忘れしていたもんですけん、まことに、はや、失礼 してしまいました」 「いや、あんたがたのことですけん、そういうてつかあさるとは思うとおりましたけえど、

まどきの機帆船より、このほうが風流じゃと思うたんです。さあ、こうござれ **大膳はみずから先に立って庭へおりると、飛び石づたいに裏木戸へいった。金田一耕助** あんたを風流心のあるお人じゃと、お見受けしたもんじゃけんな。なまじ

すけんな。いまは日の長い辻じゃし、それにこのへんは東京にくらべると、よっぽど日の 「大丈夫、大丈夫、五時か六時までにはな。六時ちゅうてもまだおてんとさまは高うごわ

はしばしば経験してきたことである。 入りが遅うなっとおりますけんな」 金田一耕助はいままでにもたびたび岡山県で事件を扱っている。いま大膳のいった言葉

「金田一さん、大丈夫ですか、こんな大事な日に島をあけて……?」

磯川警部が気遣うのを、大膳はこともなげに打ち消して

起こる道理がない。それより磯川はん、あんたも一緒にどうです」 「大丈夫、大丈夫。金田一さんを煩わさねばならんようなことはなにも起こりゃせんけに。

うが面白いですけん」 、いや、わたしは遠慮しましょう。わたしはそれより、お神輿ワッショイを見物してるほ

五郎や定吉もそのなかにまじっているではない なるほどそのとき錨屋のまえを、ワッショイ、ワッショイと練って歩く騒ぎがきこえた。

年ほどまえの蒸発一件なるものについて。 警部はおそらくあとに残って、神楽太夫の連中に当たってみるつもりなのだろう。二十

「それでは、おまえさんの好きなようになされじゃ。では金田一さん、わしのあとについ

金田一耕助はじぶんがひじょうに惨めな三枚目のような気がした。かれはかねてからこ

なるほど、これならいくら潮をかぶっても大丈夫だろうが、大膳やじぶんは……と、金田 黒い鞣革の上下つなぎのオーバーオールを着て、足には膝まで没する長靴をはいている。 くらべていると、 耕助が心細そうに、相手の甚平姿と、じぶんの薄よごれた白がすりとよれよれの袴を見

「大丈夫、大丈夫、さあ、はようこっちへお乗りんさい」

支えた。金田一耕助がしかたなしに舟のなかへ乗り込むと、 ひと足さきに舟べりを越えた大膳は、舟のなかから手を差しのべて、金田一耕助の体を

「さあ、これをお召しんさい。これなら少々潮をかぶっても大丈夫じゃぞな」 大膳がオチョロ舟の胴の間から、拾い上げたのはふた組の養と菅笠である。

蓑と笠がかかってましたね」 「ほほう、これは珍しい。そういえば刑部神社の社務所の玄関にも、これとおなじような

は外見を気にするほうかな」 「いやあ、ぼくはべつに……」 「昔の人の生活の知恵じゃけえど、現代でもけっこうまにあうぞな。それとも金田一さん

大膳の見様見真似で金田一耕助も蓑を身につけた。

「菅笠はあとで役に立つことがあるけんな、

とっておきんさい

金田一さん、えろう風流なこってすな」 大膳の手から菅笠を受け取っているとき、 二階のほうから声が降ってきた。

を見送っていた。金田一耕助はなぜかホッとした。大膳がじぶんを海へつれ出そうとして 夫がてんでに衣裳をつけたり、面をつけたり、くちぐちになにかわめいていた。なかにひ かのものは手をやすめて、いま裏木戸から外へ出ていこうとする大膳や金田一耕助のほう とりおどけた面をつけて、鈴をふりふり舞いの振りをつけているのは四郎兵衛らしい。ほ もそのあとにつづき、うしろからお島さんがついてきた。 いるのを、この人たちが目撃している…… 金田 一耕助がふりかえると、階下の十畳と八畳の座敷が開けはなたれて、七人の神楽太

わず大きく目を視張った。 だが、つぎの瞬間、大膳が裏木戸を開いたとき、金田一耕助はまた虚をつかれて、

うまでもなく吉太郎。 に、たった一艘しか残っていないといわれるオチョロ舟である。櫓を手にしているのはい 裏木戸の外の石垣には、いまヒタヒタと潮が満ちていて、そこに待っているのはこの島

「旦那、この舟で島を一周するというんですか」

「そうじゃけん、さっきもいうたろうがの。機帆船より風流でええと……」

「大丈夫、大丈夫、吉太郎は小さいときか 「でも、この島は周囲一四キロというじゃありません ら舟を漕いで育った男じゃ。その気になれば矢 かし

のようにだって漕げるぞな。なあ、吉太郎

しかし、吉太郎は無言である。かれはこちらへくるとき、金田一耕助が見かけたとおり

落としていたってわけですな」 「なるほどこのなかで北国からきた寳客が遊女を抱いて、体内にたまった垢を安直に洗い

「あっはっは、 そういうこってすな。 金田一さんはそのほうはどうです。おなごのほう

五本の指でひっかきまわした。いくつになってもこのくせだけは抜けぬら 「いや、ぼ、ぼく、そのほうはサッパリです」 金田一耕助は大いにてれて、大いに吃って、ジャンジャン、バリバリもじゃもじゃ頭を

り、酒の肴が五品ほど。すべてはお島さんの心づくしであろう。 トコトと音を立てて踊っている。ふたりの膝のまえには猫脚のお膳がひとつずつおいてあ んで相対している。七輪のうえには薬鑵の湯がたぎっており、薬鑵のなかにはお銚子がコ ふたりはいま閨房の入口の間に花莚をしいて、かっかと火のおこった七輪をあいだに挟

智竜平のもとへ引き取られていくからだろうか。それとも、ひょっとするときょうからあ 必要に応じて飲める口である。大膳もそれを聞いているから、きょうのこの饗応になった 金田一耕助は酒はあんまり好きなほうではないが、さりとてまんざらの下戸でもない。 しいが、さりとてなぜきょうでなければならないのか。今夜から金田一耕助が、越

25

「磯川はん、あんたの大事な金田」さんは、たしかにわしがお預かりしましたぞな」 「いや、どうも。いろいろ珍しい経験をさせてもらっています」

蓑を着て菅笠を持ったまま上を仰ぐと、磯川警部が二階の欄干から身を乗り出して笑っ

警部は二階から手を振っていたが、これだけの会話と警部の仕草が、金田一耕助の心に お願いします。じゃ、金田一さんいっておいでんさい」

落ち着きとくつろぎを取り戻した。

しっている。階下の神楽太夫の連中も目撃している。 ようなことはないだろう。いま大膳がじぶんを連れ出そうとしていることは、磯川警部も ふたりがじぶんに害意をもって連れ出そうとするならば、こうもおおっぴらにことを運ぶ 大膳や吉太郎がじぶんに好意を持っていないことは頭からわかっている。しかし、この

つけていることを、肝に銘じておくことも忘れなかった。 金田一耕助はじぶんがいささか被害妄想狂におちい しかし、いっぽうではそういう警戒心を催させるなにものかを、 っているのを、心中ひそかに嘲り笑 このふたりが身に

ほんならいておいでなされませ」

戸をはなれた。 お島さんがご愛嬌に舟の艫をつくと、吉太郎が櫓を漕ぎ出し、オチョロ舟は錨屋の裏木

オチョロ舟には低い屋根がついている。屋根の下は二畳敷きくらいになっていて、しか

集結しているようにも思われた。

て左側の崖のうえから、おびただしい鳥の群れが啼き騒ぐのが聞こえ、かつ望見された。 っても、どこまでいっても眺望はおなじである。とつぜんオチョロ舟の進行方向にむかっ オチョロ舟はいま崖をめぐって、島の西側を南下している。崖の高さに多少の高下はあ

は禁じられとおりますんじゃ」 「烏は刑部神社の使わしめちゅうことになっとりますけんな、獲ったり殺したりすること 「この島はどこへいっても鳥が多いですね」

のはなにか不吉なように思えるんですが、 や、それはわたしも聞いております。 島の人たちにはそれほどではないのでしょう われわれ凡愚の人間には、鳥の啼き声とい

殺したりすることはご禁制になっとおりますんじゃ」 と、里へ出てきていろいろいたずらするんで困ります。それでも昔からの掟で、獲ったり 「いや、不吉とまで思わんが、うるさいことはうるそうがすな。それに山に餌が のうなる

吉な鳥の声が入りまじって、頭上から雨のように降ってくるのは、あまり気持ちのよいも のではな そのときの鳥の群れの騒ぎがあまりにも異常だったからであろう。ガーガーというあの不 て、下にあるなにものかを狙っているようだ。 大膳は悠々と盃をあげながらこともなげにいったが、それでもふいと眉をひそめたのは、 い。オチョロ舟のなかから振り仰ぐと、 それはまるで島じゅうの鳥がその一点に 崖のうえにおびただしい鳥がむらがって

大膳自身いたたまれないような焦燥感を抱いているのではあるまい すへかけての祭りにさいして、なにか重大なことが起こるであろうことを予期していて、 か。

場所と思われる。 大磯のほうへまわっていった。 大膳と金田一耕助のこの奇妙な酒盛りのうちに、吉太郎の漕ぐオチョ なるほど大磯は遠浅で、いかにも海水浴場に打ってつけの 口舟は、小礒から

えて、波のしぶきが舟のなかに降ってきた。なるほど蓑と笠を用意したのは適当な配慮だ ったかと思われる。 雲は低くたれこめていまにも小雨がパラつきそうな空模様であった。ときおり舷側を越

_

矮性の這い松がいちめんに生い茂っている。 この島が海中からおどり出したように見える。崖のうえや途中には鷲羽山で見たような、 水面 から一〇〇メートルにも達しようか。だからその方角からだけ眺めると、突兀として に高くなっていって、それが刑部島を取りまいているのだそうである。 大磯の浜を過ぎると、しだいに花崗岩の断崖が、眼前にせりあがってくる。断崖は

ないわけです。せめて大磯小磯という浜辺があったもんじゃけん、この島に人が住みつい たんでしょうな」 「どこまでいてもこういう崖がつづいとおります。ですけん、この島には北側しか入口が

「ちかごろそういうことがありましたか」 「その役目を務めるのがそこにいる吉太郎ですんじゃ」 と、聞くにいたって金田一耕助は、そそけ立つようなものを覚えずにはいられなかった。

あんまり気味のよい話ではない。いわんや、

もんの、もしこの島で死んどったら、さしずめこの吉太郎に火葬に付されとったところで しょうな。あの男、うちの宿帳にゃ偽名をつこうとったようですけん」 いでんさる青木春雄ちゅう人物ですな。あの男なんかも海へ落ちて死んだからよいような 「うんにゃ、近年はたえてそういうことはないけえど……そうそう、磯川はんが調べてお

くりさせながら、金田一耕助の目のなかを覗き込んでいる。 いるのかいないのか、大膳はあいかわらず役者のように大きな目を、いたずらっぽくくり その青木春雄という人物が、越智竜平に派遣された密使であったということを、しって

い鳥の群れ騒ぐ、鋸山ははるか後方へおいていかれた。 そういう会話のうちにもオチョロ舟は、黙々として漕ぎ進んでいって、あのおびただし

「吉太郎」

大膳は思い出したように声をかけると、

「へえ、日のあるうちに帰れたらいてみます」 「おまえあとで隠亡谷へいてみい。またあの野良犬がなにかくわえ出したのかもしれん」

吉太郎は言葉少なにこたえた。

「吉太郎」

がこの舟へ乗ってから、この男が口をきいたのはこのときがはじめてであった。 「へえ」 「隠亡谷でなにかあったのじゃないけ」 艫のほうで櫓をあやつっていた吉太郎が、無愛想な声で返事をした。大膳と金田一耕助

吉太郎がこたえなかったので、金田一耕助がかわって尋ねた。

「隠亡谷というのがあるんですか」

あんまり気味のよい名前ではない。

ギザしとおりましょうが。その下の谷を隠亡谷ちいますんじゃ」 「ああ、いまうえに見えとる崖を鋸山ちゅうてな。ほら、崖のうえが鋸の目のようにギザ

「この島に焼き場があるんですか」

……衣類持ちもんは遺族に渡さにゃなりませんけんな……そのうえに莚をかぶせ、うえか ら油をぶっかけて焼くんですな。昔からそういう習慣になっとおります」 ですな。べつに焼き場があるわけじゃない。隠亡谷の岩の裂け目へ裸にした仏を寝かせ 島で死ぬようなことがござりましょう。そげえな場合、遺族のもんが亡骸を引き取りにく 島のもんが亡うなると、みんなあそこへ土葬にします。そうじゃけえど、他国もんがこの るのを待っとりますと、死体の腐るおそれがある。そげえなとき警察の許可をえて焼くん 「いや、この島のもんはみんな土葬です。ほら、地蔵平のわきに墓地がありましたろう。

そのへん、海面がゆるく輪をえがいているようだ。 が、崖が一部前方へせり出していて、その下がトンネルのように透けている。 い注連縄が張りめぐらしてあり、崖の麓は、これまたうえから見たときはわからなかった。 気のせいか

「あれを眼鏡岩いうとりますけえど、 金田一さん、菅笠をおかぶりんさい」

大膳はそういいながらみずからも、 そばにおいた菅笠を頭にかぶった。

「どうしてですか、旦那」

のために蓑と笠を用意してきたんじゃぞな。吉太郎、あんじょう頼むぞ」 「あの眼鏡岩のなかへはいってみるんじゃ。うえからポタポタ滴が垂れてくるけんな。そ

オチョロ舟が眼鏡岩へちかづいていくにつれて、海面の渦は遠くから望見したところよ

漕ぎ手の腕がよほどしっかりしていなければ、

舟はくるくる旋回した

オチョロ舟をすっぽり呑み込んで、なおあまりある余裕をもっている。 か 眼 もしれないと思われた。その点、吉太郎の腕はたしかである。 |鏡岩の構成しているトンネルは、これまた遠くから望見したところよりはるかに広く、

にしろなににしろ、用を達せられるように建造されているのだから、舟の幅員はそうとう 元来、オチョロ舟という舟は、胴の間にしつらえられた閨房で、男が遊女を抱いて安直

ある余裕をもっているそのトンネルは、ちょっとした渦巻く水の広場という感じであった。 い。約二メートルはあるだろうか。そのオチョロ舟をすっぽり呑み込んで、なおあまり

島(上)

りは

るか

に大きく、

野犬になってしもうた。それが土佐犬の獰猛なやつですけん、村のもんも恐れとおりますうたんですな。置きざりにされた犬はだれにも相手にされんもんですけん、山へはいって いやつでな」 んじゃ。吉太郎に撃ち殺してしまえちゅうとるんですけえど、相手もなかなかすばしっこ 「うん、まえに犬を飼うとった男が、犬をおいてけぼりにしたまんま、一家離島 野良犬がいるんですか、この島に……?」 してしも

「吉太郎さんは銃を持っているんですか」 「ああ、鑑札も持っとおります。猟期になるとあちこちへ銃をもっていきますんじゃ」 これらの話を総合すると、吉太郎という男はこの島の便利屋みたいな存在らしい。

隠亡谷を覗いてみい かもしれんな。そうなればしめたもんじゃけえど、いずれにしても吉太郎、あしたにでも 「そういえばあの野良犬、ここしばらく里へ姿を見せんようじゃが、あいつが死んどるの

「旦那、あしたでもようござりますか」

「うん、今夜は祭りで忙しいじゃろうけんな」 そのころ、崖下を漕いでいく舟はゆるいカーブをえがいて、島の南側へ出たらしい。

畳敷きからみえている島が、二キロほどむこうに浮かんでいる。 「金田一さん、あれが千畳敷きじゃ、その下が落人の淵じゃな」

崖のうえからは見えなかったけれど、千畳敷きのうえから数メートル下のところに、人

吉太郎は心細いことをいう。 旦那、わしらも去年来たきり、ここへはいったことはございませんけん」

いけえど」

なあに、 大丈夫じゃよ、おまえのことじゃけん。金田一さん、あんた泳ぎのほうはどう

「まんざら金槌じゃありませんが、といって、あんまり自信のあるほうじゃありません」 東北のしかも内陸部にうまれた金田一耕助は、 あんまりどころか、泳ぎについてはから

きし自信がなかった。

をとってもわしは大丈夫じゃけんな。それじゃ、吉太郎」 「まあ、まあ、吉太郎を信用しておいでんさい。あんたを溺れさすようなことはせん。年 オチョロ舟の舳先に立って、灯のついたカンテラを高くかかげた大膳が合図をすると、

あちこちと洞窟 と、答えて吉太郎が舟を鬼の岩屋へ漕ぎ入れた。金田一耕助も懐中電灯を照射しながら、 のなかを観察してい

る。岩肌は縦にいくつかの亀裂がはいっていて、あるところでは数匹の大蛇がもつれ 龕のように見えるその裂け目に満々と海水をたたえ、それが絶えず渦のように流動してい からみあいながら昇天しているようにみえる。ところどころに大きな岩肌の裂け目があり、 その水路の幅員は六メートルくらいもあったろうか。両側はもちろん突兀たる岩肌

きく刳られて洞窟となってつづいているのである。 うえを仰ぐと数メートルのところに峨々たる岩の天井があり、木の根のようなものが、 口をぶらさげたように下がっている。しかも、このトンネルは島の内部にむかっても、

その水の洞窟は外光のさす限り水をたたえて奥へつづき、その先は漆黒の闇につつまれ 金田一耕助はまっ暗なその水の洞窟の奥を覗いて、思わずギョッと呼吸をとめた。

ているが、どこまでつづいているのか見当もつかない。

り人の近づかんところじゃけえど、入ってみますか」 「水蓮洞という風流な名がついとるが、土地のもんは鬼の岩屋と呼んどおります。 あんま

「時間はありますか」

いっぷう変わった風景がお好きなようじゃけん」 「時間はまだ十分ある。吉太郎、それじゃなかへ漕ぎ入れてみい。 金田一さんはこういう

「旦那、これを……」

「ああ、そうか。わしもこういうもんを用意してきたけえど、これは金田一さんにお渡し 吉太郎が胴の間の屋根越しに、大膳に渡したのは占風なカンテラである。

大膳が甚平の下の腹巻きから、取り出したのは棒状の懐中電灯である。ボタンを押して それを金田一耕助に手渡して、

「吉太郎、気いつけてくれよ。海中の岩に舟底をひっかけるとわやじゃけんな。まあ、 お

267

しがなぜよりによってきょうという日に、こげえなところへやってきたかおわかりになり いや、もうすぐですんじゃ。まもなく目的地が現われてまいりましょう。そうすればわ

旦那、

この洞窟はどこまでつづいているんですか」

十枚敷けるくらいもあるだろうか。洞窟はそこで行きどまりになっているらしく、天井も の台地が現われた。金田一耕助が懐中電灯の光りで撫でまわしてみると、台地の面積 大膳の言葉もおわらぬうちに行く手に当たって、水面から約三○センチほどあがった岩 は畳

/ 皆ちばこれ | 人間のといって、台地のうえを歩けるくらいになっている。

えて刑部岩に下り立った。 刑部岩というのがあの台地の名前ですけえどな、吉太郎、気いつけて舟をつけとくれ」 吉太郎が注意ぶかくオチョロ舟を、岩の台地に横着けにすると、まず大膳が舟べりを越

「金田一さん、気いつけてつかあさいよ。この岩滑りますけんな」

舟から岩の台地に下り立つと、なるほど海苔がいちめんに付着したそこは、下駄の下でヌ ラヌラして、いまにもすべりそうであった。それに下駄の下でなにやらグシャッとつぶれ 足下を懐中電灯の光りで照射しながら、金田一耕助がよれよれの袴の裾をたくしあげ、

「ヒエツ!」

と、叫んで飛びのく金田一耕助を、大膳がそばから手をのばして支えると、

きりにポタポタ滴が落ちてくるのだから、大膳が管笠と蓑の用意をしたのは、 した岩肌を見せた天井があり、それがはるか奥までつづいているらしい。その天井からし っともな配慮というべきだろう。 懐中電灯の光りを上にむけると、水面から五、六メートルのところに、 が無気味である。 黒いギザギザと

「旦那、これは明治何年かの……」

と、金田 一耕助 はわざと二十六年という年号を避けて、

「猛台風のときできた異変ですか」

うていたといいますけんな」 が、千畳敷きから表の淵へ身を投げたとき、大将刑部幸盛の死骸は、この洞窟のなかに漂 ると、文治元年七月七日、わたしどものご先祖の平刑部幸盛と六人の郎党しめて七人の侍 「うんにゃ、それはそうじゃごわせん。これは昔からあったものらしく、いいつたえによ

皮膚の痛みを覚えずにはいられなかった。 えに落ちてくる水滴 だ重っ苦しい漆黒の闇である。その闇を引き裂くのは大膳のかかげたカンテラの灯と、金 一耕助のふりかざす懐中電灯の光りだけ。いまや外界とまったく遮断された洞窟のな 関として声なく、 チョロ舟が漕ぎすすんでいくにしたがって、外光はもうとどかなくなり、 の音だけ。金田一耕助はそのあまりの静かさに、身内がすくむような、 聞こえるものといっては吉太郎の漕ぐ櫓臍のきしりと、 あたりはた 蓑や笠のう

「旦那、はようお参りしておしまいんさい。こらマゴマゴしてると蟹に食い殺されて、骨

までしゃぶられてしまいますぞな 甚平の下にモンペのようなものを穿いただけの大膳も、しきりに地団太を踏んでいる。

パニック映画を。 映画を思い出していた。蟻の大軍が通りすぎたあと、人も獣も骨だけになっていたという 吉太郎の声は恐怖にうわずっている。金田一耕助は慄然として、いつか見た蟻の襲撃の

しかし、大膳は案外落ち着いていた。

塔もずいぶん古いものらしく、 に刳りぬ かになにか安置してある。この龕は天然にできた岩の裂け目ではなく、あきらかに人工的 「なにをやくたいもないことを。じゃけえど急ごう、金田一さんのためにもな」 ゾロゾロ這っている。 刑部岩はこの洞窟の袋の底のような位置にあり、そのいちばん奥まったところの龕のな いたもので、なかに安置してあるのは五輪の塔のようなものである。龕も五輪の いちめんに海苔が付着して黒ずんでいる。そのへんにも蟹

たからかに柏手を打った。 大膳はカンテラをそこへおくと、菅笠を取り蓑をぬぎ、用意してきた米と水を供えると、 霊

(L)

269 「金田一さん、おわかりかな、これがほんとの刑部神社じゃ。鎌倉方の詮議がきびしいも

「蟹じゃよ、金田一さん、なにもびっくりするようなことはありゃせん」 しかし、金田一耕助は驚いた。

動物がうごめいている。それは小さな蟹であった。蟹はビッシリ台地を埋めて、 じ方向に進行しているので、刑部岩全体がうごめき動いているようにもみえる。 こういう漆黒の闇の世界でも、生き物が存在するとみえて、台地のうえをいちめんに小 みなおな

一耕助はそのとたん、青木修三の断末魔の言葉を思い出していた。

……あいつは歩くとき蟹のように横に這う

……あいつは平家蟹だ……平家蟹の子孫だ

「金田一さん、どうかしたかな、お顔の色が悪いが……」

「だって、あんまり気味が悪いんですもの……あっ、蟹が足へ這い上がってきた!」

が多いようじゃ」 おまえここへきてその長靴で、蟹を踏みつぶしておくれ。ことしはとりわけ蟹

耕助は横目で視ながら、 吉太郎が言下に岩の台地へあがってきて、大膳にいわれたとおりしているのを、 金田一

「旦那、ここにはいつもこんなに蟹がいるんですか」

くらはぎがチクチク痛い。 と、いいながら袴の下から這いあがってくる蟹をほうり落としている。蟹に刺されたふ

そして、このおびただしい蟹の大群が強い印象となって残っており、 ものであったかもしれぬ。 気がしてきた。もしそうだとすると大膳のきょうの行動は、毛を吹いて傷を求めるような や、 ひょっとすると青木修二も、この鬼の岩屋へはいったことがあるのではない それがシャム双生児

を見た瞬間、蟹の連想となって発展していったのではないか。 それからまもなく三人は、蟹の大群からまぬがれて、ほうほうの態で鬼の岩屋をあとに

した。

第十三章 宵宮の惨劇

ってきたとき、 金田一耕助が吉太郎の漕ぐオチョロ舟に送られて、大膳とともに錨屋の裏木戸からかえ 表には松本克子の運転する自動車が待っていた。

「だいぶん待ったの?」

「はあ、半時間ばかり……」

あったそうじゃけえど、長い歳月のうちに鎧がくさってしもうたもんじゃけん、この五輪 な。そこでこうして地下の洞窟にお祀りしたんじゃそうな。はじめは刑部様の鎧が祀って はすまんけんな」 んかもよう知っとおります。さ、金田一さん、急いで帰ろう。竜平どんのお迎えに遅れて ここへお参りにくるのがならわしになっとりますんじゃ。このことはそこにいる吉太郎な えど、あしたは地上でお祭りがあるもんじゃけん、 の塔にかえたんじゃと、古い記録にのこっとります。その刑部様のご命日はあしたじゃけ んじゃけん、はじめのうちはおおっぴらに刑部様を、お祀りすることができなんだんじゃ わしゃ毎年こうしてきょうという日に、

ないか、この鬼の岩屋以外には……。 しいところはどこにもないということを、それとなくじぶんに示しておきたかったのでは 大膳のいうことはおそらくほんとうだろうと金田一耕助は考える。 かし、それならばなぜわざわざ、じぶんをここへ連れてきたのか。この島には秘密ら

ころで骨と骨とがくっついたふたご、すなわちシャム双生児などもそこにいるのではない の賽銭箱なども、その洞窟のどこかにあるのではないか。そして、青木修三のい のではないか。明治二十六年の猛台風のとき、崖崩れのために埋没したらしい、刑部 いうことはここ以外にもどこか秘密めいた場所、たとえば洞窟のようなものがあ ・う腰 神社

金田一耕助はこのあいだから漠然として抱いていた疑惑に、いまや確信が持てるような

「そうですか、それではそうお願いしましょうか。いつもお世話になってばかりいて

恐縮

神社のほうへおいでんさるじゃろ」 「それはすまんことをしたな。金田一さん、あんた急いでおいでんさい。あんたも今夜、

「さあ、それは越智氏しだいですが……」

「竜平どんは神社のほうへくることになっとる。あんたもきっと一緒じゃろ。またそのと

「はあ、長いことお世話になりました。いずれまたご挨拶に参上します」

「なんの、なんの、いっこう行きとどかいで」

らく山を登っていったのだろう。 が、そこはシーンと静まりかえって、人の気配はさらになかった。神楽太夫の一行はおそ 大膳をあとに残して二階へあがるとき、ちらっと階下の十畳と八畳のほうへ目をやった

お島さんがあとを追ってきた。 潮に濡れた白がすりを脱ぎ、少し小ましな帷子に着更え、一帳羅の袴をはいていると、

「磯川警部さんからのおことづけですけえど」

「はあ、それをこちらから訊きたいと思うていたところですが、あの人どうしました」

越智さんのご招待じゃけえど、それじゃあんまり恐縮じゃけん、じぶんはやっぱりこの家 へ泊まりたい……そういうておいでんさりました」 「早目に夕飯をすませてお出掛けになりましたけえど、おことづけ申しますのは、折角の

「ああ、そう、それもいいでしょう。昼間あの人どうしてました」

過ぎだろうか。 取りまく氏子たちの、手に手にかざす松明のかがやきが、空をもこがす勢いといえばいい そこにはお神輿をかついだ若者たちが、ものに狂ったように暴れまわっていて、それを

見つけたらしく その群集にさえぎられて、自動車が一時停車をしていると、だれかが金田一耕助の姿を

「そうら、金田 一先生のお出ましだ。みんな道をあけろ、 あけろ」

怒鳴っているのは松蔵らしい。

生バンザイの声が起こったので、金田一耕助は思わず面映さと尻こそばゆさを覚えずには いられなかった。 金田一耕助が自動車の窓を開いて手を振ると、だれが音頭をとったのか、突然金田一先

が、ちゃぶ台をまえにして待っていた。金田一耕助が越智多年子の案内ではいっていくと自動車は逃げるように門のなかへはいっていったが、邸内の広い日本座敷では越智竜平 からかわんでくださいよ。これすべてあなたの人気の余慶じゃありませんか。それはそやあ、いらっしゃい。それにしても金田一先生はたいへんな人気でいらっしゃる」 松本さん、はやくやってください。ぼくはバンザイなんてがらじゃない」

霊島(上)

動車の運転台では松本克子がハンドルを握って待っていた。 ぐ下りてきて、ドアを開いた。 **いの二重廻しを羽織った金田一耕助が、ボストンバッグをぶらさげて表へ出ると、** 金田一耕助の姿を見ると、 自

「お待たせして申し訳ありません。ちょっと出掛けていたもんですから」

いえ、さっき社長にも電話で申し上げておきましたから、 わかっていると思います」

は不可能だろう。 しだいに輝きをましてくるころだった。これでは鳥も塒にかえって、吉太郎の隠亡谷探検自動車が走り出したとき、日はもうすでに暮れていて、家々の軒に吊るしたといれが 「それはどうも」

「松本さんはあちら生まれですか」

こがむこうにいるもんですから」 「いいえ、そうではございません。 戦後学校を出てむこうへ渡ったのでございます。

「お生まれはどちらです」

「横浜のほうでございます」

それに第一美人であった。

道理できれいな標準語の発音をする。知性もあり、教養にもとんでいそうな婦人である。

笛や太鼓の音がきこえ、ゾロゾロと地蔵坂を登っていく人の群れが引きも切らない。みん 新在家から地蔵平までといっても、自動車でいけばすぐである。あちこちで祭り囃子の

熱気のようなものが凝縮していた。 「お父さんと呼んだんですか、あの男が、あなたのことを……?」 金田一耕助は おもわず相手の顔を視直したが、越智竜平の瞳にはなにかギラギラする、

「はあ……」

「それについてあなたなにか思い当たる節でも……?」

料理である。お銚子が二本ついていた。 きた。ご馳走を運んできたのである。ちゃぶ台にまくばられたのはすべて手の込んだ日本 竜平がなにかいいかけたとき、多年子がふたりの若いお手伝いさんを引率してはいって

「金田一先生、あなたご酒は……?」

「下戸ではありませんが、あまり沢山は……」

「ああ、そう。それに今夜のうちに一度は刑部神社へ顔を出しておかんといかんけん」 金田一耕助はきょう昼間、大膳にいったとおなじようなことを答えた。

と、竜平はついお国言葉を出して、

悪

(上)

ことがございますけんな。ご飯のときは手を鳴らします」 「叔母さん、ここはいいからこのまま退がってください。金田一先生に密々お話ししたい 多年子と若いお手伝いさんが退がっていくと、竜平は金田一耕助に酌をしながら、

うと遅くなって申し訳ございません」 「いやあ、万事は松本君の電話で承知しております。さ、さ、どうぞこちらへ」

金田一耕助は床の間を背負った上座へすえられて、落ち着かない。

金田田 一先生は錨屋の小父さんと、水蓮洞へいかれたそうですね

錨屋の旦那が島をご案内しようとおっしゃるもんですから」 「いや、むこうへいくまでは、あそこにああいう洞窟があることすらしらなかったんです。

「なにかご収穫がおありでしたか」

あの事件の捜査、その後いっこう進展していないんですが……」 「いやあ、べつに。あなたからお引き受けした事件に関する限りはね。面目ない話ですが、

「ああ、そう」

竜平はかるく受けたが、つぎの瞬間、キラリと鋭く光る目を相手にむけて、

「金田一先生はいまこの島に滞在している、三津木五郎という青年をご存じですか。胸に

カメラをぶら下げている男ですが……」

ていましたね。なにをいったんですか」 「はあ、存じております。そうそう、そういえばあの男、きのうあなたになにか話しかけ

「お父さん……と」

「お父さん……?」

金田一耕助はギクッとした。

協力を仰ぐつもりです。そのときはなにとぞよろしく」 刑部神社で重大発表があります。それがすんでから、なにもかもあなたに打ち明けて、ご

うなさいます」 「や、もうこんな時間か。わたしはこれから刑部神社へいってみますが、金田一先生はど 竜平の言葉の終わりのほうはシドロモドロで、そこまでいってしまうと腕時計を見て、

「出来たらぼくはご免こうむりたいですね。昼間の冒険でいささかバテ気味ですから」 竜平はちょっと考えて、

はなにぶんよろしくお願いします」 ならひと足さきにお休みになってもけっこうです。万事はあしたがすんでから。そのとき 「じゃ、先生はここにいらっしゃい。離れのほうに寝室が用意してございますから、なん

竜平はそこで激しく手を鳴らすと、顔を出した多年子にご飯を頼み、紋付袴の用意を命

「いや、先生はここに残っていただく。食事が終わったら寝室の方へ案内してあげてくだ

「それならちゃんと用意ができてますよ。金田一先生は……?」

278 木五郎というあの青年は……」 「こちらの思い当たる節というのを申し上げるまえに、あれはどういう男なんです。三津

あなた下津井に住んでいた浅井はるという市子……巫女ですね、そういう女性についてな「いや、あの若者に目をつけているのは、わたしより磯川警部さんなんです。そうそう、 にかお聞きになったことはございませんか」

「さあて、いっこう記憶にない名前ですが、その女がどうかしたんですか」

そこで金田一耕助が浅井はる殺害の顚末を、詳しく語ってきかせると、竜平のおもてに

はありありと憂色が濃くなった。

「すると、 いえ、そうはいうておりません。その反対にあの男はおそらく犯人ではあるま 磯川さんはあの男が犯人じゃと……?」

その間の事情をしっているんじゃないかというお疑いなんです。それにそのときの お心当たりの節というのは……?」 が、果たしてあの青年だったかどうかも、まだ断定されておりません。ときにあなたの

、さあ、それが……

落ちたように思われた。竜平はなにか思い煩うふぜいで箸を動かし、盃を口にはこんでい たが、急に箸をおき、盃を伏せると、ちゃぶ台のむこうで居ずまいを直して、 せた事実が、竜平の気持ちのうえにズシーンと重くのしかかってきたらしく、急に食欲が 竜平はあきらかに心が騒ぐふぜいで箸が重くなっていた。いま金田一耕助の語ってきか

狽ぶりはたしかに異常であった。金田一耕助はいまだかつてああいう竜平を見たことがなど。 あった。じぶんの打つ手のさきざきが読めているという自信からきているのだろう。 い。かれはつねに沈着冷静で自信に充ち満ちていた。それは過酷なまでの冷静さと自信で かも、 、その若者が殺人事件の重要参考人になっているとしったときの、竜平のあの狼

もうかがわれる。

その満腔の自信を突き崩したのが五郎の出現であり、かれが叫びかけたたったひとこと、 、いう言葉であったのだろう。それはおそらく慎重極まるかれの読みからは、完全に

外れた運命の奇手だったからだろう。 それに しても、 竜平にあの年頃の子どもがあるという可能性があるだろうか。

うだが、巴がその際妊娠したとしたら……? たことがあると。そのときは大膳の追手のものに連れ戻され、悲恋に終わってしまったそ たではないか。昭和十九年の夏竜平と巴は駆け落ちして、丹波の奥の温泉宿にひそんでい それは大いにありうるのである。こちらへ来る連絡船ちどり丸のなかで松蔵が

「ぼくは日本が戦争に敗れた年にうまれてるんです。戦争に負ける少しまえにね っぽう三津木五郎はこの間、問わず語りにこのようなことを語っていたではないか。

月 か六月のことだろう。 本が戦争に負けたのは昭和二十年八月十五日のことだから、その少しまえといえば七

であった。自動車が門から走り出すのを見送って、 食後黒紋付きの羽織袴に威儀を正した竜平を、玄関まで送り出したのはちょうど八時半

しどうぞこちらへ

並んだ銀盆と、電気スタンドがおいてあり、ほかに最近の週刊誌が二、三冊。 勢な座敷である。八畳にはもう寝床がのべてあり、枕下には水瓶、灰皿、ライターなどがと、多年子に案内されたのは、木の香も新しい離れの八畳。六畳のつぎの間がついた豪 「では、ごゆっくりと。ご用があったらそこの呼鈴を押してつかあさいよ」

「はあ、ありがとうございます」

金田一耕助にも強く印象に残ったのだが、そのとき五郎の叫んだ言葉が ご領主様に対して直訴するような行動だった。竜平がひどく驚いたような顔色だったので かってなにか叫びかけたところは、金田一耕助も目撃している。それは百姓一揆の農民が した。机にむかって簡単にその日の日記をつけおわると、無言のまま類杖をついた。 なんとも解せないのは、三津木五郎という若者の言動である。あの男がきのう竜平にむ 多年子が引きさがると金田一耕助は、携えてきたボストンバッグを開いて日記を取り出

「お父さん」

で、あったとは。

平のこの家に帰還後、ただちに人をやって三津木五郎のことを、調査させたらしいことで しかも、この言葉について竜平になにか思い当たる節があったろうことは、かれが地蔵

四十二ではじめての子とは遅すぎる。結婚後十年、あるいはそれ以上たってい それは非常に珍しいケースであろう。 広い世間には結婚後十年以上もたって、 子宝にめぐまれるという例 もな るのでは

ば、そこに有無相通ずるものがあったのではないか。 があるとする。いっぽう近くうまれてくる子どもを、 ここに結婚後十年以上もたって子宝にめぐまれず、 もてあましている一家があるとすれ 切実に子どもを欲しがっている夫婦

金田一耕助はまた思い出していた。 五郎はいったではないか。 かれが五郎に根掘り葉掘りその生い立ちを尋ねてい

そんなに珍しいことなんですかね くに根掘り葉掘り聞きましたよ。ぼくみたいな若いもんがこんな島へくるということは、 「金田一さんは錨屋の大旦那とおなじようなことをお聞きになりますね。あの大旦那もぼ

う。しかも訊かれる五郎のほうでは、ちゃんと相手の肚を読んでいたのではない うというやさきである。かれはつい根掘り葉掘り、五郎の出生や生い立ちを尋 うも合っている。大膳は大いに狼狽したにちがいない。折りあたかも越智竜平 である。そういう珍しい苗字を名乗る若者が、突然目のまえに出現した。 錨屋の大旦那は巴の腹から産まれた嬰児が、どういう苗字の ***** たのだ。三津木という苗字はそうザラにある苗字ではない。 むしろ珍しい ものに譲渡された しか わ が 年 還 か ·苗字

それにしても巴はどうなのか。五郎をわが子と気がついているのか、いないのか、

出産はちょうど昭和二十年の六月中のことになる。 年の八月のことと仮定して、そこで巴が妊娠したとすると……と、指折りかぞえてみると、 金田一耕助は竜平と巴が駆け落ちして、丹波の奥の温泉宿にひそんでいたのを昭和十九

る口実はいくらでもあったろう。 当時あい 極秘裏に運ばれたにちがいなかろう。出産はきっと島の外で行なわれたのにちがいな ろんそれは大膳 し、金田 つぐアメリカ軍の焼夷弾攻撃で、日本全国物情騒然たる時代だったから、 の目から見れば不義の子である。公然と産ませるはずがな 一耕助はこの島へきてから、巴出産のことはだれからも聞 い。ことは絶対 いてい な 島を出

ずで引きとって貰うとか。 手段があるだろうか。どこかへ里子にやるとか、子どもをほしがっている他人に、親しら かに竜平を憎んでいたにしろ、それほど非道なことはやるまい。ではそれ以外にどういう にはいかない。おそらく巴の出産には大膳がつきそっていったにちがいないが、大膳がい さて、巴が無事に分娩したとして、その子はどう始末されただろう。もちろん殺すわけ

一耕助は卒然としてまた、三津木五郎の言葉を思い出 してい

「きみはお父さんの四十二の年の子だといったね。すると兄さんや、姉さんは と、いう金田 一耕助の質問に対して、五郎はこう答えたではな

られました」 え、ぼくは一人っ子です。両親にとってとても遅い子ですから、 それだけに可愛が

なわち産婆だったのではないか。 井はるなる名前さえ、本名かどうか疑わしいともいっていた。浅井はるはかつて助産婦す る女がどこでなにをしていたのか、その前身はサッパリわかっていないという。 磯川警部の話によると、昭和三十年の十月下津井のあ の家を買いとるまで、浅井はるな 第

て、どこかにいらない子があったら世話してほしいと頼んでおいた。 ねてから子供をほしがっていた五郎の養母は、産婆としての彼女をしっていた。

をかくしたのだろう。 相談はすぐにまとまった。大膳は巴をつれて島を出ると、どこかの山奥の温泉宿へでも身 れたことだろう。 て診察を仰いだ。 っぽう、巴の妊娠に気がついた大膳は、浅井はるを捜し出し、ひそかに島へつれてき そこで浅井はるが子どもを欲しがっている女のあることを打ち明けた。 そして果たして妊娠という診断が下ったとき、さすがの大膳も途方に暮

ん坊は浅井はるに取りあげられ、別室に待っている五郎の養母に渡された。 らかじめ赤ん坊の衣類やムツキなど用意してきていたことだろう。巴の腹からうまれた赤 やがて出産の日がやってきた。浅井はるから連絡をうけてやってきた五郎 五郎の養母はすぐさまそこを立ち去った。…… の養母は、

悪

285 金田一耕助の空想なのだが、しかし、かれはこの空想に執着した。執着するだけの価値は は 推理というほどのものではない。推理としては根拠が希薄である。これは単なる

284 耕助の観察したところでは、巴のほうではそのことに、気がついていないのではないか

金田一耕助はつぎのような場合を想定してみる。

ないか。それでないと母がわが子のあとを追うては困るからだ。 に渡される。しかし、産褥にある母には、だれに譲渡されたかは内緒にしてあったのでは 巴にいいふくめ、納得させてあったことだろう。さて、産まれた嬰児はその場で三津木某 妊婦には産まれた子どもをムツキのうちから他へ渡す、そのことはあらかじめ大膳

だろうか。そこで当然考えられるのは、第三者がそこに介在したのではなかったかという 引き渡すとき、お互いに相手にしられずにすませるというようなことが、果たして出来る ことである。では、第二者とはどういう種類の人物なのか。 つうのように思われる。しかし、そういうことが可能であろうか。生母から養母に嬰児を とはしらされていても、生母の身許などは明かされていなかったのではないか。それがふ いっぽう子どもを貰いうけた三津木家のほうでは、子どもの氏素性、血統のたしかなこ

が、それにしても、このときのかれの興奮がいかに大きかったかということは、 の回転速度と、ものに憑かれたようなその目の色からでもうかがわれ やもじゃ頭を、五本の指でひっかきまわした。これが興奮したときのこの男の そこまで考えてきた金田一耕助は、突然ジャンジャン、バリバリ、雀の巣のようなもじ くせなのだ 五本の指

第三者……仲介者……産婆……と、思い当たったとき、金田一耕助の脳裡に、闇を引き

あわただしい足音がきこえ、その足音がつぎの間の六畳の外にとまると、

「金田一先生、まだお目覚めでございますか」

多年子の声はふるえている。

「おばさん、なにかありましたか」

金田一耕助が障子を開くと、多年子はべったり縁側にへたっていた。少し涙ぐんでいる

ように見える。

「はあ、あの、竜平がすぐ先生に、刑部神社のほうへきてほしいと……」

「刑部神社になにかありましたか」

「さあ、それが……みんな興奮しててんでにわめき立てるもんですけん、ようわかりませ

んけえど、神社のほうで火事があったとか……」

たそうで」 「いえ、火事はボヤですんだそうですけえど、その騒ぎのあいだにだれか人が殺されまし

「人が……? 殺されたんですって……?」 金田一耕助はじぶんでもびっくりするほど大きな声を立てていた。

「はあ、そうですけん、はよういてやってつかあさい。また竜平が罠にはめられたのやも

あると思った。 ただ、それだと浅井はるから磯川警部に宛てた手紙のなかにある、

「その秘密を種にしていままで生きてきた業の深さ」

「いまから二十二年まえ複雑な事情のもとに犯した罪の恐ろしさ」

で無事円満に解決したとすれば、浅井はるはこれほど深刻に煩悶しなくてもよさそうに思 だのという文章はいささか大袈裟に過ぎないか。巴のがわも五郎の養母のほうも、それ

されたとしたら、この秘密のうらに、さらに重大な謎がかくされているとしか思えない。 そこにこの空想のウィーク・ポイントがあり、さらにこれだけの秘密で浅井はるが殺害

その謎とはなんだろう。

そこにもうひとつ重大なデータが欠けていることを歯がゆく思いながら、かれはさらにこ の思考を発展させていくつもりであった。 しかし、金田一耕助は自分の思考が、まちがった方向をたどっているとは思えなかった。

しかし、そこに邪魔が入った。

裂したからである。複数の男の声がわめいている。なかに松蔵の声もまじっていた。 金田一耕助 の瞑想を破ったのは、そのとき突如母屋の玄関に当たって、騒々し

一金田一先生! 金田一先生!」

は七時ごろのことであっ そこで小憩があったのち、 た。 もう一度神楽殿で祝詞がある。

簡単なもので、 のことである。 一神楽殿のまえに集まった群集の頭上で、うやうやしく御幣を振ってお祓い しかし、 この祝詞は

無形文化財に指定されているのである。 く刺繍した垂れ幕が、舞台一杯にかけられている。妹尾四郎兵衛さん江、井原市有志一同 よりとあり、これは四郎兵衛がヒイキの客から贈られたもので、この地方の神楽はすべて 神楽殿の高さは二メートルくらい、拝殿よりやや高くなっているが、三方雨戸が開けは 、内部には煌々と灯がついていて明るかった。拝殿の奥には「無形文化財 」と大き

悪 島 |大国主命の国譲り」「素戔嗚尊の大蛇退治」の三篇の神話から成立している。はじめは神いないのでい備中神楽というのは出雲神楽の系統を引いているのだそうで、「天の岩戸開き」 中神楽独特の神楽太夫なるものが出現したのだそうである。 り、そのうち農民 あるいは師匠につき、農耕のかたわら芸を磨き、それを代々子孫に伝えていったもの たものだが、おいお のなか から芸達者なものが い劇的要素が強くなってきたので神職 現わ れ て、 神職にとって か は 親に か わ の手に負えなくな た。 祖父につ ここに備

りついているらしいこの老女は、なにか変事があると竜平の身を案じて、 れませんけん、先生、なんとかしてあの子を助けてやってつかあさい」 かつて石もて追われるごとくこの島を出ていった、みじめな甥の姿が、記憶の底にこび このとおりおろ

「承知しました。すぐ行きます」 金田一耕助は袴の紐をきりりと締めてたのもしかった。

おろと泣くのである。

_

いわい今夜はその心配はなさそうで、宵宮の神事は万事とどこおりなく執行されそうであそのまえの五日の夜はいっとき激しい雷雨があって、きょうの天候を気遣わせたが、さ

他村の有力者が数名ひかえていた。当然そこにいなければならぬ片帆の姿が見えなかった けれど、その段階ではまだだれも、そこにどういう重大な意味があるか気がつかなかった。 なかった。守衛の背後には巫女姿をした巴御寮人とふたごの姉の真帆、村長の辰馬、その による黄金の矢が、燦然とかがやいて異彩を放っている。 一メートルほどあがっているので、一般参拝者はその声を聞いても、姿を見ることはでき 拝殿の奥には粗い格子にへだてられた内陣があり、内陣の正面の壇上には越智竜平寄進 まず六時ごろ宮司の守衛が拝殿のなかで、長い祝詞を神に捧げた。この拝殿は境内から

二十三年の、おなじ刑部神社の奉納神楽とそっくりおなじ役割であった。 あり、大蛇は四郎兵衛自身が演ずるつもりである。それは松若の最後の舞台となった昭和 活気に溢れ、肉体的頑健さも申し分がない。だから今夜の神楽でも素戔嗚尊の役が振って 弟の勇は年々歳々父に似てきて、神楽を舞うときその動きにも、 それに体も虚弱というほどではないが、もうひとつ頑健とはいいかねる。それにひきかえ 切れ味鋭 いもの あ

恐ろしいのやおどけたのや、古怪なお面のかずかずが楽屋に散乱しており、なかでもいち にいっていたように、そこはいま神楽場のような騒ぎである。きらびやかな神楽の衣裳や、 なっているのだが、いまそこは神楽太夫の楽屋になっている。さっきも大膳が金田一耕助 ハメー る隅 ん目につくのは、つくりものの大蛇である。とぐろをまいているけれど、その長さ七、 神楽殿の奥に張ってある、無形文化財の垂れ幕の背後は、二十畳敷きくらいの会議室に トルもあろうか。そういうなかで四郎兵衛はじめ一同が興奮して、わめきちらして のほうで、誠と勇がひそひそ話をしてい . る。

年まえにはあの人もっときれ 「父ちゃんがうつつを抜かすようなおなごはこの島では、あの人しかおらんけんな。十九 いじゃったと思う」

お兄ちゃん、父ちゃんのかたきいうのんはここの御寮人さんのことけ

「そうじゃけえど、あの人神々しいばかり清らかじゃないけ」

んをたぶらかしたんはあのおなごとしても、父ちゃんを手にかけたんはほかの人間やもし 、人は見かけによらんもんいうぞな。ましてや女は化けもんじゃけんな。それに、父ちゃ

明である。 まえの昭和二十三年十月六日、後月郡の家を出たきり蒸発してしまって、いまだに生死不 に第一項健であった。四郎兵衛はこのせがれに希望を託していたのだが、いまから十九年 上も神楽を舞うている。かれの家は祖父の代から神楽太夫で、四郎兵衛も子々孫々までこ の芸を伝えたいと思っている。さいわい一人息子の松若は芸の筋もよくかつ熱心で、それ ことし七十四歳になるという妹尾四郎兵衛は、備中神楽きっての巨匠で、もう五十年以

ているのである。 とってこれ以上の痛恨事はなく、 蒸発したとき松若は三十二歳、 勇という二人の孫を遺してくれたので、いまや四郎兵衛の希望はこの二人につながれ いまだに松若のことを忘れかねている。さい いよいよこれからという年頃だっただけに、四郎兵衛に わ

残された兄弟は祖父母の手によって育てられたのだが、まもなく祖母がみまかるに及んで、 どもを置きざりにして実家へかえり、まもなくさっさと他へかたづいてしまった。あとに られてしまった。ふたりの兄弟の母なるお照は、一年待っても夫が帰ってこないので、子 思えばこの二人も不愍なもので、幼くして父に蒸発されたばかりか、その翌年母に逃げ

る。 それだけに兄弟の祖父を慕う情はあつく、四郎兵衛もまたこの二人に希望をつないでい ただ兄の誠は素直で優しい気性だが、神楽太夫としていちばん必要な覇気に乏しく、

四郎兵衛の男手ひとつによって養育された。

また、なんでおまえはいままで隠しておったんじゃ」 「まあ、まあ、 「片帆が島を出たあ……?」なぜまたよりによってこげえな大事なときに……? 「片帆ちゃんは……、その片帆ちゃんならゆうべ島を出ておいでんさりました」 それを

よう。真帆、片帆はなんで島を出たんぞな」 瞼際を朱に染めて開きなおると、巴御寮人も凜然としている。優しいばかりがこのひと紫紫紫が 、あなた、そげえな大きな声をお出しんさらいでも。わたしから聞いてみま

の本質ではなく、そうとう激しいものをうちに秘めているようだ。

しかし、真帆もほんとうのことはいえなかった。

んもしっておいでんさりましょう」 「あのひとがまえから巫女という仕事を、いやがっていたいうことは、お父さんもお母さ

とは、守衛も巴も気がついていた。 生まれたことをとても嫌がり、その傾向がちかごろますます強くなってきていたというこ い片帆のほうは、なにかにつけて反抗的だった。ことに、神主の娘という特殊な立場に それは両親もしっていた。万事に順応性にとみ、素直な気性の真帆とちがって、 個性の

「それでどこへいくいうてましたか」

す。あそこよりほかにいくとこのない人ですけん」 「いつごろここを出ていったの」 「それはなんともいうておいでんさりませんでしたけえど、たぶん玉島じゃろうと思いま

「だれじゃ、それは……?」れん」

「あのおなごの亭主じゃ、旦那じゃ。そいつがヤキモチやいてうちの父ちゃんを……」

「ほんなら、ここの神主が……?」

勇が息をのんだとき、遠くのほうから四郎兵衛が見て、

誠、おまえの出番はいちばんはじめじゃけん、さっさと支度をせんかい」 「これこれ、誠も勇もなにをゴタゴタいうとるんじゃ。まもなくお神楽がはじまるぞな。

「はい、おじいちゃん」

ところがちょうどそのころ、ここにちょっとした取り込みがあった。

な顔をしながら、 のふたごの姉妹の三人である。ところがその場になって片帆の姿が見えないことに気がつ いて、当然、両親から責められたのは真帆である。巫女姿の真帆はいまにも泣き出しそう この神楽のまえに巫女の舞いがある予定になっていた。巫女とは巴御寮人と真帆、片帆

「その片帆ちゃんなら……」

「その片帆がどうしたというんじゃ」

神主の正装をしている。そこは社務所の奥、宮司の住居の座敷である。 宵のうちから気が立っていたようだ。かれはいま神楽殿でお祓いをしてきたばかりだから、 と、天神ヒゲの守衛は、天神ヒゲをふるわせながら嚙みついた。あとから思えば守衛は

日はもうすでに暮れ かぎろいがあるということを、そこにい 「はあ、あの、すみません。 こういう取 みんなあわてているので、 り込みがあったので、巴御寮人と真帆だけの巫女の舞いが終わったころは、 てい た。 、巴御寮人や守衛を視る誠と勇 いますぐいくというてお るだれも気がつか いてつかあさい」 な の目のなかに、 か ひとかたならぬ

が、てんでにかざす松明の火が天をもこがさんばかりであった。 ョイとかえってきて、ひとしきり境内を練って歩いた。その られた篝火に点火していったからである。おまけに八時ごろお神輿 ん列んでいたし、それにさっきオチ 日が暮れても今夜に限って刑部神社の境内は、真昼のように明るかった。 3 口舟からかえってきた吉太郎 お神輿を取りかこむ氏子たち が、 がワッシ 要所 ヨイ、 夜店 要所にまくば ワッ

お神楽がはじまったのである。 このお神輿騒ぎがおさまって、無事に神輿が蔵のなかに安置されると同時に、 神楽殿で

発展、 づくのだから、 しょは に触 か 「岩戸開き」そのあとに「大国主命の 夜を徹するといっても過言ではない。現代ではテレビという便利 れるということは珍し な る僻村僻地とい えども、娯楽にことかくということは い。神楽がもてはやされ 国譲り」「素戔嗚尊の大蛇退治」とつ るゆ え h で な あ 11 る それでも

ZIE.

295 あの火事騒ぎが起こったのは、まだ舞台で「岩戸開き」が演じられている最中だった。

わたしも気を揉んでおりました」 「日が暮れてから……あのひとが出ていってからまもなく、大雷があったもんですけん、

「真帆はどうしてそれをいままで隠していたの」

「人にいうと、七生まで恨むとおいいんさるもんですけん」

いかにも片帆のいいそうなことである。

「御寮人はいままで片帆のいないことに、気がついておいでんさらなんだのかな」

守衛の口調には嘲けるようなひびきがある。

されて、どこかへ隠れとるんじゃろうとばっかり思うとりました」 がついとりましたけえど、まさか家出をしたとは……あの娘のことですけん、またふてく 「すみません、つい忙しさにとりまぎれて……それはあの娘の姿が見えんいうことには気

、取り締まり不行き届きというやつじゃな。うっふっふ。それじゃけえど、少しおかしい

「おかしいとは……?」

「ゆうべのうちに玉島へいたんなら、むこうから電話でもありそうなもの」

「そうおっしゃれば……」

を出した。 三人が不安そうに顔見合わせているところへ、神楽殿の楽屋から誠と勇がやってきて顔

「あの……巫女さんの舞いはまだですかと、おじいちゃん、いや、四郎兵衛がいうとりま

人や真帆が そのなかには五郎も定吉もおり、びっくりして社務所のなかからとび出してきた、 わ から水をかぶって走りまわっているのは吉太郎である。 って、それぞれ桶に水を汲み、そこに五列の人垣が用水桶から神楽殿の麓までつづいた。 おろおろしている。社務所の玄関にかかっていた、菅笠と蓑に身をかため、頭 巴御寮

ときである。 たが、それでもその間十五分はかかったろう。火が消えても人びとの興奮は去らない。て んでに火元へ集まって評議まちまちであったが、越智竜平がやってきたのはちょうどその さいわい発見がはやかったのと、人手にこと欠かなかったので、まもくな完全に鎮火し

けっ放した社務所のなかへはいっていった。 びたしになった境内を見まわしていたが、すぐに様子がわかったのだろう。そそくさと開 の崇拝者たちのうちだれひとり竜平の入来には気がつかなかった。竜平は眉をひそめて水 自動車は刑部神社の石段を上がることは出来ない。徒歩で境内へ踏み込んだので、かれ

をして、この男としては珍しく目が血走って錐のように尖っている。 かれは社務所のなかにものの三分もいたであろうか。こんど出て来たときの顔は土気色

一越智さん、どうかしましたか」

出会い頭に顔を合わせたのは磯川警部である。

あっ、磯川さん、巴御寮人は……?」

その声はノドに詰めものでもされたように嗄れていた。

る。その 神楽殿の舞台の下には三方に、 ひしめき合っていたのだから、 瞬境内は騒然となった。 垂れ幕が奥のほうから燃えはじめて、メラ 火事は人間を興奮させる。ましてや近来まれな群集が 「幅八○センチほどの垂れ幕がずらりと張りめぐらされてい メラと焰と煙をあげはじめたのだから、 境内に

「火事だ! 火事だ!」

と、大騒ぎ。

古怪な面をかぶった手力男命も天鈿女命も、毒気を抜かれてただ右往左往するばかり。ワーと騒いでいるうちに、火は垂れ幕をなめつくして神楽殿の柱に燃え移った。舞台では 面をとると手力男命は弥之助、天鈿女命は誠であった。 それでいて咄嗟の間、どう手を尽してよいのかわからないのが人の常である。ただワー か 背後 いをえて手力男命も天鈿女命も衣裳をぬいで、 れはまだ紋付きの羽織袴であったが、その羽織をとって燻る柱を叩きはじめ の無形文化財の垂れ幕から走り出たのは、勇である。勇の出番はまだあ いっしょに柱を叩きはじめた。

の桶が五つ伏せてある。そのひとつに水を一杯汲みこむと、 かえると社務所の入口にある、大きな用水桶に駆けつけた。用水桶の蓋のうえには手ごろ 神楽殿の下で働 いたのは松蔵であった。いっとき茫然としていた松蔵だが、すぐわれに

そうら、みんなバケツのリレーじゃ」

戦争を経験したものなら、みんなバケツ・リレーをしっている。ほかに四人のものが加

黄金の矢は守衛の薄い胸板を差しつらぬいて、矢尻が前部から突出している。 御神体の神の矢で背部から胸部へと、

の場合にそなえてだろう、合いのインバネスをはおっており、片手に金剛杖のような長い から登ってきた刑部大膳に出会った。大膳は夏物の黒紋付きの羽織袴のうえに、万一の雨 迎えの自動車に乗った金田一耕助は、地蔵平から地蔵坂へ出る曲がり角のところで、下

299 長い坂を歩かなければならないのである。しかし、そういう環境になれているせい

「御寮人なら神楽殿のほうにいますよ。いまちょっとした火事騒ぎがあったもんですけ

ああ、そう、それじゃ磯川さん、あなたいっしょに来てください」

心が騒いだ。 に廊下が横に走っている。それを右へいくと神楽殿の奥の会議室になり、 竜平の言葉なり物腰なりが、ただごととは思えなかったので、磯川警部もギクッとして 無言のまま竜平のあとにつづいて社務所のなかへはいってい 左へいくと拝殿 くと、玄関

竜平は左へ走った。

である。

きかねるというほどではない。いや、そこになにがあるか十分識別はつくのである。 拝殿のなかは火が消えていたけれど、格子越しに外光が差し込むので、物の見分けがつ

「磯川さん、あれを……」

うえからとびあ 、咄嗟にはそれがなにを意味するのかよくわからなかった。呼吸をつめ、瞳をこら の声は ものを凝視しているうちに、やっとその正体を見定めて、磯川警部は思わず床の あいかわらず嗄れてふるえている。磯川警部は竜平に示されたほうへ目をや が

つかうのは止そう。神主の正装をしているから守衛にきまっている。守衛はむこうむきに っておいた。その格子にだれかがもたれ 拝殿の奥に内陣があり、そのあいだを粗い格子がへだてているということはまえにもい かかっている。いや、だれかなどと曖昧な言葉を

坂を登ってくると、神社のあたりの空が炎えていたようですけえど」 じたらしい。大膳を吸い込むと松本克子はすぐアクセルを踏んだ。 「金田一さん、なにがあったんですか。火事でもあったんじゃありませんか。さっき地蔵

いっこう要領をえませんでした。松本さん、あなたさっき越智さんを送って神社までいか 「いや、わたしにもさっぱりわけがわからないんです。あの人たち口々にわめくばかりで

んじゃない んですか」

れたんでしょう。火事があったんですか」

はあ、火事はボヤですんだようです。社長がお宮へいかれたときは、もう鎮火していた

うちに、五分くらいもかかったでしょうか。やっと方向がきまってスタートしようとして ら。ところがあそこUターンをするのがむつかしくって、いろいろクルマを動かしている たんです。後ほど電話をするから、そのとき迎えにくるようにとおっしゃったもんですか 「はあ、わたし社長をお宮の石段の下までお送りすると、すぐ引っ返してくるつもりだっ

301 を駆け降りてこられて、人殺しがあった、すぐ金田一先生をお連れするようにって。わた しがびっくりしているところへ、警部さんの背後からいまあとから追っかけてくる人びと いるところへ、磯川さんというかた……あのかた警部さんなんですね……そのかたが石段

った。

手は松本克子である。 けていた。いや、かれがストップをかけるまえに、運転手がブレーキをかけていた。運転 自動車のヘッド・ライトのなかに老人の姿が浮かんだとき、金田一耕助はストップをか

か、大膳はべつに苦にもならないらしいが、さすがに八十歳の老人の足許は危なっかしか

「錨屋の旦那、ここへお乗りになりませんか。金田一耕助は自動車の窓から顔を出して、

これ から坂はたいへんです」

金田一さん、あんたこれからお出掛 かな。竜平どんは……?」

膳は驚いたように金田一耕助の顔を視直した。 ついてくる数名の男たちの姿を見ると、大

いいかけて、自動車のあとからゾロゾロ

世の移り変わりのようなものが感じられ、孤独の想いをかみしめながら、いまもひとりト は、妙によそよそしく、錯屋に挨拶にくるものはひとりもいなかった。大膳はなんとなく かりであった。かつては大膳の威光のまえに慴伏していた連中だが、こんど帰島 を見ると、 トボ地蔵坂を登ってきたところだが、松蔵たちの目に炎えている激しい怒りと憎しみの それらは松蔵を筆頭としてみな越智家の一門で、こんどの祭りのために帰島したものば 思わずたじろぎのようなものを感じずにはいられなかった。

金田一さん、 なに か……?

まあ、 いいからお乗りなさい。 旦那はいま坂を登っていらしたばかりなんですね」

松本克子ももちろんこの島の複雑な人間関係を知っている。消え入りそうな声音のなか それ を撥ねかえそうとするような強い願望のひびきがあった。

ふしぎそうにそばへやってきた。そしてふたりがなにをそのように押し黙って、視詰めて しかし、みだりに声を立てさせぬきびしいなにかが、ふたりの体をくるんでいた。村長は ら差し込むほの明かりのなかに、ふたりの姿を見つけると、なにか声をかけようとした。 ろへ、ひと足お 越智竜平と磯川警部が、黄金の矢で刺し貫かれた守衛の奇妙な死体を凝視しているとこ ありようはこうである。 くれてその場へやってきたのが、村長の刑部辰馬であった。村長は外部か

そこはそれ をしてい 白衣の衣裳から内陣 いるのかとそのほうへ目をやった。磯川警部にもそれをとめる権利は はじめ村長もふたりの凝視している対象物が、なんであるか理解できな か、その意 るの ほど明るくはなかったのである。 か、はたまた竜平や警部がなぜそのように押し黙って、守衛の姿を凝視 味がよくわか のなかにいるものが守衛だとわかっても、守衛がそんなところでなに らなかったのではないか。外光が差し込んでいるとはいえ、 0

島

れは跳びあがらなかった。ひと呼吸……ふた呼吸……気息をととのえると、かれはくるり み込めてきたのだろう。かれはその場で跳び上がるほど驚いたにちがいない。しかし、 目 こがなれてくるにつけ、村長にもやっとそこにいる守衛が、どういう状態であるかが合

もしそんなことがあったら、どうぞ社長の力になってあげてください。社長を助けてあげ 錨屋の旦那や村長の一味が、本家を陥れるためにやったことなのだ……と。金田一先生、が、ひしめくように降りてこられて、口々にわめいていらっしゃいました。罠だ、罠だ、

は、女性なのだということを露骨に示していた。 事件という不測の事態に直面しては、日頃のたしなみも忘れて、秘書といえども本質的に こそ越智竜平のおめがねにかなって、秘書という要職を与えられたのだろうけれど、殺人 に恵まれていなければならぬ。おそらくふだんの松本克子はその適格者で、それであれば 秘書というものはつねに冷静でなければいけない。そして要領よく物事を処理する才能

れたんはいったいだれじゃ。だれがだれに殺されたというんじゃ」 わしと辰馬が竜平どんを陥れる……? なんのことかようわからんけえど、それで殺さ

「なに? 神主の守衛がだれかを殺したというのけ」「神上さまが……」

一いいえ、殺されたのが神主さまで……」

「なんですって、神主さんが殺害されたんですって。で、殺害したのは……?」

金田一耕助が尋ね

だれがそんなことをいうんです」 「それを社長だとおっしゃるんだそうです」

たかと思うと、まもなく表のほうで大声でわめく声がきこえた。 だが、そのまえに村長の辰馬がくるりと踵を返して、すたすたと大股に拝殿を出ていったが、そのまえに村長の辰馬がくるりと踵を返して、すたすたと大股に拝殿を出ていっ

おおい、みんな聞け、巴御寮人も真帆も片帆もよく聞け」

うな静けさがそこにある。辰馬はおそらく得意満面なのだろう、わざとひと呼吸おいて、 「おい、みんな驚くな。太夫がたったいま殺された。巴御寮人のご亭主が殺されたのじゃ。 村長のどくどくしい塩辛声に、表のざわめきがピタリとやんだ。シーンと水を打ったよ

拝殿の奥の内陣のなかで殺されている」

村長は群集の反応をたしかめようとするかのように、ちょっとそこで言葉を切ったが、

その場の空気に満足したのか、塩辛声をいっそう強めて、

一殺したのはだれだと思う?」 「だれだ、殺したんは……?」

押し殺したような嗄れ声は松蔵らしい。少し声がふるえている。

村長はますます得意になってそっくり返っているらしく、

越智の本家の竜平じゃ」 「だれだと思う、だれだと思う。じゃ、いうてやろうか。おまえらがえろう信服している

305 「あっ、いけない、警部さん、あれをとめてください。さもないと大変なことになりかね

かんば と竜平のほうへ向きなおった。そしてほの明かりのなかで竜平の顔を、鼻と鼻とがくっつ かりに覗き込んで、

太夫を刺し殺しんさったんかな。これはあんたが寄進なさった矢じゃったな」 「竜平どん、これはあんたがやったことかね。いやさ、あんたがこのように惨たらしう、

があるようにも思われた。少なくともこの男は、守衛の死を悼みもしなければ悔んでもい その声は憎しみと嘲りにみちみちているが、聞きようによってはその底に、快哉の叫び

の目のなかを激しく視返しながら、 竜平は世にも意外な言葉を聞くものかなといわんばかりに、鼻先に突きつけられた相手

いや、これはわたしの知ったことじゃない。わたしがここへやってきたら、もうこの

けたが、それがいかにも言い訳めいて聞こえるだろうことに気がついたのか、

ふいと顔をそむけると、

と、いいか

「警部さん、金田一先生を……」

、金田一さんはあなたとご一緒じゃなかったんですか」

んです」 「いいや、あの人はうちにいます。少し疲れているとおっしゃるので、 あとに残してきた

「そう、じゃすぐここへ来てもらいましょう。さっき表に山崎君……山崎巡査がいました

「クよしなず

「ああ、それはほんまのことじゃ」「太夫さんが殺されたとか……」

「それで、犯人はここにおいでんさる本家じゃとおいいんさるんで」 一瞬、群集のあいだから不安そうなざわめきが起こったが、松蔵はまた一歩前へ出て、

たなこというのはやめときんさい。少しは身分柄をわきまえたらどうじゃ」 「それはまだわからん。それにしても、村長、あんたも少しはしたないじゃないけ。めっ と、一本釘をさしておいて、山崎巡査をさしまねいた。そして、拝殿の入口の階段のと

吉が近づいてきた。三津木五郎はあいかわらず、胸にカメラをぶら下げてい さっきから神楽殿の下でひとかたまりに立っていた巴御寮人と真帆、三津木五郎と荒木定 ころで張り番をしているよう、だれもそこからなかへ入れぬようにと命じているところへ、

にこちらのようすをうかがっている。 吉太郎もその仲間にいたのだけれど、かれだけはあとに残って、例によってうわ目使い

固唾をのんでいるようである。 神楽太夫の七人は神楽殿のうえから、いぶかしげに、警部と越智竜平の周辺を覗いてい 霊 島 (E)

竜平は警部の腕をつかんだが、果たして表のほうから反発するような声が撥ねかえって

「嘘だ! 嘘だ! そんなバカな!」

松蔵らしかった。 松蔵はさらに言葉をつづけて、

「嘘だ!嘘だ! 太夫が殺されたとしたら殺したんは、 村長、 おまえじゃないけ」

「そうだ、そうだ。それとも錨屋のじさまかもしれ

と、いう声々がいっせいに村長の塩辛声を取りまいた。

自信のほどを示すものだろう。 んど帰島した人びとのあいだに、いかに絶大な信望をかちえているかということに対する。 こめてきた。村長が袋叩きになることを危懼しているのだろう。と、いうことは竜平がこ 磯川警部はそのときはじめて、竜平が大変なことになりかねないと口走った理由がのみ

「いきましょう。とにかく表へ出ましょう」

う状態で、さすが を取り巻く群集のあいだで、口汚い罵り合いがつづいていた。村長は袋叩き一歩手前とい 磯川警部と竜平が肩をならべて、社務所の玄関口から外へ出ると、果たして村長と村長 に顔面蒼白になっていた。

歩進み出て、 警部と竜平の姿を見ると、一同は一瞬シーンと静まり返ったが、そのなかから松蔵が一

「それはまだわからんというとる」 からんとおっしゃると、その可能性もあるということですか」

「それがまだわからんというとるんじゃ」

なおり、 この警部としては珍しく大声でわめいたが、すぐ後悔したように巴御寮人のほうにむき

よく調査もしておらんような始末なんで……」 に会いたいでしょうが、もう少々お待ちください。じつはまだわたしもちらと見ただけで、 「奥さん、大変お気の毒なことになりました。あなたは一刻もはやくご主人のおなきがら

人は、どういう殺されかたをなすったんです。刃物で刺し殺されたのか、それとも紐かな 「しかし、これだけはいってあげてもいいんじゃないんですか。こちらのお母さんのご主

んかで絞殺されたのか、それとも鈍器ようのもんで撲殺されたのか……」 「それはね、三津木くん」

けたが、そのときそばから大声にわめきだしたのは村長の辰馬である。 と、警部はなぜか執拗に、五郎の目のなかを覗き込みながら、事態を説明しようとしか

はな、 「おい、若僧、それならわしの口から聞かせてやろう。太夫はな、すなわちこちらの神主 越智の本家が寄進した黄金の矢で、刺し貫かれて死んだんじゃ。矢がな、背中から

竜平もまた彼女のおもてから目をそむけていた。 「五郎さん、聞いて……なにがあったのか聞いて……」 かすれてしゃがれている。彼女はなるべく越智竜平のほうを見ないように努力しており そばまでくると巴御寮人が喘ぐような声で五郎を促した。巴御寮人の目はうわずり、

「承知しました。お母さん」

そこにいる多数の群衆のなかで、五郎だけが態度も言葉つきも明快だった。

されたようにいってらしたが……」 「警部さん、いったい何事が起こったのですか。村長さんはいまこちらの神主さんが殺害

ほんまじゃっと」 「三津木くん、巴御寮人にいってくれたまえ。その点に関する限り、村長のいうたことは

乱したふうはなく、ただ怯えの色だけが深かった。 あわてて左右から抱きとめた。真帆の顔色も母親同様真っ白だったが、母親ほどには取り そのとたん巴御寮人が額に手をおき、たたらを踏むようによろけるのを、真帆と定吉が

と、五郎が唇の乾きを舌で湿しながら、「それで……」

ほんとうのことなんですか」 「村長はいま犯人はそこにいらっしゃる、越智さんのようにおっしゃいましたが、それも 警部はそういう五郎の目をしっかり視詰めて、

311 とは、ことほどさように、犯人の守衛にたいする憎しみが大きかったということだろうか。 し殺しただけではあきたらず、強い力で守衛の体を刺し貫いているのである。

「こう突っ立ってな」

と、それから胸のまえ一七、ハセンチくらいのところを、もういっぽうの手で示しなが

じゃ。 「矢尻がこのへんまで覗いとおる。つまり太夫は黄金の矢で、串刺しにされてしもうたん よっぽど腕っぷしの強い人間じゃないとやれぬ仕業じゃ、つまり越智の本家みたい

ぐったりと五郎と定吉の腕に抱かれていた。 そのとたん呻き声が聞こえたので振り返ると、こんどは巴御寮人がほんとうに失神して、

金田一耕助が駆け着けてきたのは、それから間もなくのことである。

=

「それにしてもこれは妙な殺害方法ですね。ここまでやらなくとも、犯人の目的は達しら

これは金田一耕助のみならず、だれの頭にも浮かぶ疑問である。

ことは、読者諸賢もすでにご存じのとおりである。 である。いまそこに殺害されている神職の守衛が、上京したさい越智竜平に会って、こう いうものを貰ってきたと、大膳や村長に披露したとき、金田一耕助もその場に居合わせた 凶器として使用された黄金の矢は、金田 一耕助もこのあいだ、錨屋のお帳場で見たもの

真正面から守衛 金田 二耕助 は袴の裾をたくしあげて、そっとくぐり戸を抜け、 0 顔を見た。 内陣のなかへは 61

舌がだらりと垂れている。 であろうか。むろん知っていたにちがいない。 ずがないからである。 驚愕なのか恐怖なの か、守衛の馬面は両眼と口をくわっと開き、開い 汐垂れた天神ヒゲが哀れであった。守衛 それでないとこの神聖な場所へ迎え入れる は犯人を知ってい た口 から黒ずんだ

笑止千万であると思われ ずれに しても三人の御寮人を持つという、この好色な神職の最期としては、まことに

このように惨たらしう串刺 さっき金田 が数センチ背部から突入しただけでも、 一耕助 も指摘したように、犯人はそこまでやる必要はなかったはずである。 しにする必要はな 犯人の目的は達せられたはずなのだ。

る磯川警部もそれらの事件をともにしているので、金田一耕助が質問 伝わる古い手毬唄にのっとって、かずかずの殺人が演じられたのである。この島 しという事実に関して、なにか特殊な伝説のようなものでもあるのではな い出していた。前者の場合は江戸時代から伝わる俳句のとお 金田一耕助はふと『獄門島』の俳句殺人事件や、『悪魔の手毬唄』 り、 後者の場合は の手 すると、 , 毬唄殺, いか。 その そばにい にも串刺 人事件を 村に

金田一先生、わたしもさっきそれを思い出したんです。この死体、なんとも暗示

とんでいなかった。これでは犯人が、返り血を浴びたであろうという可能性は希薄であっ ことになるのだろう。胸部から突出している矢尻のほうは、ドップリと血にまみれ のほうが、これまた一七、ハセンチ。そうすると守衛の体の厚さは二丘、六センチという 矢羽根の先端から背部までが一七、八センチ。 うより、 矢の長さは六○センチぐらいもあるだろうか。 背部の白衣はほんのちょっぴり血がにじんでいるだけで、あたりには血の飛沫は 胸部と腹部の中間ぐらいのところで、 少しうえから守衛の背部に侵入し、胸と 矢尻のほうが下をむいて突出して 胸部と腹部の中間から突出している矢尻 ている

ぶらさがるような恰好で、そこに吊りさげられているのである。 だてる格子の桟にひっかかっているので、守衛の死体は倒 守衛の背部 から突出している一七、ハセンチの矢羽根のほうが、 れる ちょうど魚の干物のよう わけにも かず、格子に 拝殿と内陣

なはだ暗示的でもあり、寓意的でもあっ とぐらい、筆者もわきまえているつもりだが、 がどのように奇妙きてれつでも、それを揶揄するようなことは慎しまねばならぬというこ や、人間の死というものは、いかなる場合でも厳粛なものである。その死のありかた た。 それにしても守衛の死体のありかたは、は

ていて、ふだんは鍵がかかるようになっているのだけれど、 格子には人間ひとり腰をかが めてはいれるくらい の、おなじ格子づくりのくぐり戸がつ いまは内側に半開きになっ

合わせだったというわけですか。余計な神経を使わなくてもすむわけですから」

それもよっぽど近しい間柄の人間でない限りはね。守衛はすっかり気を許していたんでし かへはいろうと思えばはいることはできたでしょう。ですけえど、そこにはこの被害者が いたのですけん、めったな人間ははいれなかったでしょうな。被害者の顔見識りのもんで、 「そういうこってす。くぐり戸の鍵がかかっていなかったのですけん、だれでも内陣のな 金田一耕助は白い歯を見せて冗談めかしたが、磯川警部は真顔をくずさず

「なるほど、そうすると犯人が大いに限定されてくるわけですね」

ようけん」

矢羽根と矢尻が しなければならなかったのか。 「ときに、医者は・・・・・・」 金田一耕助はまた目のまえの守衛の死体に目をやった。背部と胸部から突出してい かれにはどうにも気にくわないのである。 なぜこうまで残酷な殺しかたを

すむにつれて、商売がなりたたんようになったもんですけん、逃げ出してしもうたんじゃ 「金田一先生、この島には医者はおらんのです。以前はいたそうですけえど、過疎化がす

津井署と県警の本部へ連絡しときました。さいわい下津井署には広瀬くんがいたもんです まものう医者や鑑識のもんを連れてやってくるでしょう。こういうとき離島は不便ですけ けん、委細のようすは話しときました。やっこさんえろうびっくりしとりましたけえどな。 そうです。医者も坊主もおらん島じゃな、ここは。そこでさっきここの電話をかりて、下

的ですけんな。それで越智氏に聞いてみたんですけえど、あの人の返事は否定的でしたね。 この島に生まれて育ったじぶんじゃけえど、そげえな話聞いたこともないいうんですね」

そこで磯川警部は声をひそめて、

ことは、 いとやれぬ仕業じゃ、越智の本家のようにな、そういうてわめいていましたよ。と、 「それよりさっき村長はこういうてましたよ。これは、よっぽど腕っぷしの強い 犯人は越智氏に罪を転嫁しようという了見じゃありますまい か 人間でな

ほかにもそうとうたくさん、腕っぷしの強いのがいそうじゃありませんか。あの村長自身 「しかし、腕っぷしの強いのは、なにも越智氏ひとりとは限らないでしょう。この島には

金田一耕助は笑いながら、 腕つぶしが強そうですぜ」

ときに、そこのくぐり戸の鍵はかかっていなかったんですか」

れ密室の殺人というわけにはいきませんかな いや、鍵は かかっていませんでした。 ちょうどそのくらい開いていましたね。だからこ

かかっていたとしても、こう粗い 目の格子じゃ密室とはいいかねますね

は内陣 くぐり戸の鍵 「そうじゃけえど、金田一先生、矢は内陣のいちばん奥にあったんですぜ。それですけん、 へはいったんでしょうけんな」 がかかか っていたら、密室の殺人ちゅうことになるんじゃありませんか。犯人

するとくぐり戸に鍵がかかっていなかったというのは、われわれにとって仕

……、こげえにおいいんさるんですけえど。なあ、三津木さん、そうじゃったなあ けえど、そのまえにひとめ会わせておいてやりたい。そこのところを相談してきてほしい のほうから御寮人をつれていったらいかんじゃろうか、いずれ解剖に付されるんじゃろう 「そうです、そうです。この人のいうとおりです。警部さん、御寮人さんもだいぶ気が落 「うむ、うむ、それで錨屋の大旦那のおいいんさるには……」 「検屍がすむまで死……いや、おなきがらを動かすわけにはいかんじゃろうけん、こっち

に会いたがっておいでんさります。それで錨屋の大日那のおいいんさるには……」

つきからだけでは、竜平とこの若者の血のつながりを探り出すことはむつかしかった。 いう五郎の顔を、金田一耕助は深い興味をもって視守っている。しかし、その面ざしや体 警部はまだしらないことなのだけれど、越智竜平にむかって、お父さんと呼びかけたと

ちつかれたようですから」

警部は警部でべつに思惑があったのか、

「ええ、いっしょでしたよ。われわれいまやお神酒徳利みたいなもんです。なあ、荒木く きみたちいやに仲がいいが、今夜もずっといっしょだったのかい」

五郎はまたいつか人をくったような調子にかえっていた。定吉はちょっと泡をくったよ

えっ、ま、そうです、そうです、そうですん。ふたりはいつもいっしょですんじゃ」

てもええいうてつかあさったもんですけん、いま迎えにいてもろうとるところです」 えど、さいわい越智さんが自家用汽艇……あれ朝日号というんですね、あれを自由に使う

金田一耕助がくぐり戸を抜けて、拝殿のほうへ出てきたところへ、ゴソゴソと足音がし 二津木五郎と荒木定吉だった。ふたりともまだお祭りの印袢天を着たままである。 ふたりが振り返ってみると、社務所の背後へ通ずる廊下の階段の途中に立ってい おい、きみたち、こっちのほうへきたらいかんというといたじゃないか」

「はあ、でも、錨屋の大旦那に頼まれたもんですから」

る。警部はあわてて死体のまえへ立ちはだかると、 はもうどこにもない。荒木定吉は恐ろしそうに、階段の途中に立って内陣のほうを見てい 答えたのは丘郎のほうである。さすがにこの若者も顔面蒼白で、人をくったような態度

「錨屋の大旦那になにを頼まれたんだ」

「御寮人さんがやっと気がつかれて……」

「ああ、そうか、御寮人さん気がつかれたか……それでどうしたんだ」

「荒木くん、あとはきみからいってくれたまえ」

「えつ、あの、ぼくから……?」

わりにハッキリした調子でいった。 五郎にうながされて定吉はちょっとヘドモドしていたが、それでも責任を感じたのか、

一その御寮人さん、しきりに御主人: ……いえ、あの、御主人の死体……いや、おなきがら 「そうじゃけえど……?」 「ああ、あれ」 「今夜ずっといっしょだったかと、聞いていらしたじゃありませんか」 「妙なこととお 磯川警部はきびしい顔を金田一耕助のほうへむけて、

いいんさると……?」

男じゃないかと疑うとります。あいつ殺されるまえの浅井はるからなにかを聞いた。それ と、ふたりともまんざらこの被害者と関係がないとはいいきれん。そうじゃけえど……」 がどういうことであるかわからんけえど、なにかこの島に関係があることじゃあなかった わたしはいまでも下津井の市子、浅井はるの家からとび出したヒッピーは、やっぱりあの とこの島に、なにか関係があるんじゃないかと疑うとるらしい。また三津木五郎のほうは、 においておりますんじゃ。あのふたりとて例外ではない。いや、荒木定吉はおやじの蒸発 「金田一さん、わたしゃ今夜この神社の境内にいたもんは、いちおうみんな容疑者の圏内 それでこの島へやってきたんじゃないかっと、わたしはいまでも疑うとります。する

金田一耕助がオウム返しに聞きかえした。

思えん。そうじゃけん、ふたりが今夜ずっと行動をともにしていたとすると、互いにアリ なってまだ日も浅いふたりが、共謀してこげえな大それたことをやらかしたとはどうにも バイが成立すると思うたんです」 「もしふたりにそれぞれ神主殺しの動機があるとしても、単独犯ならともかく、近づきに

警部はかるく頷いて、

うことは……? むやみにそこらを触られたら困るんじゃけえど」 「ところで、金田一先生、どうしたもんでしょうな。御寮人さんをここへ呼び入れるとい

う。そうそう、おなきがらに会いたいといってらっしゃるのは、御寮人さんだけ?」 「いいんじゃないですか、ご希望に添うてあげたら。あらかじめ注意しとけばいいでしょ

「いえ、真帆ちゃんも」

「それから錨屋の大旦那も」 お神酒徳利のふたりがひとことずつわけて答えたあとへ、

「村長は遠慮したいといっています。あの人はもう会っているんでしょう」

と、三津木五郎がつけくわえた。

警部は拝殿の広さを目測して、

ぼなんでも気味が悪いじゃろうけんな。ことにおなごどもには気の毒じゃ」 「そう、それじゃ二人いっしょにくるようにいうてくれたまえ。ひとりひとりじゃ、なん

「承知しました」

をやった。 「警部さんはいまあのふたりに、妙なことをお尋ねになりましたね」 五郎と定吉が階段をおりていくうしろ姿を見送って、金田一耕助は磯川警部の横顔に目

なおもこの奇妙な懸垂物をたしかめようとするかのように、うつろに視張った目で一歩ま も内陣と拝殿を隔てる格子の内側にいて、背中に突っ立った矢羽根によって、格子に引っ えへ踏み出した。 かかって支えられている夫の死体をひとめ見たとき、ギクッと大きく全身を痙攣させたが、

しかし、巴御寮人の耳には警部のその詫ごとが、はいったかどうか疑問であった。彼女

ぶるふるえる右の手は、襟の合わせ目を必死となってつかんでいる。 「あっ、どこへもおさわりにならんように」 警部に注意されるまでもなく、彼女の左手はしっかり大膳の手を握りしめており、

いる夫の胸元から、一七、ハセンチほど突出している、血に染まった鋭い矢尻に目をとめ 巴御寮人と大膳はこうして粗い格子に額を近づけると、むこうむきに矢で引っかかって

「だれが……だれがこねえな惨いことを!」 腸をしぼるような声であった。

んがおやりんさったいうておいでんさったけえど、そねえなこと嘘でしょう。嘘でしょう、 「だれが、だれが、だれがこげえな惨いことをしたんですよう。村長のおじさんは竜平さ

嘘でしょう、嘘にきまってるわ」 巴御寮人の絶叫は拝殿の内部にこだまして、外部の境内へもとどろき渡ったろう。

越智竜平もまだこの神社のどこかにいるはずである。巴御寮人のその叫びを聞いたとし

体を左右から、抱きかかえるようにして現われた。 「なるほど、よくわかりました」 金田一耕助が明快に答えたところへ、社務所の奥の住居から、大膳と真帆が巴御寮人の

際にしては、いささかあでやか過ぎる姿だが、おそらくいままでこういう姿で、 く胸にまいて、その結び目を腰に長く垂らしている。夫が非業の最期をとげたというこの 巴御寮人も真帆ももう巫女の衣裳は脱いでいる。真帆は薄手のセーターにスカートとい 小ザッパリした洋装だが、巴御寮人のほうは白い無地の着物に薄桃色のしごきを幅広 臥所のな

足を踏み入れると、いやでも内陣のなかにいるあのものが目にはいる。 階段へさしかかったとき、うえから磯川警部が手をかした。階段をあがり切って拝殿へ

大膳は、

かにいたのであろう。

「ウーム!」

と、唸って例の役者のような目を大きく視張り、 真帆は、

「キャッ

と、小さく叫んで母のかげに顔をかくした

申し訳ないことと思うとります」 り片付けるわけにはいかんのです。まるでおなきがらを晒しもんにするようなことをして、 「御寮人さん、勘弁してつかあさいよ。係りのもんがきてよう調査するまでは、遺体を取

もびっくりしたんじゃけえど、片帆はきのうこの島を出ていてしもうたんじゃそうな」 「金田一さん、磯川はんも聞いてつかあさい。これは今夜こちらへきてから聞いて、わし

たとしたら頼っていくさきは一軒しかない。そう、そう、金田一さんや磯川はんは聞いて 気がつかなんだんじゃな、片帆の姿が見えんということに。それに気がついたもんじゃけ に内緒にしておいたとおみんさい。太夫も御寮人もけさからの忙しさに取りまぎれ、つい ん真帆を責め問うたら、はじめてあの子が打ち明けたんじゃそうな。さて、片帆が島を出 って出ていったそうな。それを真帆が口止めされたもんじゃけん、きょうの夕方まで両親 「さあ、それはわしにもわからん。きのう真帆にだけ打ち明け、真帆がとめるのも振り切

「はあ、どういうことです」

倉敷の御寮人だの玉島の御寮人だのと呼ばせていたちゅうことですけえど」 「倉敷と玉島にひとつずつ兼務神社を持っていて、そこにひとりずつおなごをかこうて、 あの太夫が……」 と、大膳は宙にひっかかったような姿勢でいる、守衛の死体へ顎をしゃくって、

「はあ、そのことなら聞いております。警部さんもご存じです」

たら、かれはいったいいかなる感懐を持ったであろう。かつては駆け落ちまでしたふたり の仲である。竜平にとっては守衛はいわば恋敵であった。その守衛が殺されたのだから、 一見竜平の立場は不利とも考えられるのだが、それを否定しようとしているかつての恋人

巴の声を、竜平はいったいどのような気持ちで聞いたであろうか。

そこのところを大膳が、おごそかに締めくくった。

ことはあっても、殺そうなどとはもってのほか、あの村長はばかじゃ、 じゃ、勝者じゃ。それにひきかえ守衛は敗北者じゃ、敗者じゃ。勝者が敗者に施しをする わけじゃ。さあ、御寮人、そう取り乱したらどもならんぞな。もうええじゃろう。いこ 「そうじゃ、そうじゃ、これは竜平どんのやったことじゃない。いまの竜平どんは勝利者 たわけじゃ、大た

「あつ、うよ

「あつ、ちょっと」

と、金田一耕助が呼びとめて、

「そこにいるのは真帆ちゃんですね。片帆ちゃんはどうしてるんです。体ぐあいでも悪い

真帆はそれを聞くと蒼ざめて、急にシクシク泣き出した。

るけんな」 へおいき。お母さんをよう労わってあげるんじゃぞな。お母さん、取り乱しておいでんさ 「金田一さん、その話ならわたしからしまひょ。真帆、 おまえはお母さんをつれ てあっち

うである。磯川警部は磯川警部で、大膳が電話をしたとき、電話のむこうに澄子や玉江が 大膳は目前にぶら下がっている死体のことより、あとの悶着について思い煩うているふ

無関係と思われる露店商人のほかは、全部磯川警部によって足止めされていた。もちろん 船には報道関係の連中も、そうとう多数便乗していたので、刑部島の神職串刺し事件は、 部隊が駆け着けてきたのは、昭和四十二年七月七日の午前零時ごろのことであった。この おなごどもは帰宅することを許されたが、それでもなにか今度のことで、思い当たるふし 事件の起こった当時、刑部神社の内部ならびに境内にいあわせた人びとは、全然事件に 、テレビ、ラジオの媒介によって全国に報道されて世間を驚倒させた。 朝日号によって下津井から広瀬警部補の引率する、捜査員の大

玉島へ預けられていたんじゃけん、片帆が頼っていくとするとさしずめ玉島しかないわけ じゃ。それにしてもあの子がいったんならいったで、玉島のほうから電話でもありそうな 「それや好都合じゃ。そいで真帆と片帆は高校時代三年間、真帆は倉敷へ、片帆のほうは わしもふしぎに思うたもんじゃけん、さっき電話をかけて問い合わせてみたとこ

「問い合わせてみたところ……」

もしれんと思うたもんじゃけん、こんどのこの事件……」 、片帆はいっとらんちゅうんですな。ひょっとすると片帆に口止めされて、隠しとるんか

と、大膳はまた串刺しの神職のほうへ顎をしゃくった。村長もそうだったがこの人など

たふうじゃが、その片帆ちゃんなら学校を卒業して島へかえって以来、全然音沙汰なしじ もんじゃけんな。玉江……ちゅうのが玉島のおなごの名前じゃけえど、たいそう驚いとっ 、この事件のことを話して聞かせた。どうせあしたになれば新聞に出ることじゃと思うた

も、守衛の死を悼むふうはみじんもない。

やけえど。それにしてもあしたになったら、ふたりとも駆け着けてくるというとる。 天、しきりに巴御寮人や真帆のことを気遣うていた。これはせんからようでけたおなごじ うとる。倉敷のおなごは澄子いうのじゃけえど、こんどの事件の話をすると、びっくり仰 や、あねえにようしてあげたのにと不平たらたらじゃったけに、片帆はほんまに玉島には っとらんらしい。念のために倉敷へも電話してみたけえど、こっちのほうもしらんとい また、

本家を、弾劾していた辰馬の存在はかれらにとって迷惑千万なのだろう。 たらよいかと、 連中である。 のふたりからわざと離れて、六人の男が羽織袴に威儀をただしたまま、ひと塊になっ と、右顧左眄、日和見をしている連中である。それだけにさっき露骨に越智の、うにきでんでよりなの一門に属するのだが、いまやどちらの麾下に馳せ参じ、この人たちは刑部家の一門に属するのだが、いまやどちらの麾下に馳せ参じ みんなきのう越智竜平が島へ着いたとき、波止場まで出迎えにいった

ているのであろう。

ところでは信吉もいる。謙ちゃんもいる。由ちゃんもいる。みんなお祭りの印袢天のまま ープが そのたびに口をつぐんで唇をなめている。定吉のおもてにはお 下ろして、これまた押し黙ったままである。三津木五郎と荒木定吉である。 いので神楽殿の下にたむろしている。このグループの大将はなんといっても松蔵で、若い き盗むように五郎を見、なにかいおうとするのだが、五郎が傲然とうそぶい さて、第二グループはふたりだけだが、このふたりは社務所の受け付けのベンチに腰を いちばん人数も多く、その数三十人を越えるだろうか。 第三のグループは竜平の斡旋で帰島した人びとである。なんといってもこ 家のなかにははいりきれな (1 お い怯えの色が たまま 定吉はときど くなる。 なので、 ブ 'n

しまったので、刑部神社の境内は、 んより曇っているらしく、空には月もなければ星もなかった。 昭和四十二年の七月七日は旧暦の五月三十日、いわゆる三十日の闇である。おまけにど まっくらになるはずだったが、さいわい三個所ある篝 ましてや夜店が引き揚げて

があったら、駐在所なり、当神社なりへ申し出るようにと要請された。 めて、重っ苦しく押しだまったまま、 足止めされた連中はいくつかのグループにわかれて、それぞれおもいおもいの思いを秘 係り官の到着するのを待っていた。

子のうわごとがその唇をついて出た。 熱を発して、 なかにいて、 その第一グループは被害者守衛の一族である。神職の住居の八畳には巴御寮人が臥所の 夢うつつの境にいるのだが、ときおりはげしく身ぶるいすると、 仰向きに寝た彼女の額のうえには氷嚢がぶら下がっている。 御寮人は きびし · ま 高

「だれが……だれが……だれがごげえに惨いことを……」

れであった。 いるのであろう。その枕下に真帆がつきそっていて、ときどきシクシク泣いているのが哀いるのであろう。その枕下に真帆がつきそっていて、ときどきシクシク泣いているのが哀 巴御寮人はおそらく串刺しにされた夫の死体のありかたを、夢うつつとして見つづけて

しである。辰馬はふてくされたように目玉をギョロギョロさせているが、 みをしてい には村長の辰馬が、これまた羽織はぬいでいるが袴のまま、どっかとあぐらをかいて腕組 そのつぎの間には大膳が羽織をぬいで、袴のまま肘枕をして横になっていた。その枕下 なるほどさっき金田一耕助も指摘したとおり太く逞しく、 ときどき思い出 強そうな腕つぷ

「わっはっは」

バカみたいに高笑いをするのは、さっき危うく、 袋叩きにされかけたことを思い出

寝起きするんじゃそうな。ひとりもんじゃけんな。まあ、いうてみれば犬ころみたような もんじゃ」 「いやあ、あいつの家は小磯じゃけえど、お宮の仕事が立てこんでくると、ここの納屋に

「へへえ、その犬ころを、ここの御寮人さんが抱いてお寝んさるんけ。そいじゃまるで八 松蔵の口ぶりには、汚いものでも吐き捨てるようなどくどくしさがある。

犬伝の伏姫みたいじゃないけ」 「だれだ、そげえなえげつないことをいうやつは」

松蔵はギロリとそのほうに目をむけて、

吉やんに面とむこうて、おまえあんじょう御寮人さんに可愛がられとんのとちゃうかっ 「だれにいうて、あんたがいうておいでんさったじゃないけ。こっちへくる船のなかで。 「ああ、一さんか。おまえだれにそげえなえげつないことを聞いた?」

「わしそげえなこというたかな」

「いうた、いうた、おじさんたしかにおいいんさったよ」

でも、酒がはいっているからいきおい大声になる。 信吉が声をひそめながらもそばから囃し立てた。いや、本人は声をひそめているつもり

やもしれんけえど、めったなことをいうもんじゃない はこと欠かなかった。それに夏とはいえ島の夜は更けるにつれて冷えこんでくるから、こ 火の火が残っているところへ、おりおり吉太郎が薪をくべにまわってくるので、明るさに の篝火は暖をとるにも好都合である。おまけにこの人たちみんな腹に酒がはいっている。 「おい、みんな、いまに警察がやってきて、ここにいるわれわれみんな取り調べをうける

グループの大将の松蔵が、酔いのうかんだ目で一同を睨めまわしてい ぞねし

「そうじゃ、そうじゃ、うっかり口をすべらせて、本家に迷惑がかかっちゃ おおごとじゃ

「それにしてもさっき村長のやつが、えげつないことをぬかしおったじゃないけ」

「あれはみんなヤキモチよ」

松蔵が断固といった。

くさったんじゃ」 ょうの祭りでいやというほど見せつけられたもんじゃけん、村長のやつ、頭に血がのばり まや刑部一党はすっかり落ち目よ。それに引きかえ越智の本家は威勢隆々。それをき

たコトコトと拝殿の背後へまわっていくのを見て、 だれも口をきくものはなく、吉太郎もまた口をきかなかった。 っかり裏切りもの扱いをうけているのである。その吉太郎が篝火に薪をくべおわって、 そこへまた吉太郎 がやってきて、篝火に薪をくべてまわった。かれが境内にいるあいだ かれは越智の 一党から、

なにが去来しているのか、それが忖度できない以上、このグループについて語ることはな 61 もないとい を送り、 を開きか なに ・うの けては閉ざす多年子と克子は、 か話しかけようとするのだけれど、かれはそのほうに見向きもしな が、そのとき竜平をくるんでいる雰囲気であった。 ただ顔を見合わせるばかりである。 竜平の胸中に 取 か りつく島 った。 たい

らひとことも口をきかな

い。遠く離れてすわっている多年子や克子が、気遣わ

しげな視線

が部屋 きらびやかな衣裳や古怪な面が、広い会議室の畳のうえに散乱し、長い大蛇の縫いぐるみ 殿の背後の会議室にいた。大きなふたつの葛籠の蓋が開いていて、そこから取り出された いっぱ 最後の第五グループとは、いうまでもなく神楽太夫の一行である。かれらは神楽 あたりは少しも片付いていない。だれも片付ける気力が いに、のたくっていることはさっきもいったが、あれ ないい からそうとう時間 がた

観念せざるをえないであろう。祭りがお流れになったとしたら、 の限りであった。 火事騒ぎだけでも大狼狽だったのに、そのあとに起こったのが殺 ことに殺されたのが神主 であってみれば、 今年の祭りはもうこれ お神楽などの沙汰ではあ 人事件 とあっては沙汰 限りと

「四郎兵衛さん」

葛籠のそばで頭をかかえこんでいる社長の四郎兵衛に、そっと声をかけたのは平作であ なんといっても平作がいちばん四郎兵衛に年もちかく、神楽太夫としてもいちばん古

かと、そういう意味じゃ。いかにここの御寮人さんが物好きじゃとて、あげえな薄汚い男 えげつない意味じゃなかった。ただこのお宮のじいやとして可愛がられとんのんとちがう 「そうかな。そんじゃいうたことにしとこう。

じゃけえど、わしのつもりじゃ、そげえな

するというのは、あまりにも深刻であると思ったからであろう。当然一座はシーンとしら なかったのは、神職が殺害されたというこの時点で、神職の妻と他の男の関係をうんぬん を抱いて寝るなんて、バカバカしいにもほどがある」 い訳めいてきこえずにはいなかった。だが、だれもそれ以上この問題を追求しようとし 松蔵は吐き出すようにいってのけたが、しかし、その言葉はなんとなくそらぞらしく、

までグサッと串刺し。恋の恨みというやつか、ああ、 「なるほど、あの男、薄汚いことは薄汚いけえど、腕っ節は強そうじゃぞな。背中から胸 きょうとや、きょうとや」

けたが、そのときだれかが呻くようにつぶやいた。

はもちろん三方雨戸がしまっていて、ガランとした床に三人座っているところは、 子もくわわっていた。彼女は家にいては、 も侘しげにみえた。 いって、さっき駆けつけてきたのである。このグループは神楽殿のなかにい 第四のグループは越智竜平と松本克子である。このグループに竜平の叔母の多年 心配のためにいてもたっても いたたまれ た。 神楽殿に な

しきりに白扇を鳴らしていた。唇をかたく結び、瞳をきっと虚空にすえたまま、さっきか 竜平は羽織袴の姿のまま、母屋から運んでくれた座蒲団のうえに正座して、膝のうえで までグサッと串刺し、そらちょっとむりじゃろうな

たんじゃ。わしはこの目の玉が黒いうちに、悴のかたきを打ってやろうと思うていたのに、 して、腑抜けにしてしもうたんじゃ。それを亭上の神主がヤキモチ焼いて松若を殺しよっ 「わしの信念は変わりはせん。目差すかたきは神主夫婦じゃ。さっきあの御寮人に会うて あの体に流れている血は穢れとる、腐っとる。あいつがさんざん松若をおもちゃに ハッキリわしにはわかったぞな。あのおなご、うわべは神々しうて、浄らかじゃけ

だれかに先を越されてこげえに悔しいことはないぞな」 のもむりはない。 四郎兵衛は歯ぎしりせんばかりの悔しがりようだが、なるほど、これでは誠が心配する

揉むのもむりはなかった。 おじいちゃんは気が立っておいでんさるけん、むやみなこというたらあかん」 と、誠は勇を諭していたが、いまの四郎兵衛の狂態を見たら、祖父思いの孫たちが気を

がうっかり警察の耳にはいったら、おまえさんが疑われんもんでもない わしゃ疑われてもかまやせんけえど、残念ながら年寄りのこの痩せ腕では、背中から胸 四郎兵衛さん、四郎兵衛さん、そげえに気を立てたらどうもならんがな。そげえなこと

こと話す気か」 それを聞いてわしも安心したけえど、おまえさん警察の調べがあったとき、松若どんの

さっきも警部と名乗る男が、さかんにカマかけてきたもんじゃけん、わしゃそばでハラ

四郎兵衛は両手でかかえこんでいた頭をむっくりあげると、 つきあいである。

「なんじゃな、平作どん」

平作は四郎兵衛の顔を見ると驚いたように、

「ふ、ふ、ふ、年をとると気が弱うなっていかんな。わしゃ悔しうてなあ」 「なんじゃ、四郎兵衛さん、あんた泣いておいでんさったんか」

「なにが……? なにをそんなに悔しがっておいでんさる」

若が舞うたのが、あの子にとって最後の舞台になったけえど、そのときの役回りが松若の 心づもりもお流れになるかっと思えば、腸が煮えくりかえるようじゃ。これを悔しがらず 対するせめてもの回向にするつもりじゃったのに、こげえな騒ぎになってしもうて、その にどうしようぞいの もりじゃった。おまえさんもしってのとおり、いまから十九年まえのここのお神楽で、松 「なにがちゅうて、今夜わしは勇に素戔嗚尊を舞わして、わしは八岐の大蛇を付きあうつ 、わしの大蛇じゃった。そうじゃけん、孫の勇に素戔嗚尊を舞わせ、それを松若に

「そうすると、四郎兵衛さんは松若どんが蒸発したんは、やっぱりこの島じゃっと思うて いでんさるんけ」

ひきつらせている。四郎兵衛は三人の顔を見くらべながら断固といった。 平作の背後からにじりよってきたのは、徳右衛門と嘉六である。ふたりとも異様に顔を

「うん、わかったよ、おじいさん。イサちゃん、いこう」 四郎兵衛は気遣わしそうに目を視張って、 ふたりは連れ立って会議室を出ていったが、すぐ誠をつれてかえってきた。その誠の袴

のこってす。うちもうなにやら息苦しうてかなわんもんですけん、そこらを散歩してきた おじいちゃん、そげえにいちいち気をもまんといてつかあさい。 「誠、どげえしたんじゃ、その泥は だが、そういう誠はふところに、懐中電灯を忍ばせている。こっちへ来てから新在家の ただ滑って転んだだけ

安心したんじゃけえど、こんどはどうおしんさるおつもりじゃ」 ハラしとったけえど、ええあんばいにあんたがシラを切ってとおしんさったんで、

げえしたんじゃ、誠の姿が見えんようじゃけえど」 「そのときはそのときのこっちゃ、臨機応変といこう。そらそうと、勇、お兄ちゃんはど

四郎兵衛はむこうの隅にいる孫の勇に声をかけた。

「お兄ちゃんなら御不浄へいてくるいうて、お立ちんさったけえど」

もうそろそろ十二時じゃぞな」 「御不浄にしては長いな。マコちゃんがここを出ていったのは十一時半よりまえじゃった。

時計を見ながら告げ口をした。 勇のそばに寝そべって、週刊誌なんか読んでいた弥之助が、むっくり起きなおると、腕

である。 まれて四郎兵衛が預かっているのだけれど、その神楽にももうひとつ身がはいらないふう めて神楽でもみっちり仕込んでもらえば、少しは身性もよくなろうかと、両親から頼み込 この弥之助だけが三十代だが、極道が過ぎて身が持てず、いまだに独りもんである。せ

とったようじゃけえど、お兄ちゃんはどこへいったんじゃ」 「勇、お兄ちゃんはどげえしたんじゃ。おまえらさっきからこそこそと、内緒話ばかりし

勇はベソをかくような顔をして 四郎兵衛は不安の色を、露骨におもてに表わして、言葉の調子も気遣わしそうだった。

した。

そのたびに拝殿に内陣にとフラッシュの光りがつっ走った。鑑識班はあたりい 行動を開始 写真班は格子の外から内からと、あらゆる角度にカメラをかまえてシャッター ちめんに銀 を切った。

そうとうのお年である。白い口髭をまさぐりながら、困ったように死体の位置を視守って 粉をまいて、指紋採集に努力している。 いる。死体を診るにも宙にぶらさがったようなこの状態では、はなはだ不便でもあり、不 そのなかでいささか困惑のおももちは、 下津井署の嘱託医木下先生である。木下先生は

「広瀬くん、もうこの死体動かしてもええじゃろう。このままじゃ手もつけられやせんが

都合でもあった。

、ええ、もうい おっ とし いでしょう。おい、藤田くん、手をかしてあげたまえ」

藤田というのはこのあいだ、下津井の浅井はるの台所で、金田一耕助も会ったことのあ い刑事であっ

ている矢羽根のほうを取り外し、死体をかかえるようにして、内陣 藤田刑事はくぐり戸を抜けて内陣のなかへはいっていくと、まず格子の桟にひっか 寝かせたといっても矢に刺し貫かれているのだから、仰向きにするわけにもいかない の床にそうっと寝 か

337

ていたのではないか。いや、それのみならず、神楽殿の下にいる松蔵たちのグループの酒 こいらの人たちの声は甲高く、それに興奮したときには、よけいに声が荒くなっている。 郎兵衛に贈られた無形文化財の幕だけである。しかも、 それが取り払われたままになっていて、あいだを隔てているものといえば、 電気商で、買い求めてきたものである。 しかし、 幕ひとつしか隔てていない、神楽殿にいる竜平の耳には、これらの会話が筒抜けになっ この会議室と神楽殿のあいだには、仕切り戸が取りつけられているのだけれど、い それよりおじいちゃ いにはずんだ会話も、おなじように雨戸越しに聞こえていたのではあるまいか。 竜平は袴の膝に両手をおき、唇をかたく結び、きっと虚空に目をすえたまま身 ん、いや、みなさん、警察の人が大勢やってきたようですよ」 内緒話をしているつもりでも、 ヒイキ か まは

=

じろぎひとつしなかった。孤愁の色がその全身を包んでいる。

現場へ案内された広瀬警部補の放った第一声がこれだった。いや、これは広瀬警部補の 中! や! こ、これは……」 千軍万馬のこの人たちは、変死体には慣れている。変死体とい かれが引率してきた捜査員のすべてが胸中で放った言葉であったろう。 うものは、その

ありかたがどのような形態であっても、薄気味悪いものときまっている。しかし、それを

「じゃ、最初の発見者は……?」 いや、わしじゃない。わしは二番目じゃ」

「越智氏……越智竜平さんじゃ」

害者の、前部と後部から突出している、黄金の矢が、かれにはなんとも腑に落ちないらし その目はともすると格子越しに内陣のほうへむけられる。いま床によこたえられている被 は拝殿のほうにいて、捜査員諸君の邪魔にならないように、あちこち身をよけてい 磯川警部はそういいながら、ちらっと金田一耕助のほうへ目をやった。その金田一耕助 るが、

「越智竜平……氏?」

広瀬警部補はいくらか声をはずませて、

「その人でしょう。ちかごろこの島に莫大な投資をしているというのは」

ず、凶器として用いられたその矢なども、越智氏の寄進によるもんじゃそうな」

「そうそう、この神社なども新しく建てかえて寄進した人物じゃな。いや、それのみなら

広瀬警部補は怪しく目を光らせて、

「その越智氏がこの事件の発見者じゃとすると、そこになにか意味があるとおいいんさる

「そうはいうとらんけえどな。金田一先生、あの人が地蔵平の家を出たんは何時ごろでし

引き抜かなければならないだろうが、それには矢尻を切断するよりほ と調べなければならないのだが、着物をぬがせるのが厄介であった。 いていて、裾の乱れる心配はなかった。いずれは素っ裸にして、ほかにも外傷は けっきょく、横向けに寝かせるよりほかに方法はない。守衛は白衣のうえに水色の袴を 俯伏せにするわけにもいかなかった。 どちらにしても矢を かはないだろう。

にかがみこんだ。 木下先生は上衣をぬいで藤田刑事に渡すと、ワイシャツの腕をたくしあげ、死体のうえ

たいんですが……」 「木下先生、これはいうまでもないことですけえど、犯行の時刻をできるだけ正確に知り

は必要じゃけえどな」 いや、広瀬くん、それならわしにはわかっとるんじゃ。もちろん先生の医学的な鑑定書

「警部さんに……? どうして……?」

手にまだぬくもりが残っていたもんじゃけに、おやと思うて胸にさわってみた。 なじ温かみが残っとった」 「わしはその死体を見つけるとすぐ手をとってみたんじゃ。脈を見るためにな。 そしたら 胸にもお

「それは何時ごろのことですゥ」

「すると、あなたがこの死体を発見されたんですか」 わしゃそのとき本能的に腕時計に目をやったんじゃが、八時四十分であった」

くりしたような顔をしておいでんさった。わしとは出会いがしらじゃったな」 務所のほうへ近づいてきたんじゃが、するといまなかへはいっていった越智さんが、びっ でんさったけえど、すぐ社務所のなかへはいっておいでんさった。わしもそれを見て社

「その間どのくらいの時間だったんですゥ。越智氏がなかへはいって、また出てくるま

「そうじゃな、二分……長うて三分くらいのもんじゃろな」

なにをしとったですゥ」 「それは越智氏に聞いてみんとわからんな。早急に関係者一同の聞き取りをはじめなけれ 「二分、いや、三分あればそうとうの仕事ができますぜ、越智氏はその間この社のなかで

ばならんけえど、まずいちばんにあの人の話を聞くんじゃな。なんちゅうてもあの御仁が この事件の最初の発見者じゃけん」 警部さんにちとお尋ねいたしますが……」

「はあ、どういうこと?」 と、そのとき拝殿のほうから格子越しに、金田一耕助が声をかけた。

とおっしゃいましたね」 「あなたは火事騒ぎがあったので八時二十分ごろ、お宮のなかから境内へとび出してきた

「ああ、そういうたが、それがなにか……?」 あなたのあとから、だれかこのお宮からとび出したものはありませんでしたか」

「キッチリ八時半でした。わたしは玄関まで送って出て、自動車で出ていかれるのを見送 **一腕時計に目をやったんです。八時半ジャストでしたね**

やけえど、八時二十分ごろ火事騒ぎがあってな 「ああ、そうそう、ボヤがあったんじゃそうですね。そのボヤとこんどのこの事件と、 「そんなもんじゃろうな。わたしは四時ごろ神楽太夫の一行といっしょにここへきたんじ

にか関係があるとおいいんさるんで?」

かります。それで……?」 にいあわせたもんはみんな足止めしてあるけん、部下によう聞き込みをさせるんじゃな」 「それはわしにもまだわからん。そうじゃけえど全然別個の偶発事故とも思えん。その場 ありがとうございます。警部さんが今夜ここにおいでんさったんで、われわれ大いに助

る、太夫たちの楽屋にあの連中といっしょにいたんじゃ、その意味はわかるじゃろ」 「火事騒ぎがあったもんじゃけん、わしは表に飛び出した。それまでは神楽殿の背後にあ わかります。なにか収穫がおありでしたか」

がお宮の石段をあがっておいでんさった。時計を見ると八時三十六分じゃった」 すぐ消えて大事にいたらなんじゃけえど、わしはまだ境内にいた。するとそこへ越智さん 「皆目。じゃけえどあの連中がなにか隠しとることはたしかなようじゃな。さて、火事は

「越智さんは水びたしになった境内を見ると、びっくりしたようにあたりを見まわしてお 八時半ジャストに地蔵平の家を出たとすると、そんなもんでしょうな」

動車の運転手松本克子、叔母の越智多年子から金田一耕助まで、この聞き取りの対象とな に過ぎて、午前二時になんなんとしていた。竜平につづいてかれをここへ運んできた、自 越智竜平を筆頭として、この聞き取りが開始されたのは、七月七日の午前一時をとっく を省略するわけにはいかない。省略すると記録の納得性が失われるからである。 れたのだが、この種の記録のなかでいちばん辛気臭いのが、この聞き取りというやつで 。書くほうでも辛気臭いが、読むほうではより以上に辛気臭いであろう。

帆 お 寮人は木下医師 る人物ばかりである。頭ごなしに怒鳴りつけたり、絞めあげたりするわけには まけに みんな疲れ 大膳という順序であったが、これらの人びとは社会的にそうとうの ープが 巴御寮人のまえに村長の刑部 の鎮静剤の注射がきいたかして、さっきからみるとだいぶ おわると巴御寮人を筆頭として、刑部家の一族である。 ているから、その手間暇のかかることといったらお話になら 辰馬が呼び出されてい た。 巴御寮人につづい さいわい、巴御 ん落 地步 ち着 か

が嘘をついているのである。その嘘を看破らなければならないのだが、それは容易なこと 犯人であると申し立てるもののないのが、こういう聞き取りの場合ふつうである。だれ ここに殺人という厳粛で苛酷な事実が演出されているのである。しかし、だれ

の聞き取りは社務所のなかで行なわれたのであるが、越智一族と刑部一族をおわって、

そうじゃけんわしがいちばん最後にとび出したもんらしい。神楽太夫の連中は別として んな火事じゃ、火事じゃという声を聞いてとび出したとみえ、そこにはだれもおらなんだ。 いや、わしはとび出すまえに社務所の奥の住居のほうを覗いてみたんじゃ。すると、み

「いや、ありがとうございます」

「金田一先生」

磯川警部はなぜか開きなおって居丈高に、

れたんです。つまり、この事件の責任者はこのわしじゃ。わしよりあとから飛び出したも 「さっきわしは岡山の県警と電話で打ち合わせをして、この事件はいっさいわしが一任さ

んがあったとしたら、この広瀬くんに注意しますぞな」 いや、失礼しました。つい念のためにお聞きしただけのことで、そう気を悪くなさらん

でくださいよ」

時から九時までのあいだであろうという断定であった。そして、このことは磯川警部の話 いまがちょうど七月七日の午前一時であるから、犯行が演じられたのは七月六日の午後八 と一致していた。 そのとき念入りに死体を鑑定していた木下医師が、死亡時刻について断定をくだした。 あらゆる点から観察してみて、この死体は死後五時間から四時間というところであろう。

かくて、そのあとで関係者一同をひとりひとり呼び出して、聞き取りということが行な

土間においてあっ

郎はそっちのほうへはいかずに裏側へまわった。裏側には苔の蒸した狭い石段がある。 にも滑りやすそうな石段だが、吉太郎は慣れているのか、そこを一気に駆け るのだが、石垣の下に人間ひとり身をかがめて、潜れるくらいのささやかな龕が って、転んだような跡がついていた。この石段は刑部神社を支える石垣に沿って 吉太郎はそのほうへは見向きもせず、石垣の角をまがるとそこは千畳敷きであ なかにきのう金田一耕助が、下の水蓮洞で見たとおなじような五輪の塔が安置 いそいでいるので気がつかなかったけれど、石段のいちばん下の段に、最近だ

われた千畳敷きの右手には、 七人塚がひっそりと朝靄のなかにたた

る石垣の反対側の小道へ出た。金田一耕助や誠や勇がとおった道である。 吉太郎は足音をぬすむような歩きかたで、千畳敷きをとおりぬけると、 へさしかかる時分から、吉太郎の足は速くなり、やがては背中を丸くして風のように駆 竜平の自動車が駐まっていたが、さいわいだれもいなかった。 地蔵峠 刑部神社を支え 刑 部 神 社の

から地蔵

らじらと明るんでいた。 三津木五郎と荒木定吉に取りかかろうとしたときには、夏の夜の明けやすく、東の空はし

が、必ずしもそうではないことは、刑部神社へ寝泊まりするとき、かれが塒にしている納 んど帰島した人びとの話をきくと、吉太郎という男がいかにも不潔な動物のように思える いつまでたっても呼び出しがこないので、かれは 警察の要請で足止 めくった吉太郎も、納屋のなかで自分の出番を待ってい いつか納屋のなかで眠ってしまった。こ

箒だの塵取りなどがいっぱい詰まっており、上の段には使い占した道具類が押し込んであ 屋のなかをのぞいてみればよくわかる。 三畳敷きほどあるこの納屋は、上下二段にわかれていて、下のほうには薪だの炭だの、

のである。この一事をもってしても、かれがいかに図太い神経に恵まれているかというこ るが、それらはよく整理整頓されていて、不潔な感じはどこにもない。 とがわ 上の段の道具類のあいだに、畳半畳ほどの空間があり、そこに茣蓙が敷いてあ かるであろう。 へ泊まるとき、 かれはいつもその空間に毛布にくるまり、道具類にもたれ て眠る

乗せて、島めぐりをしたときのままの衣裳、すなわち黒い鞣革の上下つなぎのオーバーな懐中時計を取り出してみた。吉太郎はきのうの昼間、金田一耕助と大膳をオチョロ舟 納屋のなか の朝吉太郎はこの納屋のなかで目を覚ました。すでにしらじらとした外光が、 れこんでいるのに気がつくと、かれは驚いたように腹のどんぶりか

いような貧しい家だが、内部はあんがい整頓されていて、この男のきれい好きを示してい の家へかえってきた。それは家というより、小屋といったほうが当たっているかもしれな それから三十分ののち吉太郎は、小磯の部落からポツンと一軒離れた、山際にある自分

これまたよく磨ぎすまされていて、柄から切っ先まで二五センチ、ドキドキするような鋭 いている。吉太郎は弾帯を腰に巻くと、剣袋から剣を抜き出して目のまえにかざして見た。 れをしているのだろう。弾帯を取り出して銃に弾丸を詰め込んだ。弾帯には革の剣袋がつ い光沢をたたえている。 吉太郎は押し入れを開いて散弾銃を取り出した。銃身はよく磨かれている。絶えず手入

その代わり丘の頂上へ出ていた。 はいそぎ足で登りはじめた。十五分ほど登るとさすがに占太郎も息が切れ、汗が流れたが 裏側はすぐ山である。その麓を少し迂回すると細い坂がある。かなり急な坂だが、吉太郎 古太郎は弾帯をまいた腰をひとゆすりすると、銃をさげたまま家の裏側から外へ出た。

百羽をこえているだろう。 た。もう夜はすっかり明けていて、空にはいちめんに鳥が舞っている。そのかずおそらく 吉太郎は汗を拭い、呼吸をととのえながら眼下にひろがる荒涼たる景色を見ま

いま、吉太郎の眼下にひらけているのが、すなわち隠亡谷である。

金田一耕助ファイル19

悪霊島(上)

横溝正史



角川文庫 4879

印刷所

大日本印刷 製本所——大谷製本

〒一〇二 振替〇〇一三〇一九一一九五二〇八

装幀者

杉浦康平

定価はカバーに明記してあります。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛に

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

発行所——株式会社**角川書店**

平成成

年四月二十五日

改版初版発行

昭和五十六年五月

十八日

二十三版発行初 版 発 行

電話 編集部 (〇三)三二三八一八五二 東京都千代田区富士兒二一十三 :三 東京都千代田区富士兒二一十三 :三

©Printed in Japan

がありますが、作品発表時の時代的背景と文学性を考え合わせ、著作権継承者の了解 本書中には、今日の人権擁護の見地に照らして、不当・不適切と思われる語句や表現 を得た上で、一部を編集部の責任において改めるにとどめました。(平成八年九月)

〈金田一耕助ファイル〉シリーズ

ボサボサの髪、人なつこい笑顔、 色白で内気な……ちの男が帰ってきた!!



呪われた名家、美しいヒロイン、完璧な密室、 …そして殺人の美学 ——日本ミステリー界の巨匠横溝正史が生んだ、 名探偵金田一耕助が挑む難事件の数々。

西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近 化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。 来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。 代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して 第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。 私たちの文

を期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願 の文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんこと 科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、 廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百 刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで めには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石 幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすた 九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不

九四九年五月三日

角川文庫 横溝正史《金田一耕助ファイル》作品集

金田一耕助ファイル1 金田一耕助ファイル2 八つ墓 村 本陣殺人事件 金田一耕助ファイル3 金田一耕助ファイル4 獄 島 悪魔が来りて笛を吹く 金田一耕助ファイル5 金田一耕助ファイル6 犬神家の 族 瘡 V 舶 金田一耕助ファイル7 金田一耕助ファイル8 < 迷路荘の惨劇 夜 歩 金田一耕助ファイル9 金田一耕助ファイル10 女 蜂 霊 幽 男 金田一耕助ファイル12 金田一耕助ファイル11 首 悪魔の手毬唄 金田一耕助ファイル13 金田一耕助ファイル14 つ首 塔 七つの仮 金田一耕助ファイル15 金田一耕助ファイル16 悪魔の百唇 金田一耕助ファイル17 金田一耕助ファイル18 仮面舞踏 白 黒 金田一耕助ファイル20 金田一耕助ファイル19 悪 霊 島(上)(下) 病院坂の首縊りの家(上)(下)



発行部数5,500万を越える、 日本の大ベストセラーシリーズ!

スイルュ「八つ墓村」スイルュ「林門島」スイルュ「林門島」スイルュ「林門島」

スイル6「人面瘡」

ファイル11 [首](「花園の悪魔」改題)

ファイル12「悪魔の手毬唄」ファイル13「三つ首塔」

ファイルは「悪魔の百唇譜」ファイルは「悪魔の百唇譜」

アイル19「悪霊鳥山下」ファイル18「白と黒」

マアイルター女王蜂

ファイル10 幽霊男

ラマル8 | 迷路荘の惨劇

ライルフー夜歩く

ファイル20「病院坂の首縊りの家山下」



9784041304679

ISBN4-04-130467-9

CO193 P560E 定価560円 (本体544円)



1910193005609

島 田 出身地の刑部島に建設中のさらに依頼人越智竜平が、 残して怪死したことを知る。 も束の間 5 を感じるが……? いることを知って、 旧交を暖めた。 し振りに会った磯川警部 を訪れた金田一 前途に不吉な事件 大レジャー施設をめぐり 人探 人々から反感を買 の尋ね人が謎の言葉を 1) しを依頼され カ 、警部の話から りの 耕助は、 だが、それ 億 万長 .の予 金田 ハって 岡 者 兆 金 山 か

